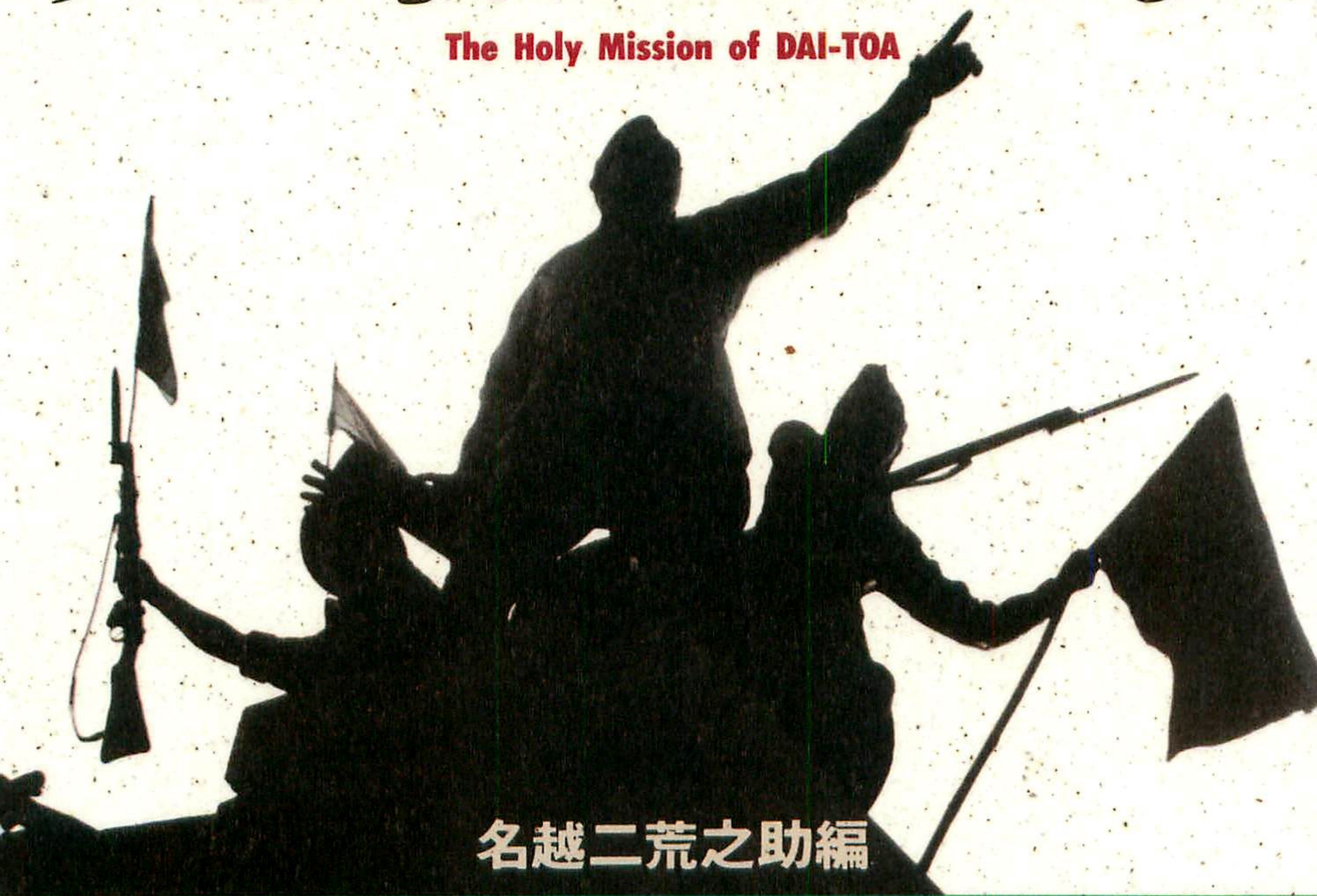
世界から見た大東亜戦争

The Holy Mission of DAI-TOA

名越二荒之助編

これまであまり語られることのなかった大東亜戦争の意義や遺産を、
外国の人々は高く評価していた。
専門研究者も交え、三、四十代の戦後生まれを中心に、
慰霊の心をもって輝かしい歴史を発掘。

日本人に自信と誇りを
回復させる、刮目の一書。

展転社

カバー〔表〕写真：インドのオールド・デリー市内レッド・フォート前にあるチャンドラ・ボースとインド国民軍兵士の群像(460頁参照)
〔撮影：名越二荒之助〕

The Holy Mission of DAI-TOA：インドネシアのウトモ氏が海部首相の演説を批判して使った言葉。「大東亜における日本の崇高な使命」とでも意訳できようか（本文397頁参照）

はしがき

——太陽を背にして——

人類史の一大転機を画した大東亜戦争が勃発したのは、本年を去ること五十年前の昭和十六年十二月八日のことであった。この曠古の大戦に際会して、当時の日本国民は打って一丸となり、前線に銃後に全力を傾けて敢闘した。時運利あらず、とりわけ原子爆弾という最も非人道的な兵器の出現と、米国の教唆を背景としたソ連による日ソ中立条約の背信的侵犯とを見るにおよんで、わが国は遂に矛(ほこ)を収(おさ)めたが、結果的に多くのアジア諸国が欧米列強の植民地支配から解放されて、政治的独立を達成した。大東亜戦争の重要目的が成就されたといえる。

現在、すでに世界第二位の経済大国となった日本を中心に、東アジアの新興工業諸国ならびにASEAN諸国が構成する地域経済圏は、遠からず米・加・墨、およびEC中心の西欧の各経済圏と同等の経済的実力を持つにいたるものと観測され（世界経済の三極化）、戦時中にわが国が標榜した「大東亜共栄圏」は、それに近いものの実現が夢ではなくなった。これに伴って、特に湾岸戦争以後、わが国がアジアにおいて果たすべき積極的な政治的・軍事的・経済的役割に対する期待が世界的に高まってきている事実は、看過しえない。

このような時期に、戦後一貫して大東亜戦争の歴史的意義を強調し、その「真実」の認識が肝要であると、熱血をもって日本国民に訴え続けてこられた名越二荒之助教授が、新たに渾身の力をこめて責任編集にあたられた労作『世界から見た大東亜戦争』が、いくたの協力者の参加を得て公刊される運びとなったことは、慶賀の至りである。読者諸賢が、本書を通じて、大東亜戦争の真実を十二分に理解されるであろうと、信じて疑わない。

大東亜戦争は、明治維新このかた独立自尊とアジア人のためのアジアの実現を求めてやまなかった日本国民にとり、避けて通れぬ運命的な戦争であった。米国により挑発され追い詰められた日本は、死中に活を求めるべく乾坤一擲（けんこんいってき）、真珠湾攻撃を決行したが、このこと自体すでに米国大統領ルーズベルトの謀略のわなに陥るものでもあった。

米国の著名な政治家ハミルトン・フィッシュは、自著『悲劇的欺瞞』（Tragic Deception, 1983）（岡崎久彦監訳『日米・開戦の悲劇』、PHP研究所刊）の中で、「ルーズベルト大統領は、その絶大な権力を使って遂に米国を日本との戦争に巻き込むことに成功した。そのことは、米国を欧州における戦争に参戦させるという彼の最終目的を達成させた」と述べている。日本外交学会編『太平洋戦争原因論』（文部省補助研究、昭和28年6月刊）は、「日本のハワイ攻撃は決して米国に対する不意討ちではなかった。日米開戦は交渉の進行とともに、漸次にその決定に誘導された。ハル・ノートは、米国の大いなる決断をもって交付された。不意討ちであったのは、真珠湾にあった米軍にとってであり、米国政府そのものにとってではない。事実、米国側は、日本側の敵対行動の開始を期待し、さらに国民世論の

統一のため、それを希望さえしていた。わが外交文書の暗号解読により、十分に日本側の意図を理解し、日本の第一撃を待っていた米国は、完全に悪意であった」と解明している。

ＢＢＣ（英国放送協会）が制作したテレビ番組「真珠湾攻撃――暗号を解いた情報部員たち」（平成元年十二月八日にＮＨＫテレビが放映）は、多くの生存者の証言をもとに、ハワイに近づく日本艦隊の位置が、サンフランシスコの米第十二海軍区情報部により時々刻々海図上に書き込まれ、ワシントンの政府首脳部に通報されていた――しかし、ワシントンからハワイには知らされなかった――事実を明らかにした。開戦時の駐日英国大使クレーギーが作成した本国政府への報告書は、「米英両国が意図して日本を戦争に巻き込んだ」と主張している。英国週刊誌「ニューステーツマン」の本年一月十八日号は、「五十年前に、陰謀、術策、嘘言により、真珠湾を舞台装置にして、戦争に突き進んだルーズベルト大統領」に言及している。

一九四四年十一月二十八日に米国下院で、共和党のＤ・ショート議員は「真珠湾攻撃に関するすべてのいきさつと真実が語られ、白日の下に曝されるならば、米国国民は衝撃を受け、激怒し、かつ悲嘆にくれるだろう。彼らの心は深い悲しみに包まれ、激しく傷つけられるだろう」と演説している。

なお、戦時国際法の研究により学士院恩賜賞を受けられた早稲田大学の信夫淳平博士は、日本軍の真珠湾攻撃を、「自衛権の正当な行使」と解しておられる。真珠湾攻撃をめぐって今日までに多数の研究成果が日米を中心として諸国で発表されているが、未公開の資料・文書もあるため、謎の部分が今なお多く、真相の完全な究明は将来に期待せざるを得ないことも事実である。

屈辱的なハル・ノートの受諾を断固拒否して、日本政府は開戦を決意するにいたったが、その時、永野修身軍令部総長は「政府の陳述によれば、米国の主張に屈すれば亡国は必至とのことだが、戦うもまた亡国であるかも知れぬ。だが、戦わずしての亡国は、魂を喪失する民族永遠の亡国である。たとえいったん亡国となるも、最後の一兵まで戦い抜けば、われらの児孫はこの精神を受け継いで、必ず再起三起するであろう」と述べたと伝えられるが、日本が開戦に踏み切った余儀なき事情が明瞭に理解される言葉である。大東亜戦争は、日本民族がその歴史を通じて（他国との相対的関係における）最強の軍事力を有していた時点で、遂行されたものであり、西洋諸国による積年のアジア侵略に対するアジア人の決定的な反撃として、世界の歴史家が注目する重大な意義を持ち、かつ現実的に世界史の動向を左右するきわめて大きな効果を挙げることができた。

戦後（正確には軍事占領中に）連合国側が強行した東京裁判は、それが準拠すると呼号した国際法にそれ自体違反した政治的茶番劇であり、この事実は、現在、国際連合国際法委員会をはじめとして、諸国の良識ある多くの国際法学者が認めるところである。

東京裁判の十一名の判事の中で唯一人国際法に通暁していたインドのパール判事が、精緻にしてかつ厳格な国際法理論を展開して、東條英機元首相以下の日本側被告全員の無罪を宣告した個別反対意見書（いわゆるパール判決書）は、今日では東京裁判の正体を理解する上に不可欠の基本的重要性を持つ文献であるが、その末尾に掲げられた次の言葉は、世界的にあまりにも有名である。「時が、熱狂と偏見をやわらげた暁（あかつき）には、また理性が、虚偽からその仮面を剝（は）ぎとった暁には、そのときこそ、正

義の女神は、その秤を平衡に保ちながら、過去の賞罰の多くに、その所を変えることを要求するであろう。」(When time shall have softened passion and prejudice, when reason shall have stripped the mask from misrepresentations, then justice, holding evenly her scales, will require much of past censure and praise to change places.)大東亜戦争開戦五十周年を迎える本年こそ、日本国民は、正義の女神と共に立って、過去の賞罰にその所を変えることを厳しく求めなければなるまい。

ところで、一部の日本国民が誤解している事柄だが、東京裁判は、日本が「侵略」戦争をしたとは判定していない。一九二八年の不戦条約により、防衛戦争(自衛戦争。在外合法権益の保護の場合を含む)ではない攻撃戦争(侵攻戦争)が違法化——犯罪化ではない——されたと解されるが、自衛か侵攻かの判断は、各国の「自己解釈権」によるべきものとされた。しかるに、東京裁判で連合国側は、日本の「自己解釈権」を無視し、かつ「侵攻」(英語の aggression, アグレッション)の国際的定義が確立されていないのに、勝手に日本が侵攻戦争をしたと極めつけ、また「侵攻」があったと仮定しても、それは単純な国際不法行為(損害賠償ないし原状回復の責任が生ずる)であって、厳密な法的意味での犯罪ではないのに、犯罪と独断し、戦争責任を(法人としての国家ではなく)個人に追及することを許す国際法は存在しないのに、東條元首相以下の戦時指導者を個人的に有罪とした。恐るべき国際法侵犯である。

わが国は、満洲事変・支那事変・仏印進駐等を通じて、実定国際法上合法的な軍事力行使——政治的に賢明なものであったか否かは別として——に終始したことを実証でき、大東亜戦争についても、

「自己解釈権」に基づき、かつ十分な法的根拠により、自衛戦争であることを、堂々と主張できるのである。アグレッションを「侵略」と和訳するのが間違いであるのは、侵略は「他国に無理に押し入って領土や財物を奪い取ること」をいい、略取・掠奪の意味を含むが、アグレッションは本来「挑発を受けないのに行う攻撃」、つまり違法な攻撃ないし侵攻を意味し、略奪の意味を持たないからである。東京裁判は、日本がウォー・オブ・アグレッション（war of aggression）を行ったと、恣意的に断定したが、それは正しくは攻撃戦争ないし侵攻戦争と邦訳されるべきものであった。日本国民としては、大東亜戦争が侵攻戦争でもなく、自衛戦争であったことを、信念をもって主張すべきである。

日本民族にとり、大東亜戦争終末の悲劇は、神武天皇が御兄五瀬命（いつせのみこと）を喪われることになる孔舎衛（くさえ）坂の敗退になぞらえることができよう。「還り退き、神を祭り、太陽を背にして賊を討たん」（『日本書紀』）と決意されて、遂に金鵄（きんし）の光燦然たる究極の勝利をおさめられた神武天皇の御偉業の再現を、日本国民は今こそ徹底して図るべきである。

日本の上空にはいまだ妖雲去りやらず、大東亜戦争をあしざまに罵り、国民に故なき贖罪感を強いようとする悪魔的な声がなお聞かれる。本書が、内外からする妖気を一掃し、国民に浩然たる正気を回復し、祖国日本を本然の姿に回帰せしめるために、広く江湖に歓迎され愛読されんことを、心より念願するものである。

平成三年十一月三日

青山学院大学国際法研究室

佐藤　和男

目次

世界から見た大東亜戦争

スポット・ライト

第三部

第四部

第一部　日米戦争の遠因と近因

一　大東亜戦争はなぜ起こったか

長期的視野に立った原因の研究・主として英仏の教科書から

真珠湾奇襲と忠臣蔵の討入り

大東亜戦争は一般に、真珠湾奇襲からはじまったように言われています。たしかにそうですが、話をいきなり真珠湾攻撃からはじめると、いかにも好戦的な日本人が、だまし討ちによって勃発させたという印象を与えます。

なぜ日本は奇襲に訴えざるを得なかったのか。そこには長い歴史の積み重ねがあったのです。「民族の意地」というか「誇り高き気概」というか、それが積もり積もって爆発したのです。そこまでに至る背景を抜きにしては、生きた歴史とは言えないのです。

例えば、忠臣蔵の物語があります。この物語でも、いきなり吉良邸の討入りからはじめたらどうで

しょうか。赤穂浪士は予告もせずに土足で吉良邸を「奇襲」し、すやすやと眠っている老人の首をはねたのですから、「忠臣蔵」どころか、武士の風上におけぬ「狼藉蔵」になってしまいます。

ところが「忠臣蔵」を、浅野内匠頭の殿中における刃傷事件からはじめ、主君を思う大石良雄ら四十七士が、粒粒辛苦の末やっと討入りに至ると、観衆は溜飲を下げ喝采するのです。

大東亜戦争の場合も、これと同じことが言えます。真珠湾奇襲から描くのではなくて、三百数十年にわたって欧米諸国がアジアを植民地にした時代背景から入る必要があります。その間、彼らがいかに老獪な手段でアジア諸民族から搾り取り、独立を求める蜂起をいかに峻烈に断圧していったか。

そうした中で、唯一の例外は日本でした。日露戦争では国家の総力を挙げて大国ロシアを破り、アジアの期待を集める国となりました。アジアにおいて確固たる独立国は日本しかなく、我が国は次第にアジアの安定に対して責任を感じるようになっていました。

欧米諸国は日本に対して、老獪な手段をもって次第に圧迫を加えてきました。こうしたアジア史の中に生きた日本であり、その帰結として戦われた大東亜戦争でした。真珠湾奇襲と緒戦における赫々たる大戦果を目の前にして、当時の日本人のみならず、アジアの諸民族はひとしく溜飲を下げ、快哉を叫んだのであります。

東条英機首相の歴史観

ここで唐突なようですが、関連した資料をひとつだけ紹介したいと思います。大東亜戦争の最大の

責任者として、極東国際軍事裁判（東京裁判）の法廷に立った東条英機（とうじょうひでき）元首相の言葉です。東条被告は、八日間にわたるキーナン検事やウェッブ裁判長の尋問が終った日（昭和23年１月７日）、清瀬一郎弁護人に対して、次のような心境を語っております。

〈この際特に申上げることはありませんが、私の心境はたんたんたるもので、ただ靖国神社の祭霊と戦争により戦災をこうむられた方々の心になって述べたつもりです。言葉は完全に意をつくしておりませんが事柄だけは正しく述べたつもりです。

もし私にここで希望を言うことが許されるならば、二つの希望が残っている。この裁判の事件は昭和三年来の事柄に限って審理しているが、三百年以前少なくとも阿片戦争までにさかのぼって調査されたら事件の原因結果がよく判ると思う。またおよそ戦争にしろ外交にしろすべて相手のあることであり、相手の人々、相手の政府と共に審理の対象となったならば事件の本質は一層明確になるでしょう。〉

東条被告は、歴史は長期的視野で、しかも多面的に見ることを訴えているのです。日本を裁くのなら、三百年以前、少なくとも阿片戦争（一八四〇年～四二年）までさかのぼって調べたら、大東亜戦争の原因がよくわかる、と指摘しているのです。そして、戦争の責任を日本にだけ押しつけるのではなく、戦争の相手国であった米・英の所業にも目を向けることを述べているのです。

大東亜戦争の全責任を背負って、キーナンやウェッブと一騎打ちをして「圧倒」した後の言葉であるだけに、教訓を汲みとることができるのです。

ヤスパースの『戦争の責罪』

ドイツの有名な実存哲学者であるカール・ヤスパース（一八八三年～一九六九年）は、東条被告よりもっと突っ込んだことを述べています。

彼は第二次大戦が勃発する前年の一九三八年、ナチスから大学を追放され、終戦まで執筆を禁じられていました。普通だったら戦争が終ると、占領軍に便乗して、ナチス批判の急先鋒になると想像されていました。しかし哲学者としての良心は、真理に対して忠実でした。

彼はドイツ敗戦の翌年、早くも『戦争の責罪(Die Shuldfrage)』(桜井書店刊）を著し、次のように述べています。

〈戦争は歴史を通じて存在し、なお幾多の戦争が切迫しているのをどうみるか。私はどう考えても、一つの民族だけが戦争の責罪を負わねばならぬ義務はないと思う。自分には罪がないなどというのは薄っぺらで、ゴマ化しの道徳意識だ。その証拠には彼らはすでに次の戦争の準備をし、これを促進しているではないか。〉

第二次ヨーロッパ戦争の口火を切った人物は、たしかにヒトラーでしょう。しかし、ヒトラーの出現を許したのは、彼個人の力量や「悪魔性」だけではありません。苛酷なるベルサイユ体制が、誇り高きドイツ民族を、がんじがらめに拘束し、経済も破綻してしまった。そこから脱出を願うドイツ人の悲願をうまく補足したのが、ヒトラーでした。

この原因や背景を無視して、ヒトラーやドイツにだけ戦争の責罪をおしつけ、自分だけを免罪にするのは、ヤスパースも言うように、ごまかしの道徳意識に過ぎません。

このヤスパースの指摘は、ニュルンベルク裁判でナチス・ドイツを断罪した米・英・ソに対する批判だけではありません。戦後の日本人への痛烈な批判でもあります。

敗戦後の日本人は、戦争の責罪は日本にだけある、と思い込んでしまった感があります。そのため戦争の責任は天皇にあったとか、当時の指導者軍人にあったとかの論が横行しました。これではまるで愚かな内輪喧嘩ではありませんか。ヤスパースの言う「薄っぺらで、ゴマ化しの道徳意識」というよりほかありません。

そもそも戦争は、相手があって起こるのです。日本が勝手に戦争を起こして、一人相撲をとったのではありません。そして日本は、東南アジア諸国を攻撃したのではなくて、そこを植民地にしている米・英を相手に戦ったのです。だから開戦の責任は日本にあったか、それとも米・英にあったかを論ずるべきです。

戦争の責任はどこにあるか――イギリスの教科書記述に見る

それでは、戦争の責任は日本にあったのか、米・英にあったのか。ここで想い起こすのはイギリスの教科書です。英国でもっとも多く採用されている中等教育用の教科書『世界の近代史』（一九八五年、ロングマン社）の第五章は、「二つの新興強国―アメリカ合衆国と日本（Two New Giant, USA &

Japan)」というタイトルです。
この教科書は、太平洋をはさんでほぼ同時期に、日本とアメリカの両巨人国が現われたというわけです。一八九八年、アメリカはスペインとの「米西（べいせい）戦争」（外国国名の表記では亜米利加と西班牙となるので）を契機として膨張を続け、太平洋からアジアにまで手をのばしてゆきます。それに対して日本は日清・日露戦争（一八九四年〜五年・一九〇四年〜五年）に勝利して、アジアのチャンピオンとなります。この両新興強国が宿命の対決をしたのが大東亜戦争（太平洋戦争）でした。
どちらが侵略であったか、そしてどちらに責任があり、加害者であったのか。そういう善玉・悪玉論ではなく、大局的・客観的に描いているのです。
イギリスの教科書は日本のものに較べて極めて長文なので、全文を引用できませんが、最初にアメリカの起こした「米西戦争」から入ります。まず冒頭に興味深い写真を載せています。それは一八九八年、米西戦争が勃発した年の二月十七日に発行した「ニューヨーク・ジャーナル」の巻頭記事です。この新聞は煽動的な記事を得意とする新聞ですが、派手な見出しをつけて、次のような趣旨を訴えています。
〈アメリカの軍艦・メイン号が、極悪非道の秘密兵器を使ったスペイン人によって爆破され、二百六十人のアメリカ水兵が死んだ。犯人を知らせてくれた者には五万ドルの賞金を払う。〉
この新聞は、メイン号を爆破したのはスペイン人で、二百六十人のアメリカ水兵が殺されたと断定していますが、実はその証拠はなかったのです。

そもそも当時のスペインは、アメリカと戦争する気はありませんでした。ところが新聞はスペインの仕業と決めつけて、犯人を知らせてくれた者には五万ドルの賞金を払うと公募したのです。この新聞を読んだアメリカ国民は激昂し、遂に米西戦争に踏みきったのです。やがて「メイン号を忘れるな」といふ合言葉が効を奏し、米西戦争はわずか八カ月足らずで終り、ハワイ、グァム、フィリピンを占領しました。あまりにもうまくいったので、アメリカはこの戦争を「すばらしい小戦争」と呼んでいます。

聡明なる読者は、ここまで読んでもうお気づきになりましょう。「メイン号を忘れるな」という合言葉は、やがて日米戦争で「真珠湾を忘れるな」というスローガンとなって甦ったことを。

5
Two New Giants
USA and Japan

Americans who read the *New York Journal* in the 1890s were used to sensational events because the paper's owner, William Randolph Hearst, believed in exaggerated stories. Seldom did he disappoint them with a dull or boring tale. Even so, they must have been surprised at a news item dated 15 February 1898. Apparently the US

'New York Journal' announces the sinking of the 'Maine', 1898

$50,000 REWARD.—WHO DESTROYED THE MAINE?—$50,000 REWARD.

NEW YORK JOURNAL
AND ADVERTISER

DESTRUCTION OF THE WAR SHIP MAINE WAS THE WORK OF AN ENEMY

$50,000!
$50,000 REWARD!
For the Detection of the Perpetrator of the Maine Outrage!

Assistant Secretary Roosevelt Convinced the Explosion of the War Ship Was Not an Accident.

The Journal Offers $50,000 Reward for the Conviction of the Criminals Who Sent 258 American Sailors to Their Death. Naval Officers Unanimous That the Ship Was Destroyed on Purpose.

NAVAL OFFICERS THINK THE MAINE WAS DESTROYED BY A SPANISH MINE.

イギリスでもっとも多く使われているロングマン社の中等教育用世界史教科書（第５章）の冒頭

この章は「新興二大巨人国，アメリカと日本」と題し，まずアメリカが「米西戦争」を勃発させたところから入る。教科書は，当時の「ニューヨーク・ジャーナル」の記事を掲げ，「アメリカの軍艦メイン号を爆破したのはアメリカ人だが，それをスペイン人が爆破したような煽動記事を書いて，戦争を挑発した」ことを紹介している。掲載されたこの新聞には「アメリカの軍艦メイン号が『極悪非道の秘密兵器』を使ったスペイン人によって爆破された。犯人逮捕につながる情報を提供した者には，５万ドルを与える」という提案が載っている。

＊

ここでついでに触れておきたいことがあります。アメリカが米西戦争を勃発させた手口は、「米比戦争」（比律賓＝フィリピン）でも使われたのです。

アメリカは、フィリピンを植民地にしていたスペインと戦うに当って、フィリピンのアルテミオ・アギナルド将軍以下に対して、「戦争に協力してスペインを追い払ったら、独立を認める」と約束しました。約束を信じてアギナルド軍は勇敢に戦ったのですが、もともとアメリカは独立させたくなかったのです。

一八九九年（明治32年）一月、米西戦争の講和条約が米上院で討議されている最中、マニラ付近のサンタ・アナ橋で夜間二発の発砲がありました。それをきっかけに米国は、三年にわたってフィリピン征服の戦争を続けたのです。フィリピンのアギナルド将軍は、遺憾の意を表したにも拘わらず、アメリカのオティス将軍は「発砲」をもって戦争の開始と見なしたのです。（アメリカのアジア通G・B・レー『満洲国出現の合理性』参照）

読者はここまで読んで、満洲事変の発端を想起されましょう。満洲事変は、関東軍の一部の軍人が鉄道を爆破し、さも中国人がやったように見せかけて事変を起こしたことが、極東裁判で明らかになり、今では日本の教科書にも一様に載るようになりました。アメリカも、日本のように敗戦して軍事裁判にかけられたら、メイン号を爆破した犯人も、サンタ・アナ橋の二発の銃声も、一部の米軍人の謀略であったことが曝露されましょう。

＊

さて話をもとに戻して、イギリスの教科書にかえりましょう。米西戦争に勝利したアメリカは、その後どのように変貌したか。教科書は次のように結んでおります。

〈事態は驚くべきスピードで進んだ。この予期せぬ戦争の結果、アメリカは太平洋の三千百四十一島を獲得し、七百万の原住民を支配下に入れた。アメリカ国民は自分の国が突然帝国主義国になったのを不思議に思った。そして一度帝国主義の道を歩みはじめると、停止することは難しかった。事態は連鎖反応を開始したのである。アメリカは太平洋と大西洋の二つの大洋に必要な海軍を布陣するようになった。〉

イギリスの教科書は、このように書いて、アメリカがたちまち帝国主義化し、アジアにまで手を伸ばすようになった経過を明らかにしているのです。

それでは一方、太平洋の対岸にあった日本の登場ぶりはどうか。イギリスの教科書は続いてアジアの新興国日本の記述に移ります。

日本は、アメリカがスペインを敗退させた「米西戦争」とほぼ同じ頃に、日清戦争と日露戦争に勝利します。イギリスの教科書は、特に日露戦争の推移を好意的に書いております。東郷平八郎のＴ字戦法により、「ナイルにおけるネルソン以来の大勝利を収めた」と激賞し、「日本は海外に領土を持つ帝国主義国となり、西欧に対するアジアの人々の明らかなチャンピオンとなった」と結んでいます。

このように、太平洋をはさんで、日・米の両新興強国が同時的に登場したことを書いています。や

がて日米両国の民族エネルギーが膨張し、アジアの覇権を求めて激突するに至るのです。どちらが善かったとか悪かったとかでなく、国際政治の宿命的力学を教えているのです。このような記述は、フランスの教科書にも見られます。

フランスの教科書──日米を対等にみる大人の史観

フランスの中等教育用教科書『歴史―フランス革命から今日の世界へ』(一九七八年、フェルナン・ナタン刊)はカラーをふんだんに使った、見て楽しい歴史の教科書です。

その第四巻・第十五章は「ヨーロッパ外の二つの新興強国・アメリカ合衆国と日本」です。この章は、表題のようにヨーロッパ外に二つの新興強国が現われたとして、アメリカと日本の登場ぶりを対照的に描いています。

まずアメリカの方は、左のページに、一八五五年頃のニューヨークの寒村ぶりをカラーの絵で示しています。摩天楼が林立した今日のニューヨークと較べて、今昔の感があります。教科書はこのような寒村に過ぎなかった米国が、フロンティア精神をもってインディアンと戦い、広大な地域を征服したことを表わすために、開拓者とインディアンの戦闘の場面を紹介しています。

アメリカが西部開拓から半世紀の間に、世界的役割を担うまでに強大な工業国家になったのは何故か。教科書は、モンロー主義を拡大解釈して、対外進出を打ち出したセオドア・ルーズベルト大統領(第26代、一九〇一年~一九〇九年まで2期)の言葉を引用しています。

15 Deux jeunes puissances extra-européennes : États-Unis et Japon

De l'autre côté du Pacifique, le Japon entre dans la voie du modernisme

フランスの中等教育用教科書『HISTOIRE』第４巻第15章
「ヨーロッパ外の２つの新興強国・アメリカ合衆国と日本」
太平洋をはさんで，新興の日米両国が対立してゆく伏線として紹介している。左頁が米側で，ニューヨークの寒村ぶりと，フロンティア・スピリットをもって西部に進出するアメリカを描いている。右頁が日本側で，忠臣蔵に代表されるサムライ（吉良邸の門を破った大高源吾）と，日露戦争の奉天大会戦で勝利して入城している絵（明治神宮聖徳記念絵画館所蔵）を併載している。

〈もし軍事上、商業上の覇権争いに於て、その地位を保ちたいと願うなら、我が国の国境外に勢力を打ちたてなければならない。〉

〈もし我々が厳しい競争を避け、命をかけて勝利を摑もうとしないなら、我我よりももっと大胆で、もっと強力な国民が、我々を追い越し、世界の支配権をその手に収めるであろう。〉

アメリカは米西戦争によってフィリピンを支配下におさめ、同年ハワイを領有していました。ロシアがアジアで勢力を伸ばしそうになると、陰に陽に日本に肩入れして、仲裁役まで買って出ました。日本が勝利し、アジアで覇権を握りそうになると、今度は日本の圧迫にかかりました。教科書はこの時代の「アメリカ帝

国主義」の考え方を、当時の舵取り役であったルーズベルト大統領に語らせているのです。
これに対して、近代日本の導入部はどうか。赤穂浪士の絵を掲げ、恐るべきサムライ戦士が、十九世紀半ばまで日本を支配していた、と解説しています。そして、このような古い封建的なサムライ日本が、明治維新を契機に近代化の道に突入し、四十年足らずのうちに大国ロシアに勝利したことを強調しています。その象徴的な資料として、奉天に入城する日本軍の絵を掲げた訳です。
そして教科書は、その後の日本の置かれた立場を、駐日フランス大使であったポール・クローデル（文豪の評価が高い）に語らせています。
〈日本はもともと資源に乏しく、増大する人口を抱えて、大国としての役割を果たすためには、強力な武装を整えなければならなかった。そして、工業、商業に力を入れ、競争に打ち勝つためには、あらゆる犠牲を払っても、中国市場を獲得しなければならなかった。〉
以上、英・仏二種の教科書を紹介しましたが、両者に共通していることは、①長期的視野に立っていること。②戦争を善悪の判断で見ずに、国家対国家の対立の帰結と見ていること。③そのため前掲のロングマン社の教科書などは、敵国のドイツ側でも、勇敢に戦った軍人や智謀の将には敬意を表しています。真珠湾攻撃でも、航空機に力を注いだ山本五十六（やまもといそろく）提督の先見性を評価し、淵田美津雄（ふちだみつお）指揮官の見事な攻撃ぶりを詳しく述べ、フチダの名前が四カ所も出てくるのには驚きました。それでいてこの教科書は、日本の真珠湾奇襲は失敗（石油基地と航空母艦を破壊できなかった）であった、と指摘しています。

明治天皇とハワイ王カラカワ

明治維新後、日本に救援を求めて最初に来日したのはハワイ王国のカラカワ王で、時は明治十四年であった。

カラカワ王は、

「アメリカの進出によってハワイの独立は危殆に頻している。何とかして、自分の姪のカチオラニー姫の聟君として、海軍兵学校在学中の皇族東伏見宮依仁親王をいただきたい。そして自分の後を継いでハワイに君臨していただき、日本の力でハワイの独立を守ってもらいたい」

と、内密に明治天皇に申し入れた。

さすがの明治天皇もこの申し出には驚かれたが、即答を避け、後日、外務卿をして「日本皇室にはそのような例はない」ということで辞退された。

ハワイには、明治初年より日本人が多く移住し、日本政府はハワイ政府と移民に関する条約を結び、正式な外交関係を有していた。明治二十三年（一八九〇年）の国勢調査では、全人口約九十万人のうちハワイ人四十万、シナ人十五万、日本人十三万、アメリカ人二十万、その他となっている。

しかし、アメリカは強引に併合工作を進め、日本はこれに対し、しばしば厳重に抗議をしたが、ついにアメリカはクーデターを敢行して王制を転覆させ、明治三十一年（一八九八年）これを併合してしまった。そしてここに大海軍基地を築き、アジア進出の一大根據地とした。これが真珠湾軍港（パール・ハーバー）である。

（宮内庁編『明治天皇紀』巻5参照）　【鈴木】

ついでに、大東亜戦争全体の記述では、東条英機（2回と写真）、山本五十六（6回）、山下奉文（写真）というように、軍人ばかりで書かれており、戦争の全貌が掴めて興味が湧きます。
ここで紹介した二つの教科書は、「帝国書院」が「世界の歴史教科書シリーズ」の中で全訳していますし、拙著『世界に生きる日本の心』には、原文も載せていますので、参照してください。

【名越二荒之助】

二　日露戦争直後からはじまった日米対決

遠因はアメリカのアジア侵出にあった

孫文とネルー

日露戦争は、世界史を転換させた大事件でした。

当時、ロシアは世界一の大陸軍国であり、イギリスに次ぐ大海軍国でした。ロシア帝国に対し極東の小国日本が宣戦を布告（明治37年）した時は、日本の同盟国であったイギリスも日本が勝つとは思わず、世界中が日本の敗北を予想していました。

しかし、その予想は見事に覆えったのです。日本という小人がロシアという巨人を倒したのですから、世界は驚倒しました。近代史において、有色人種が白色人種に初めて勝利したのです。

日本は死闘しました。大陸における最終決戦となった奉天会戦の規模は、ロシア軍三十二万、日本

軍二十五万、ロシア軍の損害約九万、我が方の死傷七万、日本は世界最強と称されたロシア陸軍を見事に撃破しました。海上では、遠くヨーロッパから回航し来ったバルチック艦隊を、日本海において数刻の間に全滅させました。この勝利は世界海戦史上、空前の完勝でした。

それまでヨーロッパ人の前に屈伏してきた全アジアの諸民族は、〝自分達もひとたび立ち上れば、ヨーロッパの植民地たる運命を脱することができる。ヨーロッパ人の搾取から解放される。みじめな白人の奴隷状態から脱出できるのだ〟と歓喜し、奮い立ちました。

アジアばかりか、ロシアに侵略されていた北欧のフィンランド、黒海を出てゆくロシアの艦隊を見送ったトルコ、あるいは中東のペルシャやアフガニスタン、アフリカではエジプトなどでも、日露戦争をきっかけに独立運動が起こりました。

革命中国の父孫文は、その時のことを、「大アジア主義」と題した有名な講演（大正13年・於神戸）でふれています。少し長くなりますが、大切な点ですので、そのまま引用します。

〈ヨーロッパの文化は進歩し、科学も進歩し工業生産も進歩し、武器もすぐれているし兵力も強大で、わがアジアにはとりえがないと考えた。どうしてもアジアは、ヨーロッパに抵抗できず、ヨーロッパの圧迫からぬけだすことができず、永久にヨーロッパの奴隷（どれい）にならなければならないと考えたのであります。――きわめて悲観的な思想だったのであります。――ところが、日本人がロシア人に勝ったのです。ヨーロッパに対してアジア民族が勝利したのは最近数百年の間にこれがはじめてでした。この戦争の影響がすぐ全アジアにつたわりますとアジアの全民族は、大きな驚きと喜び

話いたしましょう。

　日露戦争がはじまった年、私はちょうどヨーロッパにいましたが、ある日東郷大将がロシアの海軍をうちやぶり、ロシアが新しくヨーロッパからウラジオストックに派遣した艦隊が、日本海で全滅させられたことをききました。このニュースがヨーロッパにつたわると全ヨーロッパの人民は、父母を失ったように悲しみました。イギリスは日本の同盟国でしたが、このニュースをきいたイギリス人のほとんどいずれも眉をひそめ、日本がこのような大勝利をおさめたことは、結局白人の幸福ではないと考えたのであります。これは、ちょうどイギリスでいわれる Blood is thicker than water.（血は水よりも濃い）という考え方です。その後まもなく、私は船でアジアにかえることになり「スエズ」運河をとおるときに、たくさん土人がいまして、これはほとんどアラビア人でしたが、私が黄色人種であるのを見て、ひじょうにうれしそうな様子で、私に「お前は日本人か」と問いかけてきました。それに答えて「ちがう、私は中国人だ。何かあったのか、なぜそんなにうれしそうなのだ」といいますと、なんでも、ロシアがヨーロッパからまわした海軍を、日本が全滅させたということだ。そのニュースが本当かどうか知らないけれど、自分たちは運河の両側にいて、とおる船ごとにロシアの負傷兵がヨーロッパへ送られるのをよく見る。きっとそれはロシアが大敗した証拠にちがいない。これまでわれわれ東洋の有色民族は、いつも西洋民族の圧迫をうけて、苦しめられ浮かびあがれないが、こんど日本がロシアをまかしたのだから、東洋の民族が西洋の民族を、う

ちゃぶったことになる。日本人の勝ったのは、自分が勝ったようなものだと思う。これは本当に歓喜すべきことだ。だから自分たちは、こんなに愉快になり喜んでいるのだ」といっていました。──

日本がロシアに勝っていらいアジアの全民族は、ヨーロッパをうち破ることを考えるようになり独立運動がおこりました。エジプトに、ペルシャ、トルコに、アフガニスタン、アラビアに独立運動がおこり、インド人もこれいらい独立運動をはじめたのであります。〉（玉島信義編訳『中国の眼』所収の訳文から）

インド建国の父ジャワハルラル・ネルーはどうでしたでしょうか。彼は当時、十六歳の多感な少年でした。

〈日本の戦捷（せんしょう）は私の熱狂を沸き立たせ、新しいニュースを見るため毎日、新聞を待ち焦がれた。相当の金をかけて日本に関する書籍を沢山買い込んで読もうと努めた。（中略）私の頭はナショナリスチックの意識で一杯になった。インドをヨーロッパの隷属から、アジアをヨーロッパの隷属から救い出すことに想いを馳せた。（中略）五月の末（注—明治38年）に近い頃私たちはロンドンに着いた。途中ドーヴァーからの汽車の中で対馬沖での日本大勝利の記事を読み耽りながら、私はとても上機嫌であった。〉（『ネルー自伝（上）』）

アジア各国の志士達は続々と日本へやって来ました。支那（清国）から、フィリピンから、ベトナムから、インドから、祖国独立に熱血をたぎらせた青年達が、次から次へと日本に来ました。シナか

らの留学生は一万名にも達し、孫文はこれらを指導しました。アジア復興の正気は日本からえんえんとして燃え上ったのです。

白色人種の世界制覇

一四九二年、コロンブスは大西洋を越えてアメリカ大陸の一部に到着、一四九八年、バスコ・ダ・ガマはアフリカ大陸の南端を廻ってインド西海岸のカリカットに到着しました。一五二二年、マゼランは南米の南端を廻って太平洋に達し、その部下は世界周航を完成しました。

これからを大航海時代と言うそうです。が、これは白人の体裁よい呼び名です。事実は「大侵略時代」でした。鉄砲を揃えて軍艦に乗り、キリスト教の布教という名目で、ありとあらゆる悪業の限りをつくしアメリカ、アフリカ、太洋洲のすべてをその手中に収めたのです。

次いで、彼らの魔手はアジアへ向けられ、インド、ビルマ、ベトナム、インドネシアの独立王国が次々に滅ぼされてゆき、すべてがその植民地となり、中央アジア、シベリア、オーストラリアとても例外ではありませんでした。彼ら白人は有色人種を対等な人間として認めず、教育を与えず、最低の生活に放置し、その膏血を絞って、これをヨーロッパに送りました。これによってヨーロッパは繁栄を謳歌しました。

もっとも悲惨を極めたのは、アフリカの黒人でした。大規模な「土人狩り」が行われ、彼らは「家畜」としてアメリカへ送られました。アメリカの繁栄は、その膏血の上に咲いた花です。

全世界を席巻した白人に残されたのは、清帝国と朝鮮、日本でした。ここにおいて仕掛けられたのが阿片戦争（一八四〇年～四二年）です。これはもっとも不道義、非人道な戦争でした。老大国清は無残にも敗れ、支那はイギリス、フランス、ドイツ、ロシアにより分割されんとしました。これが日露戦争直前の世界でした。

この時、有色人種で危うく独立を保っていたのは、日本と清、タイ、エチオピアの四カ国のみでした。ただしタイは、英仏両国の植民地獲得戦争の緩衝地帯として危うく独立を保っていたに過ぎず、エチオピアはアビシニヤ高原の瘴癘（しょうれい）（風土病）の地にあり、彼らはそこまで手が届かなかったに過ぎません。かく観れば、日露戦争直前における有色人種の真の独立国は我が日本のみでした。

日本はこの弱肉強食の白人の魔手から何故逃れることができたのでしょうか。そのひとつの理由として、日本がはるか極東の東端に位置していたことによると説く人もありますが、それは真の理由にはなりません。

日本がよく独立を保ち得たのは、迫り来る白人の魔手に機敏に反応し、上下一体となって幕藩体制を清算し、明治維新を完遂し、近代国家へと逸早く転身し、必死懸命に国内体制を大革新し、西欧に対抗し得る体制を整えたからです。

日本は清国に対しても朝鮮に対しても、白人の侵略に力を合わせて対応すべく呼びかけましたが、この両国は老衰救い難く、なんら応えなかったのです。そのために日本は、独力をもってロシア帝国との決戦を強いられたのでした。

アメリカのアジア侵出とハル・ノート

日露戦争による日本の勝利に有色人種は歓喜しましたが、白人はそうではありませんでした。日本を応援した英国も米国も、いずれはこの日本が発展し、いつの日にか有色人種の旗頭になり、白人の世界征覇をゆるがすのではないかと危惧しました。そこでまず動き出したのがアメリカでした。

アメリカはアジア大陸への侵出がいちばん遅れた白人国ですが、まずフィリピンを植民地とし、ハワイを併合して大陸へ眼を向けた時はすでに時遅く、大陸へ入り込む余地はありませんでした。

そこでアメリカは、日露戦争の結果、ロシアの権益が日本に引き渡されたことに目を向け、日本を排除して満洲へ侵出しようと企てたのです。

南満洲鉄道は、ポーツマス講和条約（明治38年）でロシアから正式に日本へ譲渡されることになりましたが、アメリカの鉄道王エドワード・Ｈ・ハリマンは条約締結の最中に日本に渡り、日本政府に働きかけて、戦争で疲労した日本ではこの鉄道は維持できぬから、アメリカが買収して、共同管理にしようと、巧みに持ちかけました。戦争による膨大な借金を背負っていた日本政府は、この甘言にまんまと乗り、桂首相との間に満鉄共同管理に関する予備協定を結びました。

ハリマンは意気揚々として帰国しましたが、これとすれ違いにポーツマス講和会議から帰朝した外相小村寿太郎は、寝耳に水の桂・ハリマン協定に仰天しました。十万の同胞の命と二十億円の国費を犠牲にして得た満鉄を売却するのは、ロシアに代ってアメリカが満洲に入り込むことであり、白人の

アジア支配に手を貸すことに他なりません。日露戦争は何のための戦争であったかと、小村外相は大反対しました。この小村の正論が通り、日本は仮協定を破棄したので事なきを得ましたが、まったく危いところでした。

満鉄買収に失敗したアメリカはその後、手をかえ品をかえ満洲への侵出をはかってきます。明治四十年（一九〇七年）には法庫門鉄道案、明治四十二年には満洲銀行設立案、錦愛鉄道案と次から次へと働きかけてきました。翌四十三年には、アメリカの主張である門戸解放・機会均等の名分のもとに満洲の全鉄道を中立化し、日本の満洲での優位をくつがえそうとして満洲諸鉄道中立化案を発表しました。日本は必死に防戦して、ようやくこれを退けました。

次にアメリカは英、独、仏の三国を誘い、清国との間に四国借款契約に調印しました。これは、満洲での事業についての一切の金融企画の優先権を四カ国に認める、というものです。四国借款団は明治四十四年、ロンドンで公債を発行しようとしましたが、間もなく辛亥革命（一九一一年～一二年）により清帝国が崩壊し、ことなきを得ました。

＊

このように日露戦争直後からアメリカは満洲へ侵出しようとし、日本はこれを必死になって防ぎました。その後もアメリカは終始、日本を大陸から追い出す政策を貫きました。このことは、日米開戦の前夜、アメリカが日本につきつけたハル・ノートに明らかに示されています。

ハル・ノートは、アメリカ大統領の仲介で成立した日露講和条約をまったく無視し、遼東半島租借

権のみならず、全満洲から全軍隊、全警察の総撤退を要求しました。これは、日本は日清・日露戦争以前へ戻れという苛烈なものでした。

このように、日露戦争による日本の勝利はアメリカに中国大陸侵出の野望を抱かせ、迂余曲折を経て三十六年後にゆきつくところ、ついに日米の決戦となったのです。日本はこれを大東亜戦争と呼称し、アメリカは太平洋戦争と呼びましたが、この呼称に両国の戦争に対する認識が明白に現われています。アメリカは太平洋を越えてアジア大陸に侵出しようとし、日本はこのアメリカの侵攻を防ぎ止めんと一国の命運を賭して戦ったのです。

日本が大陸から撤兵していたら

戦後の史家は論じます。「日本は日露戦争に勝って、アジア大陸へ大きく一歩も二歩も踏み出した。そのために満洲事変が起き、これが日中戦争（正しい呼称は支那事変）、太平洋戦争（大東亜戦争）へと続き大敗した。日本はロシアから満洲での権益を得ることを辞退し、大陸へ侵出せず、四つの島に閉じこもっていたら、平穏無事であった。大陸へ足を踏み入れたから、日本は不幸な戦争を巻き起こしたのだ」と。この論には大方の知識人も賛成する者が多いので、一言します。

このような論は現実を無視した空論です。夢物語りですが、百歩譲って、日本がロシアの権益を受け継がず、そのまま引き下ったとしましょう。前後の事情からして、アメリカは必ず満洲へ侵出したでしょう。

当時、清帝国は阿片戦争以来、衰退に衰退を重ねていました。内・外蒙古はロシア、山東半島はドイツ、揚子江流域とチベットはイギリス、南支那はフランスというように勢力圏が確立し、もうひと押しで欧米勢力による中国大陸の分割は成功する状況でした。

一九一二年(明治45年)に清帝国は滅亡するのですが、その後、軍閥の抗争によって国内は麻の如く乱れ、中央政府は存在しませんでした。蔣介石が統一国家らしい政府を樹立するのは、清帝国滅亡から十六年もたった一九二八年(昭和3年)のことでした。日本が南満洲を押さえていなかったとしたら、白人列強は自分達の意のままに、アフリカで行ったように支那を分割領有してしまっていたでしょう。

そのようになっていたら、確かに満洲事変も支那事変も大東亜戦争も起こらなかったかもしれません。しかし、我が国への圧迫は必ずや別の形で加わり、全アジアに対する欧米の支配はゆるぎなく安定したものとなり、この体制は半永久的に固定し、現在に至るも続いていたでしょう。

これが冷厳苛酷な国際政治の力学なのです。われわれは為にする無責任な仮定論に惑わされてはなりません。

【鈴木正男】

三　アメリカの対日外交攻勢

パリ講和会議とワシントン会議

人種平等を提案して否決される

大正三年（一九一四年）から大正七年（一九一八年）まで戦われた第一次世界大戦が終ると、パリで講和会議が開催され、日本は戦勝国の一員として全権団を送りこみました。参加国は二十七カ国で、白人支配圏以外は日本と中国の二カ国だけでした。この会議は、講和会議と並行して、世界恒久平和のための国際聯盟の設立が大きな議題でした。

日本は国際聯盟の規約に人種差別の撤廃条項を入れることを強く主張しましたが、否決されてしまいました。この報が日本国内に伝わるや、世論は「白人の横暴」に憤慨、一致して「国際聯盟不参加」に変わったのです。その中心は、第一次大戦開戦時の首相大隈重信でした。彼は「人種平等は日

本の死活問題であり、列国がこれを認めないかぎり、日本の聯盟参加はありえない」とし、「人種差別撤廃期成同盟」を結成し、猛烈な運動を展開しました。日本の各新聞もまた「欧米の列強は恒久平和のための国際聯盟と理想をふりかざしながら、その実、国際聯盟によって現状を固定し、日本の擡頭を妨害しようとしている」と論じました。正にその通りでした。

日本は聯盟規約最終委員会に動議を提出しました。それは「諸国民平等の原則」という言葉を規約本文でなく前文に挿入するという、当初の提案から大きく後退した案でしたが、これも否決されてしまいました。

時の首相原敬は決断を求められました。その決断とは、人種平等を否決した国際聯盟に参加するか、しないか、でありました。日本の世論は決定的に不参加です。しかし、原首相は米英に屈し、世論を押さえて参加の調印に踏みきりました。

日本は有色人種の旗手として、世界の檜舞台で堂々と人種平等の正義の旗を翻えしたのですが、その旗は無残にも破り捨てられ、残念ながら米英を中心とする白人に押さえ込まれたのです（確かにパリ講和会議では日本の主張は通らなかったが、第二次大戦後の昭和二十三年〈一九四八年〉に開かれた第三回国連総会では、「世界人権宣言」が採択され、今や「人種差別撤廃」のみならず人権尊重は天の声となった）。

ワシントン会議による日本押さえ込み

アメリカが日本押さえ込みのために次に打った強打は、大正十年（一九二一年）のワシントン会議

でした。アメリカの目的は、次の三つでした。

第一は、軍縮を行って日本の海軍力を押さえること、第二は、日英同盟を廃棄させること、第三は、満洲における日本の特権を認めた石井・ランシング協定（大正6年・一九一七年）を廃棄し、中国の領土保全につき新条約を結ぶことでした。

会議はアメリカの主導で進み、日本は戦艦保有について、対米英七割を主張しましたが、アメリカとイギリスは一歩も譲らず、遂に「米国五、英国五、日本三」の比率を呑まされました。そして、太平洋での問題の紛争は外交的手段で解決するとした四カ国条約（日・米・英・仏）が結ばれ、明治三十五年以来二十一年間続いた日英同盟は廃棄されました。次いで、支那の主権と領土保全・門戸解放・機会均等の原則を承認した九カ国条約（米・英・日・仏・伊・蘭・ベルギー・ポルトガル・支那）が結ばれ、石井・ランシング協定も廃棄されてしまいました。

これで日本は、満洲における優先権のすべてを放棄させられたのでした。会議はアメリカの完勝、日本の完敗に終りました。

ロンドンの王立国際問題研究所は、この結果について

〈英語を国語とする諸国は、日本を難攻不落と見えた地位から、巧妙な策謀によって一歩一歩押し出してしまった。〉

と評していますが、正にその通りでした。

では、日本はなぜ外交的敗北をしたのでしょうか。それは、国内の便乗的雰囲気もありましたが、

アメリカが日本を満洲から叩き出す手段として、支那を巧妙に操ったからであります。

当時、支那の政権は南北に分裂し、中央政府は存在せず、外債は支払えず、国家としてまったく無能でした。アメリカは支那のためにシナリオを書き与え、支那はアメリカにとり入るためにあらゆる努力をしました。この支那とアメリカの共同作戦に日本は手も足も出ず、見事に完敗したのでした。

この結果、支那は増長し、これ以来、無鉄砲なナショナリズムに走り、排日・侮日が渦を巻きはじめたのでした。

【鈴木正男】

四　日米協調時代の欺瞞性

スタール博士の慧眼

幣原の「平和外交」に警告

第一次大戦が終り、ワシントン会議（大正11年・一九二二年）から満洲事変（昭和6年・一九三一年）までの十年間は、日米協調時代でした。それを代表したのが幣原平和外交であり、「よき時代であった」と現代では考えられているようです。しかし、果たしてそのように断定できるでしょうか。

ワシントン条約は、日本がアメリカの遠大なる謀略に組み込まれるとして、当時の日本には次のような強力な反対勢力もあったのです。

①　ワシントン会議で締結された海軍軍縮協定で、米・英・日の主力艦比率を五・五・三に決めることとは不当極まる処置である。

②　同時に結ばれた「中国に関する九カ国条約」の締結国は、日本を除いて欧米諸国ばかりである。これらの国々はシナに対して直接の利害が乏しく、近接した大国ソ連は加盟していない。それにシナ大陸は、国家として充分な機能を果たしているとは言えず、排日運動が盛りあがりつつある。これらを考慮しない条約締結は、日本の手足を無期限に縛ることになる。

というのが反対の理由でしたが、これらの主張は国論を決定するまでに至りませんでした。敗戦後の日本では、戦前の対米強硬派に対して、「国際協調精神に乏しい頑迷なる攘夷派」のようなレッテルが貼られました。ところが、「あの当時の日本外交の軟弱なる譲歩主義が、将来必ず禍根を残す」と警告したアメリカの学者がいたのです。

　その学者はフレデリック・スタール博士（一八五八年～一九三三年）という人類学者です。日本人以上に日本の伝統を愛し、自ら「寿多有（スタール）」と名乗り、日米の架け橋となった人です。

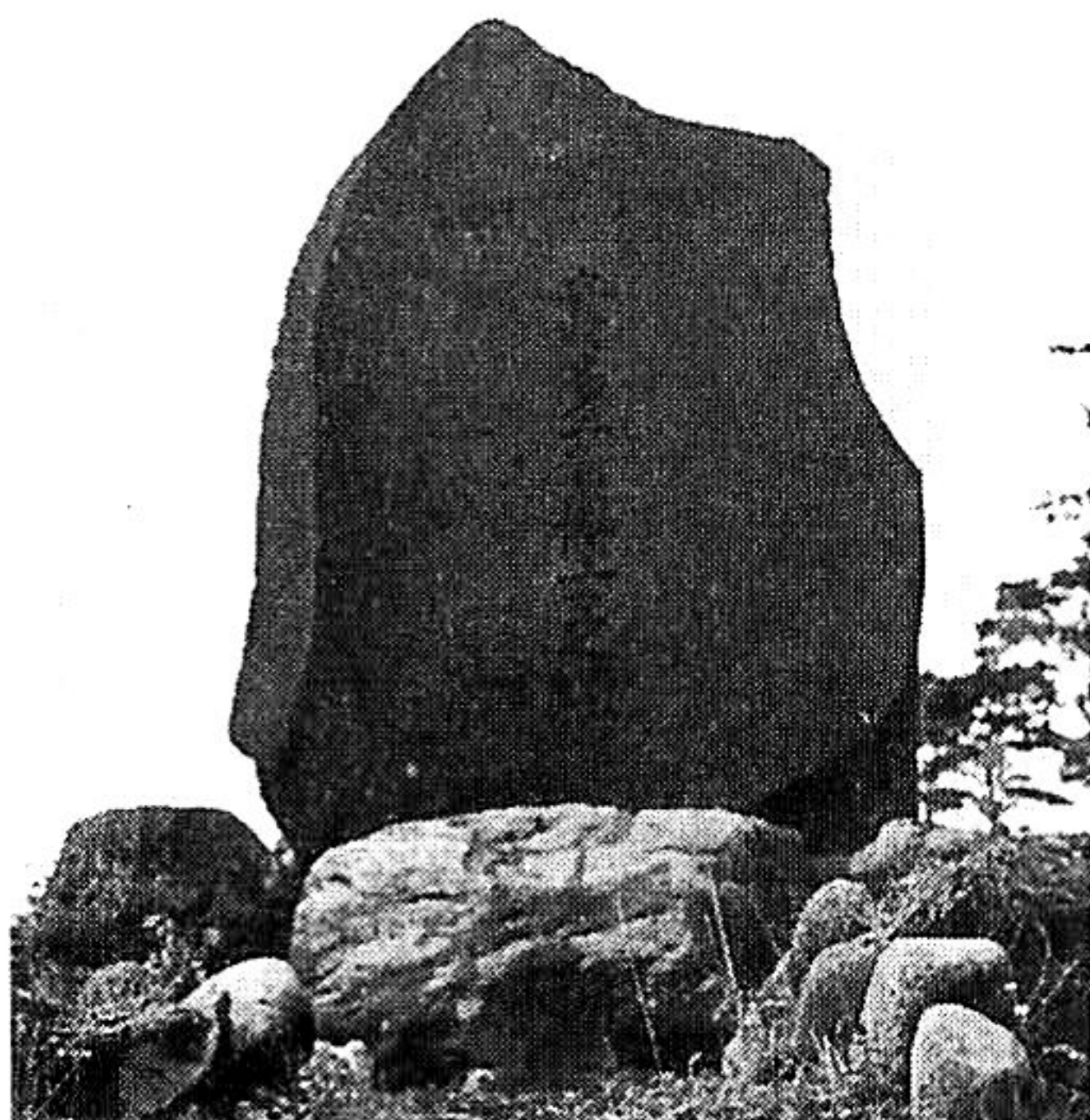
生涯独身で通し、シカゴ大学に「日本学講座」を設けたほどの知日家でした。特に神社・仏閣にある千社札（せんじゃふだ）に興味を持って、納札会の会員になり、「お札博士」など十数種のお札を作って、各地の神社仏閣に収めました。富士山をこよなく愛し（登山5回）、昭和八年、東京聖路加病院で亡くなりました（74歳）が、遺言に従って、墓は富士の登山口として知られる須走（すばしり）に建立されています。

親愛なる日本国民諸君へ

そのスタール博士は、大正十三年（一九二四年）に、「排日移民法」が米議会に上程された時には、

「日本人だけを差別する移民法は、人道を無視するもの。しかも関東大震災後、日本が困っている時にこのような法律を制定することは、米国の建国精神に反する」として反対したのであります。

博士の真面目（しんめんぼく）は、昭和五年（一九三〇年）十月十九日、東京中央放送局から「去るに臨みて・親愛なる日本国民諸君へ」と題して行った講演の中に現われています。約三十分の放送でしたが、日本人に深い感銘を与えました。

博士は放送の前段で、「日本に美しい文化伝統があるにも拘わらず、外国との接触によって、三文の価値もないものを輸入して喜んでいる。日本婦人は典雅にして謙譲の美風を忘れて、もっとも下卑た米国婦人の真似をして粗野に流れつつある。青年男児は日露戦争の如き剛気勇武の風を失って、柔弱に流れている」というように、当時の軽薄なる時代風潮を憂えています。博士が放送したのは昭和

スタール博士の墓碑
静岡県須走の富士山のよく見える場所に巨大な Dr.FREDERICK STARR（寿多有博士）の墓碑が建っている。碑文は徳富蘇峰によって書かれ，昭和９年11月11日の除幕式には斎藤実元首相も出席。

地元にはスタール博士の遺徳を偲び，遺影と著書を供えてお祀りしている人や「寿多有博士顕徳会」もある。

五年、即ち満洲事変が勃発する一年前の様子を語っているのですが、さながら現代の日本を髣髴とさせます。そして後半は「日本は外交で譲歩するなかれ」と題して次のように述べております。「さわり」のところだけ紹介しましょう（昭和9年、博士の墓碑除幕式当日に配布された印刷物から）。

〈日本は今や過去の孤立鎖国の域を脱して、世界の列強の一つとなった。日本は世界の進歩発達に際して真のリーダーとなるべき幾多の機会を有したが、勇気と確信を欠きたるためにしばしば絶好の機会を失ったことは痛嘆の至りである。日本はこの大責任を果たさんためには高遠の理想と、高尚なる目的と、確乎不抜の決断と、特別の智慧を有たねばならぬ。今日何れの国家と雖も利他的なものはない。また、これを期待することは愚である。日本は国際親善の精神と正義の観念とをもって、自主的見地から勇往邁進せば、反って世界の尊敬を受け自然のリーダーとして立つことができると信ずる。（中略）

日本は一八九五年の日清戦争以来、常に外国の圧迫に対して譲歩に譲歩を重ねて来た。日本は他国の要求及び意志に従はんとして常に国家の重大事に関して譲歩したのである。私は日本の譲歩の動機は国際協調及び国際親善のために寛大なる態度に出でたのであろうと信ずる。しかしながら、かかる政策が繰り返されたならば、外国はこれを目して日本は国際親善の目的に非ずして、むしろ自己の行為または判断の不当を容認せるか、然らざれば卑怯に基因せるものなりと誤解し、その結果、日本を軽蔑するやうになって来るのである。斯様に推移して行くならば、日本は将来必ずや国権を主張せねばならぬ機が到来するであろう。然しながらその時は、日本の主張が有効となるには

あまりに遅過ぎるのは遺憾である。要するに日本の諺に「後悔先に立たず」という名言がある。
今これを例証せんとせば、米国の排日移民法通過の際の日本の態度の如きはその適例である。日本政府当局者は何故に日本国民の名誉のために、且つ正義人道のために、正々堂々と日本の正当の主張をなさなかつたか。米国との親善を希望して米国に遠慮し、最後まで日本の主張を率直に米国民に披瀝しなかつた故に、反つて不幸なる結果を招来したのである。
日本はワシントン会議に於て日本の国防上多大なる犠牲を払って大譲歩を為した。国際関係に於ては国家と国家との間は対等であらねばならぬ。然るに日本は何故にワシントン会議に於て、自ら進んで世界列国環視の前で、巨艦に於て対英米六割の比率を承認して自国の劣等なることを制定する条約に調印したのであるか。（中略）
親愛なる日本国民諸君、今や日本を去るに臨んで諸君に希望する。諸君は光輝ある日本帝国の伝統を基礎にして、日本国民の美徳を涵養せられ、日本文明の精華を発揮すると共に、米国及び世界から多くの長所美点を採用し、以て日本をして東亜に於てのみならず、太平洋時代に於ける真の世界的リーダーたらしむべく努力せられんことを切望して止まない。〉（笠井重治訳）

現代の日本にこそ当てはまる助言

ここでは、博士が外交問題に触れた一部を紹介したに過ぎません。彼は米国人であるにもかかわらず、その頃の国際社会を生きる日本の立場を理解して述べております。

これを読んでいると、当時の時代背景がわかり、日本が米英に次第に追いつめられてゆく状況が手にとるようにわかってきます。

しかもこれは六十余年前、即ち半世紀以上も昔のものですが、これは前段の内容と同様、そのまま現下のわが国の政治外交状況に対比させても当てはまる警告となります。

「歴史は繰り返す」と言いますが、講演の中に出てくるワシントン会議、アメリカによる排日移民法、そして、ロンドン会議の頃の日本は、協調外交のもと平和主義を謳歌し、軍人が軽蔑され制服で表を歩けなかった時代。今の日本は、あの当時と同じように哲学なき「平和外交」であります。外国の干渉によって教科書問題、靖国神社問題、藤尾文相の発言による辞任、お詫び外交等々、ことごとく譲歩に譲歩を重ねています。世は見せかけの太平ムード、自衛隊員が制服を着て闊歩できない世相、何とよく似た状況ではありませんか。

かつての日本は、スタール博士が予言したように、軟弱外交が次第に追いつめられて俄に硬化し、遅まきの反撃に転じ、墓穴を掘る結果となりました。賢明な民族であるなら、平素から勇気と識見をもって堂々と外交交渉において渉りあい、後顧の不安を除去することができるのであります。

第二の轍を踏まないように、スタール博士の助言に、もう一度耳を傾けたいものです。

【名越二荒之助】

五　満洲事変は起こるべくして起こった

国際聯盟離脱の原因

幣原外交と満洲の混迷

昭和五年（一九三〇年）にスタール博士が指摘したように、当時の日本男性は日露戦争当時のような剛気勇武の気風を喪い、婦人は下卑た米国女性の真似をして、外交はまた米英追従の軟弱ぶりでした。確固たる外交の哲学がなく、五・五・三の比率を全世界注視の中に呑んでしまいました。続いて起こったアメリカの対日移民法に対しても打つ手がなく、隣国の支那はすっかり日本の手のうちを読んでいました。その支那に手を貸したのが、幣原外交でした。

幣原喜重郎外務大臣は、大正十三年六月から昭和二年四月までの三年間と、昭和四年七月から昭和六年四月までの二年間、五つの内閣で都合五年間その任にありましたが、その対支外交方針は、

でした。

① 対支内政不干渉の徹底

② 支那現状に対する寛容と同情

内政不干渉ですから、張作霖が北京に進出しようが、蔣介石の革命軍が北上しようが、支那が赤化しようが、干渉しませんでした。眼にあまる国際条約違反行為があっても、通り一遍の抗議をするのみで、何もしません。そのため日本はなめられて、行きつくところ最悪の事態に追いつめられ、最終的に日本は満洲から叩き出される寸前に立ち至ったのでした。

支那側は、満鉄（ポーツマス条約によって、我が国が南満洲鉄道株式会社を設立して経営した鉄道の略称。「満鉄」は炭鉱や港湾等も経営していた）を自滅させるため条約に違反して満鉄並行線を作り、大連港に対抗して胡蘆島に築港を完成させ、当然のこととして満鉄は赤字経営に転落しました。

日本人に対する暴行迫害もその極に達し、日本人小学校は無期休校、または廃校の止むなきに至りました。万宝山事件、中村大尉殺害事件を頂点に、未解決事件は実に二百四十件にも達し、支那側はますます狂暴化し止どまるところを知りません。

その結果、内地人、朝鮮人合わせて百三十万人に達していた在留邦人は百万人に減り、在留する者は日本へ帰る方途なく、生命の危険におびえつつ止むなく踏みとどまっていたのでした。

犠牲者が三十万人も出た背景のもと、昭和六年（一九三一年）、満洲事変は自衛のため起こるべくして起こったのでした。

リットン報告書と国際聯盟離脱

満洲事変が起こると、支那はこれを国際聯盟に提訴しました。国際聯盟は、イギリスの代表リットン卿を団長とする調査団を満洲に派遣しました。イギリス、フランス、ドイツ、アメリカ、イタリアの五カ国、二十人からなる調査団は、昭和七年二月末日東京に到着、次いで大陸各地を視察し、北平（北京）で報告書の起草にかかり、昭和七年八月三十日にこれを完成しました。

調査委員の報告書は膨大なもので、英文で一四八頁、全十章、うち八章までは歴史叙述と事実認定にあてられ、阿片戦争から説き起こし、さながら支那の近代史を読む観があり、日露戦争後の日本の満洲進出、支那の抵抗を述べ、結論として、事変解決のために次の調停案を提出しました。

一、柳条湖事件以前への「原状回復」も「満洲国の承認」もいずれも問題の解決にならない。

一、外国人顧問（国際聯盟理事会が派遣）の指導のもと、広範な行政権を持った自治政府を支那の主権下に樹立する。

一、満洲を非武装地帯とし、国際聯盟の助言を得た特別警察が治安維持に当る。

一、日支両国は相互不可侵・相互援助の条約を締結し、もしソ連がこれに参加を求めなければ、別途三国協定を結ぶ。

これは満洲の中立化であり、国際管理です。支那からも日本からも満洲を取り上げ、国際管理を提案したわけです。国際管理といえば体裁はよいのですが、実質は国際間の実力者アメリカの管理下に

置こうと言うものでした。
アメリカは、この案が成立すれば労せずして満洲を手に入れることになります。アメリカの野心を見抜いている日本としては、この調停案を承諾するわけにはいきませんでした。
採決が行われ、国際聯盟案に賛成四十二、反対一、棄権一という結果でした。棄権はアジアの国タイでした。この案を服めない日本としては、国際聯盟を脱退せざるを得ませんでした。
しかし、ここで留意すべきは、『リットン報告書』中の次の指摘です。
〈日本は、シナの無法律状態により他の何れかの国よりも苦みたり。シナにおける居留外人の三分の二以上は日本人にして、満洲における朝鮮人の数は約八〇万を算す。故に現在の状態においてシナの法律、裁判及び課税に服従せざるべからずとせば、これにより苦しむ国民を最も多く有する国は即ち日本なり。日本はその条約上の権利に代るべき満足なる保護が期待し得られざるに於ては、到底シナ側の願望を満足せしむること不可能なるを感じたり。(中略)
　前掲各章の読者にとりては本件紛争に包含せらるる諸問題は往々称せらるるが如く簡単なるものに非らざること正に明かなるべし。即ち問題はむしろ極度に複雑なるを以て一切の事実及びその歴史的背景に関し十分なる知識あるもののみ、これに関する決定的意見を表明する資格ありといふべし。本紛争は一国が国際聯盟規約の提供する調停の機会を予め十分に利用し尽すことなくして他の一国に宣戦を布告せるが如き事件にあらず。また一国の国境が隣接国の武装軍隊により侵略せられたるが如き簡単なる事件にもあらず。何となれば満洲に於ては世界の他の部分に於て正確なる類例

の存せざる幾多の特殊事態あるを以てなり。〉（外務省仮訳『リットン報告書』）

満洲国を認めない『リットン報告書』でさえ支那の無法律状態を認め、それにもっとも苦しんだのが日本だと認めています。ですから日本の行動を「侵略」と断じていません。「武装軍隊により侵略せられたるが如き簡単な事件にもあらず」、つまり「一切の事実及びその歴史的背景」や「特殊事態」に照らしてみれば〝やむを得ない軍事行動〟だったと認めているのです。

日本の教科書はいずれも満洲事変を「侵略」と記していますが、これは重大な誤りです。当時の世界の世論を代表した国際聯盟の指摘する線に訂正すべきです。

満洲事変後に成立した「満洲国」は、五族協和のスローガンのもと、驚くほど順調に成長し、世界の注目するところとなりました。

【鈴木正男】

六　日本の立場［満洲事変・国際聯盟離脱］を理解した外国の碩学たち

G・B・レー、J・トーランド、R・C・カルルギー

満洲国傀儡論を徹底批判したジョージ・ブロンソン・レーの『満洲国出現の合理性』

戦後日本では、満洲事変後の歴史を否定的に見ることが、過剰と思われるばかりにあふれています。欧米がアジアを侵略したことは「進出」と言い、日本の戦争に対しては「侵略」のレッテルを貼るようなアンバランスぶりです。歴史書や百科事典あたりでも、満洲国には「傀儡国家」とか「偽国」と書いていますが、ソ連の衛星国やその他傀儡と思われる国家には、この言葉は使いません。

そんな例を見るたびに思い出すのは、アメリカのジャーナリストで、中国在住三十二年のG・B・レーが書いた『満洲国出現の合理性』（昭和11年、田村幸策訳）の大著です。この本は豊富な支那在住体験と、あらゆる文献を駆使したもので、著者の博覧強記ぶりには驚くほどです。二、三紹介すれ

ば、満洲を「傀儡国家」と呼ぶことを批判して、次のように述べています。

〈世界は満洲国を呼んで、〃傀儡国家〃であるといふ。満洲国人自ら政治の術に巧ならざりしが為に、肇国当初日本人専門家の友好的援助を受けて新国家を組織したのである。それを傀儡といふなら、世界には無数の傀儡国家が存在することになる。〉

彼はこのように述べて、世界の傀儡国家の例を挙げています。そうすると、自力で独立している国はだんだん少なくなってきます。満洲を傀儡国家として攻撃している「支那共和国」自身も傀儡国家になってしまいます。

あの当時日本人には、五族協和の王道楽土を建設するという、満洲への大きな夢がありました。それは欧米流の植民地ではなく、それ以前にソ連がモンゴルに対して行った共産主義に基づく衛星国家

ジョージ・ブロンソン・レー
（1869―1936）

彼は上海で月刊英文雑誌「ファー・イースタン・レヴュー」誌の社長兼主筆であった。満洲国成立後は，外交部顧問となり，母国アメリカで満洲国の正当性を訴えた。ここに紹介した『満洲国出現の合理性』（田村幸策訳）の原書は『Case for Manchoukuo』で，昭和10年（1935年）ニューヨークとロンドンで発刊された。アジアにおける日本の立場をこんなに深く理解したアメリカのジャーナリストが，現在の日本であまりにも知られていないことは残念というよりほかない。

化でもなかった、必然性も合理性もあった、その点を指摘しています。

その他紹介すれば際限もないのですが、もう一点だけ触れておきましょう。昭和七年四月、国際聯盟からリットン調査団が派遣されました。調査団は、満洲の多数の住民が支那人または支那系満人であることから、支那人が満洲の主権を当然に獲得する権利があるように報告書で述べております。それに対してブロンソン・レーは次のように反駁しています。

〈支那本部からいかに支那人が満洲に移住しても、満洲に対して権利を獲得するものではないことは、恰もスペインの移民がラテンアメリカ諸国にスペインの主権を樹立し、ブラジルにポルトガル、アメリカにイギリス、ケベックにフランス、ハワイに日本、シンガポールに支那の主権を樹立し得ないのと同様である。もし植民もしくは移民したものの数が原住民の数を超えたという事実が主権を伴うことになれば、日本は同一論法をもってハワイ群島に対する主権を主張するかも知れない。〉

当時、ハワイの全人口は三十六万。そのうちアメリカ人は二万二千、それに対して日本人は十四万七千人もいました。

レーは詳しくハワイと満洲を対比しながら、「アメリカには、日本が満洲でとった政策を判定する資格はない」と厳しく批判するのです。その他、ソ連に言及しつつ「軍国主義日本が、世界平和の脅威になるというのは、ソ連の宣伝であり、本当の軍国主義国はソ連である。これまでアジアで果たしてきた日本の役割を忘れてはならない。支那やソ連に同情するあまり、日本を孤立化させ、発展を阻

害してはならない。日本こそはアジア安定の礎であり、共産主義の防波堤だ」という趣旨を、繰り返し述べております。

アメリカの矛盾を鋭く抉ったジョン・トーランドの『大日本帝国の興亡』

日本を孤立化させ、叩き過ぎることは、アジアのバランスを崩し、共産主義の進出を許すことになるとして警告したアメリカ人は多かったのです。

アメリカの参謀本部で戦争計画の立案に一時携わったこともあるウェデマイヤー大将は、その著『ウェデマイヤー回想録』の第一章「第二次大戦前奏曲」の中で〈参戦に反対する米国民〉の項目を設けて、それらの人々の言説を紹介しています。著者のウェデマイヤー大将、リンドバーク大佐、フ

ジョン・トーランド
1912年，アメリカ生まれ。アラスカ大学卒業後ノンフィクションの世界に入る。妻は日本人。本書で紹介した『The Rising Sun』（邦題は『大日本帝国の興亡』）に続く問題作は『Infamy（破廉恥）』（邦題は『真珠湾攻撃』）。この中で彼は，アメリカの情報操作によって日本が開戦のわなにはめられた事実を発掘。現在は昭和天皇崩御に至る壮大な戦後史を書いている。日本に対する氏の警告は，「昭和天皇に代わる求心力を“パックス・ジャポニカ”は見出せるか」という点にある。

ーバー元大統領、エール大学のニコラス・スパイクマン教授等は、いわばアメリカの反戦派であり、反共派でした。これらの人々はルーズベルト大統領の路線を、戦争挑発派、親英・援ソ派として攻撃していました。彼らはドイツと日本を抹殺すれば、その後に共産主義ソ連の大進出を許すと警戒し、運動を続けていたのです。

ここでは、日本でも著名なノンフィクション作家ジョン・トーランドの『大日本帝国の興亡』（一九七一年度ピューリッツァ賞）の中から、排日移民法や満洲事変についての見解を紹介してみましょう。著者トーランドは、当時のアメリカの政策を次のように批判しているのです。

〈一九二四年（大正13年）、アメリカ議会が日本人のアメリカ移民を禁止する移民法を可決すると、世論の支持を受けるようになった。この法案の成立は、傷つきやすい日本人の誇りに対する作為的な挑戦として受け取られ、（日本の）親米派であった人々でさえも動揺せざるをえなかった。ある日本の高名な学者は「日本はあたかも突然、なんの前触れもなく、親友に頬を打たれたように感じた。移民法が改正されることも、廃棄されることもなく年月が過ぎてゆく。それは、いつか個人および国家間のつき合いにも現れてくるほかないだろう――、われわれの屈辱感を高ぶらせていくだけである」と言っている。

日本の満洲奪取と北支への侵攻に対して、アメリカがさらに激しい言葉を用いて日本を弾劾するようになると、両国の間の溝はいっそう深まった。この道義的な原則に基づくアメリカの非難は、逆に日本の一般国民の結束を固めるだけであった。なぜ、アメリカではモンロー主義の存在が許さ

れるのに、アジアに対して「門戸解放」の原則を強制しようとするのか？　日本が匪賊の跋扈する満洲に乗り出すことは、アメリカがカリブ海に武力介入するのとなんら変わらないではないか？(注１)そのうえ、どうしてアメリカのような広大な国家が第一次大戦以来、日本の発展を阻んできたいろいろな問題を理解できると言うのだろうか？　イギリスやオランダがインドや香港、シンガポールおよび東インド諸島を領有することはこれを完全に認めることができるが、日本が彼らのまねをしようとすれば罪悪であると糾弾する根拠はどこにあるのか？　なぜ、インディアンに対して術策を弄し、酒を使い、虐殺をして土地を奪ったアメリカ人が、日本人が中国で同じことをしたからといって、指をさすことができるのだろうか？(注２)

（注１）アーノルド・トインビーは一面では、このような主張の正当性を認めている。後日彼は「日本の満洲に対する経済進出は、日本が国際社会で存立してゆくのに不可欠であったので、けっして貪欲な行為とは言えない……国民党に率いられる中国と、ソ連と、太平洋にあった人種偏見の強い英語国民が日本を圧迫すると、日本の国際的地位は再び危いものとなった」と述べている。

（注２）グルー大使は、このような議論をめぐって一度、国務省へこう意見を具申したことがあった。「現実は、遺憾ながら国際道徳を律し、諸国が安全を託せるような有効で、実際的な法規も存在していないし、一国がそれぞれ置かれている情勢によって、道徳律は変化するので、諸国間には個々の人間の間に存在するような共通な道徳律はない。そこで、もしわれわれが他国も現在われわれがもっているのと同じような国際道徳に照らして行動していると考えて、外交政策をたてるのは不健全であり、必ず失敗を招くだろう」。〉

リヒァルト・クーデンホーフ・カレルギー伯の国際聯盟批判

今から数年前、NHKテレビがオーストリアの貴族（伯爵）であるクーデンホーフ一家の特集番組を放映したことがあります。現在のEC（ヨーロッパ共同体）の理論的基礎を作ったクーデンホーフ・カレルギーという碩学の母は、実は日本女性だったのです。

彼の父ハインリヒ・クーデンホーフ・カレルギー伯がオーストリアの駐日公使館に勤めていた頃、青山光子という日本女性と結婚して、一八九四年（明治27年）に生まれた次男がカレルギー博士（日本名エイジロウ、国際法）でした。クーデンホーフ・光子は七人の子宝に恵まれ、テレビでは七人の子供がそれぞれ国際的活躍をしている華麗な模様が放映されました。

カレルギー伯は東京で生まれ、大成してからもたびたび来日しています。来日中に何を語ったかは、『クーデンホーフ・カレルギー全集』（鹿島出版会）や『クーデンホーフ光子伝』（同）に詳しく出ています。

しかしこれらの翻訳書には、戦前日本が困難な歩みを続けていた頃、彼が日本をどう見ていたかは載っていません。たまたま『続・満洲事変』（みすず書房）を読んでいたら、遠藤三郎論文（昭和21年3月に書かれたもの）の中に当時書かれたカレルギー伯の論文が引用されていました。

伯は、満洲事変から満洲建国、そして国際聯盟離脱に至る日本の歩みに深い理解を示し、日本の使命を高らかに謳いあげていたのです。おそらく、彼が四十歳に近い頃の論文と思われます。遠藤氏が

引用した原文を見つけることができず、孫引で恐縮ですが、論文は次のような文章ではじまっています（句読点があまりないので適宜附した）。

〈日本は国際聯盟で鄭重なる言辞を以て、而も強硬なる行動を以て世界に対し「満洲より手を引きなさい」と叫んで居る。日本は第三国の干渉や仲裁を用ひずに、直接の商議を支那との間に開かんことを要求して居る。即ち日本は、極東に於ける「モンロー」主義を要求して居るのである。支那は此の「モンロー」主義に反対して居る。恰も羅典（ラテン）アメリカ諸国が米国の「モンロー」主義に反対して居る様に。併し、米国及英国の「モンロー」主義を承認して居る国際聯盟が単（ひと）り極東「モンロー」主義だけを拒否し、亜細亜を無制限に聯盟の権力下に置かんとすることは困難であらう。

日本の占領以前の満洲は蒙古や西蔵（チベット）と同じく、何等重要さもない、人口稀少な支那辺境の一州に

クーデンホーフ・カレルギー伯
（1894―1972）
本書に紹介した原稿をまとめた1934年頃の写真（40歳）。伯は1923年にヨーロッパ統合のバイブルと言われる『パン・ヨーロッパ』を出版。26年には「パン・ヨーロッパ・ユニオン」の総裁となる。現代ではヨーロッパ共同体（EC）の生みの親と仰がれている。戦後も何回か来日して講演した。講演集『大陸日本』の一節。「日本こそ明日の平和文明の中核である。皇室の伝統を持ち，インド，中国，並びにヨーロッパの哲学に育まれ，生活の本拠をアジアとアメリカの間に置いている日本は，西欧の正統なる従兄である」

過ぎなかつた。しかも一度は露国に占領せられ、若し日本が奉天の会戦に敗れて居たとするならば、満洲は今日既に露国の一州と化して居たに相違ない。今日に於て満洲は支那全州で最も繁栄し最も発展した地方であり、人口は増殖し、各種工業の隆盛に於ける経済上の一中心である。日本は幾十億の巨額を投資し、支那革命の混乱の間に在つて此処に能く治安の別天地を作り、支那全土の各地方より来る幾百万の支那人移民に安住の場所を与へた満洲に於て、日支両国の権利及利益が密に錯雑して居ることは、「スーダン」に於ける埃及（エジプト）と英国との権益関係に似て居る。故に満洲は日本と支那とを堅く結び付ける楔（くさび）となるか、然らずんば両国を永久に離反する不和の原因となるか、其の孰（いず）れかである。〉

国際法学者らしく、アメリカのモンロー主義や、イギリスとエジプトの関係を対比しながら、日本と支那に関わる満洲問題を客観的に述べております。彼は続いて、フランスのルール占領やロカルノ条約の例をひき、日本代表に次の事を行うべきであった、と提言しています。

〈（国際聯盟の）理事会の席上、日本代表は其の同僚たる各国代表に対して、唯一語づゝ耳語（じご）するだけで討議を打ち切ることが出来たであらう。即ち仏国代表に対しては「ルール」、英国代表に対しては「埃及（エジプト）」、米国代表に対しては「ニカラガ」、伊国代表に対しては「コルフー」、ポーランド代表に対しては「ヴイルナ」、而して更に聖書の一句を引用して「誰でも罪がないと思ふものがあるならば、先づ石を投げなさい」とつけ加へたならば、極東に対する国際聯盟の物質的及び精神的無力は、米国傍聴者が理事会に参加したことに依つても少しも救済されない。〉

要するにカレルギー伯は、「国際聯盟はフランスもイギリスも、アメリカもイタリーもポーランドも、自分たちがやってきたことは棚にあげて、満洲事変を材料に日本だけを悪者にし、孤立化に追ひ込んでいる」ことを指摘しているのです。日本はそのことを聖書の言葉「誰でも罪がないと思ふものがあるならば、先づ石を投げなさい」を引用しながら耳語（耳打ち）すべきであった、と述べているのです。そしてカレルギー伯は、論文の最後を、次のように結んでいます。

〈今日本は、極東に於ける西洋文明の選手であり、治安の巨巌である。露西亜（ロシア）のボルシェヴィズムと、支那の無政府状態との怒濤を破って立つ岸壁である。

日本がボルシェヴィズムの脅威を感じて居ることは、欧州と異る所がない。日本は「ソ」連邦の亜細亜侵略を阻止することを得る唯一の強国である。この一事だけでも、欧州と日本との将来の提携を確保するに足るものがある。

共同の運命を持ったこの提携こそは重大な問題であつて、国際聯盟の面目などは問題でない。

故に欧洲は極東のモンロー主義を認むると共に、欧洲自身のモンロー主義を宣すべきである。欧洲モンロー主義は、欧洲の自決及自衛を意味するものであつて、英帝国、亜米利加及極東のモンロー主義と平等の地歩に於て、友誼的協力を維持せんとするものである。〉

彼が強調していることをまとめれば、次の四点になります。

①　日本は、極東における西洋文明の選手である。

②　日本は、ソ連共産主義のアジア侵略を防ぐ巨きな巌壁である。

③　日本は、支那の無政府状態を防ぐ治安の巨巌である。
④　欧米諸国は、このようなアジアにおける日本の役割を理解し、極東のモンロー主義を認めるべきである。
しかしその後、欧米は極東のモンロー主義を認めることをせず、日・米英戦争という悲劇の選択をすることになったのです。
【名越二荒之助】

七　支那事変の真相

中国大陸を舞台にした列強の謀略戦場

ことの起こりは中国共産党と国民党の抗争から

第一次世界大戦中の大正六年（一九一七年）、赤色革命によって成立したソビエト社会主義共和国連邦（以下、ソ連と略）は、世界赤化をめざす国際機関としてコミンテルンを創設し、世界赤化に乗り出しました。アジアにおいては大正十年（一九二一年）に中国共産党が、翌年には日本共産党が結成され、東アジア赤化へと大きく踏み出しました。

外蒙古の赤化は急速に進み、大正十三年（一九二四年）には中国より分離し、モンゴル人民共和国が成立、ソ連の保護国となりました。

中国共産党は結成当初からの国民革命軍の武闘組織であり、これをソ連が全面的に支援し、たちま

ち侮るべからざる勢力となりました。一方、孫文の国民党はこれと安易に提携して、蟠踞する各地の軍閥を討伐しようとして、第一次国共合作が成立し、孫文は間もなく死亡しましたが、この合作は三年半続きました。

やがて両者は抗争状態となり、紅軍（中共軍）は追われて井岡山地区に入り、瑞金を根拠地として体制を整備し、勢力を伸ばし、昭和九年（一九三四年）には兵力三十万に増大。湖南、湖北、河南、安徽、四川の省境地区にいくつもの赤色根拠地が建設されました。

この間、蔣介石を総帥とする国府軍は各地の軍閥を次々に打倒し、次いで中共軍の討滅に向かいました。この大作戦は三年間にわたって五回実施されました。第五次作戦は昭和八年（一九三三年）秋に開始され、国府軍は百万の兵力と飛行機二百機を動員するという徹底したものでした。

国府軍の大攻勢により中共軍は各地で敗退、このままでは全滅は必至です。かくて十万の紅軍はいわゆる大長征の途につき、貴州省・雲南省を経て康生省から四川省に入り、北上して陝西省に逃げ込みました。この間一カ年、悪路峻路を戦いながら、すべて徒歩でした。出発時の十万は一万に減っていました。大長征というものの、大敗走でした。

この紅軍の大敗走に驚いたのはソ連であり、コミンテルンでした。大敗走の真っ最中の一九三五年（昭和10年）七月から八月にかけ、モスクワで第七回コミンテルン大会が開かれ、戦略の大転換を決定指令しました。中国共産党は当面の敵である国民党と速やかに妥協し、国共合体して日本軍と戦えという大転換です。潰滅に瀕した中共を救う道はこれしかなかったのです。

この頃、新興の満洲国（昭和7年建国）は豊富な地下資源のもと、重工業が次々に開発され、北満には精強な関東軍が配備されました。一方、国民党との間には梅津・何応欽協定、土肥原・秦徳純協定が結ばれ、北支に冀察政権が成立したため、国民党中央は満洲国と国境を接するチャハル・河北両省より撤退、北支は中立地帯となり、日中関係は安定状況にありました。これは、コミンテルン指令を出したソ連としては黙視できないことでした。

紅軍は辛うじて大長征を終え、陝西省の延安に辿りつきましたが、ここは荒蕪の地で、兵士の糧食にも困るような僻地でした。

蔣介石は、今度こそこれを全滅させようと大軍を差し向けました。山西省まで出て来ていた紅軍はたちまち撃退され、国府軍はもう一息で息の根を止めるところまで紅軍を追いつめましたが、それがなかなか実現しません。

生き残るか死ぬかの関頭に立たされた毛沢東、周恩来等も必死でした。攻撃軍の第一線は中央軍ではなく、張学良の東北軍と揚虎城の西北軍でした。紅軍中共は必死になってこれらの青年将校、兵士に向かって、内戦を停止し「一致抗日」を呼びかけたのです。満洲事変により満洲へ帰れなくなっていた東北軍は、紅軍との戦闘に戦意なく動揺し、これは将帥の張学良にも及びました。戦意のないことは揚虎城の西北軍とて同じでした。

蔣介石は、このような事態に業を煮やし、督戦するため一九三六年（昭和11年）十二月四日、西安に乗り込みました。

ここにおいて十二月十二日未明、西安事件が起きました。張学良が蔣介石を捕えて監禁し、容共抗日を迫ったのです。時を移さず、このことは中共軍に伝えられました。中共軍の宿営地では全党員、全兵士が集められ、一大野外集会が開かれました。毛沢東、周恩来、朱徳等が、「今や中国民衆の裏切者蔣介石を清算する時が来た。彼を人民裁判にかけ、全土を日本帝国主義に対する闘いに一致団結させるときが来た」と演説しました。

この報は瞬時にモスクワにも届きましたが、スターリンの反応は意外にも冷静でした。

ソ連は〝今、重点は西方に向けなければならぬ。日本の脅威に自力で立ち向かう余力はない。中国をして日本に対抗せしむべきである。そのためには中国は政治的に統一されねばならない。とすれば、蔣介石は絶対殺してはならぬ――〟。

このような判断に立ったモスクワは、十二月十四日深更〝蔣介石を釈放せよ〟というスターリンの厳命を指令したのでした。この電報を受け取った毛沢東は「真っ赤になって怒った」そうです。このときのことを宋慶齢は、次のように語っています。

〈毛は悪態をつき、足を踏みならして怒りました。指令を受けるまで、共産党は蔣を公判にかけて殺し、抗日防衛政府を樹立する計画でいたのです。〉（エドガー・スノー『中共雑記』）

スターリンの命令で状況は一転、周恩来は西安に飛び、密かに蔣介石と面会しました。張学良と周

蔣介石の慨嘆―戦わない共産軍

日本の陸軍士官学校に学び、辛亥革命（一九一一年、辛亥の年）に参加した蔣介石は、支那事変以後、共産党と統一戦線を組む。しかし、重慶に移ってからは反共路線を強め、戦後一九四八年に初代中華民国総統となったものの、人民解放軍により台湾に追いやられた。その怨の深さは、次の文章にも表われている。

「毛沢東の〝思想〟をふきこまれた第八路軍（註―共産軍）が、まともに抗日戦を戦うはずがない。彼らは兵力の損耗をおそれて日本軍とは正面から戦わず、政府軍（註―国民党軍）の力で勝ちとった戦果を横どりし、あたかも彼らが勝ったかのように宣伝することにのみ、力をそそいだ。

戦後、共産党は、抗日戦を戦ったのは、あたかも共産党であるように吹聴した。彼らの宣伝によると『共産軍は対日本軍作戦の六九パーセント、対汪兆銘作戦の九五パーセントを担当し、作戦回数は十二万五千回を超え、日本軍、汪軍百七十一万余をせん滅した』というが、これはまったくの〝創作〟である。

公式に残る戦史では中国軍と日本軍の戦闘は、小戦闘三万八千九百三十一、重要戦闘一千百十七、大会戦二十二の計四万七千回に及ぶが、第八路軍が戦闘に参加したのは平型関（一九三七年九月、一個師団）と、山西南部遊撃戦（一九三八年春、二個師団）のたった二回にすぎない。このことは、連合軍参謀長ウェデマイヤーの報告によって確認されている通りである」。

（『改訂版・蔣介石秘録（下）』）　【鈴木】

恩来と蔣介石との三者の間で、この時いかなる談合が行われたのかは未だに不明です。
生き証人張学良はそれより五十六年後の今日、台湾で余生を送っていますが、このことに関してはけっして口を開きません。本年（平成3年）、ＮＨＫのインタビューに応じましたが、この点に話が及ぶと話をそらしていました。
しかし、蔣介石の生命と引きかえにどのような約束が行われたかは、その後の蔣介石の行動を見れば察しはつきます。
蔣介石が釈放されて南京に帰った一カ月後、国府と中共の両者の間に協定が結ばれました。これまで十年近く死闘を繰り返し争っていた両陣営は、一転協力して日本軍と戦うことを約束したのです。ここに第二次国共合作が成ったのです。この重大な変化に、当時の日本の情報機関は気がつかず、むしろ対岸の火災視していました。まことに迂闊と言うよりほかありません。

盧溝橋事件

西安事件の七カ月後の昭和十二年（一九三七年）七月、天津郊外の盧溝橋で日支両軍が衝突しました。戦後、この盧溝橋事件は日本が仕掛けたと説く人があります。しかし、事件から五十五年たった今日、現代史家の論文や、事件に関係した将兵の手記を読んでも、日本側から最初に発砲したとする説はまったく見当たらなくなりました。
それでは、最初に発砲した犯人は誰か。多くの証言をもとにした論を総合すると、最初の射撃は国

府軍（第29軍）の中に潜入していた中共側であろう、というところに落ちついています。

自衛上、日本軍が止むなく応戦したのは七月八日午前五時三十分で、最初の不法射撃を受けてから実に七時間後です。現在、盧溝橋事件は七月七日に起きたと、どの史書にもありますが、これは重大な誤りで、日支両軍の戦闘は七月八日にはじまったのです。（「芸林」平成3年2月号所収、坂本夏男「盧溝橋事件勃発についての一検証」参照）

日本は当時、支那との紛争を何とか回避しようとして懸命に努力し、停戦協定は直ちに現地で結ばれました。東京の参謀本部も、政府も、現地軍も、誰一人として事件の拡大を望むものはありませんでした。また蔣介石も、未だこの時点では戦争へ持ってゆこうとは考えておらず、現地解決を望んでいたのです。

しかし、停戦協定が結ばれると、これがたちまち破られるのです。このことが何回も繰り返され、事件を拡大へ拡大へと導いた者がいたのです。これはまぎれもなく国府第二十九軍の中に潜入した中共軍の息のかかった兵士であり、また、北京に潜入して劉少奇に使嗾されていた北平大学、精華大学の学生を中心とする学生のゲリラ隊でした。

これらの小事件を拡大した元兇は、もちろん中国共産党でした。その証拠は数えきれないほどありますが、その中でも重要なのは次の電文です。中国共産党は七月八日の早朝、延安の本部から全国へ次の電報を打っています。

〈七月七日夜一〇時、日本は盧溝橋に於て中国の駐屯軍馮治安部隊に対し攻撃を開始し、馮部隊に

対し、長辛店への撤退を要求した。日本軍のかかる挑発行動が遂に大規模なる侵略戦争にまで拡大するか否かにかかわらず、天津と華北は日本軍に武装侵略される危険があり頗る切迫している。(中略)中華民族が抗戦を実行する事が吾々の責務であり、宋哲元軍は即時動員して応戦する様に、南京中央政府は二九軍を即時有効に援助せよ、全陸海空軍、全国民衆の愛国運動を結集して侵略日本軍に立ち向うべし。〉(日本国際問題研究所『中国共産党資料集』第八巻)

この電報が打電された時刻は、日支両軍の司令部でさえ事態の真相をつかんでいない時です。この時点でこのような電報が即刻打電されたことは、中共軍が影でこの事件を画策していたことを推察するに十分な資料です。

また、これに呼応するかの如く、モスクワのコミンテルン本部も直ちに次のような指令を発しています。(興亜院政務部「コミンテルンに関する基本資料」)

一、あくまで局地解決を避け、日支の全面的衝突に導かねばならない。

二、右目的の貫徹のため、あらゆる手段を利用すべく、局地解決や日本への譲歩によって支那の解放運動を裏切る要人は抹殺してもよい。

三、下層民衆階級に工作し、彼らに行動を起こさせ、国民政府として戦争開始のやむなきにたち到らしめねばならない。

四、党は対日ボイコットを全支那に拡大し、日本を援助する第三国に対してはボイコットをもって威嚇せよ。

五、党は国民政府軍下級幹部、下士官、兵並びに大衆を獲得し、国民党を凌駕する党勢に達しなければならない。

中共当局はこの指令のままに行動し、幾度も停戦協定を破りました。その後、日本側から働きかけ、なんとか事変を解決しようとした和平交渉もすべて流産せしめたのです。

中共が支那事変の主謀者であり、推進者であったことを証明する資料はまだまだたくさんあります。詳しくは、中村粲(あきら)氏の『大東亜戦争への道』（展転社）や伊達宗義氏の『中国共産党略史』（拓殖大学海外事情研究所）を参照してください。

支那事変と援蔣ルート――事実上の日米戦争はじまる

満洲国の出現とその順風満帆な成長ぶりを見て脅威を感じたのは、ソ連だけではありませんでした。ソ連以上に恐れたのは、アメリカを中心とするイギリス、フランス、オランダの諸国です。彼らはいずれもアジアに広大な植民地を持っています。現在は力で押さえつけているが、いつ民族独立運動をめざす植民地の反乱が起こるかわからない、と恐れました。ここにおいてソ連と米英仏蘭の利害は一致し、支那を徹底して助けることになりました。

アメリカは支那政府に、以前から資金や武器の援助を行っていましたが、日支が戦争状態になるやその援助は本格的になりました。

重慶に送り込んだ蔣介石が容易に屈しなかったのは、アメリカの強力な援助があったからに他なり

米国は開戦前に巨額の対支援助

次の表に明らかなように、米国は大東亜戦争開戦前、すでに総計一億七千万ドルにものぼる巨額の対支援助を行っていた。

昭和2年（一九二七年）

7月25日　張作霖、米国資本を背景に満鉄併行線のひとつ打通線を、満鉄併行線敷設禁止協定（対華21箇条のひとつ）を無視して完成。

9月　満鉄併行線のひとつ奉海線、米国からレール、英国から車両を輸入して完成。

昭和6年（一九三一年）

米国は、張学良軍の対日軍備の充実のため、年間戦車百台、飛行機数十機、弾丸百万発の生産能力のある兵器工場建設を援助。更に米国は、総額二千六百万ドルに及ぶ資金援助を三年間で行うことを決定。

昭和8年（一九三三年）

8月　米国農務省、八千万ドルの小麦と棉花借款を南京の国民党政府に供与。

昭和9年（一九三四年）

2月17日　中国広東空軍司令部と米航空機器公司との間で、米国の援助による空軍三年計画契約交渉が行われていることが判明。

2月20日　米国の借款により、米軍用機購入と米海軍予備将校の指導を条件として、福州およびアモイに飛行場を建設。

昭和14年（一九三九年）

9月　米国輸出入銀行、中国国際貿易委員会に対し四千五百万ドルを資金援助。

昭和15年（一九四〇年）

3月30日　米国、蔣政権に対する二千万ドルの資金援助を発表。

9月25日　米国、中国への追加の資金援助と

して二千五百万ドル供与を発表。
11月30日　ルーズベルト大統領、蔣介石に一億ドルの資金と新式戦闘機五十機の援助を約束。一億ドルのうち二千五百万ドルは中国の航空計画と地上兵器部品購入に使用。

昭和16年（一九四一年）

2月　米、Ｐ40Ｂ戦闘機百機の対支援助を決定。その不足する装備武器と弾薬百五十万発は、大統領命令で米陸軍基地から直接補給。
4月15日　パウリー米インターコンチネント社社長、中国と航空機パイロットの米国義勇団に関する条約締結、二百五十九名を中国に派遣することとなった（この部隊は「米国防総省承認の正規の空軍」と本年7月16日付米紙報道）。
4月22日　米国陸軍省、中国に引き渡し得る軍需品リスト（四千五百十万ドル相当）を提示。
5月6日　ルーズベルト大統領、中国向けトラック三百台を二週間以内にビルマ・ラングーン向け出荷を承認。また四千九百三十四万ドル相当の軍需物資の中国供与を決定。
7月23日　米国統合委員会、軍事使節団派遣と米志願兵による中国からの日本軍爆撃のためＢ17五百機の対支派遣決定。この統合委員会での確認事項は次のようなものであった。
イ、中国およびその周辺地域または海域で作戦中の日本軍に有効な反撃を加えるため、第一陣として二百六十九機の戦闘機と六十六機の爆撃機を装備すること。
ロ、米国は、中国人の飛行および航空機整備の訓練のための手段を提供すること。
ハ、米国によって与えられた大量の兵器の適切な使用について助言を与えるため、米国は、軍事使節団を中国に派遣すべきこと。
因みに開戦後は、十七億二千三百二十万ドルの援助をしている（日本青年協議会発行「祖國と青年」平成元年6月号参照）。

【柚原】

ません。援助物資を輸送するための「援蔣ルート」が造成され、ひとつはベトナムのハイフォンから発する仏印（フランス領インドシナ、現ベトナム）ルート、ひとつはビルマ（現ミャンマー）のラングーンから発するルート、もうひとつはソ連から新疆省を経て入る西北ルートです。

日本は南京をはじめ主要貿易都市、工業都市のすべてを押さえましたが、この三つのルートから運び込まれる豊富な武器や物資があるので、蔣介石側は一向に困らず、抗戦を続けました。このため日本は、輸送拠点の広東や南寧を攻略し、輸送ルートを爆撃したのですが、たいした効果はあがりませんでした。

アメリカはこのように援蔣物資を送り続ける一方で、日本の占領地域で、アメリカが年来主張し続けて来た門戸解放、機会均等が剝奪されているとして、自分のことは棚に上げて強硬な抗議をしてきました。

日本は、支那事変という非常事態においては平和時の門戸解放主義は適用できないと反論、これに対しハル国務長官は、アメリカはいかなる第三国の要請や特殊目的があっても、いささかでも支那に対する門戸解放を制限する新秩序は承認できぬと反論します。かくして日米の対立は深まり、遂に昭和十四年七月、アメリカは日米通商航海条約の一方的廃棄を通告してきました。日本に経済制裁の鉄拳を下したのです。これによって、日米関係は一段と緊張しました。

日本にとっては、援蔣ルートを遮断しなければ事変は解決しません。ルートのうちでいちばん重要なのは、全輸送量の半分以上をこなしている仏印ルートでした。日本はフランス政府（ドイツ占領下

のヴィシー政権）と交渉、北部仏印進駐の協定を結び、昭和十五年（一九四〇年）、北部仏印に進駐しました。これに対しアメリカは、屑鉄・屑鋼の対日禁輸をもって応じました。

アメリカの肚の内は明らかでした。対日経済圧迫を強化して、日本を経済的に屈服させることでした。その決め手は石油の禁輸です。

そこで日本は蘭印（オランダ領東インド、現インドネシア）の石油買付に最大の努力をするのですが、オランダが応ずるはずもありません。この頃から時局は次第に緊迫し、日本はアメリカとの直接交渉でなんとか局面を打開しようとして、「日米交渉」に入ったのです。

この交渉がワシントンで正式にはじまったのは昭和十六年三月八日ですが、この交渉と平行してアメリカは、密かに蔣介石軍に正規の空軍部隊を派遣し、日本軍と戦っていたことが最近明らかになりました。アメリカの対日開戦の肚はとっくに決まっていたのです。日米交渉は、開戦準備が完了するまでの擬態にすぎませんでした。

切迫した日本は七月、南部仏印に進駐、アメリカはこれに対してＡＢＣＤ日本包囲ラインを固め、遂に対日石油禁輸に踏みきりました。日米交渉で日本は譲歩に譲歩を重ね、最終的和平案を提出するのですが、アメリカは「ハル・ノート」をもってこれに答えました。このハル・ノートは前にも触れたように、全満洲からの撤兵が和平の条件の中に入っています。

全満洲からの撤退は、明治以来の遺産をおめおめと放棄することであって、誇り高き日本民族にとって絶対耐えられることではありませんでした。アメリカも、それを充分予想していました。

かくして日米開戦となるのですが、長期的視野でみた場合、両者の対決は満洲にはじまり、満洲問題で火蓋が切られたことになります。それでは、開戦まで九カ月にわたって続けられた日米交渉は、どのように難航したのか。これは次章で述べられます。

【鈴木正男】

八　難航した日米交渉

大西洋会談までに対日戦の決意を固めていたルーズベルト

日本の大陸政策を根本から否認したアメリカの対応

昭和十六年（一九四一年）三月八日、野村吉三郎駐米大使は、アメリカ合衆国のコーデル・ハル国務長官と同長官の住所カールトン・ホテルにおいて、第一回会談を行いました。野村大使は、フランクリン・D・ルーズベルト大統領とは旧知の間柄にあったので、満洲事変、支那事変、ことに昭和十五年九月に調印された日独伊三国同盟条約以後、悪化した日米関係を調整するため松岡洋右外相により起用され、二月十一日、ワシントンに着任していたのであります。

両者の会談は、第二回目が四月十四日、第三回目が同月十六日、ともに長官の新居ウォドマン・パーク・ホテルで行われますが、『コーデル・ハル回想録』によりますと、第三回目の会談の際、ハル

長官は、次のような四原則を書いた陳述書を野村大使に手交し、これは日米協定の基礎となるべきものである、と言明しています。

1、あらゆる国家の領土保全と主権の尊重

2、他国の国内問題に対する不干渉原則の支持

3、商業上の機会均等を含む均等原則の支持

4、現状が平和的手段により変更される場合を除き、太平洋における現状の不攪乱

もしこの原則が適用されることになると、満洲事変以来のわが国の大陸政策は根本から否認されることになり、日米交渉は、当初から、このような大きな難問を孕んでいたのであります。

六月二十二日、独ソ戦の火蓋が切られ、世界に大きな衝撃と影響を与えることになりますが、わが国の軍部は、同月二十四日、「情勢ノ推移ニ伴フ帝国国策要綱」を採択し、本要綱は、七月二日、御前会議で正式に決定しました。かくてわが国は、「対英米戦備ヲ整ヘ（中略）南方進出ノ態勢ヲ強化ス」ることになりました。これより三週間後の二十三日、大本営現地機関と仏印総督との間に進駐に関する細目協定が成立したので、わが国の陸海軍部隊は、二十八日、平和裡に南部仏印、即ち今日のベトナムの南部に進駐を開始しました。

日本軍のこの進駐に対するアメリカ合衆国の反応は、わが国の大方の予想に反し、即時かつ強烈でありました。同国は、暗号解読により日本軍の進駐のことを知ると、早くも二十六日、在米日本資産を凍結し、八月一日、対日石油輸出を全面的に停止しました。当時わが国は、石油輸入の大部分をア

メリカに依存していたので、この措置は、わが国の死活に係わる深刻な問題であります。事態を憂慮した近衛文麿首相は、ルーズベルト大統領と直接会談の上、危機に瀕した局面を一挙に打開することを決意し、八月七日、豊田貞次郎外相を通じて野村大使に電訓し、両国首脳会談の開催をアメリカ側に提議させました。

しかしハル国務長官は、この提議には極めて冷淡であり、不賛成でありました。同長官は、戦後開かれた真珠湾攻撃調査合同委員会で、次のように証言しています。

〈近衛公は、一九四〇年、日本がドイツとイタリアと結んだ三国同盟に調印した時の日本の首相でありました。

日本が征服のコースを放棄する姿勢を示さなかった数カ月以上にわたる日本との交渉の結果、同国が平和の方向へ動く意図の明確な証拠を示さない限り、近衛との会談は、他のミュンヘン若しくは全く無意味なものに終わるだけだ、と確信しました。私は、最初のミュンヘンに反対でありましたが、第二のミュンヘンには、なお更反対でありました。〉

右の「ミュンヘン」とは、一九三八年（昭和13年）九月ミュンヘンで開かれ、チェコスロバキアのズデーテン地方のドイツ合併問題でドイツに宥和政策を採ったことで有名な英・仏・独・伊四国の首脳会談のことであります。

ルーズベルト大統領は、八月九日から十二日まで、カナダ東方ニューファンドランド島のプラセンシャ湾に浮ぶ軍艦において、イギリス首相ウィンストン・S・チャーチル首相と会談し、ヨーロッパ

及び極東問題等につき討議しました。これが有名な大西洋会談であります。チャーチル首相は、翌年一月二十七日下院で行った演説の中で、「私がルーズベルト氏とこれらの問題を討議した大西洋会談以来、合衆国は、たとえ攻撃されなくとも極東の戦争に参加し（the United States, even if not herself attacked, would come into a war in the Far East）、終局の勝利を確実にする可能性によって、これらの危惧は和らいだようであります」と述べています。これによると、ルーズベルト大統領は、大西洋会談までには対日戦の決意を固め、その会談の際、チャーチル首相に対して重大な約束をしたことが推察されます。

大西洋会談を終えて十七日ワシントンに帰着すると、ルーズベルト大統領は、その日は日曜日であったにも拘らず、野村大使をホワイトハウスに招致し、日本が武力による隣国支配を更に続行すれば、アメリカ政府は必要と認める一切の手段を講ずる旨の厳しい覚書を手交しました。

アメリカの石油輸出全面的停止により、わが国では対米強硬論が台頭しました。このような中で、九月六日、御前会議が開催され、「帝国国策遂行要領」が決定されましたが、同要領は、「十月上旬頃ニ至ルモ尚我要求ヲ貫徹シ得ル目途ナキ場合ニ於テハ直チニ対米（英蘭）開戦ヲ決意ス」という、国運に係わる重大な内容を含んでいました。

立たざるを得ない立場に追いつめた「ハル・ノート」

日米交渉は難航して進展しないまま事態は推移し、十月二日、アメリカは、日米首脳会談を実質的

に拒否してきました。

また、この頃から近衛内閣においては、対米交渉中最難関であった中国からの撤兵問題を巡り、意見の対立が深刻になりました。かくて近衛内閣は、閣内意見不統一のため、十月十六日、「日米交渉といふ火のついた爆弾」を置き去りにして、総辞職したのであります。そのため翌十七日、宮中で重臣会議が開催されましたが、次期首相には東条英機陸相が推薦され、早くも翌十八日、東条英機内閣が成立しました。焦点の外相には、外交のベテラン東郷茂徳前駐ソ大使が就任しています。東郷大使は、一旦は入閣を辞退しましたが、新内閣は日米交渉に鋭意努力する、ということを条件として、外相就任を受諾したのでありました。

アメリカ側では、東条内閣に対する評価が大きく二つに分かれました。国務省のウィリアム・R・ラングトン極東部員は、その覚書の中で、「(東条)が首相に任命されたことは、合衆国との会談続行を含む近衛公の政策継続を意味すると信じられる。」と書き、ジョセフ・C・グルー駐日大使は、その日記に、「予期された通り、近衛内閣は文官でなく武官によって継承されたが、東条内閣が前段に略記した事情に照らして会談続行の意志を示している事実は、同内閣に、対米武力衝突を惹起しそうな政策を推進する軍部独裁政権であると烙印を押すことは、早計であることを意味しよう。」と書き込んでいます。

他方、サムナー・ウェルズ国務次官は、その著書『決定の時』の中で、「一九四一年十月近衛公が辞任し、東条将軍がその後継者に任命されたのに伴い、かかる交渉の可能性は消滅した。その時か

ら、賽は投げられたのである。」と記し、また、ハロルド・イッキス内務長官は、その秘密日記の中に、「これは、軍事的な、かつ疑いもなく熱狂的な帝国主義的内閣である。日本は、再び鞘の中で軍刀をがちゃつかせている。（中略）私は長い間、われわれが戦争に参加する最善の方法は、日本経由であろう（our best entrance into the war would be by way of Japan）、と信じていた。（中略）勿論われわれが日本と開戦すれば、必然的にドイツとの戦いになるであろう。」と述べています。

前掲の日独伊三国同盟条約によると、三締約国中何れかの一国が、現に欧州戦争又は日支紛争に参入していない一国によって攻撃された時は、三国はあらゆる方法で相互に援助することになっています。三国同盟はアメリカを対象としていたので、当然同国には強烈な反発が起こりましたが、日米開戦当時、アメリカ太平洋艦隊駆逐隊司令官であったロバート・A・シオボルド少将は、その著書『真珠湾の最後の秘密』の中で、

〈一九四一年後半、大西洋では宣戦布告なき戦争状態に入っていたにも拘らず、ドイツは、米独両国間の正式な戦争状態をつくる意図のないことは、早くから明瞭であった。しかし一九四〇年九月の三国条約は、大統領に回答を与えた。この条約の下では、日本との戦争は、ドイツ及びイタリアとの戦争を意味した。〉

と、イッキス長官と同様な観点から、日独伊三国同盟の意義を指摘しています。

東条内閣成立後、大本営政府連絡会議は、ほとんど連日国策の再検討を行い、十一月二日、第二次の「帝国国策遂行要領」を採択し、十一月五日の御前会議で、この遂行要領は正式に決定しました。

かくてわが国は、「武力発動ノ時期ヲ十二月初頭ト定メ陸海軍ハ作戦準備ヲ完整ス」「対米交渉カ十二月一日午前零時迄ニ成功セハ武力発動ヲ中止ス」ということになりました。このため対米交渉は残る期間僅か一カ月足らずとなるので、東条内閣は、この五日、来栖三郎大使をワシントンに急遽派遣し、最後の外交努力をすることになりました。

アメリカでは、十一月二十五日、ホワイトハウスで、ルーズベルト大統領司会の下に戦争会議が開かれました。戦争会議は、各週一回または大統領の召集により開かれ、戦争に関する情報や意見を交換した会議であります。ヘンリー・L・スチムソン陸軍長官は、膨大な日記を残していますが、一九四一年十一月二十五日の条に、この日の戦争会議の状況を次のように書いています。

〈今日は実に多忙な日であった。（中略）それから十二時に、われわれはホワイトハウスに行き、そこに一時半近くまで居た。その会議には、ハル、ノックス、マーシャル、スターク及び私が出席した。

そこで大統領は、「ビクトリー・パレード」計画を持ち出さず、専ら対日関係だけを持ち出した。彼は、日本は無警告で攻撃を行うことで有名であるので、われわれは多分次の月曜日（筆者注―12月1日）に攻撃を受ける可能性がある、ということを持ち出し、そして問題は、われわれはいかに対処すべきかであった。問題は、われわれが大きな危険にさらされることなく、最初の発砲をするような立場に、日本人をいかに追い込むか（how we should maneuver them into the position of firing the first shot）、であった。〉

右引用文前段記載のハルは国務長官、ノックスは海軍長官、マーシャルは陸軍参謀総長、スタークは海軍作戦部長でありますが、スチムソン日記は、アメリカの政治・軍事の最高首脳が、どんな策略によって対日戦を開始しようとしていたのか、この重大な事柄を明確にしています。

明けて二十六日、国務省において第四十四回野村・ハル会談が開かれ、その席上、ハル長官は、野村・来栖両大使に「合衆国及日本国間協定ノ基礎概略」という文書を手交しました。この文書は一般的には「ハル・ノート」と呼ばれ、その第一項には、ハル四原則を持ち出し、第二項では、中国及び仏印から、日本は一切の陸・海・空の兵力及び警察力を撤収すること、蔣介石政権以外のいかなる政権をも支持しないこと、日独伊三国同盟条約を死文化することなどを要求しています。前出『スチムソン日記』の十一月二十七日の条によりますと、ハル長官は、スチムソン長官の対日交渉に関する質問に、すべてを御破算にした、と答え、「僕はそれから手を洗った。今や君とノックス——陸軍と海軍の手にある。」と付言しました。

ハル・ノートは、当時のわが国にとって極めて苛酷な内容であり、東郷外相は、二十七日、これを受領した時目の眩む思いがした、と語ったと伝えられます。イギリスの駐日大使ロバート・クレイギー卿は、大東亜戦争開戦後の抑留中、加瀬俊一(としかず)外相秘書官（戦後国連大使）に、

〈ハル・ノートは日本の国民感情を全く無視したものであって、あれでは日本として立たざるを得なかった、と考える。イギリス政府が私の意見に耳をかさなかったのは、かえすがえす残念だ。〉

と述懐し、極東国際軍事裁判のインド代表判事ラダビノッド・パール博士は、その判決書の中で、

〈現代の歴史家でさえ、「今次の戦争に関しては、真珠湾の直前、国務省が日本政府に送ったものと同じような通牒を受領した場合、モナコ公国やルクセンブルク大公国でさえも、合衆国に対して武器を執ったであろう（would have taken up arms against the United States)」、と考えることができた。〉

と述べています。また、日本軍の真珠湾攻撃当時、太平洋艦隊司令長官であったハズバンド・E・キンメル大将は、著書『キンメル提督の話』の中で、

〈一九四一年十二月七日朝の攻撃は、コーデル・ハル国務長官の十一月二十六日の対日最後通牒に対する烈火の回答（a fiery answer）であった。〉

と、書いています。

1941年12月７日午後２時５分（ワシントン時間）国務省に到着し，ハル国務長官に対米覚書を手交するため，控室で15分も待たされた野村(右)・来栖両大使。

対米覚書[最後通牒]手交の遅延

わが国の外務省が、ワシントンの野村大使に対米覚書を十四部に分割して発信した概況は、本文に記述したが、日本大使館がそれらを接受解読した経過の概要は、左の表の通りである。

来栖三郎大使に随行してワシントンに赴いた結城司郎次書記官が、七日午前九時頃、日本大使館の書記官室に行くと、奥村勝蔵書記官（庶務担当）が、一心に覚書のタイピングをしていた。大使館には、ウェンズという有能な中年の女性タイピストがいたが、機密保持のため「本件覚書ヲ準備スルニ当リテハ『タイピスト』等ハ絶対ニ使用セサル様」という外相訓令が、事前に到着していたからである。

七日午後十一時頃には、対米覚書を「貴地時刻七日午後一時ヲ期シ」アメリカ側に手交すべき旨の訓電が、解読されていた。

当日の奥村書記官のタイピングは、緊張のためか、平常よりも速度が遅いうえ、間違いも多く、この傾向は、前出の訓電が到着してから一層著しかったようである。煙石通訳生に手伝わせ、午後一時五十分頃、ようやくその作業を終わった。しかし、この時は既に覚書手交指定の時刻をはるかに過ぎていた。

なお外務省電信課の予測によると、覚書十四

ホワイトハウスに向かう日米の外交団。左より野村駐米大使，ハル国務長官，来栖大使。（1941年11月17日）

部全文のタイピングは、遅くとも七日午前十一時頃までには、完了し得るはずであった。
　大使館玄関で待ち構えていた野村・来栖両大使は、タイピングした覚書を受け取ると、直ちに国務省に急行、十五分待たされた後、野村大使がハル国務長官に手交した。時に午後二時二十分（ハワイ時間午前八時五十分）機動部隊の真珠湾攻撃開始に遅れること一時間であった。
　ハル長官は覚書を一読した後、内容は大体既に知っていたので読む振りをしただけであると推定されるが、激怒した面持ちで、アメリカの外交文書によると、「過去九カ月間における貴官との全会談中、自分は、一言も嘘を言わなかった。（中略）五十年の公的生活を通じ、自分は、これ程不名誉な虚偽と歪曲に満ちた文書（a document that was more crowded with infamous falsehoods and distortions）を見たことがない」云々と極言した。両大使は、これを聞き終わると、無言のまま長官室を退去したのであった。

【坂本】

	月日	事項	備考
第1部〜第13部	12月6日	正午頃より、引き続き接受。電信課員、午後7時頃、第8〜9部まで解読終了。午後11時頃、第13部まで解読完了。	1、本表記載の月日時はワシントン時間。 2、6日夜、覚書のタイピングは、始められていない。
第14部	12月7日	午前7時頃まで接受。電信課員、午前10時より解読開始、午後0時20〜30分頃、これを完了、書記官室に提出。	

真珠湾攻撃開始より遅れた対米覚書の手交

わが国では、二十七日開かれた大本営政府連絡会議において、ハル・ノートはわが国に対する最後通牒であり、最早対米交渉打開の望みはない、という結論に達し、十二月一日に開かれた御前会議において、「十一月五日決定ノ帝国々策遂行要領ニ基ク対米交渉遂ニ成立スルニ至ラス　帝国ハ米英蘭ニ対シ開戦ス」ということが決定しました。

ハル・ノートに対するわが国の回答である対米覚書は、一般的には対米最後通牒または対米最後通告と呼ばれていますが、これは長い英文でありました。そのため一度に送信すると企図が暴露する心配があるので、外務省は、これを十四部に別けて野村大使宛に発信しました。その概況は、次の表の通りであります。

	東京時間	ワシントン時間	備考
第1部〜第13部	6日午後8時30分〜7日午前0時20分	6日午前6時30分〜同日午前10時20分	1、東京とワシントンの時差は14時間。 2、東京中央電信局の発信は、第1部〜第13部、6日午後10時10分〜7日午前1時50分。第14部、7日午後5時（ＭＫＹ経由）、同日午後6時（ＲＣＡ経由）の両路線
第14部	7日午後4時	7日午前2時	

第一部から第十三部までは、六日夕方（ワシントン時間）までアメリカ側に傍受、解読され、大統領付海軍武官補佐官レスター・Ｒ・シュルツ中佐は、同日午後九時半、ルーズベルト大統領にその文書を手交しました。真珠湾攻撃調査合同委員会におけるシュルツ中佐の証言によると、同大統領は、これを一読した後、傍らにいた側近のハリー・Ｌ・ホプキンズに渡し、「これは戦争だね」（This means war）と言いました。

わが国の対米覚書の解読・タイピング等の事務処理は、日本大使館での不手際により大幅に遅れました。そのため、野村・来栖両大使が国務省に馳け付け、十五分待たされた後、対米覚書をハル長官に手交したのは、七日午後二時二十分のことであり、この時は、機動部隊の真珠湾攻撃開始より一時間後でありました。そのためわが国は、外交交渉中に騙し討ちをした、という汚名を着せられることになります。

【坂本夏男】

第二部　大東亜戦争のクライマックス

一　真珠湾攻撃

日本の「奇襲」に安心した米英首脳

アメリカは昭和十六年一月末にハワイ攻撃のことを知っていた

連合艦隊司令長官山本五十六（やまもといそろく）中将（のち大将）は、参謀長福留繁（ふくとめしげる）少将（のち中将）に対し、「ハワイの航空攻撃はできないものだろうか」と独言ともなく語りました。昭和十五年（一九四〇年）末頃のことである、と推定されます。当時まで、誰一人としてこのような破天荒な作戦計画を着想する者はいませんでした。

山本長官は、昭和十六年一月七日付の海軍大臣及川古志郎（おいかわこしろう）大将に宛てた書簡の中で、「日米戦争ニ於テ我ノ第一ニ遂行セサルヘカラサル要項ハ開戦劈頭敵主力艦隊ヲ猛撃撃破」する必要があることを指摘し、「敵主力ノ大部真珠港ニ在泊セル場合ニハ飛行機隊（航空部隊）ヲ以テ之ヲ徹底的ニ撃破」することを強

調しています。この頃、山本長官は、第十一航空艦隊参謀長大西滝治郎少将（のち中将）を招致し、ハワイ航空攻撃の研究を委嘱しました。

機密事項であるべきハワイ航空攻撃計画のことは、早くも十六年一月下旬、外部に漏れたようであります。アメリカのグルー駐日大使は、その日記の一九四一年（昭和16年）一月二十七日の条に、

〈日本は、合衆国と断交した場合、大規模な真珠湾奇襲（a surprise mass attack on Pearl Harbour）を決行する計画を立てている、という意味の噂が、東京では盛んに流れている。〉

と書いています。もちろん同大使は、この噂を直ちに本国政府に報告しました。前出『キンメル提督の話』によると、スターク作戦部長は、二月一日、キンメル提督に対して、噂された日本の真珠湾攻撃に関するグルー大使の報告を連絡しています。

第一部の八、難航した日米交渉、で触れたように、十六年八月一日、アメリカが石油の対日輸出全面的停止を断行してから以後、日米関係は極めて深刻になりましたが、九月になると、ハワイ作戦は、関係者だけでハワイ作戦特別図上演習として極秘裡に研究され、また、軍令部と連合艦隊は、その採択につき討議を行いました。その討議では、連合艦隊は積極的でありましたが、軍令部は慎重であり、第一航空艦隊は消極的、反対の態度であり、意見は一致しませんでした。

十月三日、第一航空艦隊参謀長草鹿竜之介少将（のち中将、連合艦隊参謀長）と第十一航空艦隊参謀長大西滝治郎少将は、山口県室積沖に停泊中の連合艦隊旗艦陸奥に山本長官を訪ね、ハワイ作戦の中止を具申しました。

草鹿少将は、その時の状況を著書『連合艦隊参謀長の回想』の中で、

〈そこである日、大西少将と私は旗艦に山本長官を訪ね、忌憚のない意見を開陳した。あるときは勢のあまり失礼な言葉をはくこともあったが、私の意見に終始黙々として真剣に耳を傾けられた。（中略）長官は、「僕がブリッジや将棋が好きだからといって、そう投機的、投機的というなよ」と、軽く応じ、最後に、諸君の説くところはまさに一理ある、といわれたほかはなにもいわれなかった。すでに不動の決意をされていたのである。〉

と記しています。山本長官のハワイ作戦についての強固な決意を知った両参謀長は、以後その貫徹に尽力するようになりました。

永野（ながの）修身（おさみ）軍令部総長は、ハワイ作戦の採用につき軍令部と折衝していた連合艦隊首席参謀黒島亀人（かめと）大佐に対し、十月十九日、山本長官の強請したハワイ作戦に同意を与えました。かくて軍令部は、真珠湾攻撃計画を正式に承認し、十一月五日、永野軍令部総長は、山本長官に対して次のような大海令第一号を伝達しました。

一、帝国ハ自存自衛ノ為十二月上旬米国英国及蘭国に対シ開戦ヲ予期シ諸般ノ作戦準備ヲ完整スルニ決ス
二、連合艦隊司令長官ハ所要ノ作戦準備ヲ実施スベシ
三、細項ニ関シテハ軍令部総長ヲシテ之ヲ指示セシム

「大海令」とは、天皇の海軍に対する命令のことであり、陸軍では、これに相当するものが「大陸

命」であります。

アメリカ首脳をホッとさせた真珠湾攻撃

択捉島中部東南岸の単冠湾（ひとかっぷわん）に集合していた機動部隊は、十一月二十六日、一斉に抜錨し、第一航空艦隊司令長官南雲忠一（なぐもちゅういち）中将に率いられ、一路ハワイ海域に向かいました。機動部隊は固有編制でなく、作戦目的に応じて臨時に編組された部隊であり、その中核は航空母艦でありました。

当時、日米関係はほとんど絶望状態になっていたが、わが国では、平和に一縷の望みを懸けている向きもありましたので、第一航空艦隊参謀長として真珠湾攻撃作戦に参画した草鹿少将は、前出の回想記の中で、「いまや私の一番大きな問題は、敵情と万が一にも、『日米交渉妥結、機動部隊引き返せ』の引きあげ電報がきた際にそれを確実に受信することであった。」と書いています。

十二月一日、御前会議において、対米英蘭戦が決定しましたので、翌二日、山本長官は、「ニイタカヤマノボレ一二〇八」、即ち開戦日は十二月八日と決定、予定通り行動せよ、と下命しました。

かくて機動部隊は八日朝、真珠湾攻撃を敢行し、軍港一帯を修羅場と化しました。ただし攻撃は、飛行場、軍艦等軍事的目標に限られ、民間の物には及んでいません。攻撃開始の時刻は、東京時間八日午前三時十九分、真珠湾時間七日午前七時四十九分、ワシントン時間七日午後一時十九分でありました。

スチムソン陸軍長官は、日本軍の真珠湾攻撃に関し、その日記一九四一年十二月七日の条に、

〈ハワイからくるニュースは、極めて悪かった。日本軍は完全な奇襲をわが艦隊に加え、湾内の戦艦を目掛けて激しく攻撃し、甚大な損害を与えたようである。（中略）

日本がわが国を攻撃したという第一報が入った時、私の最初の気持ちは、救われた（my first feeling was of relief）ということであった。未決定状態は終わり、危機が到来して全国民は団結するのである。その後急激に広がった災害のニュースにも拘わらず、私はこのような気持ちを持ち続けた。なぜならば、非愛国の連中により煽られていた冷淡さと分裂は、今日まで憂慮すべきであったが、団結したわが国は、事実上恐れるものはない、と感じたからである。〉

と記しています。

第1次攻撃隊の爆撃によって煙を上げる真珠湾（昭和16年12月8日午前）

真珠湾口で座礁したネバダ
スチムソン陸軍長官は「最初の気持ちは，救われたということであった」と日記に記し，チャーチル英首相も「救われたという気持ちと感謝の念で，ぐっすり眠った」と著書に記している。

この日の夜ルーズベルト大統領は閣議を開き、閣僚とともに日本軍の真珠湾攻撃に関することを協議しましたが、この閣議に出席した労働長官フランシス・パーキンス女史は、その著書『私の知れるルーズベルト』の中で、その夜の同大統領の態度について、

〈一九四一年十二月七日夜、彼の自負、海軍や艦船への信任及びアメリカの情報機関への信頼に対する甚大な打撃であったにも拘わらず、また、戦争がわれわれに実際もたらす恐怖にも拘わらず、彼は、非常に冷静な態度を持していた。彼の深刻な道徳上の問題が、この事件によって解決したのである。

われわれが外に出た時、フランク・ウォカーが、「僕は、ボスは数週間前と比べて本当に気楽になったと思う。」と私に言った。〉

と書いています。右文中のフランク・ウォカーというのは、ルーズベルトの側近の一人であり、その頃郵政長官をしていました。

ルーズベルト大統領は、翌八日、議会で発表した戦争メッセージの中で、次のように述べています。

〈昨日、一九四一年十二月七日――汚名のうちに長く残るであろう日（a date which will live in infamy）――アメリカ合衆国は、日本帝国の海・空軍によって、突然かつ計画的に攻撃されました。

合衆国は、日本とは平和な状態にあり、しかもその懇請によって同国政府とはなお交渉中であり、天皇は、太平洋における平和の維持を期待していました。

事実、日本航空部隊がアメリカのオアフ島の爆撃を開始した一時間後に、日本の駐米大使とその同僚は、最近のアメリカの文書に対する公式回答を国務長官に提出しました。この回答は、現在の外交交渉を継続することは無益に思われる、と述べていますが、戦争もしくは武力攻撃の威嚇も暗示も含んでいなかったのであります。

日本からハワイまでの距離から推して、攻撃は多日にわたって、もしくは数週間以前に注意深く計画されたことは、明白であります。（中略）

一九四一年十二月七日、日曜日、日本が挑発されないかつ卑劣な攻撃（the unprovoked and dastardly attack）を加えた以上、私は、合衆国と日本帝国との間に戦争状態が存在することを、議会が宣言することを要請します。〉

アメリカ合衆国憲法によれば、戦争宣言の権限は連邦議会にありますが、同議会は八日、上院では賛成八二、反対〇、下院では賛成三八八、反対一の圧倒的多数で対日宣戦を可決しました。下院でただ一人の反対は、平和主義者として有名なジャーネット・ランキン女史でありました。

アメリカの著名なジャーナリストであるジョン・ガンサーは、その著書『回想のルーズベルト』の中で、

〈真珠湾のように鮮烈な行動のみが、アメリカ合衆国を実際の戦争に誘い込むことができるのである。わが国を遂に戦争に突入させ、世界的規模の勝利を得させた日本のため、自由の像のような感謝の記念像のようなもの（some kind of monument of gratitude like the Statue of Liberty）を建てるべ

きだ、と興奮した干渉主義者が言ったのを、私は聞いたことがある。ひとたび合衆国が立てば、ヒトラーの没落は避けられなくなった。日本軍が穏やかなオアフの海浜を強襲したことは、ドイツの終局的な敗北と崩壊とを必然的なものにした。そしてドイツは、日本より手強い敵であった。〉

と書いています。

周知のように、「自由の像」は、ニューヨーク港のリバティ島に立つ巨大な女性像であり、フランス人が、一八八六年十月、アメリカ独立百年を記念して寄贈したものであります。なおリバティ島の旧名は、ベドロ島でありました。

イギリスのチャーチル首相は、十二月七日夜九時頃、ロンドンの北東にある首相別荘チェカーズで、ＢＢＣのラジオ放送により日本軍の真珠湾攻撃の第一報を知り、直ちにルーズベルト大統領に電話を掛け、そのことを確認しましたが、その著書『第二次世界大戦』の中で、

〈私は、日本の武力を正確に判断したなどと言わないが、今や実にこの瞬間、合衆国が深くかつ最後まで戦争に入ったことを知った。かくてわれわれは、遂に勝ったのである。（中略）私は、三十年以上前、エドワード・グレー（注―第一次世界大戦時のイギリス外相）が私に言った言葉を想起した。合衆国は、「巨大なボイラーの様なものである。その下に火が焚かれると、無限の力を出すことができる」。私は、満身これ感激と感動に浸りかつ満足し、ベッドに行き、救われたという気持ちと感謝の念で、ぐっすり眠った。〉

と書いています。チャーチル首相が、日本軍の真珠湾攻撃に、いかに狂喜したかが推察されます。

正義の女神は過去の非難と賞讃に所を換えることを要求する

イギリスの保守党の重鎮であり、第二次世界大戦中、チャーチル内閣の生産相を務めたオリバー・リットルトンは、一九四四年（昭和19年）六月二十日、ロンドンのサボイ・ホテルで開かれたアメリカ商業会議所での午餐会で演説を行いました。この演説に関して、翌二十一日付『ザ・タイムズ』は、次のような記事を掲げています。

〈通信社によると、リットルトン氏は、用意していた演説から逸脱し、「日本人が真珠湾でアメリカ人を攻撃せざるを得ない」程、アメリカは日本を挑発した、と言明し、「アメリカが戦争に巻き込まれたと言うのは、歴史を戯画化したものである（It is a travesty of history ever to say that America was forced into the war.)」、と付言した。〉

イギリスの海軍軍人ラッセル・グレンフェル大佐は、その著書『主力艦隊シンガポール』の中で、〈今日、いやしくも合理的な知性のある人で、日本が合衆国に対して悪辣な不意討ちを行った、と信ずる者はいない。攻撃は十分予期されていたのみならず、実際に希望されていたのである。ルーズベルト大統領が自国を戦争に巻き込みたいと考えていたことは、疑問の余地はない。しかし政治的理由から、最初の敵対行動が相手側から始められるようにすることを、熱望していたのである。そのような理由から彼は、苟も自尊心のある国民であれば、武力に訴えなければ耐えることができない点まで、日本人に圧力を加えたのである。日本は、アメリカの大統領によって合衆国を攻撃す

るように仕組まれたのである(Japan was meant by the American President to attack the United States.)。〉と述べています。

リットルトン生産相は、米英生産・資源庁長官も兼任し、アメリカの事情に精通した政治家であり、また、グレンフェル大佐は、近代史に造詣の深い軍人でありました。しかもこの両人は、第二次世界大戦中、日本を敵として戦った国の優れた有識者であります。従ってその意見は、客観的かつ公正な立場から、日本軍の真珠湾攻撃問題の核心を突いたものである、と言わなければなりません。

オーストラリアの司法官ウィリアム・F・ウエッブ卿は、周知のように、昭和二十一年五月から二十三年十一月まで開かれた極東国際軍事裁判の裁判長を務めましたが、アメリカの記者ディヴィッド・バーガミニの著書『天皇の陰謀』に序文を寄せ、その中で、

極東国際軍事裁判のウエッブは裁判長であるにもかかわらず，裁判中「日本を断罪するどんな権利があるのか」と自問し，真珠湾攻撃とも関連して裁判の正当性を疑っていた。オーストラリアに帰国後，昭和天皇について「神だ。あれだけの試練を受けても帝位を維持しているのは神でなければできぬ」と作家の児島襄氏に語った。

〈私は、東京で裁判長席に座った三十か月の間、証人達の皇室に対する気遣いと尊敬の念、及び自己の立場を主張する際の真面目さと誠実感とに、しばしば心を打たれた。私は、一九四一年戦争に訴えたことに対して、日本を断罪するどんな権利があるのか（what right we had to condemn Japan for having resorted to belligerency in 1941.）、と時々自問した。〉

と書いています。

この文章の後半によると、極東国際軍事裁判の裁判長自身が、日本軍の真珠湾攻撃とも関連して、同裁判の正当性を疑っていることが明瞭であります。

前述しましたが、右の軍事裁判のインド代表判事ラダビノッド・パール博士は、その判決書の最後を、次のような文章で結んでいます。

〈時が熱狂と偏見とを和らげた暁には、また理性が虚偽からその仮面を剝ぎ取った暁には、その時こそ、正義の女神は、その秤を平衡に保ちながら、過去の非難と賞讃の多くに、その所を換えることを要求するであろう（justice, holding evenly her scales, will require much of past censure and praise to change places.）。〉

大東亜戦争史観のあるべき姿を、まことに含蓄ある言葉で、的確かつ明快に指し示しているではありませんか。

【坂本夏男】

二　空前のスケール・破竹の進撃

アジア・アフリカの植民地民族に与えた独立への夢と勇気

重い荷物を背負わせる戦後教育

戦記物というと、どうも悲惨なものばかりが日本では目につきます。毎年各地で開かれる戦争展にしても、その悲惨さを最大限に訴えているものが多いのが現状のようです。

学校でも、戦争の悲惨さや不条理、あるいは、人間として国家としてしてはならないことを日本はしたんだと教えられてきました。平成四年度から使われる教科書をみても、そのような主旨で書かれています。ですから、何か重い荷物を背負わされたような気持で私は学生時代を過ごしました。恐らく、今の学生の中にも私と同じ気持を味わっている人は多いのではないでしょうか。

しかし、戦争の全期間を通じて、すべてが悲惨なものばかりだったのでしょうか。すべて「過ちは

繰返しませぬから」といった過ちばかりの戦争だったのでしょうか。日本人として誇れることは何ひとつなかったのでしょうか。

学校では一言も教えてくれませんでしたが、日本が米英に宣戦布告し、緒戦を連戦連勝することにより、イギリスやオランダやアメリカの植民地になっていた東南アジアやインドの人々に、独立への夢と希望を与えたというのです。

日清・日露の戦いが、フィンランドなどの北欧やトルコやアフガニスタンなどの中近東の国々に独立の夢を与えたように、大東亜戦争にも同じような面があったとは意外な感じですが、教えられていないのですから仕方がありません。ましてや、敵対国だったイギリスの軍人が緒戦における日本の戦果について「歴史上、最も驚くべき軍事的業績」とほめ讃えているなど、あの戦争の悲惨さや罪悪な面ばかり教えられた人々にとっては、信じ難いことかもしれません。しかし、これもあの戦争にまつわる事実なのです。

ここでは、学校ではほとんど教えられることのない、昭和十六年十二月八日から翌十七年始めにかけての緒戦の経過を順にたどりつつ、それに関する外国の教科書や外国の人々の発言を紹介していきます。まずは真珠湾攻撃からです。

十二月八日は真珠湾ばかりではなかった

昭和十六年（一九四一年）十二月八日、ついに大東亜戦争の火蓋は切って落とされました。

十二月八日午前三時十九分（日本時間）、我が海軍機動部隊の六隻の航空母艦から発進した百八十三機からなる第一次攻撃隊が真珠湾上空にさしかかると、「全軍突撃せよ」の命令とともに空襲を開始したのです。湾内のアメリカ艦隊および各飛行場を一時間にわたって攻撃した後、百七十一機による第二次攻撃も行われました。この開戦の真珠湾攻撃はアメリカ太平洋艦隊に潰滅的な打撃を与え、大成功を収めました。

この第二次攻撃の折、第三制空隊隊長としてカネオエ基地とベローズ陸軍基地を攻撃した飯田房太中佐（当時大尉、二階級特進）は、敵弾に燃料タンクを撃ち裂かれてしまいました。母艦に帰るだけの燃料がないことを知った飯田中佐は、隊長として、攻撃終了後の列機を集めて帰投する針路に誘導す

第２次攻撃隊によって破壊されたハワイ・カネオエ基地のPBY哨戒艇。

飯田房太中佐の顕彰碑。「日本機衝突地点―パイロット，第３制空隊隊長飯田大尉，1941年12月７日」と書かれている（ハワイ・カネオエ米海軍基地内，撮影・田中香浦国柱会会長）

るや機首を下げ、ただ一機戦場に引き返しました。そして、カネオエ基地の格納庫めがけて体当りして戦死したのでした。

アメリカ海軍は、飯田中佐のこの戦いぶりを〝敵ながら天晴（あっぱれ）〟と讃え、今からちょうど二十年前の一九七一年（昭和46年）、その三十周年に際し、「飯田房太大尉顕彰の碑」をカネオエ海軍基地内の突入地点に建立しています。己が体を弾として体当り攻撃を決行した飯田中佐の勇敢さは、戦後三十年を経ても忘れ難い衝撃としてアメリカ海軍に残っていたことになりますが、恩讐（おんしゅう）を越えて碑を建立した精神もまた見事（みごと）です。

現在、ホノルルにある日蓮宗別院に、飯田中佐以下六十五名のハワイ攻撃の際の全戦没者霊名が安置され、毎日ご供養されているといいます（月刊「真世界」昭和60年2月号・8月号参照）。

＊

ところで、十二月八日というと、どうも真珠湾だけがクローズアップされる印象が強いのですが、宣戦の詔書に謳われているように、大東亜戦争の戦う相手国はアメリカとイギリスでした。

ハワイ、太平洋上の諸島そしてフィリピンなどに対する攻撃は、海軍による対アメリカ戦でした。では一方、陸軍はといいますと、東南アジアにおけるマレー、香港（ほんこん）、ビルマの各作戦をすすめ、これはイギリスに対する戦いだったのです。そして、ともに大戦果を上げ、緒戦はすべて勝ちいくさだったのです。

それでは次に、陸軍による東南アジア攻略をみてみましょう。

海軍機動部隊が「ニイタカヤマノボレ一二〇八」の暗号電報を受けた十二月二日、海南島に集結していた山下奉文陸軍中将の指揮する第二十五軍（山下兵団）にも暗号電報が届きました。「ヒノデハヤマガタ」とあり、やはり十二月八日開戦、予定通りマレー作戦を決行せよとの内容でした。

十二月八日未明の午前二時頃、日本軍はマレー半島の東海岸（タイ湾）のタイ領シンゴラ、タペー、パタニに無血上陸し、マラヤ領コタバルへの上陸は、上陸用舟艇群が潮流のため敵国イギリス軍陣地近くまで流され、英軍守備隊の砲火を受けつつ行われた苦しいものでした。しかしながら、後に勇名を馳せた加藤隼戦闘隊など陸軍航空隊の援護を受け、上陸に成功するやコタバル全域を占領し、マレー作戦の緒戦をかざり、一路シンガポールをめざして急進していったのでした。

＊

このマレー作戦を成功させるためには、日本軍はタイ領を通過しなければならず、何としてもタイの了承を得なければなりませんでした。開戦前日の七日夜、坪上貞二駐泰大使はピブン首相に緊急面会を申し入れたのですが、あいにくピブン首相は国境の空港建設視察に出かけていて不在でした。日本側は一睡もせず待ち続け、ピブン首相が帰ってきたのは八日の朝六時四十分でした。

直ちに閣僚会議が開かれ、他の閣僚の同意も得て「日本軍のタイ国への平和進駐に関する協定書」に調印することとなったのです。調印終了は七時三十分。タイ政府はラジオを通じて「日本軍上陸通過協定」の締結を発表したのですが、時すでに遅く、日本軍が上陸した後でした。タイ軍や警察隊との小ぜりあいがありました。しかし、すぐに終わりましたので大事には至らず、まさに間一髪でした。

シャムという国名をタイに改めたピブン首相は、タイ国内の華僑勢力を抑えて、タイ人のタイ国をめざして「ラタニヨム」という愛国運動を起こし、これは間接的な日本支援の運動でもありました。日本が支那事変を戦っていた時、タイに住む華僑は本国援護の送金をしており、この政策により実質的にストップさせられたからです。

このピブン首相のタイ国と日本は、昭和十六年十二月二十一日、日タイ同盟条約を結びます。すると米・英は翌十七年（一九四二年）一月初め、同盟したということでタイの地方都市を空襲しはじめたのです。そこでタイは一月二十五日、米・英両国に敢然と宣戦布告したのでした。

ところで、産経新聞は平成三年の八月八日から「日本はどう教えられているか―東南アジアの教科書から」という記事を連載しました。その第一回はタイでした。そこでは、中学三年用社会科教科書『わたしたちの世界』（一九七八年版）を取り上げ、特徴的なこととして「国土・資源小国で、敗戦による荒廃を経験した日本が、なぜ経済大国としてよみがえったのかという問題が教科書の基調」であることを上げ、この記事を書いた記者（バンコク・宗正毅氏）はさらなる特徴として次のようなことを上げています。

〈アジア諸国でいまなお根強い対日警戒感の原点をなす大戦中の日本のアジア侵略について、触れられていない点だ。〉

この教科書では日本について、戦争中のことについてよりも、戦後の経済成長の原因の分析に重点があり、「他国民は日本にもっと関心を持って研究すべきである」と書かれているそうです。

このタイの教科書は一九七八年版、つまり十三年も前から同じ内容が教えられているわけですが、いわゆる「日本のアジア侵略」に触れられていないと記者は訝（いぶか）っています。しかし、これまでみてきたように、日本はタイを通過・進駐しただけで侵略していないのですから、侵略について書きようがないのです。また、過ぎ去ったことを振り返るよりも、タイ国自身の発展につながることとして、前向きな心で日本をとらえようとしている編集姿勢が濃厚にうかがえることからも、この記者の指摘が的はずれであることがおわかりいただけるかと思います。

いずれにせよ、この記事は、先入観をもって大東亜戦争をみてはいけないことを反面教師として私たちに教えてくれています。

マレー沖で沈めたイギリスの東洋侵略の象徴プリンス・オブ・ウェールズ

マレー半島に上陸した我が日本陸軍は、シンガポールをめざして南下していきました。一方、海軍はイギリスの東洋艦隊を求めてマレー沖海戦にのぞみました。

このイギリス東洋艦隊には、世界に誇る最新の不沈旗艦プリンス・オブ・ウェールズ（三六、七五〇トン）とレパルス（三二、〇七四トン）の二戦艦があり、アジア植民地の守護神としてシンガポールに派遣されていました。

十二月十日午前十時四十五分、この戦艦を見つけ、サイゴンとツドウムの飛行場から海軍航空隊がそれぞれ九機編隊を組んで飛び立ち、この巨艦に波状攻撃をかけたのです。攻撃参加機は八十一機で

した。敵艦も、一分間二千発というヴィクス機関砲による弾幕をはって応戦してきました。しかし、魚雷による海軍航空隊の近接攻撃により、午後十二時半、両艦とも撃沈されてしまったのです。

イギリスの東南アジア侵略の象徴ともいえるプリンス・オブ・ウェールズを撃沈したマレー沖海戦における我が日本軍の勝利は、英軍はもちろん連合国軍に手痛い打撃を与えました。イギリスの首相チャーチルは戦後、『第二次大戦回顧録』をものしてノーベル文学賞を受けました。このマレー沖海戦の敗北の報はチャーチルを深く嘆かせ、次のように記させています。

〈十二月十日、私の部屋で電話が鳴った。それは軍令部長であった。彼の声は変だった。咳をしているようでもあり、こみあげてくるものをこらえているようでもあり、はじめは明瞭に聞きとれなかった。「総理、プリンス・オブ・ウェールズとレパルスが、両方とも日本軍に沈められたことを報告しなければなりません。フィリップス（注―極東艦隊司令長官）は水死しました」「その通りかね」「全く疑う余地はありません」。私は受話器を置いた。私はひとりきりであることが幸だった。戦争の全期間を通じて、私はそれ以上の衝撃を受けたことがなかった。〉

また、そのイギリスでも、著名な歴史学者アーノルド・J・トインビーは冷静に歴史を振り返り、この歴史的偉業を次のように位置づけています。

〈英国最新最良の戦艦二隻が日本空軍（注―海軍航空隊）によって撃沈されたことは、特別にセンセーションをまき起こすでき事であった。それはまた、永続的な重要性を持つでき事であった。なぜなら一八四〇年のアヘン戦争以来、東アジアにおける英国の力は、この地域における西洋全体の支

配を象徴してきていたからである。一九四一年、日本はすべての非西洋国民に対し、西洋は無敵でないことを決定的に示した。この啓示がアジア人の志気に及ぼした恒久的な影響は、一九六七年のベトナムに明らかである。〉（昭和43年3月22日付「毎日新聞」）

確かにトインビーの指摘する通りで、「アジア人の志気に及ぼした恒久的影響」はベトナムでも証明されました。しかし、それ以上に、アジアにおける五十年から三百五十年にも及ぶ西洋の侵略を、たった三年半の日本の大東亜戦争をきっかけとして、戦後、アジア各国自らが打ち破って独立を達成したことに、それはより明確に表われているようです。

＊

ところで、戦後四十六年を経ても、アジアにはイギリスの植民地があります。香港（ホンコン）です。極東におけるイギリスの拠点はシンガポールと香港でしたので、我が日本陸軍は香港を攻略すべく、開戦の十二月八日未明、マレー半島上陸の成功を知らせる「ハナサク・ハナサク」の暗号電報を受けるやいなや、まず香港の対岸にある九竜半島の啓徳飛行場を攻撃し、十二日にはイギリス軍を九竜半島から追い出し、香港に引き揚げさせたのでした。

香港には多くの一般住民もいましたので、香港攻略をした酒井隆（さかいたかし）軍司令官は軍使を二回送り、降伏を勧告しました。しかし、イギリス軍は住民を人質としてこれを拒否します。そこで、十八日夜、香港島に上陸し果敢に攻め込みました。

市街へ給水していた貯水池を発見して給水を停止したことも功を奏し、クリスマスの十二月二十五

日夕、十八日間の攻防の末、イギリス軍は白旗をかかげて降伏したのです。

マレー半島・シンガポールを七十日で席巻

タイの南のシンゴラ・タペー、パタニそしてコタバルへ上陸した山下奉文中将率いる日本軍は、タイ・マラヤ国境から約三〇キロのジットラに、日本軍の進撃を少なくとも三カ月は食い止めることができるといわれていた「ジットラ・ライン」と呼ばれる堅固な防衛陣地を、上陸してから四日目の十二月十一日、十二日のたった二日間で難なく突破してしまいました。そして、インド洋側にあるアロールスター（マレーシア・ケダ州都）へイギリス軍を追いつめ、十三日午前九時にはここも占領してしまいました。

このアロールスターでは、降伏した英連邦軍の中に、後にインド国民軍（ＩＮＡ）の初代司令官になったモハンシン大尉がおりました。「共にインド独立のために起ちあがろう、この戦争はアジア解放の戦いなのだ」という呼びかけに応じて投降してきたのでした。

日本軍の捕虜となればどんな屈辱を受けるかと不安に陥っていたインド兵たちは、待遇が日本兵と同じことに感激し、後に日本の協力によって創設されたインド国民軍に次々と加わり、チャンドラ・ボースがこれを率いて「チャロ・デリー（進め、デリーへ）！」を合い言葉に、日本軍とともにインパール作戦を戦ったのでした。（第2部「4、壮絶なる闘い」および第3部「5、インド」参照）。

日本軍が緒戦を圧倒的な勝利で飾った背景には、武器や軍人の数、あるいは軍隊の優劣を越え、ア

ジア独立の戦いであることを明確に宣明することによって、現地の人々の全面的協力を勝ち得たということがあり、この事実は見逃されてはなりません。

快進撃を続ける日本軍は、マレー半島を西と東から競うように南進していきました。途中からはタイに進駐していた近衛師団部隊も加わり、自転車に乗った銀輪部隊を先頭に、ジャングルとゴム林の間を縫ってシンガポールめざして進撃していきます。自転車は当時の秘密兵器で、あまりの快進撃そして神出鬼没ぶりに、イギリス軍は為すところを知らなかったそうです。

マレー半島作戦における英軍の最後の抵抗となったのは、クアラルンプールとシンガポールの中間に位置する山岳地ゲマスにおける戦いでした。この陣地にたてこもるイギリス軍は、これまでのようなすぐに敗走するイギリス軍と違い、猛烈な反撃をしたのです。この勇敢な部隊はオーストラリア部隊で、一週間の激戦が続きました。双方に多くの戦死者を出しましたが、翌十七年一月十九日、イギリス軍は敗走してゲマスの戦いを勝ち取りました。

シンガポールの中学二年生が使っている『現代シンガポールの社会経済史』（一九八五年版）では、この戦いの模様を次のように書いています。

〈オーストラリア兵達の勇気は、日本兵、特に彼らの指揮者によって称賛された。敬意のあかしとして、彼らは、ジェマールアンのはずれの丘の斜面の、オーストラリア兵二百人の大規模な墓の上に、一本の巨大な木製の十字架をたてることを命じた。十字架には、「私たちの勇敢な敵、オーストラリア兵士のために」という言葉が書かれていた。〉

マレー作戦経過要図

シンゴラ・
パタニ上陸
12月8日

シンゴラ
タペー
パタニ
ジットラ
アロールスター

ジットラ陣地突破
12月11日〜12日

スンガイパタニ
グルン
ペナン島
ベトン
コタバル
ケチル
グリク

ペナン島占領
12月19日

タイピン
クアラカンサル
ブランジャク
イポー
ルムト
カンパル

カンパルの戦闘
12月28日〜1月2日

テロクアンソン
スリム

スリムの戦闘
1月7日

ダンジョンマリム
セランゴール
クアラルンプール
クワンタン

クアラルンプール占領
1月11日　2000

クラン
セランバン

ゲマスの戦闘
1月12日〜15日

ゲマス
マラッカ
エンドウ
カラン
ムアール
クルアン
メルシン
パクリ
ジョホールバル
バトハハ
コタチンギ

ジョホールバル突入
1月31日　夕〜夜

英軍降伏
2月15日　1950

シンガポール

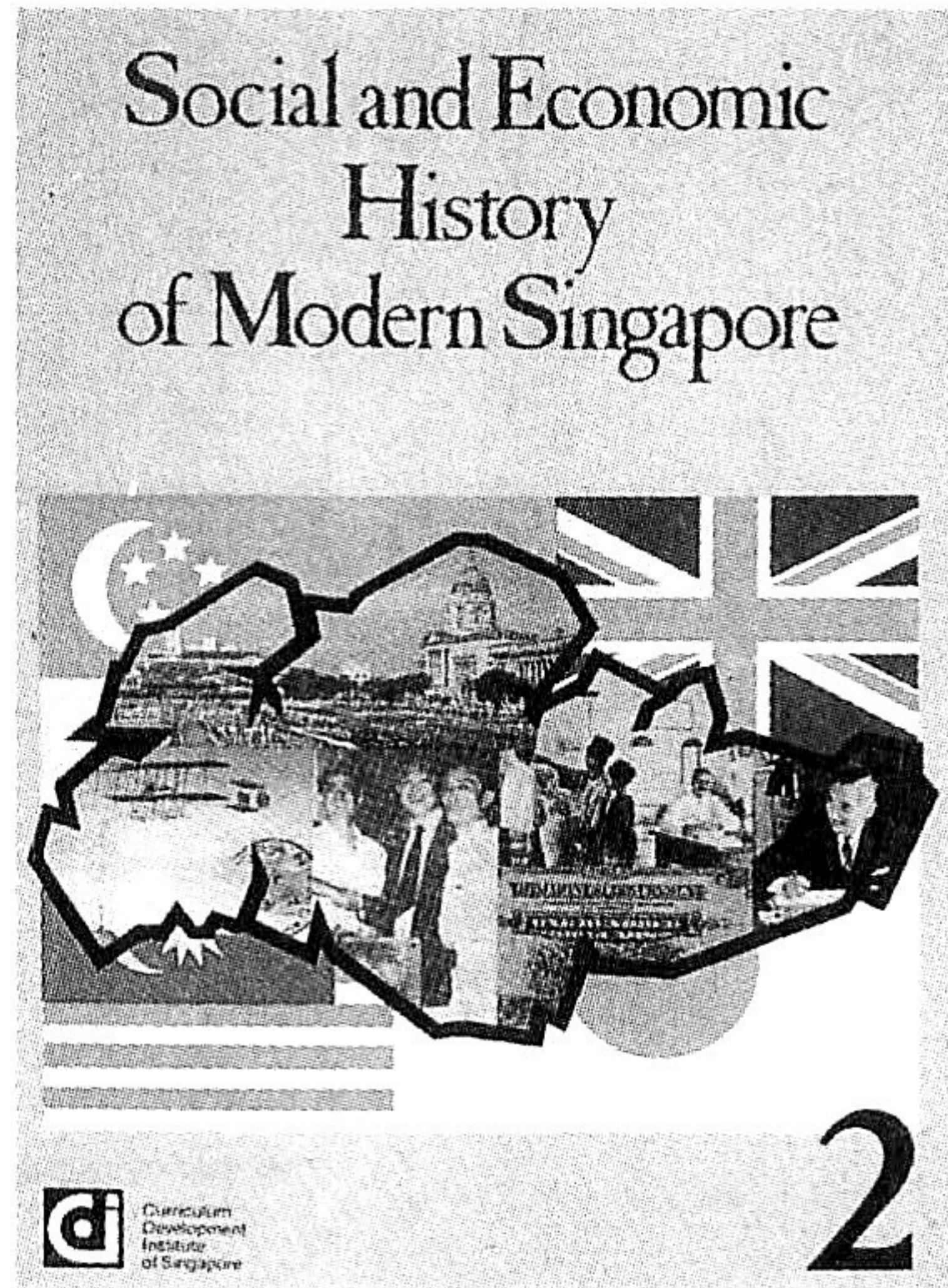
（土生良樹『日本人よありがとう』より）

シンガポールの教科書ですから、もちろん自国のことをよく書き、日本の戦争中のことは批難を込めて書いていています。しかし、このような日本軍の真摯な行為は、コメントこそ加えていませんが忘れずに記しています。何でもかんでも「日本のアジア侵略」で片づけてしまう日本の教科書とは、一味も二味も違うようです。

そして一月三十一日、日本軍はついにマレー半島南端のジョホールバルに突入し、同日夜にはここも占領してしまいました。めざすシンガポール島はもう目の前にあります。十二月八日上陸から一月三十一日のジョホールバル占領まで、五十五日。マレー半島約千キロをたったこれだけの日数で縦断し席巻したのですから、世界の戦史に残る快進撃といってよいでしょう。

Social and Economic History of Modern Singapore

2

Curriculum Development Institute of Singapore

シンガポールの中学２年生が使っている『現代シンガポールの社会経済史』

Japanese troops on bicycles
Large numbers of Japanese troops moved about on bicycles, most of which they had taken from the local people. They could move faster than the British troops, who usually travelled on foot.

自転車に乗っている日本の軍隊（シンガポール教科書の写真とその説明）

＊

マレーシアのジョホールバルとシンガポール島の間には、ジョホール水道があります。日本軍の各部隊は次々とこのジョホール水道に殺到し、休む間もなく、イギリス植民地の心臓部であるシンガポール島へ進撃し続けました。

マレー方面陸軍最高指揮官に任ぜられた山下奉文中将は二月八日、十一日の紀元節（現在の建国記念の日）までにシンガポールを陥落しようと総攻撃を開始しました。十四日、山下中将は「あと二日で弾薬が尽きる」という報告を受けていましたが、最後の一発まで砲撃を続けてイギリス軍を降伏させるべく、これまでと同じように攻撃の手をゆるめませんでした。

A group of British officers marching to surrender to the Japanese
(General Percival was on the right)

イギリス士官のグループが日本軍への降伏のために歩いている［右端がパーシバル将軍］（シンガポール教科書の写真とその説明）

General Yamashita, Commander of the Japanese troops who captured Singapore, inspecting one of the damaged areas in Singapore after the British surrender.

イギリス降伏後のシンガポールの損害を受けた地域を視察する日本軍司令官山下将軍（同）

二月十五日、大きな白旗を掲げたイギリス軍の軍使が前線に現われ、日本軍は劣勢を気づかれることなく降伏文書に署名させたのでした。

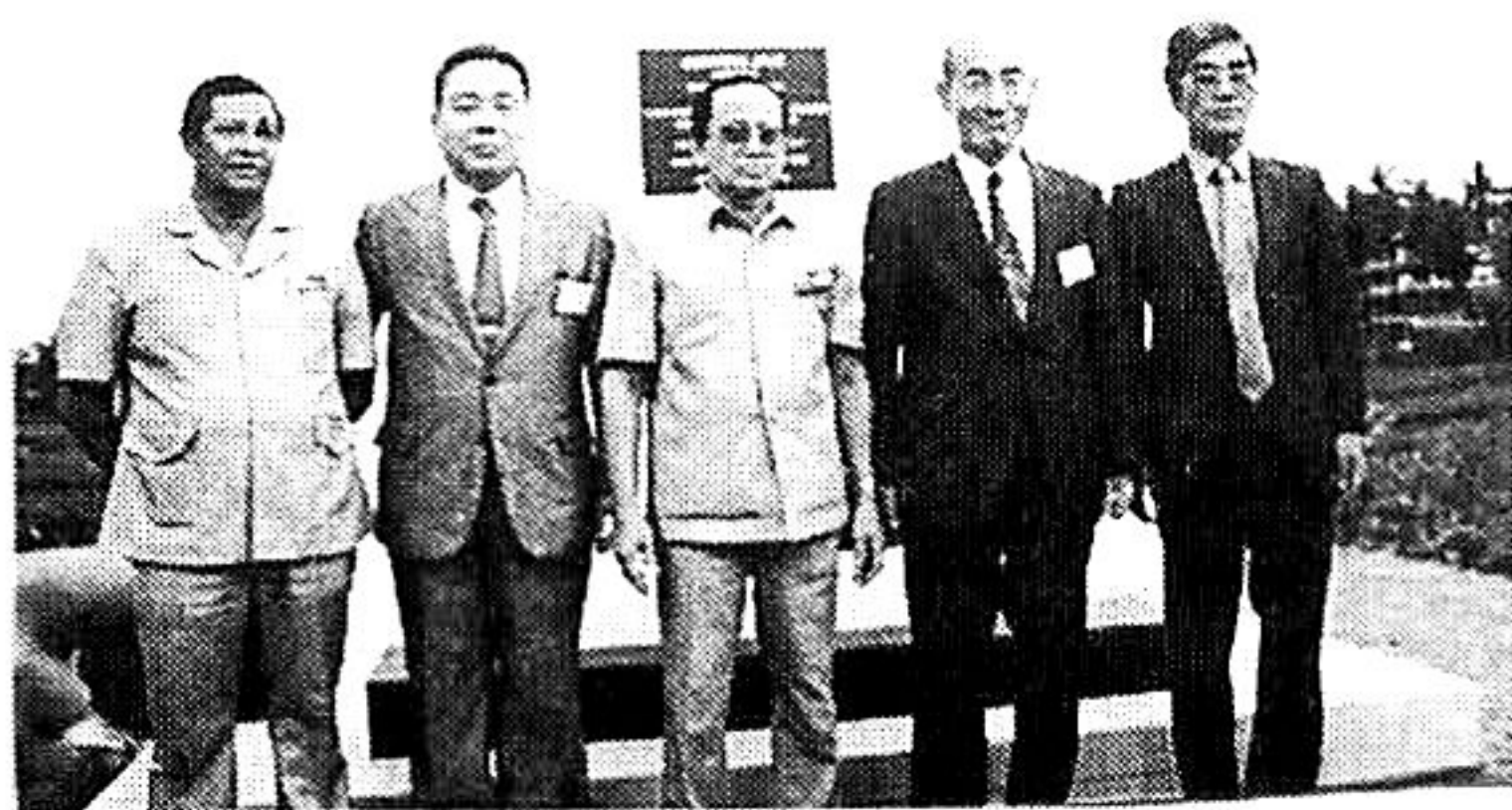
昭和十六年十二月八日から翌十七年二月十五日まで、七十日にわたる攻防の末、ついに日本はイギリスを東南アジアから追い出し、世界の誰もが、当の日本さえ予期していなかった大勝利で終結を迎えたのでした。

フランスのド・ゴール将軍（戦後のフランス大統領）は、二月十五日の日記に「シンガポールの陥落は、白人植民地主義の長い歴史の終焉を意味する」と記しました。まさしくこの昭和十七年二月十五日は、日本とともに戦ったアジアの人々にとって忘れられない日となったのです。

アメリカの歴史学者ヘレン・ミアズはさらに明確に、『アメリカの反省』の中で次のように指摘しています。

〈アジア大陸及び英仏蘭（注―イギリス・フランス・オランダ）の植民地に於ける日本の最初の勝利は、土着民の協力者達の活動によつて、獲得されたものなのである。二、三の著しい例外はあるが（フィリピンの戦役は、その中の一である）日本の緒戦の成功は、ほとんど戦ひらしい戦ひをせずに獲得された。アジアに於けるヨーロッパの「所有王」達は、日本の軍隊に追はれるといふよりも、むしろ土着民の敵対心に抗しかねて引き上げた。我々は「解放」の戦と呼んだが、アジアに於ける戦争はヨーロッパのアジア再征服――（恥づべきことには）アメリカの援助を伴つた――の戦であることが判明したのである。〉

先にも少し触れたように、マレー半島およびシンガポールにおける日本の勝利は、それぞれの国で現地の人々の協力があったお蔭です。ヘレン・ミアズはいみじくもそれを指摘しています。このような歴史があったことを、敵国だったアメリカ人でさえ指摘しているのです。

話は少し戻りますが、日本軍が上陸したコタバルはマレーシアのケランタン州に含まれています。現在、その州知事をしているダト・モハマッド・ヤコブ氏は、コタバル上陸部隊戦友会がたびたびマレーシアを訪ねては慰霊を重ねていることを知り、環境開発庁長官をしていた時、この戦友会に「日本軍上陸海岸一帯を平和公園にしたい。助力してもらえば、五エーカー（約二万平方メートル、約六千坪）の土地を提供したい」と持ちかけたのでした。

コタバル平和祈念時計塔

平和祈念時計塔前に立つ現地要人と戦友会の人々。中央がヤコブ州知事（昭和63年２月24日）

その後、コタバル在住華僑の反対などの紆余曲折を経て、昭和六十三年二月二十四日、コタバルの地に戦友会の手によって、高さ一〇メートルの「コタバル平和祈念時計塔」が建立されました。祈念塔の四方には、日本語、マレーシア語、英語、アラビア語で「永遠に平和と自由の時を刻むを祈る。一九八八年二月」と刻まれています。

除幕式には日本から六十五名が参加し、現地からはヤコブ知事をはじめ多くの人々が集い、開会の挨拶に立ったヤコブ知事は次のように述べました。

〈日本軍の上陸とその後の占領は、我々にとって厳しいものであったが、それによって我々に民族精神を振起させ、一九五七年に独立を達成するきっかけになった。（中略）この時計塔が、コタバル上陸部隊戦友会と当地ケランタンの人々との間に意義深いシンボルとなることを祈念し、私はここに慈悲深い神の名において、この平和公園と時計塔をオープンすることを宣言する。〉（名越二荒之助著「反日華僑とマレー人―英語教科書事件から考へる」より）

やがて、この平和公園内には戦争記念館も建てられる予定だそうです。

フィリピン戦線の日本兵

シンガポールがイギリスの東南アジアにおける心臓部なら、アメリカのそれはフィリピンでした。

十二月八日朝、台湾・台南を発した航空部隊はクラークフィールド、イバの両飛行基地を空爆しました。この日の攻撃はアメリカの油断にも助けられて、百機以上も撃墜大破させ、思わぬ戦果を上げ

たのでした。以後、約一週間にわたる空爆で、日本軍は完全に制空権を握り、これと同時に、先遣隊がルソン島などに上陸して、アメリカ軍の飛行場を占領してしまいました。

アメリカの極東軍司令官は、あのダグラス・マッカーサーでした。一八九九年、八万の大軍を率いてフィリピンに乗り込んできた時のアメリカ軍の軍政長官はアーサー・マッカーサーで、その副官が息子のダグラス・マッカーサー大尉でした。

マッカーサーは日本軍の攻略にたじたじとなり、態勢を立て直すため、全軍にバターン半島への退却を命じました。十二月二十四日のことです。

その結果、翌昭和十七年一月二日、本間（ほんま）雅晴（まさはる）中将率いる日本軍は南北からマニラに無血入城し、占領したのでした。開戦から二十六日目と、これまた驚異的なスピードでした。

日本軍はその後、ただちにバターン半島攻略に乗り出し、強い抵抗を受けたものの、マッカーサーを追いつめていきました。マッカーサーはコレヒドール島からミンダナオ島へと逃げ、三月十七日、ついにオーストラリアへと脱出してしまいました。当然のこと、最高指揮官の欠けたアメリカ軍の士気は落ち、四月十九日にはバターン半島が攻略され、五月七日には最後の要塞コレヒドール島も日本軍の手に陥ち、アメリカ軍は無条件降伏を申し出て、フィリピン作戦もまたマレー作戦と同様、日本軍の勝利で終結したのでした。

ところで、日本では今もって大東亜戦争中のことが尾を引いて、フィリピンの対日感情が特に悪いように受けとられている風潮があります。

しかし、国立フィリピン大学のエルピディオ・サンタロマーナ助教授（国際関係論）によれば、それは誤りで、その風潮を煽っている「特定のイデオロギーを持つグループ」が両国にいるからで、彼らが両国の「成熟した関係を築」くことを妨げているというのです（399頁参照）。とすれば、彼らの説く「侵略戦争論」は十二分に疑って聞く必要がありそうです。

「第二次世界大戦の日本将兵の、思いやりのある一面を明らかに」しようとして『草の根証言集・フィリピン戦線の日本兵』をまとめた国立フィリピン大学のアルフォンソ・P・サントス教授（英語学、米国ペンクラブ会員）もまた、両国の成熟した関係を築こうとしている一人です。

サントス教授は「すべての日本将兵が残虐であったのではないことを告げ示す証言」として、「ジンボ・ノブヒコ（神保信彦）中佐とマヌエル・ロハス将軍の場合のように、一人の日本人が一人のフィリピン人の生命を助け、そのフィリピン人が今度はその日本人の命を助けるという話」など八十七の物語を集め「日本将兵の人間味のある側面を証(あか)してい」ます。

よくよく考えてみれば、人間として当り前のことですが、いかに戦争中とはいえ、日本軍将兵の中には結婚していない青年がたくさんおり、フィリピン女性に恋し、フィリピン青年の恋仇(こいがたき)に敗れることもあったり、フィリピンの少年に日本語を、日本の兵隊には英語を、それぞれ教え合うこともあったことなどを紹介しています。

戦時下であり「日本のアジア侵略」における「虐殺」というイメージだけが煽られ、ついそのような人間としての行為が忘れられがちですが、それもまた歴史の事実としてきちんと振り返られるべき

ことを教えられます。

ビルマ解放闘争となった大東亜戦争

ビルマはイギリスの植民地でした。大西洋憲章（一九四一年）で「一切の国民」に主権と自治を返還すると宣言したチャーチル英首相でしたが、一カ月かそこらで「英帝国の植民地には適用されない」とひるがえしています。

この理不尽な発言に、植民地の人々は心の底から憤りを覚えました。若くしてイギリスのケンブリッジ、フランスのボルドー両大学に学び、弁護士の資格と哲学博士の称号を得て帰国し、一九三七年、四十四歳の時、英統治下の新憲法のもとで最初のビルマ人首相となったバー・モウもその一人でした。

〈それは、白人のための憲章であって、すべての白人国家が自由で主権を持たなければならないということを意味した。植民地に対しては、あらゆるものを保証された者たち（白人）以上に戦争に挺身するよう呼びかけながら、何の明確な約束もなかったのである。〉（バー・モウ『ビルマの夜明け』）

大西洋憲章は白人国家以外には適用されないという民族差別発言は、バー・モウはじめあらゆるビルマ人を激怒させました。当り前のことです。なおかつビルマは、英国によって強制的に第二次大戦に組み込まれたのですから、この発言が「やがてビルマ人の闘争を最終的な方向にむける役割りを果たすようになる道を拓いたのであった」とバー・モウは述べています。

そもそも、日本とビルマは友好関係にありました。さかのぼれば、日露戦争の日本の勝利は「アジアの目覚めの発端、またはその発端の出発点とも呼べるもの」（バー・モウ前掲書）で、一九三〇年代には日本・ビルマ文化協会が互いの国に発足していました。

このような時に、一九三九年、ドイツのポーランド進出によって第二次世界大戦が始まり、日本が「アジア人のためのアジアを」というスローガンを掲げて、アジアを侵略していたアメリカとイギリスに宣戦布告したのですから、ビルマの人々は日本軍を快く迎え入れたのでした。

日本がビルマ作戦を行ったのには、重要な目的がありました。それまで日本は支那事変を戦っていたのですが、蔣介石の戦力を維持するため、連合国側は月に三万トンもの物資を送る援蔣ルートを四つも開き、日本をおおいに悩ませていました。日本としては、何としてもその主要ルートであるビルマルート（昭和15年10月18日、イギリスは援蔣物資の輸送を再開）を断ち切る必要がありました。

そこで、昭和十六年（一九四一年）二月、陸軍は鈴木敬司（すずきけいじ）大佐を機関長とする南機関を発足させ、ビルマルート切断、ビルマ独立運動の活発化、インド独立を刺激すること、を目的とするビルマ工作にとりかかりました。

大本営の考え方としては、マレー作戦やフィリピン作戦が順調に運んだ後にビルマ作戦を展開しようとしていました。しかし、南機関がビルマ独立義勇軍の編成に成功し、独立の気運が急速に盛り上ってきたため、昭和十七年（一九四二年）一月、我が日本陸軍と、前年暮も押しつまった十二月二十八日に産ぶ声を上げたばかりのビルマ独立義勇軍二百名は、ともにタイ国境を越え、ビルマ南部へ向

かったのでした。

飯田祥二郎(いいだしょうじろう)中将率いる第十五軍はビルマに入るや声明を発し、「日本軍のビルマ進撃の目的は、最近百年間搾取と圧政とを事とするイギリス勢力を一掃し、ビルマ全民衆を解放して、その宿望たる独立を支援し、以て東亜永遠の安定確保と世界平和に寄与せんとするに外ならぬ」と高らかに宣示したのでした。

ビルマの人々にとってはビルマ独立戦争であり、バー・モウに言わしめれば「当時われわれが多大の感動をもって呼んでいた、第四番目のそして最後の英国対ビルマの戦争（第四次ビルマ戦争）」がはじまったのです。ビルマ独立義勇軍は二百名でタイのバンコクを出陣したのですが、多くのビルマ人が我も我もと入ってきて、二カ月目には二十四倍の約四千八百人にもふくれ上ってしまいました。

アメリカのアジア学者で、『大隈重信』や『チャンドラ・ボースと日本』を書いた州立コロラド大学歴史学部教授のジョイス・C・レブラは、南機関はじめ東南アジア各国で義勇軍や独立軍の訓練にたずさわった人々の真摯な情熱を認め、ビルマにおける状況を『東南アジアの解放と日本の遺産』の中で、次のように述べています。

〈ビルマ独立義勇軍がビルマの村々を通って進撃する間、何千という若者たちが解放闘争に参加せよという呼びかけに応じて参集した。実際、あまりに多数の者が参加を求めたので、日本軍もビルマ独立義勇軍統帥部(ママ)も状況を処理することができないほどだった。〉

このような応援を受けて進撃するのですから、補給や輸送路の不備を心配しなければならないほど

順調に進み、当面の目標としたラングーンを昭和十七年（一九四二年）三月八日に陥落させ、海上ルートの補給基地と南部ビルマの航空基地を確保したのでした。イギリス・支那・アメリカからなる連合軍は北部ビルマへ退いたものの、北部ビルマのマンダレー付近で迎えうつ態勢を整えました。しかしここでも、ジャングル戦に一歩長じた日本軍は、イギリスが集結させた機械化部隊を一蹴し、四月下旬にはマンダレーも陥落させたのでした。五月一日、イギリス軍はインドへ、支那軍は自国へと総退去しはじめました。

バー・モウはその時の様子を、『近代ビルマ史』の著者ジョン・F・ケーディの表現を借りつつ、次のようにつづっています。

〈一九四二年五月二十日、英国はビルマにおける戦闘を公式にやめ、英国のビルマ軍の総司令官の官職を解き、以後、それはインドにおける軍事指揮下に置かれることになった。ケーディの憂鬱そうな表現を借りると、「一九四二年五月下旬までに、日本軍の勝利は蹂躙を尽くして完全なものとなった」〉（前掲『ビルマの夜明け』）

このあとすぐに続けて、イギリス軍側の見方を取り上げています。

〈陸軍少佐ジョン・L・クリスチャンは『ビルマと日本人侵入者』（一九四五年、タッカー・ボンベイ）の中で、これら短期間に達成された太平洋地域および東南アジアでの勝利について、「歴史上、最も驚くべき軍事的業績」と述べている。〉

確かにこのイギリス陸軍少佐の言う通り、ビルマ作戦が連戦連勝で快進撃を続けている間、日本は

ジャワ作戦も平行してすすめ、三月八日にはジャワ島も占領し、オランダ軍や米英濠連合軍を降伏させているのですから「歴史上、最も驚くべき軍事的業績」と言えるのかもしれません。敵国だった軍人が、最終的に日本を敗った一九四五年に述べているのですから、私たちは素直にそれに耳を傾けるべきでしょう。

東南アジア・インドそしてアフリカにまで影響を与えた緒戦の勝利

事実としても、それは裏付けられます。まず、そのスピードの早さです。昭和十六年十二月八日の開戦からマレーシアの首都クアラルンプール陥落までが三十五日、マレー半島南端のジョホールバルは五十五日、シンガポールは七十日、ビルマのラングーンは九十一日、インドネシアの首島ジャワも同じく九十一日でそれぞれ陥落させているのですから、その範囲をみれば驚くべきスピードでした。

また、人数の点からもそれは裏付けられます。マレー半島上陸の時、日本軍の約四万二千人（途中から一万八千人増援）に対し英印軍は約十万人と、半分しかいないのです。インドネシアへのジャワ作戦もほぼ同じです。終戦時、ジャワ作戦参謀をつとめた宮元静雄氏の詳述する『ジャワ終戦処理記』には、次のように記されています。

〈今村均（いまむらひとし）中将の指揮する第十六軍五・五万は、昭和十七年（一九四二年）三月僅か十日、死二五五傷七〇二を以て蘭印地区連合軍八万を降伏させ、激戦を考慮して準備せられた第二、三次梯団五万余の兵力を不用とした。〉

では、どうしてこのようなスピードと少ない人数で緒戦を次々とものにしていったのかと言いますと、その成功の原因を、先にあげたシンガポールの中学二年生用の教科書では、イギリス軍と比較して次のように書いてあります。

〈山下（注―山下奉文中将）が指揮する日本の兵隊達は、ジャングル戦の訓練をよくしていただけでなく、国や天皇に対する愛国心がとても強かった。彼らは、降伏したり捕虜になるより、むしろ死ぬまで勇敢に戦う覚悟ができていた。〉

もちろん愛国心に満ち満ちていたこともありますが、イギリスやアメリカ軍人も同じように愛国心は懐いていました。やはり、それ以上に重要だったのは、インドネシアやビルマにみられたように、現地の人々の協力を得たことです。先にあげた宮元静雄氏もそれを指摘しています。

〈(兵力を不用とした）これはインドネシア民族の心からなる協力に基くもので、またインドネシア民族に自ら感ずる親近感と相俟ち、心からの同胞感をもち、敵対感をもたなかった。そしてこれがジャワ軍の伝統となっていた。〉

この「協力」を保ち得なかったところもありましたが、緒戦の百日は、現地の人々の「心からなる協力」を得た栄光の百日だったと言えそうです。これが「歴史上、最も驚くべき軍事的業績」をあげさせ、東南アジアやインドの人々は〝独立〟への夢と勇気を育んだのでした。

しかしながら、独立への夢と勇気を育んだのは東南アジアやインドばかりではありません。驚いたことに、アフリカの人々も独立への勇気を与えられた、と言うのです。

西アフリカのギニア湾に面したナイジェリアはイギリスの植民地でしたが、一九六〇年に独立しています。現在、ナイジェリア史の入門書として広く読まれ、高校の教科書にも採用されているマイケル・クローター著『ナイジェリア―歴史への入門』では「第二次世界大戦に従事した多数の兵士は、新しい思想をもち帰った」として、日本の緒戦の勝利に触れています。

〈第二に、白人が無敵ではないこと、たとえば極東のイギリス帝国における日本軍の占領をみてしまった。第三に、インドで、兵士たちは強烈な民族主義感情と接触した。〉

緒戦において、イギリスをアジアから追い出した日本の印象は強烈だったようで、「イギリスの敗北、特に日本軍による敗北は、植民地権力が無敵であるというイメージを弱めた」と記し、それが独立のきっかけとなったのだと、はっきり述べているのです。

今は敗戦の陰にかくれてあまり語られることのない緒戦ですが、その勝利がどれほどアジアやインド、あるいはアフリカの人々に独立への夢と勇気を与えたか、私たちは謙虚に振り返って素直に受け入れ、大東亜戦争を戦った父祖たちを誇りに思ってもいいのではないでしょうか。これは、私たち日本人の大切な遺産のひとつなのですから、私たちの代で途切れさせることなく、慰霊の心とともに、確実に次代へ伝えていきたいものです。

【柚原正敬】

三　大戦のハイライト・大東亜会議

昭和十八年のアジア・サミット

我が国が主催した初めての国際首脳会議

神田の古本街を散策していたある日、私は一冊の古ぼけた本を見つけました。『大東亜共同宣言』（大日本言論報国会編、斎藤忠・大串兎代夫・斎藤晌・作田荘一・白鳥敏夫著、社団法人同盟通信社刊、昭和19年4月15日発行。原文は正漢字・歴史的仮名遣いの正統表記）がそれです。

冒頭に、前文と五原則からなる「大東亜共同宣言」を掲げ、次いで、各原則ごと、その言わんとするところを各執筆者が明らかにする解説が続き、最後に、この宣言が採択された大東亜会議（昭和18年11月5日、6日）における各国代表の演説を日本語訳で掲載してあります。粗悪な紙質のため、もう少しでバラバラになりそうな本です。それに、今どき「大東亜」と名のつく本などあまり人の注意を

引きそうにもありません。

しかし、各国代表の演説に目を通すうち、〝これは、我が日本が主催した世界最初の「アジア・サミット（首脳会議）」ではないか〟と、思わず声が出そうになりました。私が生まれる十六年も前に、こんな壮挙を我が国はやり遂げていたのです。ついつい惹き込まれ、あたかも私自身がその議事に立ち会い、首脳演説に耳を傾けているかのような思いにとらわれたほどでした。

東条英機首相（敗け戦の後では罵詈雑言しか浴びせられなかった開戦時の首相）の堂々たる演説。アジア諸国の代表達はといえば、独立と建設の意気高く、アジアの主体性と自国の誇りを滔々として語っています。今日ではひたすら、我が国による「侵略」の犠牲者とされている彼の国々の代表達が、ここでは、祖国とアジア全体の解放のために、我が国と戦陣を共にする決意を述べているのです。

我が国に、そしてアジアに、かくも堂々たる時代があったことを、これからその演説を中心にご紹介いたします。（以下引用は、特に断わらない限り前掲『大東亜共同宣言』に基づく）。

＊

昭和十八年（一九四三年）十一月五日から六日にかけて、東京の帝国議会議事堂（現国会議事堂）に、我が国を含むアジア七カ国の代表が一堂に会し、アジアの自主独立を旗印とする歴史に残る会議が開かれました。五日の開会式に続いて各国代表演説が行われ、翌六日、共同宣言を満場一致で採択して閉幕しました。

公式日程は11月３日（明治節）午後４時から催された東条首相招待のお茶の会から始まり、翌４日午前11

時過ぎ皇居参内（宮殿にて昭和天皇より拝謁を賜わる）、5日午前10時開場、同10時20分より代表演説、6日午前9時40分に議事堂正面玄関で記念撮影、午後0時55分「共同宣言」採択、自由インド仮政府首班演説、新宿御苑散策ののち大晩餐会、7日日比谷で開催の大東亜結集国民大会において各国代表演説、最後に歌舞伎座の観劇会で結ばれた。

この会議は、我が国が主催し、我が国で開催した初めての国際首脳会議であったばかりか、アジアの国がアジアのために、アジアの地で開いた初めての国際会議でもありました。いわば「昭和十八年のアジア・サミット」とでも言うべき首脳会議だったのです。この会議は「大東亜会議」と呼ばれ、大東亜戦争における我が方の政治的栄光の絶頂を極めました。

この時まで、アジア人が一堂に会し、その結束を固め、共通の諸問題を検討し得る機会はありませんでした。なぜなら、古い歴史を有する国で独立していたのは日本とタイのみで、フィリピンはアメリカの、ビルマやインドはイギリスの植民地とされ、独立を奪われていたからです。

＊

一九四一年（昭和16年）八月、大東亜戦争開戦の約三カ月前、アメリカのルーズベルト大統領とイギリスのチャーチル首相は、大西洋上に浮かぶイギリスの誇る大型戦艦プリンス・オブ・ウェールズ（昭和16年12月10日、我が日本軍により撃沈せらる）艦上で会談し、対ドイツ戦を背景として、両国の「国政上のある種の共通原則」を明らかにした「英米共同宣言（大西洋憲章）」を発表しました。領土不拡大や政体選択権の保障とともに、第三項には「両国は主権および自治を強奪せられたる者に主権、お

よび自治が返還せらるることを希望す」と、民族自決の原則を高らかに謳い上げていました。

しかし、チャーチルはその言を翻します。それに憤ったのがビルマのバー・モウでした。

〈一カ月かそこらでチャーチルは、この憲章は英帝国の植民地には適用されないと再び宣言したのであった。従って、それは、白人のための憲章であって（中略）植民地に対しては、あらゆるものを保障された者たち（白人）以上に戦争に挺身するよう呼びかけながら、何の明確な約束もなかったのである。〉（バー・モウ『ビルマの夜明け』）

バー・モウならずとも、このチャーチルの翻言に怒りを覚えないアジア人は、心根まで植民地の奴隷根性に侵された者のみで、多くのアジアの人々に独立への意志をあらためて固めさせたのでした。

この米英に対し、我が軍将兵は、アジアを彼らから解放するという決意を懐いて南方へ進軍したのです。だからこそ我が軍は、到るところで現地の人々から熱烈な歓迎を受けました。彼らの協力を得て、我が軍はたちまち南方各地を解放したのでした。このフィリピン、ビルマがまず独立を獲得したのです。

こうして、ようやくアジアの独立国代表が一堂に会し、我々アジアのための共同宣言、すなわち五原則からなる「大東亜共同宣言」を採択できたのです。会議参加の各国代表は次の通りです（イロハ順、外務省編『日本外交年表竝主要文書』）。

・日　本　国　内閣総理大臣　　東条英機閣下
・中　華　民　国　国民政府行政院院長　汪兆銘閣下

・タ　イ　国　内閣総理大臣ピー・ピブン・ソンクラム元帥の名代としてワンワイタヤコーン殿下
・満　洲　国　国務総理大臣　張景恵閣下
・フィリピン共和国　大統領　ホセ・ペー・ラウレル閣下
・ビ　ル　マ　国　内閣総理大臣　バー・モウ閣下

これらの錚々（そうそう）たる人々に加え、オブザーバーとして「自由印度仮政府」首班のスバス・チャンドラ・ボース閣下も参加しています。

「大東亜共同宣言」を採択した十一月六日の夕刊各紙は「不滅の大東亜を建設」等と一面に大きく取り上げ、戦後、日教組礼賛の小説『人間の壁』などを書いたいわゆる「進歩的文化人」といわれた作家の石川達三なども「大東亜共同宣言」と題する詩をつくったように、日本中がハワイ攻撃の成功やシンガポール陥落の報を耳にした時と同じような、輝かしくも晴れやかな思いをしたのでした。

各国代表の烈々たる演説にみる大東亜共栄圏建設への決意

会議参加への感動をもっとも素直に述べたのは、バー・モウ首相です。

〈多年（中略）私の亜細亜（アジア）人としての血は常に他の亜細亜人に呼び掛けて来たのであります。昼となく、夜となく、私は自分の夢の中で亜細亜が其の子供に呼び掛ける声を聞くのを常としましたが、今日此の席に於て私は始めて夢に非ざる亜細亜の呼声を現実に聞いた次第であります。〉

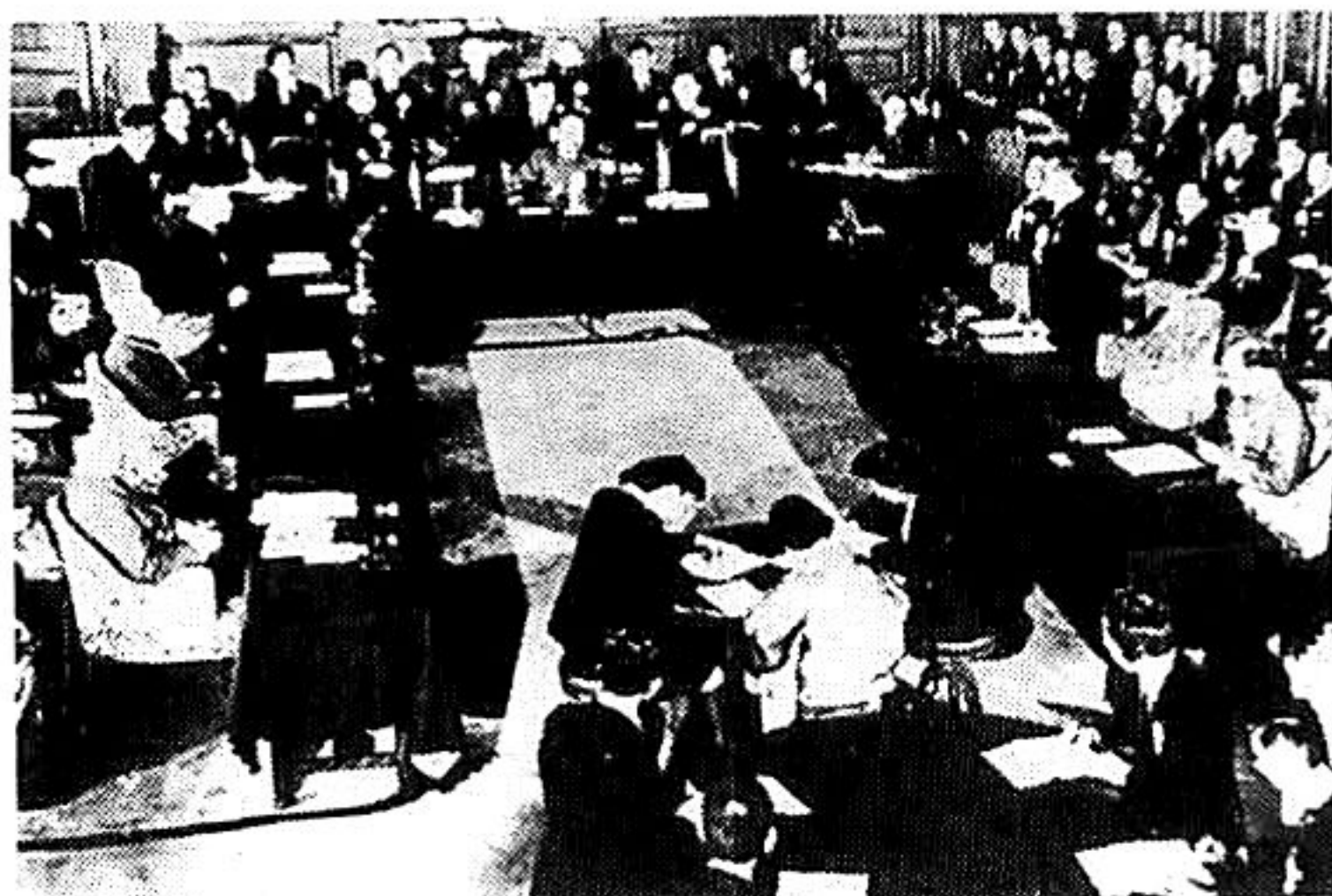
バー・モウ首相は、ではなぜかくも長く待たなければならなかったのでしょうか。十億のアジア人

が「米英に（中略）斯くも圧迫支配され」て来た理由として、フィリピンのラウレル大統領は左の三点を挙げています。

一、「政治的支配及び経済的搾取」・「分割統治」

二、これらにより「弱体化せられ（中略）積極性を萎微せしめられ」たこと。

三、「生まれたばかりの小国であるフィリピン共和国の体験に基く」と特に断わった上で「対日猜疑感」の醸成、つまり「我等をして日本は（中略）朋友同胞に非ずして仇敵なりと信ぜしめた西洋諸国(の)外交的謀略」です。

敵が我が国と「アジア」を分断しなければならないと考えたこの事実の中に、大東亜戦争の意義の

大東亜会議の模様

会議の公式行事は，昭和18年11月3日（明治節）の午後4時からはじまった。この写真は翌4日に撮ったもので，席がコの字型に配置されている。正面に東条英機首相，その左が中華民国の汪兆銘（精衛）国民政府行政院院長，満洲国の張景恵国務総理大臣，ビルマのバー・モウ首相。東条首相の右がタイ首相名代のワンワイタヤコーン殿下，フィリピン共和国のホセ・P・ラウレル大統領，自由印度臨時政府のスバス・チャンドラ・ボースと並んでいる。この写真を，東条首相は退任後も応接間に掲げ，常に仰いでいた。

ひとつが隠されてはいないでしょうか。我が国はアジア解放の鍵であり、自由なアジアを創造する力の源泉だったのです。

我が国の軍事力（及びそれを支えた総合的な近代国家としての力）がなければ、独立への意欲のみでは解放は実現し得なかったのです。まさに張総理の次の言の通りなのです。

〈悲惨なりし過去に訣別し、汚辱せられたる栄誉を回復すべく、米英支配権力の偽瞞と抑圧とにも拘らず、東亜各国に脈々として底流しつつあつた解放への念願は、大日本帝国の終始一貫せる道義的政策と旺盛なる実行力とに依り、大東亜の名に於いて茲に一挙に実現せられんとしつつある。〉アジアをアジア人の手に――。しからば、その解放されたアジア諸国の間にはいかなる秩序が建設せられるべきなのでしょうか。

この問いへの答えが大東亜共栄圏であり、その依って立つ根本原則を示したのが本会議で採択された「大東亜共同宣言」です（左頁参照）。この五原則を簡単に示せば、次のように要約できます。㈠共存共栄、㈡独立親和、㈢文化昂揚、㈣経済繁栄、㈤世界進運貢献。

我が国はこの原則に基づき、支那に対しては、早くも昭和十八年一月九日以来、租界を還付し、治外法権を撤廃しています。汪兆銘院長も「国父孫先生が日本に対し切望致しました所の、中国を扶けて不平等条約を廃棄するといふことも、既に実現せられた」と述べています。

タイ国に対しては、昭和十八年七月四日にマライ三州及びシャン地方の二州のタイ領編入を承認しています。ワンワイタヤコーン殿下は「日本政府は宏量、克くタイ国の失地回復と民族力結集の国民

大東亞共同宣言

抑々世界各國が各其の所を得相倚り相扶けて萬邦共榮の樂を偕にするは世界平和確立の根本要義なり

然るに米英は自國の繁榮の爲には他國家他民族を抑壓し特に大東亞に對しては飽くなき侵略搾取を行ひ大東亞隷屬化の野望を逞うし遂には大東亞の安定を根柢より覆さんとせり大東亞戰爭の原因茲に存す

大東亞各國は相提携して大東亞戰爭を完遂し大東亞を米英の桎梏より解放して其の自存自衛を全うし左の綱領に基き大東亞を建設し以て世界平和の確立に寄與せんことを期す

一、大東亞各國は協同して大東亞の安定を確保し道義に基く共存共榮の秩序を建設す

一、大東亞各國は相互に自主獨立を尊重し互助敦睦の實を擧げ大東亞の親和を確立す

一、大東亞各國は相互に其の傳統を尊重し各民族の創造性を伸暢し大東亞の文化を昂揚す

一、大東亞各國は互惠の下緊密に提携し其の經濟發展を圖り大東亞の繁榮を增進す

一、大東亞各國は萬邦との交誼を篤うし人種的差別を撤廢し普く文化を交流し進んで資源を開放し以て世界の進運に貢獻す

萬邦―邦は国（例・邦人邦楽）。多くの、全ての、の意。ここでは全ての国々。**桎梏**―桎は足かせ、梏は手かせ。束縛の意。**綱領**―根本方針。**寄與**―役に立つこと。**敦睦**―情が厚く仲がよい。昭和天皇御製「西ひがしむつみかはして栄ゆかむ世をこそいのれとしのはじめに」。**伸暢**―のばす。**昂揚**―たかまること。**交誼**―友達のよしみ。**篤うし**―篤くする、手厚くする。（振り仮名は引用者付す）　【平田】

的要望に同情された」と、感謝の意を表しています。

つまり、この五原則を根本方針として樹立せられる大東亜共栄圏は、「之を形成する或る一国の利益の為に建設せらるるものではない」（フィリピン・ラウレル大統領）のです。

とすれば、共栄圏建設には各国の共同と、各国自身の独立自存への「自助努力」とが必要とされるはずです。

汪院長は述べます。「我々は努力し、以て自己の国家を自主独立の国家たらしめ、又自国を東亜の強力なる分子となすことを要す」と。他の代表も、それぞれ新国家建設に当たる決意と方策を述べています。

ここに、この会議の特色のひとつが見られます。軍事的威圧の下、物理的支配とイデオロギーへの同化を強要された傀儡(かいらい)国が、宗主(そうしゅ)国の笛のままに踊らされる会議ではなかったのです。

ボース首班は述べています。「本会議は戦勝者間の戦利品分割の会議ではないのであります。それは弱小国家を犠牲に供せんとする陰謀、謀略の会議でもなく、又弱小なる隣国を瞞着せんとする会議でもないのでありまして、此の会議こそは解放せられたる諸国民の会議であります」と。

当時、ビルマ大使沢田廉三(さわだれんぞう)氏私邸の隣りに住み「バー・モウの沢田邸訪問を記憶している」という作家の深田祐介氏も、最新著で「しかしこの会議に集まってきた、バー・モウ、チャンドラ・ボース、そしてラウレルは、『傀儡』の持つイメージからおおきく隔たる出色の人物たちであった」（『黎明の世紀—大東亜会議とその主役たち』）と指摘しています。

深田氏はその時、十二歳。この会議を「輝かしい印象」として記憶にとどめていました。しかし戦後、「いわゆる東京裁判に端を発する『自由主義対ファシズム』という、単純図式の太平洋戦争史観」がこの大東亜会議を「傀儡政権の代表を集めた茶番劇」と片付けるのに対し、「ここ十数年、小説やノンフィクションの取材でアジア各地を歩き、アジア有識者や一般庶民に数多く接するなかで、かつて感じた大東亜会議の輝かしい印象は、必ずしも間違っていない、とおもうようになった。」と、その本の中で述べています。

＊

各国代表は、自国の伝統文化の復興もしくは独自文化の振興を訴え、かつそれらの総体ないし共通項としてのアジア精神文化の再興を強調しています。

しかし、これは単に「光輝ある古き東亜の復興を意味する」のではなく「より多く新しき東亜の創造を意味するのであり（中略）東亜各国はそれぞれ新時代に即応する意識と力量とを具備しなければならな」いのです。

右は満洲国・張総理の言葉ですが、思えば「真に古き東方道義に立脚し、新しき東亜に目醒めたる強き正しき国家」（張総理）たらんとして建国された満洲国は、当初からこうした文化的課題をもっていたのです。

往時の満洲の有様と言えば「国土は荒廃し軍閥の封建政治に依る無秩序なる苛斂誅求（かれんちゅうきゅう）が行はれ、何等の自由性創造性も」（張総理）なかったのです。これが「典型的なる東亜の様相」（張総理）であった

ことを思えば、かの課題は、新たに独立を得てこの共栄圏に参加したアジアの国々の真に切実な課題でもあったと言えます。

*

この会議は、口舌の徒や評論家の集まりではありませんでした。祖国の存亡をかけた戦争の最中に同盟の中心国で開かれた、戦闘者の集会でした。従って、闘志あふれる烈々たる決意が次々と表明されました。

死して後も国の内外からガンジーをしのぐ仰慕を受け、ネタジ（統領・指導者）と尊称された炎の如きボース首班の言に耳を傾けてみましょう。

〈我々は今後如何なることが起らうとも、又其の闘ひが如何に長期且困難を極めようとも、更に又闘争に伴ふ苦悩及び犠牲が如何なるものなるにもせよ、我等の究極の勝利を確信し、茨刺（いばら）の途を最後迄（まで）戦ひ抜く決意に燃え（中略）、自由獲得の為には当然其の代償を支払はなければならないのであり（中略）、我々は我々の解放の日近きことを確信して戦場に赴かんとするものであります。〉

祖父達そしてアジアの同志達が播いた種は確実に育っている

戦争は政治の一手段ですから、戦争の評価を考えるときには、その戦争目的をどれだけ達成したか、をみなくてはなりません。

勝者である連合国はどうでしょうか。一九四二年（昭和17年）一月一日、ワシントンで出された

「連合国共同宣言」は、彼らの戦争目的の宣言とみられます。これは、前年八月に発表された八項目からなる「英米共同宣言（大西洋憲章）」への賛同を謳ったものです。

この憲章には、戦後の国連・GATT・IMF体制（アメリカというローラーで均（なら）され画一化された世界単一自由市場）がすでに構想されています（第4・5・6・7・8項）。とすれば、この秩序にとって、英帝国の如き植民地大国は敵性なはずですが、本憲章は英米の名で出されています。

また、領土不拡大（第1項）、政体選択権の保障（第3項）が明示されているにもかかわらず、「連合国共同宣言」の署名国として、これらを平然として踏みにじったソ連が含まれています。

さらに、チャーチルにより、例えば、主権および自治を奪われた者にそれらが返されるべきである（第3項）、との条項は、英帝国には適用されない、と宣言されていたにもかかわらず、インドが英国の側に立たせられてこの宣言に署名させられています。

「大西洋憲章」自体、それを発表した米英両国間の連携を強調するよりは、むしろ利害の相違点を表面化させ、「連合国共同宣言」に至っては、署名国を見ただけでその空疎なることが解ってしまいます。こうしてみると、連合国側はなんのために戦争していたのか、さっぱり解らなくなってきます。やみくもに日・独・伊と戦っていただけなのではないか、と思えてきます。

しかも、戦いに勝った連合国側で、戦後にその国際的地位の向上と領土の保全をなし得たのは、四十七カ国中米・ソ二国のみなのです。ましてや大国ソ連の存在は、当初の憲章の想定せざるところでした。英国は米国を引き入れて衰退し、米英の庇蔭をたのんだ蔣介石は毛沢東によって敗退を余儀な

くされ、米国はソ連を味方にしたため、世界の数億の民に共産主義政権の下で生活するという、この上もない惨虐な体験をさせました。

翻って、我が方はどうでしょうか。確かに我々は戦争に敗れ、大東亜共栄圏は志半ばで崩壊しました。しかしながら、私達の父祖達がアジアの同志達とともに切り拓いた独立と自立の道は、もはや閉ざされることがありませんでした。戦争をきっかけとして、アジアからアフリカに至る植民地は解放され、数多くの独立国が誕生したのです。

一九五五年(昭和30年)、インドネシアのバンドンで第二次大東亜会議ともいうべき「アジア・アフリカ会議」が開かれたとき、その参加国は二十九カ国にも増えていました。一九六〇年(昭和35年)には、アフリカ諸国の多数が独立して国連に加盟したことを背景として、国連総会において「植民地解放宣言」が出されるまでになったのです。

大東亜共存共栄をめざした大東亜共栄圏はまず、アセアン(ASEAN、東南アジア諸国連合)という形で一部が復活しました。最近、マレーシアのマハティール首相が提唱した「東アジア経済圏(EAEC)構想」に至っては、大東亜共栄圏構想そのものです。

大東亜会議より四十有余年、会議参加国はじめ近隣のアジア諸国は、政治的にも経済的にも世界を陽性に動かす力をもちつつある地域として、着実に成長し発展しています。父祖達そしてアジアの同志達が播いた種子は、確実に育っているのです。

「水を飲むときは井戸を掘った人を忘れてはならない」という支那の古諺があります。私達は英霊

への感謝と、共に戦ったアジアの同志達への戦友としての礼を忘れてはならないのではないでしょうか。そして私達―大東亜戦争を戦った日本の子である私達は、この輝かしい歴史の継承者として、驕ることなく、しかし誇りと自信をもって力強く前進しようではありませんか。

私達にとっての「明白なる天意（マニフェストデスティニィ）」が何であるかは、自ずから明らかであります（マニフェスト・デスティニイ〈manifest destiny〉とは、キリスト教文明を世界に普及させることこそ、天から与えられた運命〈使命〉とするアメリカの理念。敢えてこの語をここに用いた筆者の意を汲んでいただければ幸いです）。

【平田清美】

四　壮絶なる戦い・玉砕戦

日本の勇戦を讃える世界の人々

悲しい戦史を刻むまで

開戦以来、海に陸に破竹の勢いで作戦を展開した日本軍でしたが、開戦の翌年、すなわち昭和十七年（一九四二年）四月十八日には、太平洋上に進出したアメリカ海軍機動部隊空母ホーネットを飛び立った爆撃機が、日本の首都東京や地方都市に攻撃を加えてきました。

この攻撃は、本格的なものではなく、被害も微々たるものでしたが、日本の軍部に与えた心理的な影響は大きく、とくに海軍は敵空母の撃沈めざし、帝都の安全を守るため、かねて企画していたミッドウェー島攻略作戦（敵艦隊との決戦）を発動させ、同年六月五日にはミッドウェー海戦が行われました。

しかし、この海戦では、日本側の索敵が成功せず、「赤城」「加賀」といった空母をはじめ連合艦隊の中心をなす艦を失い、そのうえ百戦錬磨の優秀なパイロットを多く死なせ、日本の行手に少なからぬ暗雲がただようことになってしまいました。

その年の八月七日、南方の最前線ガダルカナル島に米軍が反攻上陸し、翌十八年二月七日に日本軍が完全撤退するまで、約半年以上の長きにわたり、苛烈な闘いが展開されたのです。海に陸に、アメリカ軍の反攻が開始されたのですが、物量に物を言わせるアメリカ軍は、日本の予想を越えるスピードで圧力を加え、反攻に転じてきたわけです。

では、その当時（昭和17年）、日本がどのような戦争指導を行おうと考えていたのか、についてながめてみましょう。

昭和十七年二月初旬、東条英機首相は南方作戦の一段落をうけ、占領地の行政方策や国内の指導を改めて検討することにし、三月七日の大本営政府連絡会議において「戦争指導大綱」を定めました。

この大綱には、占領地における重要資源の開発と海上交通線の確保、そして、長期不敗の態勢を整え、機を見て積極的な方策を講ずることが盛られていました。長期不敗の態勢と言いながら、一方では海軍による決戦が行われるなど、何かチグハグな作戦を感ずるのですが、要は、当時日本の陸軍は持久戦を目論み、南方の島々に守備隊を派遣し、占領地の確保にあたらせた、と言えます。

しかし、敵の反攻が予想より早かったことと、それら占領地の防備が、未だ充分に完成したとは言えなかったことなど、結果的に、日本軍が玉砕するという悲しい戦史が刻まれてしまったのです。

アメリカ兵も身の毛をよだてたアッツ島玉砕

昭和十八年（一九四三年）二月に南のガダルカナル島から日本軍の撤退が行われてのち、五月三十日には、今度は北方アリューシャン列島に属するアッツ島において、日本軍守備隊が玉砕してしまいます。

米軍の反攻を察知した大本営は、北方の守りを固めるため、アッツ、キスカの両島に対して守備隊の増強を図りますが、輸送船の撃沈などがあり、思うにまかせず、アッツ島ではわずか二千名あまりの守備隊で二万の米軍を迎え撃たなければなりませんでした。その守備隊の隊長が山崎保代（やまざきやすよ）大佐であり、山崎大佐がアッツ島に着任したのは、五月十二日の敵来攻一カ月前、四月十八日のことでした。

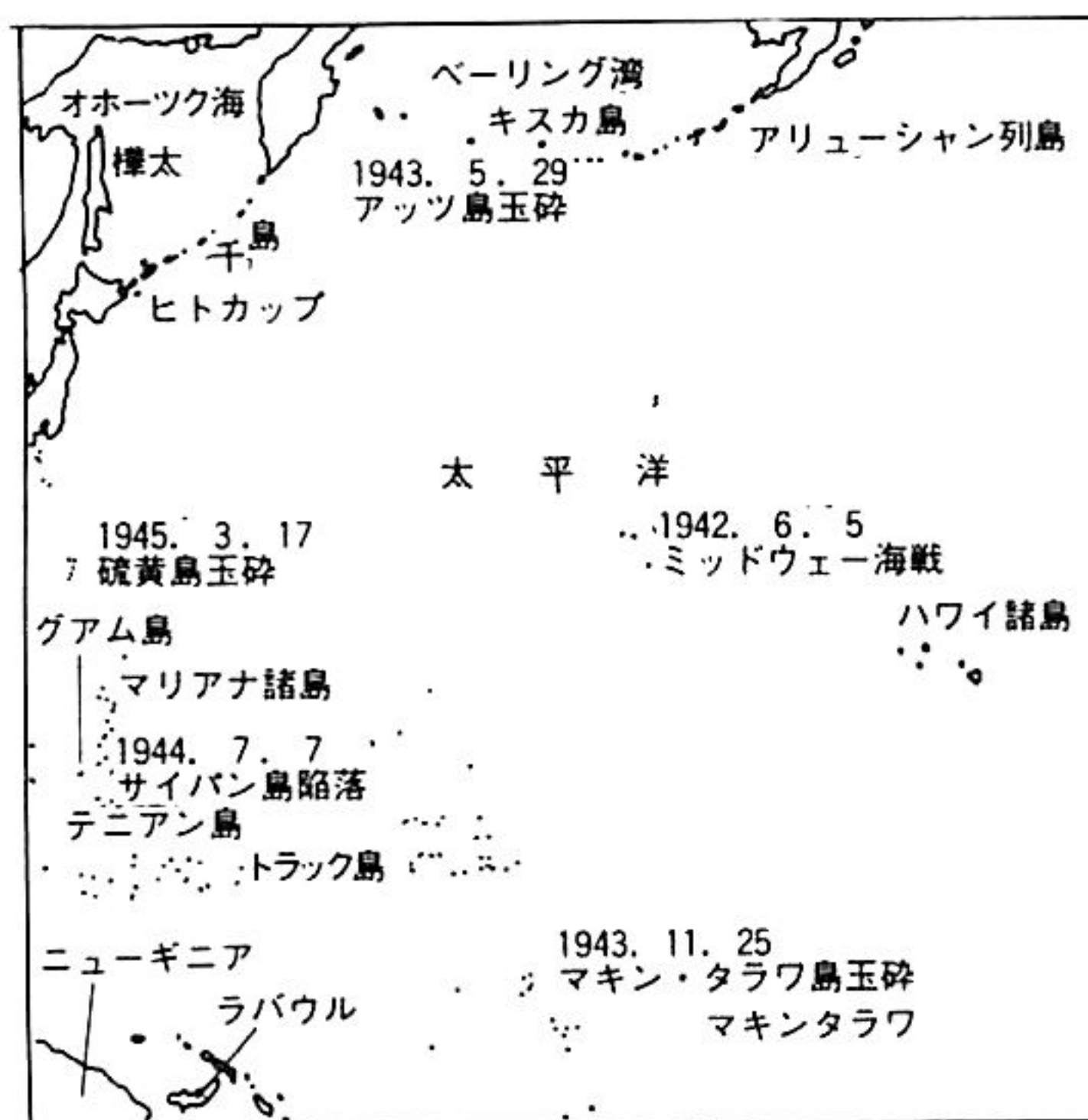
衆寡敵せず、とは、アッツ島における日本軍のことを指していましたが、それでも山崎大佐以下日本の将兵は士気旺盛、一歩も後にはひきません。

予想に反する日本軍の反撃をうけた米上陸軍の第七師団ブラウン師団長は、怖気（おじけ）づき「アラスカの第四連隊を送ってくれ」と救援を要請しました。しかし、「敵は無勢、味方は多勢なのに救援を頼むとは何事か」と怒ったキンケイド提督は、即日ブラウン少将を解任し、ランドラム少将と交代させなければならなかったぐらい、米軍は苦戦を強（し）いられたのです。

苦戦を重ねていた米軍ですが、日本軍の補給の目処（めど）は立たず、一兵の援護、一発の弾丸、一粒の米とても望めないとなれば、いかに精強な山崎部隊であっても勝目はありません。敵上陸から十八日目

の五月二十九日、山崎大佐は全軍突撃の命令を発し、玉砕して英魂となりてのちも尚、護国に赴かんとされました。

山崎大佐指揮による最後の突撃隊の模様について、アッツ島攻略米軍の第一線中隊長だったハーバード・ロング中尉は後日、このように語ったそうです。

〈自分は自動小銃を小脇にかかえて島の一角に立った。霧がたれこめ、百米以上は見えない。ふと異様な物音がひびく。すわ敵襲撃と思ってすかして見ると、三百～四百名が一団となって近づいてくる。先頭に立っているのが山崎部隊長だろう。右手に日本刀、左手に日の丸を持っている。（中略）どの兵隊もボロボロの服をつけ青ざめた形相をしている。手に銃のないものは短剣を握ってい

主な玉砕地

る。最後の突撃というのに、皆どこかを負傷しているのだろう。足を引きずり、膝をするようにゆっくり近づいてくる、我々アメリカ兵は身の毛をよだてた。〉（防衛庁防衛研修所戦史室編『戦史叢書・北東方面作戦』）

まさしく、鬼気迫る突撃であったのです。

三日間で陥落させる予定でいた米軍ですが、思いもかけない大反撃をうけ、数多の犠牲を強いられてようやく奪うことのできたアッツ島、その日本軍守備隊の鬼神をも哭かしむる奮闘ぶりは、ソ連の人々をして、のちの世までも語り継がせることになりました。前出の『戦史叢書』に収録された「アリューシャン作戦記録」（第一復員局編）によれば、

〈ソ連は、この玉砕を日本武士道の精粋なりとし、これを小学校の国定教科書の一教材として採用し〉

と記しています。

アメリカをはじめ、ソ連や世界の人々がこのように感銘を受けた所以はいったいどこにあるのでしょうか。戦争のもつ深層の意義について、こうした事実は私たちに問いかけてくるような気がしてなりません。

敵将スリム中将も激賞したコヒマの奮戦

昭和十九年（一九四四年）三月八日、インド領におけるインパール作戦は開始されました。

インパール作戦は、大東亜戦争の中でも悪名高き作戦として人口に膾炙（かいしゃ）していますが、それは、結果的に日本軍が惨憺たる敗北を喫したことに原因があります。とくにこの作戦を強力に推し進めた、第十五軍司令官の牟田口廉也（むたぐちれんや）中将などは悪の権化のように言われてきました。たしかに、この作戦は悲劇的な終末を迎えますが、敗勢を勝勢に転化させる、戦況打開を目的とした総反撃という性格を持っていたことは確かなことなのです。

このことは、敵側の英第十四軍司令官ウィリアム・Ｊ・スリム中将も認め、自著『敗北から勝利へ』（陸上自衛隊幹部学校訳）の中でこう述べています。

〈彼等（注—日本軍）がアッサムにおける勝利は遙かな密林の土地から遠くへ知れ渡るであろうと

玉砕を讃える詩三篇（英文）

世界の戦史で、その勇戦が語り伝えてきた代表的なものは、テルモピレーの戦いであろう。紀元前四八〇年、侵入するペルシャの大軍に対し、スパルタ王レオニダスは、精鋭を率いてテルモピレーの天嶮に踏みとどまり、激戦の末全滅した。この玉砕戦は、二千五百年も前の話だが、今も語り伝えられている。

日露戦争の時、旅順攻防戦の壮絶さは、テルモピレーに匹敵できると、当時のロシア将校が語っていた。またこの話は、私が使った旧制中学校の英語の教科書にも載っていた。教科書には激戦の経過が記述され、レオニダス王以下の玉砕戦跡地には二つの碑が建てられているとして、それが紹介されていた。

その一つは

"Here died four thousand men from Peoples' land, Against three hundredmyriads bravely Stand"

この地に於いて　スパルタ国四千の兵(つはもの)は戦死せり　勇敢にも三百万の軍勢に　たちむかひて

また別の柱には、

"Go, traveler, to Sparta, tell That here, obeying her, we fell"

旅人よ　行きてスパルタに告げよ　われら命を守りて　ここに斃ると

＊

この詩碑を想起する話を、もうひとつ紹介しよう。インパール作戦の時、コヒマの争奪をめぐって、我が高岐部隊と英印軍との間に死闘が繰り返された。特に三叉路高地の争奪をめぐる戦いは、彼我肉迫した白兵戦であった。昭和十

九年四月五日から五月十三日まで、約四十日にわたって、寸土を争う激闘が続いた。

　現在、高地一帯には、英軍の戦死者をまつる墓が、千三百七十一基整然と並んでいる（インド兵の墓はない。ここに英国植民地主義の尾骶骨を見る思いがする）。その入口に建つのが、この碑である。そこには、次のような詩文が刻まれている。

When you go home.
Tell them of us and say
For Your tomorrow
We gave our Today.

貴下ら帰国の暁には　我らこの地において
祖国の明日のために殉じたる旨を伝えよ

（この項は、平成3年4月、日英合同慰霊祭参列のため現地を訪れた亀山正作氏に取材）

＊

ここにテルモピレーとコヒマの例を紹介したが、さらにもうひとつ挙げたい。それはペリリュー島である。ペリリューでは昭和十九年九月十五日から七十三日間、中川州男（なかがわくにお）連隊長以下一万名が、米海兵隊と激闘を続け、七十三日もちこたえて遂に玉砕した。その壮絶ぶりに対して米軍は「天皇の島」と名付け、太平洋艦隊司令長官ニミッツ元帥は、次のような詩を作った。

Tourists from every country who visit this island should be told how courageous and patriotic were the Japanese soldiers who all died defending this island.

この島を訪れるもろもろの国の旅人たちよ。故郷に帰ったら伝えてくれよ。この島を守るために、日本軍人は全員玉砕して果てた。その壮絶極まる勇気と祖国を想う心根を！

（この項は、元航空幕僚長・浦茂氏が昭和59年、米アナポリス海軍兵学校を訪問した時知らされたものである）

【名越】

考えたのは正しかった。彼等が各部隊に対する訓示で声明した如く世界戦争の全過程を変えたかも知れない〉

英国が恐れていたインドの独立、支那の屈伏、そして何よりも英軍の潰滅をもたらす大決戦を挑んだのが、このインパール作戦だったわけです。

さて、インパール作戦のひとつにコヒマ攻略があります。コヒマは、インパールから北方へ約百キロほどの地にあるインド内のイギリス軍の要衝です。ここを攻略することで、インパールに通ずる連絡補給路を遮断する、という効果が期待でき、そこで、第十五軍は佐藤幸徳中将が師団長をつとめる第三十一師団（烈）にこの攻略を命じました。

第三十一師団の戦闘につき、イギリスの作家アーサー・スウィンソンは『コヒマ』の中にこう書いています。

〈コヒマは、貴国（注―日本）の陸軍が敗れた激烈な戦闘である。しかし、戦史を通じて、彼らがその守備に見せたほどの優秀な戦術と勇気はほとんど前例がないのである。彼らは四六時中、飢餓と疫病と砲撃に苦しみながら、しかもなお諦めなかった。わが偉大な司令官、スリム陸軍元帥は「かかる戦況で陣地を死守できたのは日本軍をおいてほかにない」と書いている。この敗北は日本軍の恥辱となるものではなかった。いや、日本軍の勇気と忍耐力とは誇るに足るものであった。〉

また、戦後、日本人として初めてコヒマに入った中根千枝氏（東大名誉教授）は、その悲惨な戦闘状況や、コヒマのナガ族の人々が日本兵の死体を手厚く葬ってくれた話などを紹介（350頁参照）して

いますが、アーサー・スウィンソンは日本軍を讃え、次のように記しています。

〈戦闘は六四日間つづいた。これほど手強い、近接した、血腥い戦いは第二次大戦を通じていくつもはない。まったく信じられないようなひどい土地と天候の中でこの戦闘は行われた。（中略）佐藤師団は三〇〇〇名が戦死し、四〇〇〇名が傷ついた。彼の師団は再起不能なまでに破砕された。火力は英軍より劣り、制空権もなく、増強兵力は一兵すら送られることなしに、彼の防御戦は偉大なまでに見事であった。彼は牟田口がインパールをたたく二カ月という時間を提供した。〉

「何かが残った」インパール作戦

コヒマで第三十一師団が奮闘していたとき、十五軍の他の師団はインパール攻略を行っていました。三十三師団（師団長柳田元三中将・弓）十五師団（師団長山内正文中将・祭）の各師団はそれぞれ悪環境の下、それでもインパールをのぞむこと一〇キロのマニプール盆地まで進出したのです。それと、チャンドラ・ボース指揮するインド国民軍（ＩＮＡ）も、日本軍とともに〝チェロ・デリー（進め、デリーへ）〟を合言葉に勇躍進撃しました。

しかし、結果は英印軍の優れた装備や、例年になく早く訪れた雨期のため、敗走をかさね、日本の大本営は七月に至り正式にこの作戦を中止することを決定したのです。

悲惨な敗け戦ではありましたが、コヒマ攻略およびインパール攻略の日本軍と戦闘を交えたイギリス軍東南アジア総司令部司令官（連合軍総司令官、ビィクトリア女王曾孫）ルイス・マウントバッテン大

世界の玉砕戦比較

テルモピレーの玉砕戦を挙げるまでもなく、全員が戦死するまで戦った壮絶さは、世界の戦史に残るのである。

イスラエルのマサダの丘（死海西岸の岩山）では、九百六十名がたてこもり、侵略したローマ軍を相手に最後の抵抗を試みた。この丘はヘロデ大王の頃から要塞化されていた。この要塞を舞台に三年間（紀元七〇年〜七三年）頑張った。その間の合言葉は、「栄光の死は屈辱の生にまさる」というものであった。

しかし、遂に刀折れ矢尽きて、最後は全員集団自決して果てた。彼らは、死によってローマの軍門に降らなかったという「栄光」を残したのである。

イスラエルが独立して後、学術調査団が徹底して発掘調査を行い、今はイスラエルの聖地として甦った（修学旅行の必修コース）。欧米では調査結果がテレビで三日間紹介されたので、知らない者はいないが、日本ではまだ放映されていない。

そして有名なのが、アメリカのテキサス州にある**アラモ砦の玉砕戦**である。

一八三六年、メキシコの大統領サンタ・アナが、五千の兵を率いてアラモ砦を包囲した。テキサス独立軍は救援隊長クロケット、指揮官トラビス等百八十二人が、降伏を拒否し、全員玉砕した。やがて「アラモを忘れるな」がテキサス人の合言葉となり、アメリカ合衆国形成の要因となった。

米西戦争（一八九八年）の合言葉が「メイン号を忘れるな」（本書21頁）、太平洋戦争の合言葉が「真珠湾を忘れるな」というように、「リ

メンバー」が三度甦った。いずれも緒戦の敗北を契機に奮起し、最後の勝利に結びついた点において軌を一つにしている。

その他、玉砕戦に等しいものを戦争史の中から探せば、まだ他にも発見できるであろう。特に我が国史には、玉砕戦と呼ばれる例が多い。

古くは平家一門の壇の浦における最期、奥州藤原氏の滅亡、元寇における対馬（宗助国等八十余騎）、壱岐（平景隆等百余騎）の玉砕戦、鎌倉武士の意地を見せた北条氏の滅亡、楠公湊川（なんこうみなとがわ）の最期、新田義貞の金カ崎籠城戦、楠木正行（くすのきまさつら）による四条畷（なわて）の玉砕、その他、戦国時代の武将が城を枕に討死した数々の玉砕例、そして、島原の乱における原城の玉砕、幕末の会津藩の最期等々。

比較的有名な例だけを拾ったが、小さな玉砕例を挙げたら、それこそ数えきれまい。

これら我国の武将たちは、死をもって降伏を拒否し、「名を惜み」「武門の誉れ」に生き、その魂は「千載青史」に留まっているのである。

それでは、大東亜戦争の玉砕はどうか。我が国史に生きる玉砕例がさながら甦ったのではないか。ここに日本的戦いの典型を見る。大東亜戦争が「国史の総動員」と呼ばれるのも、故なしとしない。

大東亜戦争「玉砕」一覧表（165頁）を作ってみたが、全部で十五カ所以上（沖縄は入っていない）、そして、少なく見積っても、十三万余の人々が玉砕したことになる。

テルモピレーにしろ、マサダにしろ、そしてアラモ砦にしても、玉砕者の数は大東亜戦争の場合に較べて比較にならないほど少ない（アラモ砦は二百人未満）。

ただ言えることは、玉砕的勇戦ぶりは、数百年数千年の単位をもって語り伝えられるということである。

【名越】

将は、『全滅の思想』の著者楳本捨三をして語らせますと、彼の回想記『ビルマ戦線の大逆襲』の中でこう書いているそうです。

〈かつて不敗を誇った日本軍も、半年の死闘に、戎衣も靴もボロボロとなり、ささえるものは不屈の精神力だけだった。指揮の崩壊と飢餓に追いつめられたとき、前途に横たわるのは生地獄だった。日本軍はインパールにおいて、また全ビルマにおいて敗れるべくしてついに敗れた。兵理である。しかし、そこには何かが残った。〉

と。

そして、その「何か」につきマウントバッテンは「それは史学の権威トインビーが、いみじくも喝破した通りである。もし、『日本について、神が使命をあたえたものだったら、それは強権をわがもの顔の西欧人を、アジアのその地位から追いおとすことにあったのだ』」と指摘しています。

インパール作戦を、このように位置づけして眺めてみることに、私などは大いなる驚きを覚えます。とともに、敵将によって日本軍の使命を指摘されたことに感謝の念を捧げたい気持にかられてしまいます。

インパール作戦における日本の将兵の死はけっして無駄ではなかった、いや「大東亜戦争」も必然性をもったものだ、こうマウントバッテンは主張しているのです。

マウントバッテン司令官に関し、もうひとつご披露しておかねばならないことがあります。それは、かつてF機関の機関長としてインド独立のための工作を担当された藤原岩市中佐が、インパール

への遺骨収集実現のためインド側と交渉し、昭和五十年（一九七五年）に無事それを実現させ、現地の人々の予想外の協力を得て帰国した、その時の模様を東宮御所に参上し、皇太子殿下に報告されたときのことです。

〈藤原さんの報告を伺って、事の次第が分明いたしました。先月（注—昭和50年2月）、ネパール国王の戴冠式に参列した節、パーティの席で、英国首席随員・マウントバッテン元帥が私を捉えて、いとも懇ろに——過ぐる戦争中、私が東南亜連合軍総司令官として、印緬戦域で対戦した日本軍将兵は、その忠誠、勇敢、規律厳正さにおいて、古今東西無類の精強でした。あのような素晴らしい将兵は、今後いずれの国にも生まれることはないでしょう——と激賞してくれた〉（藤原岩市『「進めデリーへ」の反響に想う』）

と殿下は仰せられたそうです。

「敗軍の将、兵を語らず」の諺どおり、日本軍の指導者は黙して何も語りませんが、敵側の将が、こう称揚してくれているのです。

マウントバッテンの下で英第十四軍の司令官をつとめた前出のスリム中将も、日本軍の勇敢さを絶讃しています。

〈たたかれ、弱められ、疲れても自身を脱出させる目的でなく本来の攻撃の目的を以て、かかる猛烈な攻撃を行った日本の第三十三師団の如きは、史上にその例を殆ど見ないであろう。〉（『敗北から勝利へ』）

また、

〈かくの如く望みのない目的を追求する軍事上の分別を何と考えようとも、この企図を行った日本軍人の最高の勇気と大胆不敵は疑う余地がない。私は彼等に比肩し得べき如何なる陸軍も知らない。〉（同書）

とも述べているのです。

インパールで、実際に日本軍と対した敵将のこうした絶讃は、戦争の当事者の声として生々しく私たちに伝わってきます。インパールに散った日本の将兵も、これで浮かばれます。もって瞑すべし。

（第三部「八、インド」参照）

蔣介石も「東洋民族ノ誇リ」と讃えた拉孟（らもう）・騰越（とうえつ）の死守

「拉孟」「騰越」をご存知でしょうか。これは、ビルマ国境に面した支那の地名です。拉孟、騰越ともに昭和十九年九月に至り、同地の日本軍守備隊は玉砕してしまいます。

インパール作戦に兵力を引き抜かれ、守備が手薄になったところへ、アメリカ式の装備をした支那軍（雲南派遣軍）が連合軍の後押しを得て進撃してきたため、日本軍守備隊の奮闘空しく全滅の憂目に遭ったところ、今も大東亜戦史に壮烈な記録を留めています。

拉孟・騰越の玉砕は、南方の島々での玉砕と異なっています。補給のきかない島ではなく、大陸での出来事でした。なぜ玉砕しなければならなかったのか、疑問は残ります。

しかし、玉砕した日本軍将兵の奮闘は大変なものでした。現にこの作戦中に支那の雲南派遣軍に対し蔣介石総統は、長尾唯一著『玉砕』によれば、次のような訓電を発しているのです。

〈雲南方面ニオケル敵日本軍ハ、騰越オヨビ拉孟ニオイテハ、我ガ優秀近代化ノ国軍ヲモッテシテモ、尚孤塁ヲ死守シアリ。カクノ如クンバ、日本軍ハ一兵ニ至ルマデ、死守スルモノト判断セラル。騰越ノ敵頑タリトイエドモ鬼神ニハアラズ。然ルニ戦況ハ遅々トシテ進展セズ〉

蔣介石のあせりが感じられます。つづけて、

〈拉孟・騰越ヲ死守シアル日本軍人精神ハ、東洋民族ノ誇リタルヲ学ビ、範トシテ我ガ国軍ノ名誉ヲ失墜セザランコトヲ望ム〉

と結んでいます。

日・支両国は、不幸にも敵味方に別れて干戈を交えましたが、同じ東洋民族として日本軍の勇戦を讃えた蔣介石の言葉は、敵側の司令官から日本軍に与えられた逆感状と言えるものです。敵の司令官をしてこのように発言せしめた日本守備軍の玉砕は、けっして「犬死」などと簡単にすませてしまうわけにはゆかないのです。

ルーズベルトの息をのましめた硫黄島の激闘

〈大統領（注―ルーズベルト）は戦慄のあまり息をのんだ。良いニュースであれ、悪いニュースであれ、この戦争で大統領が息をのむのをだれかが目撃したのは、これが初めてであった。〉

【作成・名越二荒之助】

抗戦日数	玉　砕　者　数	備　　考
17日間	2,000余人 （生存29人）	部隊長山崎保代大佐は2階級特進。
2日間	250人	
同上	約2,700人	
5日間	約4,000人	
2日間	約400人	
86日間	台湾インドネシア軍3,000人を含む陸軍部隊10,400人。海軍1,950人，終戦時の生存86人	支隊長葛目直幸大佐は7月2日責任をとって自決（2階級特進）。あとの指揮は大森正夫少佐がとる。
120日	1,200人	拉孟守備隊長金光恵次郎少佐は2階級特進。蔣介石総統から「東洋道徳の範」と讃えられる。
約55日	2,025人	
80日	水上源蔵少将は3,000名を率いて奮戦したが，陣地確保が不可能となり，部下800名に脱出を命じ自らは自決した。	
22日	島の総人口33,000人（うち日本人29,000人，土着人4,000人）守備隊総数30,000人。バンザイ岬に身を投じた民間人を含めて死者43,582人	
12日	守備隊9,900人 島　民3,500人	テニアンにもバンザイ岬があり，そこに身を投げた民間人も多かった。
22日	守備隊26,000人，島民10,000人（邦人150人）戦死18,377人，行方不明1,350人（米軍資料）	
73日	9,800人 （生存34人）	ペリリュー島守備隊長中川州男大佐，アンガウル島守備隊長後藤丑雄少佐の2人は2階級特進。陛下から嘉尚の電文10数回。
34日	1,400人	
32日	20,933人	
計	133,647人	ミートキーナを除く

2，この表を作るに当って『玉砕戦史』（安井久善編）『大東亜戦争全史』（服部卓四郎著）等を参考にした。これらの著書は，指揮官以下そのほとんどが戦死，自決，戦傷を負うまで戦った場合を「玉砕」と称しているようで，私もそれに従った。玉砕者数は日本側と米軍資料が違い，現在は資料も限られ，正確を期することは，至難のようである。

大東亜戦争「玉砕」一覧表

地　域	玉　砕　地	抗　戦　期　間
アリューシャン	アッツ島	昭和18年５月12日～５月29日
マーシャル群島	マキン島	昭和18年11月21日～11月22日
	タラワ島	同上
	クエゼリン本島	昭和19年１月31日～２月４日
	ルオット島 ナルム島	昭和19年２月１日～２月２日
西部ニューギニア	ビアク島	昭和19年５月27日～８月20日
雲南・北ビルマ	拉孟（らもう）	昭和19年５月10日～９月７日
	騰越（とうえつ）	昭和19年６月下旬～９月13日
	ミートキーナ	昭和19年５月17日～８月３日
マリアナ群島	サイパン島	昭和19年６月15日～７月６日
	テニアン島	昭和19年７月23日～８月３日
	グァム島	昭和19年７月21日～８月11日
パラオ諸島	ペリリュー島	昭和19年９月15日～11月27日
	アンガウル島	昭和19年９月17日～10月19日
小笠原列島	硫　黄　島	昭和20年２月19日～３月22日

１，ここでは，昭和18年５月のアッツ島玉砕以降を年代順に挙げたが，それ以前にも指揮官以下そのほとんどが全滅するような不屈の戦はあった。昭和17年末には，ガダルカナルにおける一木支隊（一木清直大佐以下約900名），東部ニューギニアのブナ地区（海軍陸戦隊・安田義達大佐以下約900名），バサプア地区（山本恒市少佐以下約800名）等も玉砕戦に含めて至当かも知れない。

この文章は、アメリカの作家ジム・ビショップが、硫黄島攻略戦での米軍の戦死者数を聞いた時のルーズベルト大統領の様子を伝えたもので、ビル・D・ロス著『硫黄島』の中に出てきます。では、ルーズベルトをして息をのましめた硫黄島攻略での米軍側の損害はどのくらいなのでしょうか。防衛庁の防衛研究所の調査によると、戦死、戦傷者合せて二万八千六百八十六名、日本軍側が二万九百三十三名ですから、米軍の損害の方がはるかに大きかったのです。

　硫黄島をめぐって日米双方が死力を尽くして戦闘を交えたのは、昭和二十年（一九四五年）二月から三月にかけてのことです。昭和二十年といえば終戦の年ですから、太平洋をめぐる日米の闘いは、ほぼ決着がつきかけていたと言っても間違いではないでしょう。ただ米軍の戦略として、日本本土を爆撃するＢ29の中継基地として、どうしても硫黄島が欲しかったのです。しかし、そうした米軍側の狙いを的確に把握して、硫黄島を難攻不落の要塞とするため築塞にこれつとめたのが、栗林忠道（くりばやしただみち）陸軍中将を司令官とする日本軍でした。

　日本軍側の周到な準備がなされた硫黄島ですから、米軍の予想外の損害も理由のあることと言わねばなりません。しかし、日本軍は、たんに準備したと言うのではなく、守備隊全員の士気も至極旺盛でした。栗林司令官が全軍に通達した「敢闘の誓」の一節には、「最後ノ一兵トナルモ『ゲリラ』ニ依ツテ敵ヲ悩マサン」とあり、この誓いの通り最後の一兵に至るまで死闘を演じ、ついに玉砕して果てたのです。

　制空権も制海権もなく、本土からの補給も期待できず、硫黄のふき出す地表を掘り進んで長大の塹

壕を作りあげ、そこに潜んで米軍に反撃する、食料も弾薬も、また飲料水も不足し、なおかつ三十六日間にわたる激しい戦いを展開し得た日本軍人の心情は、一体いかなるものであったのでしょうか。

前出のビル・Ｄ・ロスは、次のように述べています。

〈硫黄島は、集団の勇気および個人の勇気が問われたランドマーク（画期的事件）であった。その戦いは、人類が恐らく二度と目撃するとは思えないほど激烈なものであった。〉（『硫黄島』）

戦争とは、元来がこういう勇気のぶつかり合いなのでしょう。国家間の戦争であっても、最後は将兵一人ひとりのレベルでしか、その勇気は表現できないものなのかもしれません。

硫黄島における日本の将兵は、その点、敵側のアメリカ人をして舌をまかせるほどの真の勇気を示しました。世界の多くの人々が語り伝えるであろう感動的なドラマがそこにはあるのです。

＊

以上、諸地域における日本軍の奮闘、玉砕についてながめてきました。とりあげた地域以外でも、テニアン、ペリリュー、グアム、サイパンなど南洋の諸島嶼（とうしょ）において、涙なくしては語れない日本軍将兵の敢闘があり、現地の人々はその精神を讃えているのです（名越二荒之助『世界に生きる日本の心』他参照）。

これら南洋の諸島嶼についてはは他書にゆずらざるを得ませんでしたが、とにかく私たち戦後生まれの日本人の多くは、大東亜戦争について「無謀な侵略戦争で、軍部の誤れる指導のもとに、日本人やアジアの人々の尊い生命を失わしめた」という教育を受けてきたのです。

しかし、問題はそれほど単純に割り切れるものではなく、複雑に入り組んだ世界の流れを見つめなければ、あの大東亜戦争の意義はつかめないはずです。と同時に、同じ日本人であるかつての軍人に対して、「無駄死」「犬死」というレッテルを貼ることだけで、大東亜戦争を解釈しようとする姿勢に、声を大にして異議を唱えないわけにはゆかないのです。

【相澤宏明】

五　世界が驚倒した特攻隊の出現と感動

日本人よりも深く洞察し共感を寄せる外国人

昭和十九年十月二十五日の衝撃

大東亜戦争における日本の「神風(しんぷう)特別攻撃隊」(一般には「かみかぜ」とか「特攻隊」と呼ばれている)の出現ほど世界を驚愕させたものはありません。しかし、今日、「特攻隊」または「神風」という言葉は、ほとんど死語となっているようです。たまに使われるのは、ビデオの戦争物の題名としてか、古くは、無謀な運転手に対して用いる「神風ドライバー」ぐらいなものとなっています。

今日、街を行き交う若者のうち何人が特攻隊のことを知っているでしょうか。五十年の歳月は、容赦なく日本人から「特攻隊」の記憶を消し去ろうとしております。

特攻隊に関する研究は、日本では一般の目にはなかなか入っていきません。以前には散見されまし

たが、それらにしてもどちらかといえば文学的色彩が強く、軍隊や戦争がいかに非人間的なものかということを訴えるもので、反戦のために書かれたものが大部分でした。

作家の中でも、阿川弘之（あがわひろゆき）氏や豊田穣（とよだみのる）氏のように、当時の状況と特攻隊員の心情を正確に汲み取ろうと真摯な努力をした方々もおりますが、私の見るところ、日本では本当に微々たるもののようです。

ところが、外国では日本と様子が違うように思われます。ここに紹介するのは、外国人が日本の「特攻隊」を、その真相を説き明かすために綴った本からの記述です。

＊

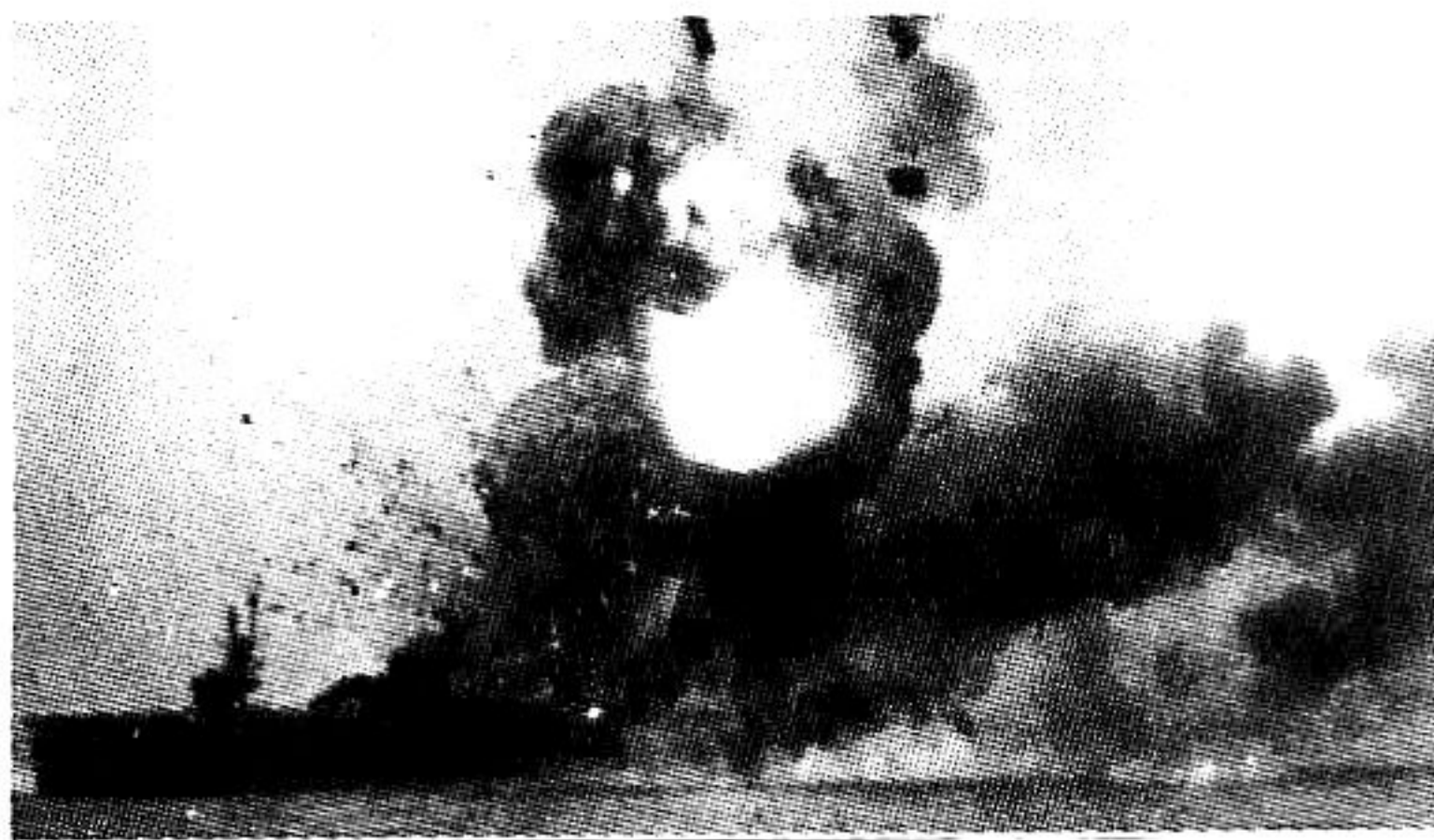
〈すべては一九四四年（注―昭和19年）一〇月二五日に始まった。いや、より正確にいうなら、全世界はこの日驚くべきニュースに接したのである。新聞とラジオは、日本軍の飛行機がレイテ沖でアメリカ海軍艦船に決然たる体あたり攻撃を敢行し、大損害を与えたことを報じた。ニュースの解説者たちは、これらの攻撃が秩序だてて実行されたもののように見えるところから、これが日本軍司令官の命令に発したものであろうということを力説した。このときをもって、太平洋戦争の局面はまったく異常な展開を見せることになったのである。この日以降、それは世界戦史のいかなる戦闘にも似つかぬものと化した。〉（ベルナール・ミロー『神風』）

このフランスのジャーナリスト、ベルナール・ミローの言葉にあるように、昭和十九年十月二十五日という日は世界史に名を残す日となったのでした。

この日午前七時二十五分、フィリピンのマバラカット基地を飛び立った一番機・海軍大尉関行男（せきゆきお）を

隊長とする「神風（しんぷう）特別攻撃隊敷島（しきしま）隊」（２番機・中野盤雄一等飛行兵曹、３番機・谷暢夫一等飛行兵曹、４番機・永峰肇飛行兵長、５番機・大黒繁男上等飛行兵）は、世界初の編隊による組織的な体当たり攻撃を行ったのです。

それまでにも日本だけでなく、アメリカでも体当たり攻撃が行われたことはありました。しかし、この日の日本軍による特攻はそれまでの体当たり攻撃とは一線を画するものでした。それまでの体当たり攻撃は、被弾して戦闘不能になった場合など、個人の判断で、敵艦もしくは敵機に体当たりしたもの（ハワイ・カネオエ基地攻撃の飯田房太中佐など、110頁参照）で、出撃の時点では生還を期しておりました。ところが、昭和十九年（一九四四年）十月二十五日の「神風特別攻撃隊」は、出撃の前から生

英国人デビット・ブラウンは特攻隊員を Fighting Elites（ファイティング・エリート）と自著『KAMIKAZE』で讃え，たくさんの写真を使いながら，特攻隊出現の経過と戦果を紹介し，その悲壮美に迫っている（カバー写真は220振部隊殉皇隊）

昭和19年10月25日，最初の神風特攻隊の敷島隊１番機・関行男大尉はレイテ近海にて米空母セイントローに突撃，約20分後に撃沈させた。「世界最初の正式人間爆弾」だった。（写真はその瞬間『KAMIKAZE』より）

還をまったく考えず、体当たりをもって敵艦を戦闘不能にすることを目的とした、全員必死の特攻であったのです。

この神風特別攻撃隊の出現の衝撃はたいへんなものでした。特攻機が、ねらった目標めざして、冷静かつ事前に立てた計画にしたがって急降下する光景は、対空砲の砲員たちの決心に衝撃をあたえ、太平洋戦線の連合軍部隊のあいだにパニック状態に近いものを起こさせたそうです。

その様子は、次のレイ・ターバック米海軍大佐の十月二十五日の日記からもうかがえます。

〈この戦闘でみられた新奇なものは、自殺的急降下攻撃である。敵が明日撃墜されるはずの航空機一〇〇機を保有している場合、敵はそれらの航空機を今日、自殺的急降下攻撃に使用して、艦船一〇〇隻を炎上させるかもしれない。対策が早急に講じられなければならない。わが軍が兵員揚陸艦（ＡＰＡ）や貨物揚陸艦（ＡＫＡ）に代えて、より多くの輸送駆逐艦（ＡＰＤ）や装甲揚陸艦（ＬＳＭ）および補給貨物を搭載した戦車揚陸艦（ＬＳＴ）を使用するようにしないかぎり、将来、上陸作戦を実施する場合、敵の自殺的急降下攻撃はＡＰＡやＡＫＡにとって致命傷となるように思われる。〉

（デニス・ウォーナー、ペギー・ウォーナー、妹尾作太男共著、妹尾作太男訳『ドキュメント神風』）

と記しております。

また、当時、米第七十八機動部隊の北方部隊指揮官バーベイ提督は次のように報告しております。

〈護衛空母とのこの戦闘で、敵はわずかばかりの、てんでんばらばらの特攻機をもって、このような大戦果をあげたので、敵はこの目的のために、相当規模の狂信的グループを訓練し編成するもの

と思われる。（中略）特攻機による攻撃は大型輸送船と護衛空母にたいして、とくに有効である。航空直衛隊の能力がもっとも減殺される月夜、黎明あるいは薄暮時、特攻機との戦闘は困難である。敵の陸上機の航続距離内で作戦を実施する場合、わが方がこれら自殺的攻撃能力を割引いて考えるべきだとは、小官は思わないし、また、明け方、輸送船にたいしてこの種の攻撃が決然として敢行された場合には、上陸作戦が挫折させられることになるかもしれないと考えている。〉（『ドキュメント神風』）

そしてまた、ハルゼー提督はこの日本の特攻について、つぎのように述べています。

〈計画的自殺攻撃の背後に潜んでいる心理は、われわれにとって、あまりにも受け入れがたいものである。生きるために戦うアメリカ人にとって、他国の国民が死ぬために戦うという事実を認識することは困難である。日本軍が彼らの腹切りの伝統のために、そのような特攻隊を真に効果的ならしめる志願者を集めることができるだろうとは、われわれには信ずることができなかった。翌日、神風特攻機がダビソン機動群の空母「エンタープライズ」はミスしたが、同群の二隻の空母「フランクリン」と「ベロー・ウッド」に命中したとき、われわれはガンとなぐられたように感じて、迷夢からさめた。〉（『ドキュメント神風』）

このように、世界最初の特攻はかなり控えめな報告でさえこのようでしたから、この特攻を目の当たりにした将兵たちは、たとえようのない恐怖感を味わったようです。

そしてまた、

〈大戦勃発（注―一九三九年）以来すでに五年、世界の人心は軍の発表や戦闘のニュースにもはや食傷していたけれども、この事件のニュースだけには感銘を受けた。だがこれに対する意見はかなり分裂した。ある者はこの途方もない勇気の持主だったパイロットたちに尊敬と感嘆を惜しまなかった。また他のある者はこの戦闘手段の性質に戦慄をおぼえ、眉をひそめ、一種の集団的発狂だときめつけたものであった。〉（『神風』）

という記述からも推し量ることができるように、一般人にもその衝撃と戦慄は大変なものでした。

それゆえ、アメリカやオーストラリアは、何カ月間も日本機の体当たり攻撃について報道することを、以下のように禁止したのでした。

〈メルボルンの海軍部から海軍部指揮官全般あての秘密覚書には、つぎのとおり指示されていた。「ジャップの自殺機などによる攻撃が、かなり効果をあげているという情報は、敵にとって大きな価値があるという事実から考えて、太平洋海域司令官は担任海域におけるそのような攻撃について、公然と討論することを禁止し、かつ第七艦隊司令官は同艦隊にそのむね伝達した」。

オーストラリアの報道検閲部長は、すべての新聞および編集責任者一同にたいして、日本軍の自殺攻撃について言及しないように要請した。アメリカとイギリスの新聞にたいしても、同様の指示が出された。アメリカに帰還したり、オーストラリアを訪れる米海軍軍人にたいしては、どんな事情があっても、日本軍の特攻機や特攻戦術についてはしゃべらないよう注意があたえられた。〉（『ドキュメント神風』）

自分を超えた何ものかのために命を犠牲にするのはいつの時代でも美しい

文字通り、命を懸けての特攻は、日本人だけでなく多くの外国人にも感動を与えました。以下にその例をあげましょう。その第一に、ビルマの元首相バー・モウの『ビルマの夜明け』の一節を紹介しましょう。

〈ここで、われわれの最終的勝利を確信している私の第三の理由をあげよう。それは、全世界を驚かせたあるもの、われわれの東アジア革命の基本的精神と意義とを示しているあるもの、すなわち神風の精神である。それは、新しい東アジアの真の基礎となりつつあり、いかなる敵も撃ち破ることのできない甲冑で武装された自己犠牲の精神、生か死かの精神、勝利のために死をいとわない精神である。私は台湾とフィリピンでの神風の偉業を読んだ時ほど、心を動かされたことはかつてなかった。その時、私は神風の精神が滅びない限り、東アジアも決して滅びない、と自らに語った。〉

（昭和19年11月7日、日比谷公会堂における大東亜結集国民大会での演説）

このバー・モウの言葉は、大東亜戦争中の日本の同盟国の首相だから特攻を称賛したというのではありません。国のため自己を犠牲にする精神は、人間ならば誰もが感動し、讃えるものなのです。

フィリピンのコラソン・アキノ現大統領の御夫君で、一九八三年（昭和58年）に暗殺された元上院議員ベニグノ・アキノ氏も、次のような感慨を込めて「延々と特攻隊員への思いを語っ」ていたそうです。

マバラカットの特攻記念碑と愛媛県西条市の特攻慰霊碑

「歴史は民族の偉大なるものを、断絶することなく伝承すること」（カール・ヤスパース）である。その偉大なるものに感動するのは、敵味方を越えた人間性の自然なる発露である。

フィリピンのマバラカットという町には、昭和十九年十月、関行雄海軍大尉を隊長とする神風特別攻撃隊の第一陣敷島隊が発進した飛行場がある。そのことを知ったダニエル・H・ディゾン画伯（歴史協会会員）は、特攻隊発祥の聖なる地に記念碑を建立し、記念館も設立したいと念願した。「東洋人であることを忘れ、有害な西洋文化に毒されているフィリピン人に、特攻精神を通して祖国のために身命を捧げることを教えたい」というのが、彼の念願であった。

彼の念願は遂に実を結び、一九七四年（昭和49年）五月九日、除幕式が挙行された。主催者はマバラカットの町長ウィルフレド・C・ハリリ氏で、竹でこしらえた鳥居につけたリボンを町長夫人がカットすることではじまった。

日本からの慰霊団が間にあわず、日本大使館からも参加がなく、町役場全員と一般市民、米軍基地に駐留する日系二世等が参列した。式はフィリピン国歌ではじまり、ついで「君が代」が二回斉唱された。

巨大な記念碑の両側には、日・比両国の国旗がカラーで描かれている。そして、記念碑の上部には日本語で「第二次世界大戦に於いて神風特別攻撃隊が最初に飛び立った飛行場」と書かれ、本文は英語で特攻出撃の経過が記され、最後は「関行雄大尉は、人間爆弾第一号として、世界の戦史に記録されるであろう」と、結ばれている。（碑文はディゾン氏による）

＊

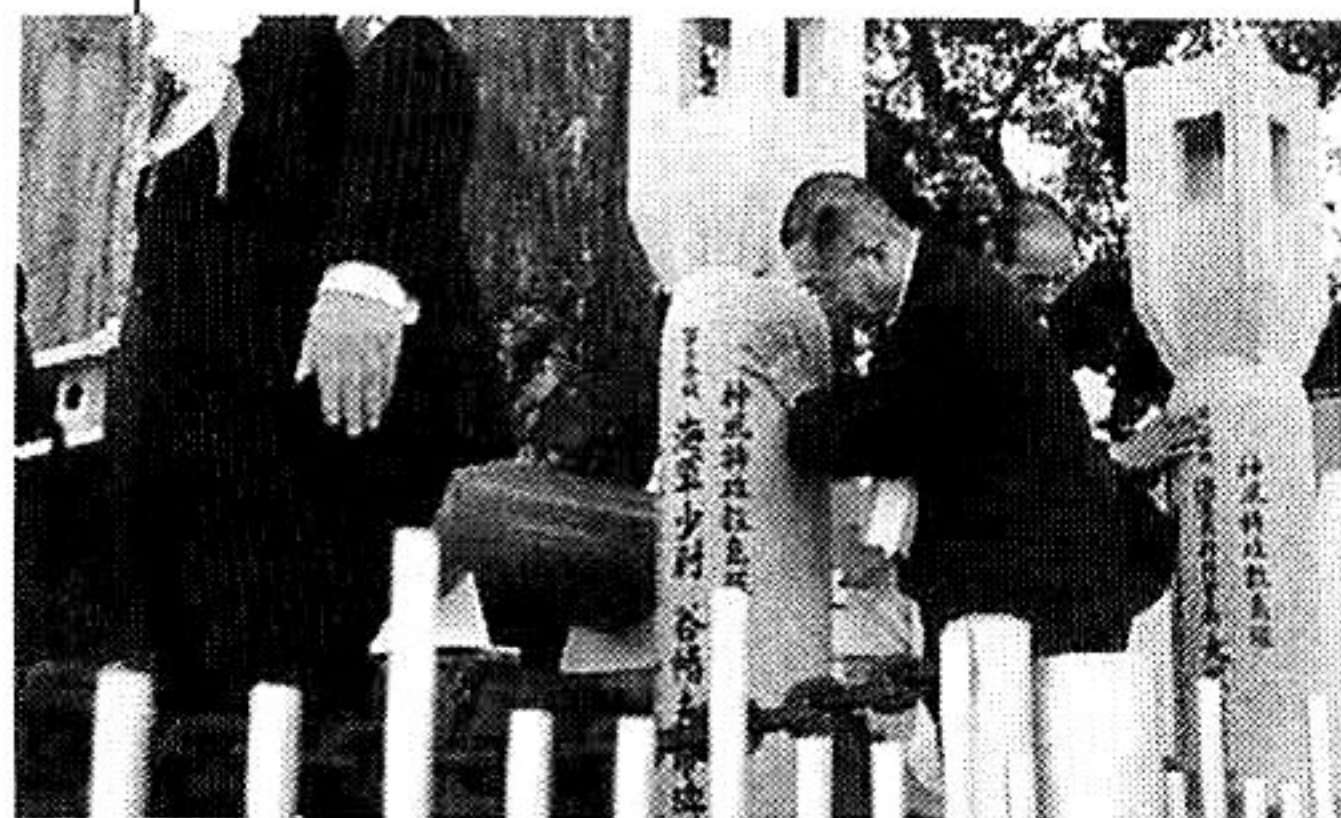
一方、関行雄大尉（戦死して二階級特進、中佐）の郷里、愛媛県の西条市では、かねてから楢本（ならもと）神社の石川梅蔵宮司（元・海軍兵学校教官）が、関中佐の慰霊碑を建立すべく奔走していた。だが、なかなか実現までには至らなかった。

ところが、突然フィリピンに巨大な特攻記念碑が建立されたと聞いて、一挙に盛り上った。完成はほぼ十カ月遅れたが、昭和五十年三月二十一日、源田実参議院議員（故人、真珠湾攻撃に参加）の手によって除幕された。

フィリピン・マバラカット飛行場に建立された巨大な特攻記念碑。1974年（昭和49年）５月９日除幕。

石川宮司はその後、八十歳の高齢をおして計三回もマバラカットを訪ね、記念碑前で奉斎した。石川宮司としては、関隊長だけでなく、共に突入した他の四人の慰霊塔も建てたかった。

そこで隊長碑のほとりに、二五〇キロ爆弾と同型同重量の石碑四基を建立し、それぞれに出身地、番機、官氏名、行年を刻んだ。この「敷島隊五軍神祀碑」は、昭和五十六年十月二十五日に除幕した。

その後、五軍神慰霊祭は毎年挙行され、一年一年盛大になりつつあると聞く。【名越】

特攻隊の先陣・関行男隊長の故郷，愛媛県西条市の楢本神社境内に建立された関中佐慰霊碑とそのほとりに建立の敷島隊五軍神祀碑。

〈人が自分を超えた何ものかのために、命を犠牲にするのはいつの時代でも美しい。マバラカットから出撃した彼らに共感を抱いた〉（平成3年6月25日付「朝日新聞」夕刊「窓―論説委員室から」）

今、そのマバラカットの町には、大噴火を続けるピナトゥボ山の火山灰が降りそそいでいます。ベニグノ・アキノ氏の出身地タルラッタの近くにそのマバラカットがあり、そのことをアキノ氏は誇りにしていたそうです。

感動したのはアジア人だけではありません。先に紹介したフランス人のベルナール・ミローも、

〈このことをしも、（注―国家への殉死、肉弾攻撃のこと）我々西欧人はわらったり、あわれんだりしてもいいものだろうか。むしろそれは偉大な純粋性の発露ではなかろうか。日本国民はそれをあえて実行したことによって、人生の真の意義、その重大な意義を人間の偉大さに帰納することのできた、世界で最後の国民となったと著者は考える。

たしかに我々西欧人は戦術的自殺行動などという観念を認容することができない。しかしまた、日本のこれら特攻志願者の人間に、無感動のままでいることも到底できないのである。彼らは人間というものがそのようであり得ることの可能なことを、はっきりと我々に示してくれているのである。〉

と自著『神風』の中で述べています。

また、同じくフランスの思想家モーリス・パンゲも

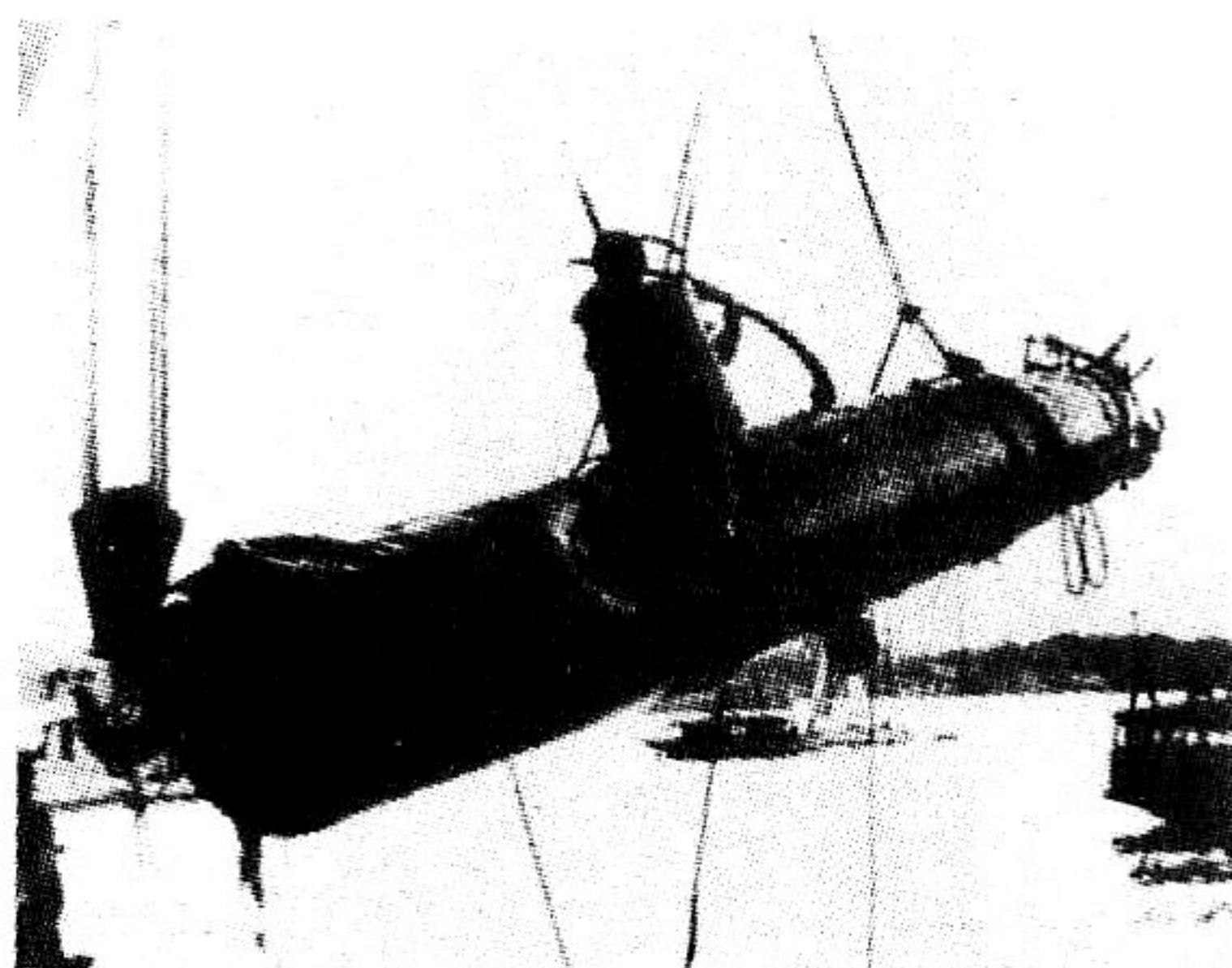
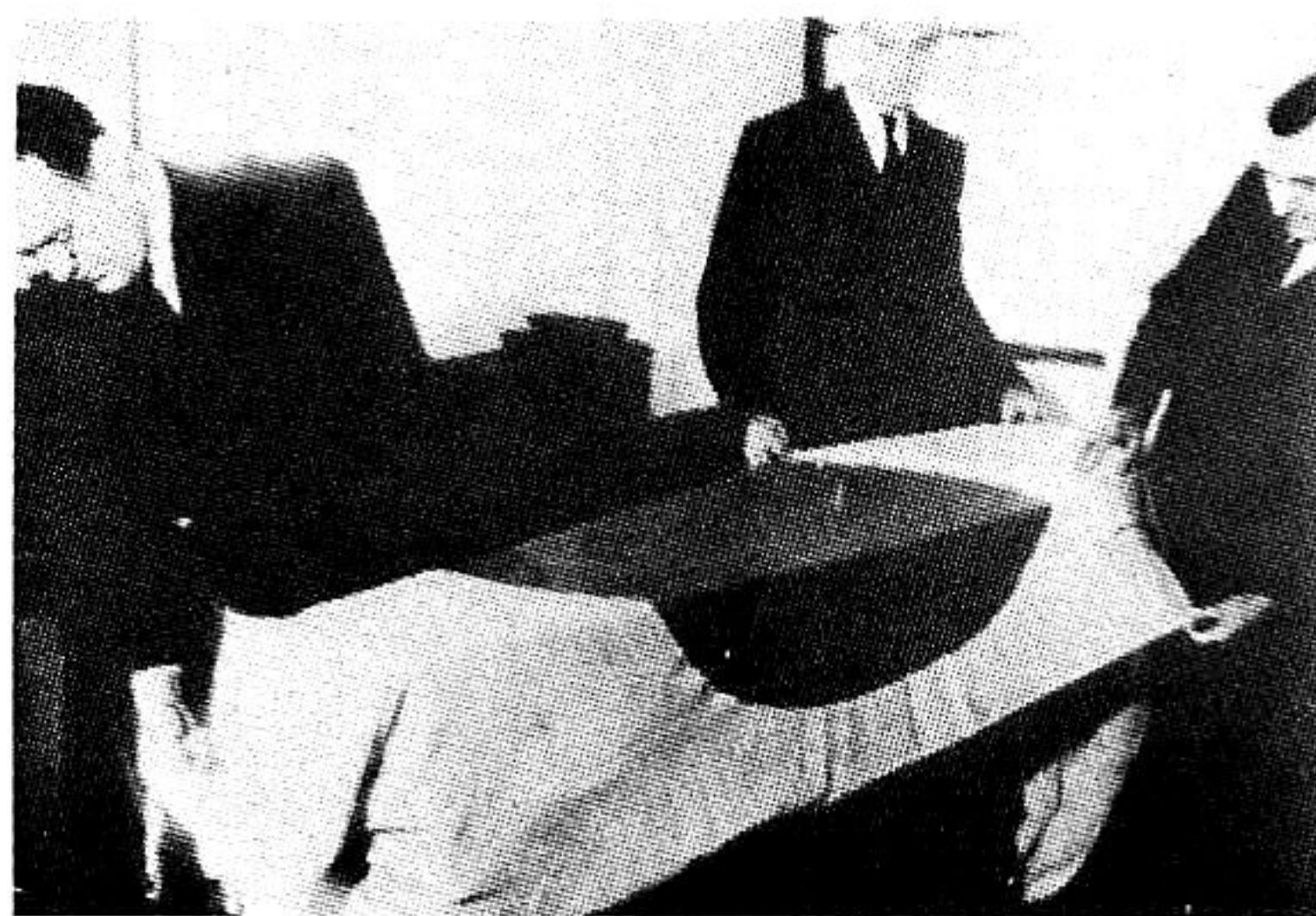
〈生きていることが美しかるべき年頃に、立派に死ぬことにこれらの若者たちは皆、心を用いた、

そのために彼らは人に誤解された。彼らにふさわしい賞賛と共感を彼らに与えようではないか。彼らは確かに日本のために死んだ。だが彼らを理解するのに日本人である必要はない。死を背負った人間であるだけでよい。〉（モーリス・パンゲ『自死の日本史』）

と述べています。

＊

この「神風特別攻撃隊」とは違いますが、その行動と精神において同じと見ていいと思える、特殊潜航艇の興味ある話があります。

特殊潜航艇による攻撃は、開戦時のハワイ・真珠湾、翌十七年五月のオーストラリア・シドニー港

昭和17年５月31日，海軍の特殊潜航艇３隻がオーストラリア・シドニー軍港を強襲，軍艦１隻を撃沈。予想もしない大胆不敵な攻撃は敵国の人々の心胆を寒からしめた（写真は引揚げられる松尾敬宇大尉艇，1942年６月４日）

日章旗にておおわれた霊柩
オーストラリア海軍は，敵国軍人の勇気を讃え，海軍葬の最高礼をもって弔い，戦争中にもかかわらず，昭和17年10月19日，遺骨を日本に返還した。我が海軍も海軍葬をもって弔い，それぞれの遺族のもとに遺骨を届けた。

とマダガスカル島・ディエゴ・スワレズ湾などに行われました。
そのシドニー港攻撃の折、オーストラリア海軍は敵艦攻撃後、沈没し艇内で戦死した四人の日本兵の勇気に敬意を表し、海軍葬の礼をもって弔った（昭和17年6月9日）というのです。
当時、オーストラリア国内では日本と交戦中ということもあって対日感情が悪く、「何故我々の同胞を殺した敵兵をそれほどまでに遇するのか」とたいへんな議論になったのだそうです。
その時、この海軍葬を命じたシドニー海軍司令官のムーアヘッド・グールド少将はラジオを通じて、毅然として次のように国民に訴え、日本兵の勇気を讃えました。
〈このような鋼鉄の棺桶で出撃するためには、最高度の勇気が必要であるにちがいない。（中略）これらの人たちは最高に愛国者であった。われわれのうちの幾人が、これらの人たちが払った犠牲の千分の一のそれを払う覚悟をしているだろうか。〉（ペギー・ウォーナー『特殊潜航艇戦史』）
そしてその後、四人の遺骨は交換船で日本に返還（昭和17年10月19日）され、遺族のもとに届けられました。
戦争中にも拘わらず、このような美談があったということは、現在、日本ではほとんど無視されております。ということは、今の日本にはグールド少将のように、敵といえどもその武勇を讃える武士の心を解する人がいないということなのでしょうか。
また、シドニー港攻撃と時を同じくして実施された、特殊潜航艇によるマダガスカルのディエゴ・スワレズ湾への攻撃に際しても、

〈一般のディエゴ市民の間では、日本の特殊潜航艇がひそかに湾内に潜航して巡洋戦艦とタンカーを沈め、その偉業の主二人が北方の山地で発見され、降伏勧告も聴かず、ライオンの如く勇敢に戦い、そしてついに射殺されたと伝えられ、日本人二人は英雄視されている。〉（フランス人の農夫、当時砲兵隊軍曹談。豊田穣『月明の湾港』）

というように、同じく当時の人々に感動を与え、今でも語り伝えられているのです。

特攻精神を高く評価し後世に伝える外国の人々

このように、特攻隊の出現に対する世界各国の人々の印象にはたいへん興味深いものがあります。しかし、それ以上に興味深いのは、戦後の日本人が全く顧みない、特攻隊の精神的背景への探求を外国人が熱心にしているところです。そこには深い洞察とともに、賞賛と共感があります。それらを以下に紹介します。

アメリカ人のアイヴァン・モリスはこう述べています。

〈彼らは、まず、自己の出生の地日本に対して恩を抱いた。また、独特の「国体」とその美徳とを体現する天皇に対する恩を感じていた。自殺攻撃についての描写は、どれを見ても、搭乗員の最後の言葉が天皇に向けられていたことを語り伝えている。たとえ個性の輝きに乏しく思えようとも、天皇とは日本という国家家系の最高位を占める祖父像になっていたのである。〉（アイヴァン・モリス『高貴なる敗北』）

フランス人のベルナール・ミローは次のように述べています。

〈日本の兵士たちは、かなりのインテリの者たちでさえも、なお皇国の不敗不滅を信じていたということは、驚くべきことだが事実なのである。そしてほとんど絶対多数の者が、死ぬまで戦わされることを納得していたのであった。信じがたいことと思われようが、このことは兵士たちの無知ゆえによるものではなかった。むしろその正反対に、彼らは大真面目によく考えていたのである。

（中略）

実際にこれらの兵器で、戦果をあげ得る前にあえなく散華した多くの純粋な日本の若者たちには、彼らの驚嘆すべき祖国愛の高揚と、その比類ない勇気のゆえに、いっそういたましく、まことに胸えぐられる悲痛さを禁じ得ないものがある。

しかしこれらの武器が我々の眼にはいかに悪魔的と映り、それによってあたら命を捨てた若者たちの冷たい勇気と決意のほどがいかに我々を畏怖せしめようとも、それでもなおかつこれら日本の若者たちは、言葉の最も高貴な意味において英雄であり、未来永劫英雄として我々の心中に存在しつづけることはまちがいない。〉（『神風』）

同じくフランスの思想家モーリス・パンゲは次のように述べています。

〈殺戮のために選ばれた犠牲者たちさ、と読者諸賢は言うだろう。だがそれは違う。彼らが自分たちの運命を受け入れる受け入れ方を見ないのは彼らを不当に貶（おとし）めることになるだろう。彼らは強制され、誘惑され、洗脳されたのでもなかった。彼らの自由は少しも損なわれてはいない。彼らは国

が死に瀕しているのを見、そして心をきめたのだ。この死はなるほど国家の手で組織されたものではあったが、しかしそれを選んだのは彼らであり、選んだ以上、彼らは日一日とその死を意識し、それを誇りとし、そこに結局は自分の生のすべての意味を見出し続けるのだ。〉（『自死の日本史』）

また、イギリス国防省の海軍史部長デビッド・ブラウンは次のように述べています。

〈神風という自殺作戦の源は、日本の自己犠牲の戦士の法典である武士道と、日本の国家宗教である神道にあり、主戦場に於て次から次に繰り返された。〉（『Fighting Elites KAMIKAZE』）

さらに、イギリス人のリチャード・オネールは次のように述べています。

〈日本人が神風を始めとする特攻隊に参加したのは、国体を護持するために、一身を犠牲にしても良いとの考えから発したものであり、彼等を勇気づけたものは、日本の武士道の伝統であった。

全国民のすべての人に、一身を犠牲にする武士道の精神を持つよう呼び掛けることができたのは、日本だけであったろう。

このことは、第二次大戦の末期における、日本の特攻作戦による勇猛な反撃をうみ、また敗戦に際しては、民族的な誇りを失うことなく、また戦後の日本の偉大なる復興の原動力となった、と筆者は信じるのである。〉（『特別攻撃隊』）

これらを読むと、外国人でさえこのように大東亜戦争における日本の特攻に深い意義を感じ、同じ人間として共感を寄せるのに、何故、同じ日本人でありながら「特攻隊は犬死にであった」とか、「無理やり特攻隊に入れられた」といった皮相的な見方しかできないのかと疑問に思います。

日本では近ごろ「自己犠牲」という言葉は絶えて聞きません。がしかし、ここに挙げましたように、国のため、他の人々のために一身を捧げる行為は人類普遍の賞讃されるべき行為なのでしょう。そのことを外国人は知っており、かつ次世代に伝えているのです。しかるに日本では、まったくといってよいほど顧みられることがありません。実に憂慮に耐えません。

この稿を終わるに当たって、特攻で戦死された方々の冥福を祈りつつ、ベルナール・ミローの言葉を引用させていただきます。

〈これら日本の英雄たちは、この世界に純粋性の偉大さというものについて教訓を与えてくれた。彼らは一〇〇〇年の遠い過去から今日に、人間の偉大さというすでに忘れられてしまったことの使命を、とり出して見せつけてくれたのである。〉（『神風』）

【渡辺徹二】

六　敗戦に顕現された民族の個性

日本帝国の決断・国体護持の誓いと整然たる和平

一億の慟哭——神洲不滅・国体護持の誓い

大東亜戦争は、緒戦において赫々（かく）たる戦果を挙げました。北はアリューシャンから西はアフリカの東にあるマダガスカル、南はオーストラリアに至るまで、雄渾壮大な大作戦を敢行しました。ヒトラーの電撃作戦も影を失うほどの目をみはるような成功を収めたのです。当時は東条首相も「絶対不敗の体制に立った」と豪語し、国民のほとんどはそう信じていました。

しかし昭和十七年（一九四二年）六月、ミッドウェイ海戦に敗れ、翌十八年二月、ガダルカナルから撤退するに及んで、次第に守勢に追い込まれてゆきました。昭和十八年五月、アッツ島で玉砕してからは、太平洋の島々からニューギニア、そして中国大陸の雲南地方（拉孟（らもう）・騰越（とうえつ））でも玉砕戦が続

き、インパール作戦では悪戦苦闘しました。そして、昭和十九年（一九四四年）十月の比島防衛戦と、昭和二十年四月からの沖縄戦では「特攻隊」まで繰り出しました。その頃、日本本土は連日の無差別爆撃によって、焼野原になっていました。それでも戦意は旺盛で、「一億総特攻」となっても戦うことを誓っていました。

その頃の残存兵力を調べてみれば、海軍こそ戦闘可能の戦艦は皆無で、残っていたのは空母二隻、巡洋艦三隻、駆逐艦三十隻、潜水艦五十隻という劣勢でしたが、日本本土には陸軍が二百二十五万、海軍は百二十五万が温存され、空軍（航空隊）は陸・海軍あわせて一万六千機。そのうち六千機は特攻作戦に使用できると考えられていました。これだけの戦力を駆使することによって、有利な講和に導けるとして、軍人は戦意に燃えていたし、国民も「敗戦」を受け容れることなど、到底考えられない状況でした。

そうしたさ中に、陛下（昭和天皇）がラジオを通じて全国民に放送されるという予告が流されました。国民は威儀を正して、ラジオの前に釘づけになりました。ほとんどの国民は、最後まで戦うことを呼びかけられる放送と信じていました。ところが放送は、ポツダム宣言受諾の趣旨を伝える内容だったのです。大東亜戦争の必勝を信じて戦ってきた当時の国民は、敗戦をどのように受け止めたでしょうか。ここに、他国には見られない日本民族の個性の顕現（けんげん）を見るのです。

現在では、「これで空襲がなくなってホッとした」とか「命が助かった」等という感想が一般的になりましたが、当時の国民は敗戦の屈辱に直面して、「一億は慟哭（どうこく）した」というのが実情でした。

当時、岩手県に疎開していた詩人の高村光太郎は、「一億の号泣」と題する長詩を作りました。それは「綸言（天皇のお言葉）ひとたび出でて一億号泣す」からはじまるもので、敗戦時の国民感情の高鳴りを次のように伝えています（昭和20年8月17日付「朝日新聞」より）。

天上はるかに流れ来る
玉音の低きとどろきに五体をうたる
五体わななきてとどめあへず
玉音ひびき終りて又音なし
この時無声の号泣国土に起り
普天の一億ひとしく宸極（皇居）に向つてひれ伏せるを知る
微臣恐懼ほとんど失語す
ただ眼を凝らしてこの事実に直接し
苟も寸毫も曖昧模糊をゆるさざらん
鋼鉄の武器を失へる時
精神の武器おのづから強からんとす
真の実と到らざるなき我等が未来の文化こそ
必ずこの号泣を母胎として其の形相を孕まん

また、「玉音（天皇のお声）放送」のあった翌日、八月十六日の「朝日新聞」の見出しには、「玉音

を拝して感泣嗚咽（むせび泣き）」「胸灼く痛憤、堪え抜かん苦難の道」「再生の道は苛烈、決死大試練に打克たん」「死せず亜細亜の魂」「神洲の不滅を信じ、国体護持に邁進」というような烈々たる文字が躍っていました。社説「一億相哭の秋」の中にも、「科学や物量に敗れたが、魂までも占領はされない」「国の生命は永久である。その無窮の生命の進路に一張一弛あり、起伏隆替あるのは、またやむを得ないことである」と書かれ、当時の国民の心意気を代弁していました。

また同じ紙面にある「国民の覚悟」を促す文章の中にも、

〈国体を護持し得るか否かは、片々たる敵の保障（ポツダム宣言）にかかるのではなく、実に日本国民の魂の持ち方如何にかかる。特攻魂に端的に現はれた七生報国の烈々たる気魄は、我々がこれを祖先よりうけついだものであるが、これは永劫に子孫に伝へねばならぬ。日本国民が果していつの日に再生し得るかは、一に日本国民の魂がこの試練によつていかに鍛へられるかによつて決まるのである。〉

とあり、「特攻魂」の現われとして「神風特攻隊・市島少尉最後の一文」を掲載しています。

詔書が渙発されると、国民は期せずして二重橋前に集まり、土下座して力足らざりし罪を謝しました。このようなことは誰に命令されるでもなく、自然発生的に起こったのです。「朝日新聞」は、「二重橋前に赤子の群」「立上る日本民族」「苦難突破の民草の声」という見出しをつけ、その模様を次のように描写しています。

〈静かなやうでありながら、そこには嵐があつた。国民の激しい感情の嵐であつた。広場の柵をつ

かまえて泣き叫んでいる少女があつた。日本人である。みんな日本人である。この日正午その耳に拝した玉音が深く深く胸に刻み込まれてゐるのである。あゝけふこの日、このやうな天皇陛下の御言葉を聴かうとは誰が想像してゐたであらう。戦争は勝てる。国民の一人一人があらん限りの力を出し尽せば、大東亜戦争は必ず勝てる。さう思ひ、さう信じて、この人達はきのふまで空襲も怖れず戦つて来たのである。それがこんなことになつた。あれだけ長い間苦しみを苦しみとせず耐へ抜いて来た戦ひであつた。

泣けるのは当然である。群衆の中から歌声が流れはじめた。「海ゆかば」の歌である。一人が歌ひはじめると、すべての者がなきじやくりながらこれに唱和した。「大君の辺にこそ死なめかへりみはせじ」この歌声もまた大内山（注—皇居のこと）へと流れて行つた。またちがつた歌声が右の方から起こつた。「君ケ代」である。歌はまたみんなに唱和された。あ、、天皇陛下の御耳に届き参らせたであらうか。

天皇陛下、お許し下さい。

天皇陛下！　悲痛な叫びがあちこちから聞えた。一人の青年が起ちあがつて、「天皇陛下万歳」とあらん限りの声をふりしぼつて唱和した。群衆の後の方でまた「天皇陛下万歳」の声が起こつた。将校と学生であつた。

土下座の群衆は立ち去らうともしなかつた。歌つては泣き泣いてはまた歌つた。通勤時間に、この群衆は二重橋前を埋め尽くしてゐた。けふもあすもこの国民の声は続くであらう。あすもあさつ

ても「海ゆかば」は歌ひつづけられるであらう。大御心を奉戴し、苦難の生活に突進せんとする民草の声である。日本民族は敗れはしなかつた。〉（昭和20年8月16日付「朝日新聞」）

世界の驚き―威武不屈・秩序整然

この「朝日」の記事に見られるように、日本国民は最後まで必勝の信念に燃えていました。しかし、ひとたび陛下の御詔勅が出されると、一億国民は慟哭して「国体護持」と「神洲不滅」を誓って、整然と矛を収めたのです。「鬼畜米英（きちくべいえい）」を呼号していた日本人だから、進駐軍は、ゲリラ的な反撃を受けることを覚悟していました。ところが、そのような気振りはどこにもなく、一斉に和平に転じたのです。この姿は、マッカーサーをはじめ、米軍の驚きでした。

スウェーデンのストックホルムにあった「朝日」の衣笠特派員は、「敗戦の祖国に寄す」の記事の中で、各国の反響を伝えています。「（前略）休戦の詔書を拝して一億の民は慟哭した。あの気持は、陛下に対して赤子の罪を謝しまつる絶対の心境である。一億反省のこの美しい姿には流石（さすが）全世界の人人も胸うたれてどの国の新聞もこのニュースだけを大きく掲載した。戦ひ敗れた後にもなほ我々には国体護持のよろこびだけが残つたのである。（中略）」（昭和20年9月8日付「朝日新聞」）

また、九月二日の同紙には、重慶に在った中華民国国民政府・王世杰（けつ）外交部長の談話が載っています。

〈日本敗れたりとはいへその国民性は決して軽視することができぬ。例へば日本国民の皇室に対す

る忠誠、敗戦後における威武不屈、秩序整然たる態度はわが国人の範とするに足る。〉（昭和20年９月２日付「朝日新聞」）

＊

しかし、敗戦に遭遇した一億号泣の誓いは、いつの頃からか霧散してゆきました。占領軍を解放軍として讃える政党が出現したり、「敗けてよかった」という言葉が公然と語られだしました。戦死者は「犬死」だったという死屍に鞭打つ言葉が平然と語られ、「国体護持」の誓いが「平和と民主主義」の謳歌に移行してゆきました。

こういう日本人の姿を見て、アメリカのジャーナリストであるマーク・ゲインは、『ニッポン日記』の中で、日本は「敗けてよかった」というような、「屈服を正当化するという苦悩をなめねばならなかった」と書いています。

彼は日本人の「解放感」を、民族の苦悩の姿と見ているのです。彼は同書の中で、ＧＨＱがいかに日本の「民主化」に狂奔し、日本をアメリカの橋頭堡（きょうとうほ）（前進基地）たらしめようとしたかを活写し、その結論と見られる部分に、「デモクラシーが国民の中から出たものでなく、征服者の事務室から出たものなら、それは民主主義ではあり得ないのである」と指摘しています。

【名越二荒之助】

七　忘れてならない敗戦時の自決者たち

壮絶なる民族への留魂

「大日本帝国」に殉じた人々

日本の敗戦を考える時、忘れてならないのは、終戦時の自決者のことであります。これらの人々は、敵国に降伏することを潔しとせず、敵に向ける刃を自らに向けて自決した人が多いのです。あるいは「大日本帝国」に殉じ、再び真日本の真姿顕現(けんげん)を祈って人柱となった人々もあります。また、自らの力が及ばなかった罪を詫び、敗戦の責任を一身に感じて自決した人々も多かったのです。

これらの人々は、我が命を自らの意志で断ちきった剛勇の人々であり、純忠無垢の魂に生きた尊貴の人たちであります。これらの方々の悲願は、我が国史の中に地熱のように生きているのです。

いま私の手もとに、昭和四十三年に発行された『世紀の自決―日本帝国の終焉に散った人びと』

（芙蓉書房・全四七二頁）という本があります。この本には、敗戦後に自決した軍人・五百六十八人の芳名が掲載され、百十八人の遺書が載っています。

自決は自らの意志で決行するものだけに、その動機、遺書の内容は様々で、分析も概括もできません。ただ言えることは、自決した軍人は、将官や佐・尉官にあたる、いわゆる将校ばかりではありませんでした。下士官で自決した者百五十五名（全体の二七％）、兵で自決した者九十九名（一七％）、そして軍属（看護婦、雇員を含む）で自決した者は三十一名（五％）に達します。敗戦の責任と直接関係ないと思われる下士官・兵・軍属が、総数で二百八十五名。全体の四九％の人々が、不忠を詫び、責任を感じ、降伏を拒否して自決したのです。

そしてさらに痛ましく、純烈の魂に打たれるのは、家族全員で自決の道を選んだ人々があったことです。かつて乃木静子夫人は、明治天皇に殉ずる乃木希典将軍とともに自刃しましたが、大東亜戦争では敗戦に当って、家族もろとも自刃した例が多いのです。

① 青野徹憲兵少尉は昭和二十年八月十七日、母、夫人、子息二人とともに京城で、
② 宇田川秋次郎海軍中佐は八月二十日、夫人、長女とともに郷里佐賀県で、
③ 内倉光秀陸軍中尉は八月十六日、夫人、長男、長女、次女とともに郷里滋賀県日野町で、
④ 親泊朝省陸軍大佐は九月三日、夫人、長男、長女とともに東京で、
⑤ 川村進陸軍中佐は八月十五日、夫人とともにハルビン市で、
⑥ 国定謙男海軍少佐は八月二十二日、夫人、長男、長女とともに土浦市善応寺で、

⑦　隈部正美陸軍少将は八月十六日、母、夫人、長女、次女とともに東京多摩川畔で、
⑧　幸田明海軍中尉は九月二十五日、夫人とともに宗谷防備隊内で、
⑨　下村良策海軍主計大尉は八月十八日、夫人とともに舞鶴で、
⑩　渋谷三郎陸軍大佐（ハルビン学院長）は八月二十一日、夫人、次男とともにハルビンで、
⑪　杉山元元帥・陸軍大将は九月十二日、本人は司令官室、夫人は自宅で、
⑫　銕（てつ）尾隆陸軍中佐は八月十九日、夫人とともに千葉県四街道桜ケ丘で、
⑬　長瀬武海軍大尉は八月二十一日、夫人とともに佐世保で、
⑭　藤井権吉陸軍中佐は八月二十六日、夫人、長男、長女とともに富山県黒部市で、
⑮　古屋昌喬海軍少佐は八月十七日、夫人とともに海軍工機学校（東京）で、

というように全部で十五組（50音順に配列）を数えます。

民間人による自決

さらに我々の心胆を寒からしめるのは、民間人で自決の道を選んだ人々です。これらの人々は軍人でないので、前掲の『世紀の自決』には載っていません。そして、軍人でないために靖国神社にも祀られず、もちろん遺族への一時金の対象ともなっていません。純粋一途に、壮絶鬼神をも泣かせる最期を遂げたのです。

当時の新聞から、集団自決した人々だけ拾えば、次の通りです。

一、八月二十二日、東京愛宕山で、尊攘義軍の飯島与志雄、摺建（すりだて）富士夫、茂呂宣八氏ら十人が爆薬を抱いて同時自刃。そして、同月二十七日午前五時、摺建、茂呂両氏の夫人がそれぞれ夫のあとを追ってピストルによる自決。

二、八月二十三日午前十一時、皇居前で、明朗会の日比和一会長以下十二人が自決。遺書には「お上に対し奉り、不忠をお詫び申しあげます。同志と共に一死以て天壌無窮を祈願す。仁愛なる陛下、希くば臣民一億をして再び国体護持の聖戦に起たしめ給へ」とあり、別に三千円を添えて、後始末を頼むとあった。

三、八月二十五日、明治神宮外苑の代々木練兵場で、大東塾の影山庄平塾長代行以下十四名が、見事なる割腹自決。共同遺書には、「清く捧ぐる吾等十四柱の皇魂誓つて無窮に皇城を守らむ」とある。

＊

ナチス・ドイツの滅亡に当って、ヒトラー総統は愛人エバー・ブラウンと結婚式を挙げ、直後に揃って自決しました。そして宣伝相ゲッペルスは、妻と六人の子供とともに自決の道を選んでいます。ヒトラーの『マイン・カンプ（我が闘争）』に影響を与えた地政学者のハウス・ホーファは、ニュルンベルグ裁判を拒否して、妻とともに自殺しました。

私はナチス・ドイツに殉じた人として、これ以外の例を知りません。それに対して大東亜戦争の敗戦、そして大日本帝国の終焉に当って、六百人をはるかに超える人々が殉じたのです。これら多数の人々の死は、歴史の残光となって、後世に光彩を放つに違いありません。

＊

ところで『世紀の自決』という本の中には、先にも書いたように、百十八名の遺書が載っています。簡単な遺書ですが、一人一人に悲痛なドラマが秘められています。それらを掘り起こしたら、いかなる小説も及ばぬ粛然たる物語が生まれましょう。

ここでは、この本に載っていない三浦襄（じょう）さんの自決（インドネシア・バリ島）と、インドネシア人であるアブドル・カリム青年の自決と、その後を追った上遠野（かどの）勇吉曹長の物語を紹介して、終戦後に決行した自決者の心情の一端を汲みとりたいと思います。

インドネシアの人柱・三浦襄（じょう）さん

まず、三浦さんの自決の真相から入りましょう。さて、「辞職と切腹は人に相談すべからず」と言ったのは、西郷南洲でした。ところが、相談するどころか、自決を予告し、その意義を公言して、その通り見事に自裁して果てた人があるのです。それも敗戦後の日本国内ではなく、インドネシアのバリ島に於て。その人こそ三浦襄氏。（三島・森田両氏の自決に似ていて違う点に注目のこと）

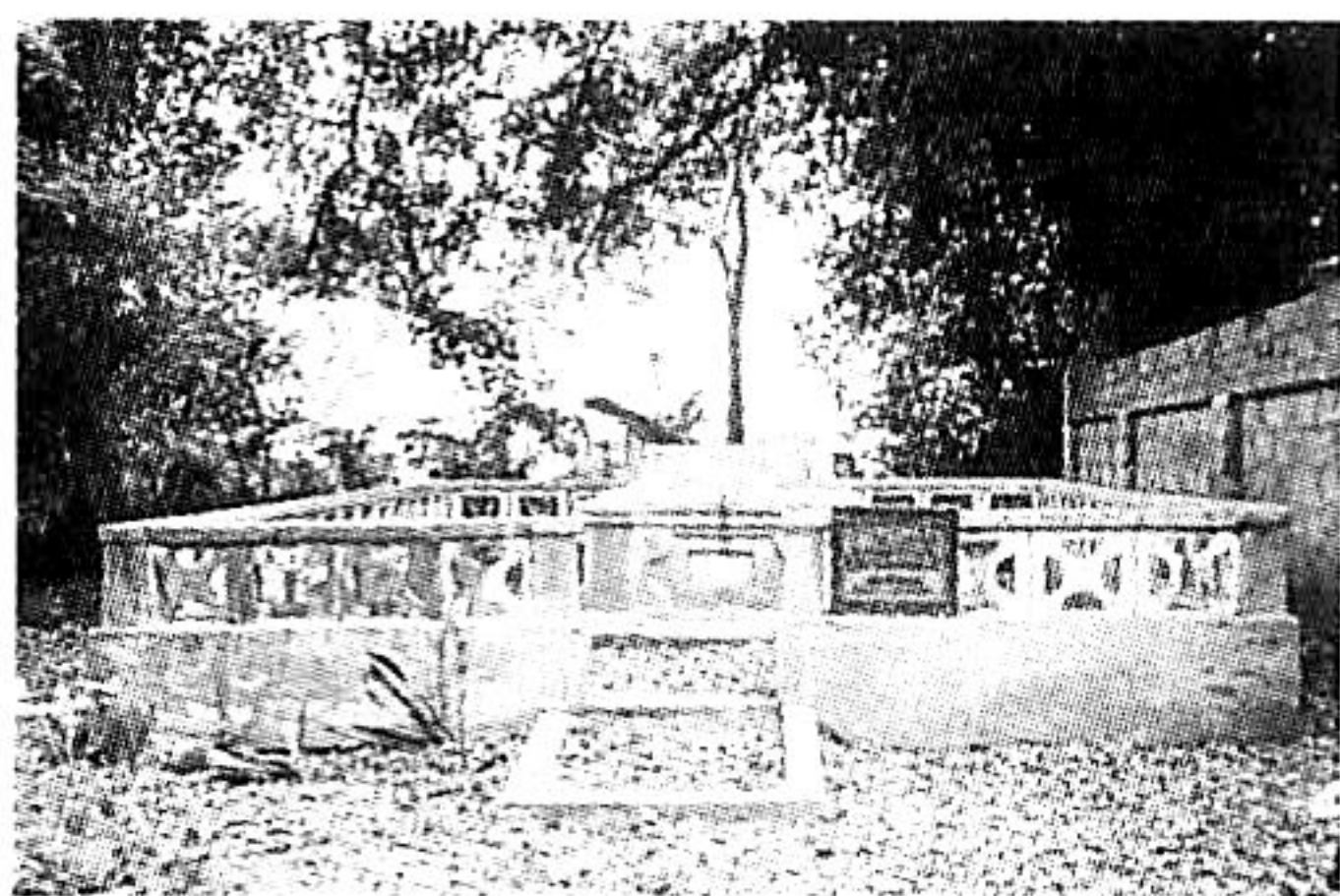
父は日本基督一致教会の牧師であり、母もバプテスト派の受洗者でした。キリスト教的価値観の中に育った三浦さんが、最後は古武士のように自決の道を選んだのです。

三浦さんは明治二十一年東京で生まれ、明治学院中退後はジャワやセレベスで貿易商会を設立し、昭和五年からは日本人の住みついていないバリ島に移り、自転車修理業を営みました。バリ島では住

民たちから「トアン（旦那）・三浦」と親しまれ尊敬されていました。しかし東亜の風雲急を告げると、昭和十六年六月、三浦さんは一時家族とともに郷里・仙台に引揚げました。しかし大東亜戦争開戦とともにバリ島攻略部隊の道案内兼通訳として徴用されました。

その頃のバリ島は、オランダの支配下にありました。オランダはバリ島を征服するために、一八四八年以来、前後六回にわたって遠征軍を送りました。最後の戦では、各州の王族は武器がなく、兵士とともに白装束に身をかため、妻は子を殺して自害し、短剣と槍で決死的反撃を行い、遂に玉砕しました。その時の死者は三千四百人に達したといわれます。

そのような歴史を持つバリ島に、日本軍は上陸（昭和17年2月19日）しました。ところが島民は、オランダと戦う日本軍来るとして歓呼して迎え、無血占領しました。

バリの人々から「パパ・バリ」と慕われ尊敬されていた三浦襄氏。独立予定日だった昭和20年９月７日，「全日本人に代って骨をこの地に埋め，インドネシア独立の人柱となって独立を見届ける」として自決した。

バリ・デンパサールにある三浦氏の墓。「J.MIURA/MENINGGL/7．9．2605」と刻まれている。MENINGGLとはインドネシア語で「亡くなった」の意。7．9．2605は日本の「皇紀（神武紀元）2605年９月７日」を意味する。

いっしょに上陸した三浦さんは双手をあげて歓迎され、日本人としての使命感に目覚めました。やがて、得意のインドネシア語を使って、大東亜戦争の意義を各地で講演するようになりました。その時はいつも、オランダの侵略史と日本の戦争目的を対比し、「この戦争はバリ島はもちろん、アジア十億の解放運動であり、それぞれの所を得しめる戦いである。インドネシアは必ず日本軍の力で独立させる。日本はけっして嘘を言わない」と力説しました。

三浦さんは一方では、宗教改革運動を起こしました。各州ごとに存在する僧侶に対して、日本軍政と大東亜解放の理想との格差を穴埋めするために努力し、「バリ敬神連盟」を作りました。さらに慈善事業にも手を出し、自宅に孤児を集め、多い時には数十人に達したと言われます。その献身的努力に対して、島民からは次第に「パパ・バリ（バリの父）」と、最大級の敬意を現わす尊称で呼ばれるようになりました。

*

やがて昭和十九年九月七日、小磯首相による「小磯声明」が出され、正式にインドネシアに独立を許容することになりました。独立の日を一年後の九月七日に定め、バリでも「建国同志会」が組織されました。この同志会のメンバーに、日本人として唯一人三浦さんが事務総長として選ばれました。

その運動が軌道に乗っていた矢先に、日本が敗戦したのです。日本の敗戦は、三浦さんを一時失意のドン底につき落しました。しかし、やがて彼は意を決して起ちあがりました。彼が島内三十九郡を日に夜をついで駆け巡りはじめたのは、終戦を十日も過ぎた頃からでした。

彼は行く先々で郡長、村長、その他の有力者を集めて、終戦のやむなきに至った事情、日本としては今や独立を援助できない立場にたち至ったが、しかし精神的にはあくまでインドネシア独立を支持して変わらないこと。インドネシアの進むべき道は、祖国愛に燃える全インドネシアの団結による前進あるのみであること。そして、自分はあくまでインドネシアを愛し、バリを愛する故に甘んじて全日本人に代って骨をこの地に埋めて独立を見届ける決心であることを、熱情を傾けて説き、住民の理解と納得を求めました。

そして九月六日の夕方には、バリ島の中心地であるデンバッサルの映画館で、現地人および華僑ら約六百人を前に、声涙ともにくだる大演説を行いました。演説の最後に、自分は明九月七日の未明に自決して骨をバリに埋め、インドネシア独立の人柱となって、諸君の独立達成を守る覚悟である、と結んで壇を降りました。

これより先、三浦さんの決心を知った現地人有志は、自殺を悪徳とするヒンズー教の教えを説いて、思い止まるよう進言し、哀願しました。日本人有志も、極力自重を要請し続けました。しかし、三浦さんの決心を翻意させることは何びとにもできえませんでした。

映画館での最後の演説を終えた三浦さんは、同夜バリ・ホテルで催されたデンバッサル民政部主催のサヨナラ晩餐会にも、請われるままに列席し、並いる司政官たちとなんの屈托もなしに歓談を交わし、自宅に帰っていきました。

自宅には、三浦さんを案じて駆けつけた現地人有志が待ち構えていました。語らいが夜更けまで続

きましたが、いつまでも傍から去ろうとしない人々に、氏はしまいに色をなしておこり出し、言葉を荒げて立ち去れと命じました。仕方なくみんなは、いとまを乞うて去らざるを得ませんでした。

みんながいなくなると、彼は書斎に入って大急ぎで何通かの遺書をしたためました。仙台の夫人や特別懇意な友人に宛てたものでした。「インドネシアに遺す言葉」として、各地で行った演説の原稿が残されたし、愛用の時計、万年筆、印形などにそれぞれ贈り先が示されました。また使い残った現金は、養育していたバリの孤児たちに分かち与えるように名前まで書き遺されました。

死んだあとの処置を済ませてから、アンディ（水浴び）をし、すっかり真新しい衣類に着替えた上、中庭の隅にしつらえさせたアタップ（椰子葉）の小屋囲いの中に入り、端座して右のコメカミに拳銃をあてがい、轟然一発、見事な最期を遂げました。「昭和二十年九月七日、インドネシア独立が許容される筈だった日」のあけがた（午前4時すぎ）のことでした。五十七歳でした。

＊

三浦さんの自決に立ち会ったのは、三浦商会の社員であったニョーマン・ムルダ氏（40歳）でした。すでにこのことあるを予感していた島民の間に、衝撃が電流のように走り、バリ島の隅々にまで伝わりました。その日のうちに葬儀の段取りが進み、「バリ葬」とでもいうべき盛大な葬儀となりました。

翌日の「バリ新聞」は、葬儀の模様を次のような記事にしています。なお、新聞の冒頭に書かれている「二六〇五年」というのは、日本の皇紀（神武紀元）で、昭和二十年のことです。三浦さんのお

墓には、「二六〇五年九月七日、J・三浦が亡くなった」とインドネシア語で刻まれているし、バリ島では今も神武紀元を使ったカレンダーが販売されています。

＊

三浦襄氏は静かに逝去された
　霊柩埋葬の儀
　　――尊敬と愛情を一身に集めた義人
　　　――各界各戸人士が葬送

二六〇五年九月七日朝の陽光は、赤々と故三浦襄氏の邸宅を照らしていた。邸宅の後部、美しく潔められた中型の柩舎には、遺骸を収めた霊柩が白布をもって蔽われ、安置されていた。各戸、各階級に渉る人士は、思い思いの国民装をまとい、故人に対する尊敬と感謝を捧げんとして引きもきらず雑沓を呈した。バリ島在住の各国民からは花環が供せられた。交互に聞こえてくるゴンとアンクロン（注―ともに南洋の楽器）の音は、島民全部に洩れなき愛敬を注いだこの義人の逝去に対し、さらに哀愁を新たにするものがあった。来場の人士のうちには、警備司令、民政部長官等も見受けられた。

夕刻三時半、葬儀は日本式をもって始められた。上述の儀礼にはバリ島酋長諸氏もまた出席せられ、在住の諸高官、さては各国民老幼男女等しく、この尊崇すべき故人の最後の葬送を送らんとして故人の邸宅は、時ならぬ雑沓を呈した。儀礼を終って、葬列はバトンの墓地に向け進発した。幾千人の人人は葬列に加わり、または路傍で尊敬の念をもって目送した。繁茂せる樹下、故人が生前掘らせ

ておいた墓穴は、既に準備が整えられていた。霊柩は大なる尊崇の念をこめて墓穴に下ろされ、導師代表は進んで祈祷を捧げた。いろいろの香華が撒布され、その香気は焼香の香気とともに漂うて空気を充満せしめた。その間、故人に縁の深かった人々は、胸に十分の尊敬の念をこめて香華を撒布し、故人の冥福を祈った。日はようやく沈みかかった。シンガラジャからも故人の知己の幾人かが葬送した。彼等は埋葬された墓前にひざまづき、敬虔なる告別の言葉を述べるのであった。心は悲しみに閉ざされ、同情の念を禁じ得なかった。終に彼らは帰って行った。

太陽はようやく沈んで、義人三浦の霊も永遠の休息に入った。バリ新聞同人もこの人の永遠の告別を悲しみ、且つ、決して忘れざらんことを表明する。願くば、故人の霊、神の国に於て祝福されんことを。（二六〇五年9月8日付「バリ新聞」）

インドネシアの青年、ラデン・アブドル・カリムと上遠野（かどの）曹長の自決

インドネシア独立の人柱となるべく自決した三浦さんを語ると、もう一人紹介しなければならない人があります。それはラデン・アブドル・カリムというインドネシアの青年のことです。彼は弱冠二十歳で「日本軍の指導に対し、全インドネシア青年を代表し、血を捧げてお礼申しあげる」として自決したのです。

カリムの家は、父がマドラ島の郡長までしたいわば素封家（そほうか）でした。彼は日本軍の進駐に感激し、志願して憲兵補に採用されました。出身地のマドラ島はバリ島の近く、スラバヤの対岸にある島です。

九州の松浦水軍が南方に流れついて、「松浦（まつうら）」が「マドラ」になった、と言われるくらい島民は情熱的で勇敢な性質です。人口は十万足らず、貧しいが名誉や信義を重んじ、暴風雨の中でも平気で船を出す勇気の持主でもあります。それだけに、東洋人としてあれだけの大戦争を戦う日本への親近感と憧れが強く、進駐した日本軍人と島民との間には熱い友情が生まれました。

カリム青年は、マドラ人の典型ともいうべき人物で、日本語の上達も早く、色白の好青年でした。日本の軍人たちから特に可愛がられていました。当時、志願して「兵補」として採用されたマドラ人は六人でしたが、日本軍人とは兄弟のようなもので、「死なばもろとも」とか「マドラに骨を埋める」とかの言葉が、何のためらいもなく交わされていました。

日本軍に志願し，敗戦後はインドネシア人を代表して日本へ感謝の誠を捧げるとして自決（20歳）したカリム青年の墓。バリ近くのマドラ島パメカサン市にある。左に立つのは，カリムに日本語を教えていた村越氏。マドラの戦友会の人々が現地を訪ねれば，住民はいつでも真心から歓迎してくれ「愛国行進曲」や「愛国の花」を最後まで歌って聞かせてくれるという。

カリム青年の死を悼み「死体はカリムのそばに埋めて下さい」という遺書を残し，昭和20年8月28日，カリム青年の3日後に自害した上遠野曹長。

ところが突然、日本が敗戦を迎えたのです。衝撃は日本軍人のみならず、インドネシア兵の間にも走りました。カリム青年は「どうしても日本に行きたい、日本に連れて帰ってくれ」と、当時、兄とも慕っていた上遠野（かどの）勇吉憲兵曹長（28歳）にせがみました。

上遠野曹長としても、かなえてやりたいのは山々でしたが、復員にあたって異民族の青年を日本に連行することは許されないし、敗戦後の日本に連れて帰る自信はありません。やっとなだめて、父なき彼に、母とともに暮らせるだけの一軒の家を買い与え、トラックと乗用車まで用意して、納得させました。

八月二十四日には憲兵補除隊式を行い、夕食には別れの宴を催しました。ところが二十五日早朝、カリムは突如憲兵隊で拳銃をコメカミに射ち込み自決したのです。日の丸を身にまとい、隊から支給された新しい軍服に白いワイシャツ、赤靴という憲兵補の軍装で——。ワイシャツには「大日本帝国万歳、インドネシア独立万歳」と、日本語をペン書きしていました。また別の遺書にはマレー語で、次のように記されていました。

〈私はインドネシア独立と日本勝利の為、またマドラ防衛の為、決死の覚悟で日本軍と共に闘って来ました。日本軍のお蔭でインドネシアは自らの力を知ることができました。インドネシアは必ず独立します。私は日本軍の指導に対し全インドネシア青年を代表し、血を捧げて御礼申し上げます。大日本帝国万歳、インドネシア独立万歳〉

日本軍はその日の午後に盛大な葬儀をすませ墓前には毎日のように花を供えていました。ところ

が、八月二十八日朝早く橋本豊平軍曹（後に戦犯裁判で死刑になった人）が花を持って参ったところ、カリムの墓前で、上遠野曹長が拳銃をコメカミに射ち込み、意識を失い倒れているのを発見したのです。橋本軍曹は直ちに附近住民の手を借り、戸板に乗せて隊へ帰り、児玉博士の来診を受けたのですが、弾丸は頭部を射ちぬき両眼瞼は閉じて紫色となっており、意識不明で手当の方法がありません。苦しみもなく、すやすや眠っている状態を続け、一言も発せぬまま午前十一時頃息を引き取ったのでした。遺書は鉛筆の走り書きで「皆様、大変お世話になりました。カリムが可哀そうなので一緒に逝きます。死体はカリムのそばに埋めて下さい」というような簡単なのがあっただけでした。

二人の死に対しては、あらためて島民による「道民葬」が行われ、上遠野曹長の遺体はカリム青年の側に並べて埋葬されました。しかし日本軍が引揚げる時、上遠野曹長の遺体は焼骨して一部は持ち帰り、遺族に引き渡しました。実弟（上遠野正一氏）は福島県いわき市に健在で、そのもとには遺書とともに遺品の時計が保管されています。

【名越二荒之助】

八　世界が評価する五つの歴史的意義

戦争目的を達成した国はどこか・見事なるドラマの完結

勝敗を超えた国家の価値

大東亜戦争は、日本歴史初まって以来の大戦争でした。最後は惨憺たる敗北を喫し、国土は焼野原になってしまいました。明治以来、営々として築いてきた栄光の遺産は、ほとんど烏有（うゆう）に帰し、民間人を含めて三百万の犠牲者を出しました。

この敗北の衝撃は現在も尾をひき、戦争への反省や批判の書はそれこそ汗牛充棟の感があります。極東裁判を下敷きにして、我が国を「犯罪国家」のように仕立てあげたものから、敗戦の原因を精緻に分析批判したものに至るまで、今も、刊行され続けています。

私は、これらの著書を読むたびに思うのです、日本人はあまりにも反省過剰ではないか。戦争に敗

けたので、さも悪いことでもしたかのように錯覚しているのではないか。そもそも戦争に勝つとか敗けるとかは、国家にとって第二義的意味しか持たないのではありませんか。勝つに越したことはありますまいが、勝ったからといって傲り、アジア諸民族の前で威張るような態度は恥としなければなりません。敗けたからといって卑屈になり、犯罪者のごとくペコペコするのも愚かなことです。勝っても謙虚、敗けても自国の真姿を失わない正々堂々たる態度こそ、国家としての第一義的価値でありまます。

このような第一義的価値を踏まえて、大東亜戦争の意義を考えてみたいと思います。実はここで種明かしをすれば、第二部「大東亜戦争のクライマックス」の内容そのものが、「世界が評価する歴史的意義」に当たるのです。そこでここでは、第二部全体の眼目を要約し、箇条書きにまとめました。次の通りです。

一、緒戦における勝利の意義

大東亜戦争は緒戦において、雄渾(ゆうこん)壮大な大作戦を展開しました。真珠湾の奇襲、マレー沖海戦による英極東艦隊（プリンス・オブ・ウェールズとレパルス）の撃沈、シンガポール陥落、香港、フィリピン、インドネシア、ビルマと破竹の進撃を続けました。戦線はさらに広がり、北はアリューシャンから南はオーストラリア、そして西はマダガスカルに至るまで、史上空前のスケールを持った大作戦でした。この勝利によって、日本民族のみならず、アジア・アフリカの人々がいかに驚喜したことか。

しかし日本は、最後に惨憺たる敗北を喫したのですから、この勝利も糠喜び、元の木阿弥に終ったと、一般には考えていました。ところがトインビーなどは、緒戦の勝利に意義を見出しているのです。

〈日本人が歴史上残した業績の意義は、西洋人以外の人類の面前において、アジアとアフリカを支配してきた西洋人が、過去二百年の間考えられていたような不敗の半神でないことを明らかに示した点にある。イギリス人もフランス人もアメリカ人も、ともかく我々はみな将棋倒しにバタバタとやられてしまった。そして最後にアメリカ人だけが軍事上の栄誉を保ち得たのである。他の二国は不面目な敗北を記録したことは、疑うべくもない。〉（一九五六年10月28日付「オブザーバー」紙）

こんなに評価してくれるのは、トインビーくらいのものかと思っていましたら、東南アジア諸国を廻れば、その時の昂奮を眼を輝かしながら語る多くの人々に出会いました。アジア・アフリカ諸国の教科書の中にも「欧米諸国が不敗でないことを知らされた意義」について書いております。

本書の一三三頁には、アフリカのナイジェリアの教科書（高校用『ナイジェリア―歴史への入門』一九七九年版）の一節を紹介しているので、ここではマレーシアの『東南アジア史入門』（中学校用・一九六三年版）の中から関連部分をお目にかけます。

〈日本軍は終りに決定的に打ち破られたが、彼らは、東南アジアにおける植民列強の陣地に致命的な打撃を与えた。彼らは、西方の力が、不敗からは遠いものであるということを示した。西洋列強――アメリカ、イギリス、オランダ、フランス――が、アジアにおける彼らの領土を、侵略と征服から必ずしも守り得ないことが明らかになった。つまり、アジアの民衆の安全は、したがって、自

分たちの努力にまたなければならない。また、日本軍支配下の状況はひじょうに困難ではあったが、それでも生活は、戦前にあれほど重要だったヨーロッパ人やアメリカ人の官僚や実業家なしにやって来られた。（中略）ある国々ではまた、国の独立が宣言され、名目的な独立政府に実権はなかったとはいえ、たいていの人が、再び独立国の市民であることに誇りを感じたのである。〉

（第二部「一、真珠湾攻撃」「二、空前のスケール・破竹の進撃」参照）

二、戦況不利の中に示した勇戦――玉砕戦と特攻隊に見る稀有の例

我が国は緒戦における赫々（かくかく）たる戦果に対して、「絶対無敗の態勢に立った」と豪語していました。しかし、昭和十七年のミッドウェー、ガダルカナルの敗戦以来、次第に敗け戦に転じました。敗け戦になっても日本民族は戦意を失うことなく、不屈の戦いを続けました。

アッツ島をはじめ、マキン、タラワ、グァム、サイパン、テニアン、ペリリュー、アンガウル、硫黄島、そして中国大陸の拉孟（らもう）・騰越（とうえつ）に至るまで、制空権も弾薬も食料もない中、降伏を拒否して玉砕するまで戦いました。比島作戦以来は特攻隊を繰り出し、最後は一億総戦死までも誓いました。

史上例を見ない不屈の闘魂と壮絶極まる戦いぶりは、欧米人の心胆を寒からしめ、アジア各国の人人を感嘆させました。彼らは「このような精強な軍隊はこれまでになかったし、今後も生まれないであろう」「あたかもギリシャ悲劇を見るような民族の最後」「東洋道徳の範」「困苦欠乏の中にも軍規厳正、最後まで戦う勇敢さは尊敬の的」等々、その著書の中で讃嘆しています。

また、インパール作戦の古戦場その他を訪ねれば、その勇戦ぶりが伝説のように語り伝えられています。特に太平洋各地の玉砕島では、英霊が神社に祀られ島民によって守られています。ペリリュー島を米軍は「天皇の島」と名づけ、島民は「英霊の島」と呼んでいます。アンガウル島では、日本軍玉砕の九月十八日に慰霊の祭を行っています。グァム、サイパン、テニアン等では、現地のガイド（ミクロネシア人）が日本人観光客に最後の勇戦ぶりを語り、バンザイ岬では慰霊のために「海ゆかば」を歌うことを提案します。しかし、日本人観光客の中には歌うことを拒む者が多いのです。日本人が拒否すれば、彼らは余計にその勇戦ぶりを現地の人に伝えようとしています。

思えば、二千五百年前のテルモピレーの玉砕戦は世界の戦史に語り伝えられ、二千年前にイスラエルで起こったマサダの玉砕戦は、ユダヤ人にとって祖国愛のメッカとなり、現在、欧米人で知らない人はないくらいです。このような前例を見れば、大東亜戦争で敢行された大規模な玉砕戦は、特攻隊を含めて、数千年の尺度をもって甦るのではありますまいか。将来、この事実が、大東亜戦争最大の歴史的意義を持つようになるかもしれません。

（第二部「四、壮絶なる戦い」「五、世界が驚倒した特攻隊の出現と感動」参照）

三、一億の慟哭・整然たる和平そして国体護持の誓い

さて、かくも勇敢であった日本民族ですが、ひとたび陛下のポツダム宣言受諾の詔書が出されると、整然と矛を収め和平に転じました。一億の国民は慟哭して「神州不滅」「国体護持」を誓ったの

です。この姿を見て、中華民国の王世杰外交部長のごときは、「日本国民の皇室に対する忠誠、敗戦後における威武不屈、秩序整然たる態度は、我が国人の範とするに足る」（190頁参照）と感嘆しております。

そして、この整然たる敗戦の後に、自決していった人々のことを我々は忘れてはなりません。敗戦を認めず、降伏を潔しとせず、自らの至らなさを詫びて、命を断った人々がいかに多かったことか。これは「大日本帝国」の未曾有の大戦のフィナーレにふさわしい純乎たる魂の発露でした。その数は六百人を超えます。

思えば大東亜戦争は、過去の戦史に例を見ない壮絶な民族のドラマでした。そして、全体に日本民族の歴史と個性が顕現され、見事な完結を遂げています。後世の人々は、必ずやスケールの大きい「民族・忠臣蔵」のような作品として、歴史を書き直すに違いありません。

（第二部「六、敗戦に顕現された民族の個性」「七、忘れてならない敗戦時の自決者たち」参照）

四、植民地解放への貢献

①英・泰・韓の識者の評価——以上は、本書の「第二部・大東亜戦争のクライマックス」を要約して述べた大東亜戦争の歴史的意義でした。その他、歴史的意義としてよく語られることに、植民地の解放をもたらした事実が挙げられます。

イギリスの歴史学者H・G・ウェルズは、終戦後早くも「この大戦は植民地主義に終止符を打ち、

白人と有色人種との平等をもたらし、世界連邦の礎石をおいた」と述べております。また、ククリット・プラモードというタイ国の元首相は、現地の新聞「サイヤム・ラット紙」に、「十二月八日」と題して、もっと端的に感動的な一文を発表しております。

〈日本のおかげでアジアの諸国はすべて独立した。日本というお母さんは難産して母体をそこなったが、生まれた子供はすくすくと育っている。今日、東南アジアの諸国民が米英と対等に話ができるのは、いったい誰のおかげであるのか。それは身を殺して仁をなした日本というお母さんがあったためである。十二月八日は、我々にこの重大な思想を示してくれたお母さんが、一身を賭して重大決心をされた日である。我々はこの日を忘れてはならない。〉

もう一人、あまり知られていない韓国の朴鉄柱氏（平成2年1月逝去・68歳）を紹介したいとおもいます。氏は戦前、日本の教育を受け、戦後はソウルに「韓日文化研究所」を設立しました。

昭和四十二年十月、私は学生を連れて研究所を訪ねたことがあります。反日感情渦巻く韓国にあって、氏は「親日派」というよりも、「崇日家」というべき人物でした。氏は日本の学生を前に二時間、熱誠溢れる懸河（けんが）の弁を奮いました。

〈ソウルから日本をながめていると、日本が〝心〟という字に見える。北海道、本州、四国、九州と、心という字に並んでいるではないか。日本は万世一系の御皇室を頂き、歴史に断絶がない。それに対して韓国は、断絶につぐ断絶の歴史で涙なくして見ることはできない。〉

と前置きして、日本の歴史伝統のすばらしさを総括し、大東亜戦争に移りました。

〈現在の日本人の自信喪失は敗戦に帰因しているが、そもそも大東亜戦争は決して日本から仕掛けたものではなかった。平和的外交交渉によって事態を打開しようと最後までとり組んだ。それまでの日本はアジアのホープであり、誇り高き民族であった。最後はハル・ノートをつきつけられ、それを呑むことは屈辱を意味した。〝事態ここに至る。座して死を待つよりは、戦って死すべし〟というのが、開戦時の心境であった。それは日本の武士道の発露であった。日本の武士道は、西欧の植民地勢力に捨身の一撃を与えた。それは大東亜戦争だけでなく、日露戦争もそうであった。日露戦争と大東亜戦争——この二つの捨身の戦争が歴史を転換し、アジア諸民族の独立をもたらした。この意義はいくら強調しても強調し過ぎることはない。〉

〈大東亜戦争で日本は敗れたというが、敗けたのはむしろイギリスをはじめとする植民地を持った欧米諸国であった。彼らはこの戦争によって植民地をすべて失ったではないか。戦争に勝ったか敗けたかは、戦争目的を達成したかどうかによって決まる、というのはクラウゼヴィッツの戦争論である。日本は戦闘に敗れて戦争目的を達成した。日本こそ勝ったのであり、日本の戦争こそ、〝聖なる戦争〟であった。ある人は敗戦によって日本の国土が破壊されたというが、こんなものはすぐ回復できたではないか。二百数十万の戦死者はたしかに帰ってこないが、しかし彼らは英霊として靖国神社や護国神社に永遠に生きて、国民尊崇の対象となるのである。〉

②英・蘭・米は目的を達成したか——私は朴氏の日本語による名調子を聞きながら、意気軒昂たる発想に息を飲む思いがしました。

氏の言うように、イギリスは戦争に勝って、植民地をすべて失い、形式的な英連邦を残すだけになりました。数百年かかって築いた「大英世界帝国」の遺産の大部分を失い、二流国に転落したのであります。当時の首相であったチャーチルは、『第二次大戦回顧録』の序文の中で、この戦争を「無用の戦争」と歎いています。そして「我々が打ち勝ったよりも、さらに大きな危険（共産主義の侵出）にさらされるようになったことは、人類の悲劇これより大なるはない」と、戦略の間違いを認めております。

さらにオランダは、三百数十年間も植民地にしていた資源の宝庫インドネシアを失い、本国ネーデルランド（低い土地）に引きこもることを余儀なくされました。

そしてアメリカは、ヨーロッパにおいてはドイツ、アジアにおいては日本を破壊してしまったために、その空白を独力で埋めねばならなくなりました。

彼らの戦争目的のひとつであったファシズム打倒は確かに成就されました。しかしソ連と手を結んだために、ファシズムよりも強力な独裁力を持つコミュニズムの大侵略を許しました。ファシズムは政治独裁ですが、コミュニズムは政治・経済・社会におよぶ独裁体制であり、自由陣営諸国に共産党という橋頭堡を築いています。そのためアメリカは、自由陣営四十数カ国と軍事同盟を結び、世界の各地に軍隊を駐留し、経済援助をはかりました。朝鮮動乱とベトナム戦争では若い青年を戦死させ、無尽蔵と思われたアメリカ経済にも、そろそろ限界が見えつつあります。

（第二部「三、大戦のハイライト・大東亜会議」参照）

③ソ連［最後の植民地帝国］の崩壊——それに較べて、第二次大戦でもっともうまく勢力の扶植をはかったのはソ連であります。ソ連は「資本主義相互間の闘争」（日・独対米・英の戦争）という戦略に成功しました。

米・英の力を利用して日・独を叩き、戦後の空白を捕捉して一挙に大侵略に成功しました。東欧から中国大陸にかけて、一時、史上まれに見る版図を拡大しました。しかし、スターリンが作りあげた大版図も、強大な武力と硬直したイデオロギーを背景としたために、やがて中・ソの対立を生みました。平成元年秋から東欧諸国が次々と共産主義を放棄し、平成二年秋（10月3日）には東西ドイツが統一し、ソ連を構成する各共和国が続々と独立・主権宣言を行い、平成三年八月、クーデターが失敗に終ると、ソ連共産党の解散宣言まで出す始末です。

やがて、「最後の植民地帝国」（サハロフ博士）ソ連は、民族、文化、伝統、宗教を等しくする共和国同士の適性規模国家に、必ずや分離独立（約30ヵ国か？）してゆくでありましょう。それがもっとも自然なる国家としての姿であります。かくして「万邦ヲシテ各々ソノ所ヲ得シメル」我が国の世界政策は、ソ連においても実現を見るのではありませんか。

（第二部「三、大戦のハイライト・大東亜会議」参照）

④国家の総力を挙げた日本の役割——思えば、幕末の青年志士たちは、薩英戦争、馬関戦争で西欧勢力に捨身の一撃を加えました。これによって日本は独立を保ち、大日本帝国として基礎固めをして世界に眼を開いてゆきました。続いて日露戦争において、北方から来る露国の勢力に決死の戦いを

挑み、日本がロシアに勝つことによってアジアの導きの星となりました。そして三度目は、大東亜戦争によって最後の抵抗を試み、これが動機で、独立の波はアフリカにまで及んだのです。

考えてみれば日本は、明治以来百年にわたって、国を挙げて欧米勢力に抵抗したのです。このような例は日本をおいて他にないのであります。確かに清国は阿片戦争を戦ったけれど、敗れただけで、アジア諸国に影響力を行使することはできませんでした。その他、フィリピン、インドネシア、インド、ビルマ等でも抵抗運動は起こりました。しかし、全国民が結束し、国家の総力を挙げて敢然と挑戦した民族は存在しませんでした。

そうかといって我々は、アジア解放を恩着せがましく、アジアの国々に対して口外すべきものでは断じてありません。二百数十万の英霊も、それは望まれぬところでありましょう。むしろ力足らず、独立を約束しながら彼らの期待にこたえることができず、中途にして挫折したことは、我々日本人として申し訳ないことであります。そして、アジア・アフリカの国々が、日本敗戦の後、自立意志を奮い起こして、敢然として独立をたたかいとったことに、祝意と尊敬の念を払うべきであります。

ただ我々としては、心中深く、「敗れはしたけれど、けっして無駄な戦争ではなかった」という誇りを秘めておきたいと思うのです。最後に、ある戦争未亡人の和歌を紹介してまとめとしたいと思います。

うつそみを散らしアジアに魂を甦らしつ天さかる君

亡きご主人が現身（うつそみ）を捧げ、その魂は独立したアジアの人々の心に甦りつつあることを実感した一首

であります。

五、日本軍政のもたらしたもの——独立義勇軍の教育訓練

ここまで読まれた読者の中には、あまりにも調子がよすぎると反発する方があるかもしれません。その方はぜひ本書第四部の「三、アジアは反日か親日か」を読んでください。また「日本がアジアを解放したといっても、事実は逆で、最後は日本に抵抗することによって独立したのではないか」と反論されるかもしれません。その課題に答えるのが「第三部、アジアに生きる遺産」であります。

そもそも欧米の植民地政策に見られない日本軍政の特徴は、現地人に独立心をかきたて、猛訓練によって軍隊を編成したことでした。それによって、これまで「猫」のようにおとなしかった民族が、「虎」に変身したのです。そこには「兵補」として日本軍の補強に役立てたいという目的もあったでしょうが、それだけでは強固な軍隊は育ちません。日本軍の教官たちは、彼らと一身同体になって、独立意志を奮い起した意義は否定できないのです。

このことは、イギリスのルイス・アレンの『日本軍が銃をおいた日』、アメリカのジョイス・C・レブラ女史の『東南アジアの解放と日本の遺産』、同じくジョージ・S・カナヘレ氏の『日本軍政とインドネシア独立』等に詳細具体的に述べております。

先日も、ジャワ派遣軍の作戦参謀であった宮元静雄氏が、しみじみもらしていました。

〈我々のやったことを、日本人は否定することしか知らない。インドネシア人の中にもわかる人は

少なくなっている。しかし、当時の好敵手であったイギリスのマウントバッテン卿が『東南アジア連合軍の終戦処理』（宮元訳）の中で、そしてまたウッド・バーン・カーン少将の『対日戦争史』第5巻の中で（274頁参照）、日本軍政を評価してくれている。さすが彼らの眼力は鋭い。私はそのことを知って安心して死ねる。〉

と。いずれにしても「第三部・アジアに生きる遺産」の中では、次に要約した日本軍政の業績に注目してほしいのです。

①インドネシアのペタと義勇軍——原田熊吉ジャワ派遣軍司令官（中将・戦後シンガポールで刑死）の指示で、インドネシア軍創設の教育を開始。最初タンゲラン青年道場からはじめ、ボゴールの錬成隊（PETA・祖国防衛義勇軍）に発展。養成した精鋭は三万八千人に達した。

教官の中には、丸崎義男少佐（参謀部別班）を筆頭に、現スハルト大統領を教育した土屋競大尉、さらに柳川宗成大尉、山崎一大尉等、教官の数は相当数にのぼる。さらにスマトラ地区では部隊ごとに義勇軍を育成した。そのほかバンドンでは、姉歯準平市長の発起で行政官養成教育が行われた（後年のナチール首相等を輩出）。この大規模教育が独立への原動力となった。

日本が敗戦すると、連合軍から独立運動を支援したり、武器を渡すことを禁じられた。独立戦争のために武器のほしいインドネシア軍と、渡せない日本軍との間にトラブルが起こった。しかし、巧妙な方法で武器を渡し、さらに、千名を超える日本軍人は帰国をやめて独立戦争に参加し、インドネシア国軍と共に戦い、多くの人々が戦死した。

②ビルマにおける三十人志士の養成――南機関長の鈴木敬司大佐（後少将となる）は、開戦前からビルマの優秀な青年を日本に招き、三十人志士を海南島に集めて猛訓練をした。その中心人物はオン・サン（現在、建国の偉人としてオン・サン廟に祀られている）であり、前大統領のネ・ウィンもその中の一人であった。開戦時「鈴木雷帝」を先頭に三十人志士が進撃すると、見る見るビルマ国軍はふくれあがった。

しかし、日本の敗戦が決定的になると、オン・サンは敗ける日本と心中するわけにゆかなかった。ビルマ独立を達成するために、心ならずも日本軍を攻撃した。アクロバットのような彼の出所進退であった。英国との交渉に成功してビルマは独立できたが、共産党と結んでいることに反対するウ・ソー派によって暗殺された。ウ・ヌー大統領は昭和五十六年、南機関員の七人（その中の一人は故鈴木少将夫人）に、最高栄誉章である「オン・サンの旗」を授与した（303頁参照）。

③インド国民軍の編成とインパール進撃――藤原岩市少佐参謀はわずか十数名でＦ機関を作り、マレー作戦で投降した英・印軍に、「インド独立」を働きかけた。誠意を尽くした藤原機関長の呼びかけに、たちまち五万人を超える「インド国民軍（ＩＮＡ）」が編成された。

当時、ドイツで不屈の独立運動を続けていたチャンドラ・ボースを招き、ボースを指導者とするＩＮＡが誕生した。ＩＮＡは日本軍とともにインパールめざして進撃し、それが戦後インド独立に繋がってゆくのである。

【名越二荒之助】

第三部　アジアに生きる遺産

一　フィリピン――日本軍政と民族意識の回復

反日・親日を超えて民族主義の系譜を説くニック・ホアキン氏

大局観に立ったラウレル元大使

東南アジアの中で、一般にフィリピンがもっとも反日感情が強いといわれてきました。しかし、果たして簡単にそう断定できるでしょうか。

昭和六十一年三月に（中島慎三郎氏や玉井顕治氏と）フィリピンを旅行した時、ホセ・ラウレル元駐日大使（戦争中のフィリピン大統領ホセ・P・ラウレル氏の次男）の法律事務所を訪ねました。元大使は日本の陸軍士官学校を卒業した人で、日本語も流暢です。私は早速、フィリピンの反日感情について質問しました。大らかな人柄の元大使は、悠揚迫らざる態度で次のように答えました。

〈日本は等質の国ですからね、反日とか親日とかで割り切れるかも知れませんが、フィリピンは島

の数でも七百からあって、いちがいに断定できませんよ。フィリピンには反米の人もいるし、親日派もいる。それに民族独立派もおります。また宗教や人種、都市と農村、それに貧富の差もあって、世論調査といってもあまり当てになりません。私は総体的にみて、フィリピンの親日感情は強いと見ています。新聞論調やマニラ市内で判断するのでなく、田舎をまわってみられたらそれがよくわかりますよ。〉

確かにフィリピンでは、田舎のすみずみまで日本車や電気器具が出まわっています。フィリピン人はもともと明るい性質だし、日本人と見れば親しく寄ってきます。大使の言うように、反日感情などは、感ぜられません。しかし、元大使の父は日本軍政下（第二共和制）の大統領だったし、弟は当時、アキノ政権下の副大統領です。元大使は、我々を日本人と見て〝遠慮がちに述べているのではないか〟そう思ってさらに聞いてみました。

〈しかしフィリピンの人々には、戦争中の悪い思い出が抜けないいんではありませんか。「ケンペイタイ」といえば、怖いものの代名詞のように使われているそうですが——。〉

〈「ケンペイタイ」もだんだん風化してきました。若い人々にはピンとこなくなりました。戦争については、フィリピン人より日本人の方がむしろ神経過敏ですよ。植民地化されたことのない日本人には理解できないかも知れませんが、フィリピンは過去三百余年にわたってスペインの植民地になり、続いて五十年近くアメリカの植民地が続きました。日本の軍政といっても、わずか四年足らずです。過去を掘り起こしだしたら、スペインやアメリカの弾圧や虐殺、欺瞞はもっと巧妙で悪質

でした〉

スペインとアメリカの植民地政策

元大使は大人の風格を持った政治家ですから、スペインやアメリカの植民地政策の具体例には触れませんでした。しかし氏の言うように、彼らの不当・暴虐ぶりを挙げだしたら、それこそ際限がありますまい。

世界一周を試みたマゼランがセブ島に上陸して、現地の酋長ラプラプ王に謀殺されたのが一五二一年。やがてスペインのフィリップ二世がフィリピン征服を決意し、レガスピがセブ島を支配したのが

ラウレル大統領の肖像画
マニラのマラカニアン宮殿には，初代アギナルド大統領以来の歴代大統領の肖像画が飾られている。これはラウレル大統領の等身大肖像画である。この絵は現在フィリピンで売られている。日本軍政下に大統領となったラウレルは復権を遂げているのである。

ラウレル元駐日大使
「日本とフィリピンの友好感情は変わらない。私の父であるラウレル大統領も，私の尊敬するリカルテ将軍も，今は復権している」とおおらかに語った（氏の経営する弁護士事務所にて）

ンはすっかりスペイン化されてゆきました。

だいいち「フィリピン」という国名そのものが、前掲のスペイン皇帝・フィリップ二世の名をとったものです。建国の偉人ホセ・リサールも、政治家のラウレルも、（イスラム教徒のモロ族を除いては）住民の百パーセントがスペイン系の名前に「創氏改名」しております。現地に乗り込んだスペイン人たちは、次々と現地妻を作って混血児を産ませ、彼らを特権階級に仕立ててフィリピン統治をやらせました。スペイン語が上流階級の言葉になり、民族信仰を排除してカトリックに改宗させました。しかしその間、宗教弾圧に抗議し、あるいは重税や強制労働に反対して各地で反乱を起こしました。しかしそれらは散発的であり、全国規模に盛り挙がらず、いずれも弾圧されてしまいました。

スペインに代ってフィリピンを支配したのがアメリカでした。アメリカは米西戦争を起こした時、エミリオ・アギナルドをはじめとする独立運動家たちに、「独立」をエサに協力させました。しかしアメリカは戦争に勝つと、たちまち約束をホゴにしてしまいました。志士たちが独立を求めて対米戦争を開始すると、徹底して弾圧してしまいました。

かくしてアメリカは、フィリピンの植民地化に乗りだしました。スペインの影響を排除して英語を公用語にし、アメリカへの同化政策を巧妙に進めました。四十数年かかってゆっくり取り組んだアメリカの植民地政策は成功したというべきでしょうか。そもそも植民地化が成功すれば、それだけ独自の民族文化は失せてゆきます。そのことを憂えて、フィリピンはアジアに還るべきであり、本来の姿

アギナルド将軍と黄金造りの日本刀

「皇太子殿下ご夫妻は（注―今上・皇后両陛下）は訪比二日目の六日（註―昭和37年11月）昼、キャビテ州カワイトー村で「比国独立運動の父」アギナルド将軍（註―第1代フィリピン共和国大統領、一八六九～一九六四）にお会いになった。

将軍はフィリピンの独立をはかって明治二十九年から六年間、当時の米軍に捕らわれるまで反乱軍を指揮、スペインや米国と戦ってきた。そのとき、日本に援助を求めたことから、将軍と日本の関係が結ばれた。ご夫妻がたずねられると、九十三歳の老将軍は、足が不自由のため手押車につかまってやっと立上がり、ご夫妻と握手。ほとんど目の見えない将軍は、皇太子殿下の「将軍に会えてうれしい」とのおことばに「日本の国はありがたい国だ。ご夫妻にぜひお会いしたかった。この機会がくるのを待っていた。わたしが反乱を起こしたとき、反乱軍が弱く心細かった。そのとき日本の天皇からという日本刀が届いて、元気づけられ、独立のため戦い続けることができた」と答えた。

また将軍は「そのときの天皇はだれでしたか」と質問、殿下は「それは曽祖父に当る明治天皇です」とお答えになるなど、なごやかに約三十分歓談され、皇太子殿下からは将軍に天皇陛下のお写真とご夫妻の写真を贈られた。」

（昭和37年11月7日付「東京新聞」朝刊）

(注)この日本刀は黄金造りの立派なもので、布引丸の先発隊として現地に先着した平山周が決死敵中を突破して将軍に届けた。但し実際の贈り主は犬養毅であった。【鈴木】

をとり戻すべきだ、と主張する人々も多かったのです。

対日協力者は傀儡(かいらい)か

現在、フィリピンでは大東亜戦争に対して否定的な見解もあるようですが、戦争を契機として民族意識が強められたことは確かです。そのことをニック・ホアキン氏は、その著『アキノ家三代――フィリピン民族主義の系譜（上・下巻）』の中で指摘しています。引用したいところはあまりにも多いのですが、一、二紹介してみましょう。

〈ラウレルやアキノのような人物は、勝ち目がないと知っても、民族主義者の伝統に基づく〝いくつかの目標を達成〟しようと努力した。これに対し、日本人と戦ったものは、必ずしも自由のために戦ったとは言えない。（日本への）抵抗は主として植民地の地位に復帰するための努力であり、〝解放〟のための戦争ではなかった。〉

日本の軍政下に大統領となったラウレル博士や、ベニグノ・S・アキノ国会議長等は、日本に勝目がないと知っていても、民族主義の伝統に基づいて、いくつかの目標を達成しようと努力した。それに対して抗日闘争をやった人々は、独立を求めて戦ったのではなく、アメリカの植民地復帰をめざした、というのです。ホアキン氏は、フィリピンの抗日闘争の本質をさらに厳しく衝いております。

〈彼らの（抗日）レジスタンスの根本には優越意識があった。（フィリピン人にとって）アメリカの植民地であることは威信を意味した。だが日本の場合は恥辱であった。日本人のような安っぽいアジ

ア人に〝解放〟されるなんて、何と恥ずべきことであるか。それに反してアメリカから独立を〝与えられる〟ことは高級な歴史であった――そして、そのうえ、感謝のきずながあるため、独立後も関係を断絶しないで、継続することを希望した。戦争勃発時のマニラの一般的な反応は「ふん、独立の話なんて、もうやめた！」というものだった。そして占領中、フィリピン人が待ちこがれたのは〝自由〟ではなく、アメリカ人の復帰であり、ピードモントたばこであり、ベーブルース・キャンディーであり、そして戦争が損ねた原状が回復されることであった。〉

日本敗戦後、一般のフィリピン人は、アメリカの味方をした者を「独立を守った正義の士」と見、日本に協力した者は民族の裏切者、即ち犯罪者としてモンテンルパの刑務所に繋がれました。ホアンキ氏は、フィリピン人が日本に協力することは恥辱と感じ、アメリカに協力することには優越感を覚える便乗性を指摘しているのです。

考えてみれば、このような便乗性はフィリピンだけではないようです。日本でも戦後は、戦争に協力したことを恥辱と感じ、誰もが戦争には反対であったような顔をしはじめました。

戦前から戦中にかけては、ヒトラー・ドイツに草木もなびく状態でしたが、敗戦後は掌を返すようにアメリカ一辺倒になりました。

また、戦争中は日本に協力したアジアの指導者や独立国を、友邦として讃えていました。しかし終戦後は、彼ら指導者に「日本帝国主義の傀儡（かいらい）」というレッテルを貼るようになりました。「満洲国」や汪兆銘やラウレルを日本の「傀儡」というなら、「モンゴル人民共和国」や毛沢東はソ連の傀儡で

あり、蔣介石は米・英の傀儡であり、日本進撃とともにアメリカに亡命したフィリピンのケソン大統領は、アメリカの傀儡だったのではありませんか。

ホアキン氏の指摘は、フィリピンの自立を訴え、自らの姿をとり戻すことを強調しているのです。この見方からすれば、日本も日本自身を確立しなければならないのではありませんか。

このように、大局観に立ってフィリピンの民族主義の伝統を追求したホアキン氏は、日本のフィリピン統治がもたらした肯定面として次の点を挙げています（前掲書、一二三七頁）。

① 日本の政策が動機となって、タガログ語が公用語になった。
② フィリピン本来の姿を求める民族主義的傾向が、戦後になって復活強化された。
③「ヤンキー・ゴー・ホーム、アジアに還れ」というメッセージが、社会運動やゲリラ活動となって戦後も広がるようになった。

【名越二荒之助】

日比同盟論を貫いたピオ・デュラン博士

リカルテ将軍とラモス党首

東南アジアの中で、フィリピンは日本にもっとも近い国です。この国と日本は歴史的にも古くから

関係がありました。

安土桃山時代のキリシタン大名・高山右近（一五五三？〜一六一五）が、本能寺の変後、信仰を守ってマニラに移住（一六一四年）したのは有名です。現在、マニラの日本人町跡地には彼の銅像が建っています。さらに現在、千葉県の銚子市賢徳寺には「日比三偉人の碑」があり、高山右近、キリノ大統領、リカルテ将軍の三人の碑が建立されています。

一時、日本では長期にわたる鎖国が続き、日比間の交流はとだえていましたが、現在、フィリピン独立の父と仰がれているホセ・リサールは明治二十一年（一八八八年）に来日しています。彼の来日を記念した碑は日比谷公園内にあります。

彼が帰国してアンドレス・ボニファシオが民族独立を求めて「カティプナン党」を創立し、その

日比三偉人の碑

マニラと姉妹都市の千葉県銚子市にこの碑がある（賢徳寺）。三偉人とは，独立の雄リカルテ将軍，独立直後から６年間大統領だったキリノ，そしてキリシタン大名としてマニラで病死した高山右近大夫長房である。

リカルテ将軍の孫
ビスルミノ・ロメロ少年のこと

アルテミオ・リカルテ将軍には、横浜・山下町に住んでいる時、最愛の孫がいた。孫の日本名を「南彦一郎」とつけ、フィリピン名は「ビスルミノ・ロメロ」だった。

将軍はそもそも「フィリピン」という国名が嫌いだった。スペインのフィリップ二世の名を国名にしたからである。

そこで孫には、フィリピン群島の三つの主要な島のシラブルを縮め「ビスルミノ」と命名したのである。「ビス」は、セブ・レイテ、サマル、パラワン、ネグロスを含んだヴィサヤ諸島を意味し、「ル」は最大の島であるルソン、そして「ミノ」は二番目に大きいミンダナオ島である。

さらに将軍は、孫たちには国名を「フィリピン」ではなく「ビスルミノ」あるいはLuviminda（ルソン＋ヴィサヤ＋ミンダナオ）と呼ぶよう指導していた。

現在のフィリピンでも、国名改正の主張はあるのである。

ビスルミノ少年は横浜市内の山下小学校に通っていたので、日本語はもちろんタガログ語にも長じていた。日本敗戦後にマニラの軍事法廷で山下奉文大将を裁く、いわゆる「山下裁判」が開かれた。その時、ビスルミノ少年は証人として法廷に立った。彼は法廷で山下・リカルテ両将軍のため、堂々として明解な証言を行い、裁判長を唖然たらしめた。

その後、両親の住むセブ島に住み、今も健在と聞く。（太田兼四郎著『鬼哭』より）　**【名越】**

後、明治の先輩たちがその独立運動を支援してゆきます。一八九八年（明治31年）アメリカがスペインに対して「米西(べいせい)戦争」を起こすと、アギナルド（後に大統領）やリカルテ将軍に独立を約束して、スペインと戦わせます。アメリカは「米西戦争」に勝利しても、フィリピンに独立を与えません。フィリピンの志士たちは独立を求めて今度はアメリカと戦い（米比戦争）、遂に敗れてアギナルドはアメリカの軍門にくだりましたが、リカルテは節をまげず獄にくだりました。

日露戦争で日本が勝利すると、フィリピンでも日本への期待感が盛りあがりました。「星条旗のもとに我生きず」と誓ったリカルテは、大正四年（一九一五年）脱獄して日本に亡命しました。やがて日本名「南彦介」（後藤新平が命名）を名乗って、横浜の山下町に住んでいました。滞日二十六年の

日本亡命中のリカルテ将軍一家と在日フィリピン人，中央×印が将軍，その左が孫ビスルミノ・ロメロ少年，△印がアゲダ夫人（1935年，将軍69歳）

リカルテ将軍は滞日26年後に帰国，独立運動の象徴的存在として活動した。1943年（昭和18年）77歳の老軀を駈って民衆に獅子吼する将軍。

間、インドのビハリ・ボース、犬養毅（いぬかいつよき）、頭山満（とうやまみつる）、内田良平（うちだりようへい）、宮崎滔天（みやざきとうてん）等の支援を受け交友を深めました。一方では海外植民学校でスペイン語を教え、フィリピン独立運動の象徴的存在になりました。

フィリピンではその後も、独立を求めて反乱や暴動が散発的ながら続いていました。中でも一九三一年、ベニグノ・ラモスによって組織されたサクダリスタ党という秘密結社は注目すべきものがありました。結成二年後には党員十万に達し、「フィリピンの即時・完全独立」を掲げて総選挙（一九三三年）に打って出ました。その頃アメリカは、十年後に条件付独立を許容していたのですが、そのインチキ性を、選挙を通じて糾弾した訳です。サクダリスタ党はその選挙で、下院議員五名、州知事二名を獲得しました。

『比律賓（ヒリツピン）独立と東亜問題』にこめられたアジアとフィリピン回帰への悲願

その頃、サクダリスタ党の理論的指導者にピオ・デュラン博士（Pio Duran 元フィリピン大学商法教授）がいました。彼はフィリピンにおける親日三巨頭（前掲のリカルテ、ラモスとともに）の一人で、これまでアメリカの強権に対して勇ましく戦ってきました。

彼には二人の子供がありましたが、日露戦争の陸海軍の勇将にあやかって、長男はトーゴー・ヘイハチロー、次男はクロキタメモト・デュランと命名したほどでした。一九三五年（昭和10年）十二月には、『比律賓独立と東亜問題（PHILIPPINE INDEPENDENCE and the FAREASTERN QUESTION）』と題する本を書きました。彼はこの本で、フィリピンは米国の隷属を脱して、同じ東洋の日本と提携

すべきだと説きました。しかし、米当局によってたちまち発売禁止の処分を受け、フィリピン大学教授の職を解任させられてしまいました。彼はそれでも屈することなく、国会議員の選挙に立候補し、「日本、フィリピン同盟論」を主張しましたが、米国官憲の圧迫を受けて落選しました。

その間、彼はラモスとともに何回か来日し、東京の「大亜細亜協会」でも講演しました。田中正明氏によれば、「私は何回か会っている。ラモスは大柄だが、デュラン博士は中肉中背で、明るく知的な風采をしていた。特に松井石根大将の崇拝者だった」ということです。

彼は戦争中どのような生き方をしたのか、生証人をたどって聞いてみましたが、リカルテ将軍に協力したこと以外に紹介できるような事実にはぶち当たりませんでした。ここでは、フィリピンで発売

日比同盟論を提唱したピオ・デュラン博士（右）は，日本の武士道精神に共鳴し，たびたび日本を訪れていた。

禁止になり、昭和十七年六月に日本のダイヤモンド社から翻訳出版された前掲の『比律賓独立と東亜問題』（野本静一訳、二九〇頁）を紹介したいと思います。

この本は今から読むと驚くべき内容です。日露戦争から満洲事変に至る日本の正当性と信頼性を、欧・米・ソの侵略ぶりと対比して熱烈に説いております。そして、三百五十年にわたるスペイン、アメリカの植民地政策によって、フィリピンの伝統文化がいかに破壊されているかを訴え、本来の姿をとり戻すために〝アジアに回帰せよ〟と主張しているのです。

彼の著書はほぼ同じ時期に、同一の原著をもとに『中立への笑劇――フィリピンと東亜』（金森三郎訳、堀真琴校閲、白揚社）が出されています。この訳書の題名を「中立の笑劇」としたのは、「アメリカがフィリピンに中立を約束しているが、経済はアメリカに握られてしまい、米軍の駐留も認めるような形での独立は笑劇に過ぎない」という主題に基づいたものです。

それではデュラン博士は、この本で全体的に何を訴えているのか。判りやすく、四つの項目に分けて要約しますので、ぜひ読んでください。大東亜戦争開始前の日本への期待感がひしひしと伝わってきます。

一、東亜四独立国（日・支・満・泰）への期待

孫文の「大亜細亜主義」を規範として西洋文明を引継ぎ、東洋文化の栄光を再生せよ。

〈将来に於ける比律賓共和国の領土保全を護る為に日本・比律賓同盟を締結し、（アメリカとの間の）

中立条約の締結はこれを拒絶するとすれば、その結果必ず東亜諸国民間の関係及び交渉の密接化を助長することとなるであらう。東亜に於ける四独立国たる日本、支那、満洲、泰国間に汎亜細亜連合が組織され、以て今や亜細亜諸国間の種族、文化、習慣、伝統の縁を強化する協同及び相互活動を齎(もたら)す機能を果たしてゐる。

最も傑出せる汎東洋主義の提唱者は恐らく故孫逸仙なるべき処、彼は神戸に於て為したる演説に於て如何に亜細亜諸国民が白人種により抑圧されたかを述べて次の如くいってゐる。

「被抑圧亜細亜諸国民が如何にして歐羅巴の力に抗し得るかといふ問題を解決する為には、汎亜細亜主義を研究しなければならぬ。軍国主義的国家は自国民と同様に、他国国民を抑圧するものである。吾が汎亜細亜主義は『王道』に基いて不正を克服せんことを目的とする。諸国家の大衆を同様に解放せんことを企図し、軍国主義に反対する。諸兄日本人は既に『王道』なる諸兄特有の東洋文明に加ふるに西洋軍国主義的文明を採用せられた。諸兄は今や西洋軍国主義の番犬となるか、又は『王道』に基く東洋的生活方法の砦となるか、二者択一の地位に在り。」

東洋を訪れる旅行者は、雪に覆はれた日本の山の斜面にせよ、ゴビ砂漠の焦がすやうな砂にせよ、印度ヒマラヤ山の目の眩むるやうな高い所に於ても、又東印度の颶風に暴された海岸等、あらゆる所に於て東洋文化の形跡を見る。しかしながら、一度旅行者が比律賓に達するや、東洋に於ては不似合な、さればとて西洋の背景をなすにも適当でない混ぜものの東洋的なものを見る。この歎ずべき状態は本質的にまた著しく、東洋的なものの上に西洋文明を強制的に重ねたことに基くが、

その非難は住民大衆に対して、為さるべきではなく、寧ろ東洋民族の一部を無気力にせんとして統治し、西洋諸国と自己を同列に置かんとした東洋民族の一部と無気力にせんとして統治し、西洋諸国と自己を同列に置かんとした東洋主義の背教者に対して為されるべきである。

今や比律賓は、幾世紀かの絶えざる闘争の後、喪はれたる自由を再び獲得せんとし居れるを以て「東洋に還れ」の運動を発足するは、すべての比律賓の義務である。幾世紀かの如何とも為し難い服従の間に強制的に押付けられた、厚く塗られた西洋文明の上塗りは、これを引剝いで、現在及び将来永遠に東洋諸国住民の生命の中に、根本的影響を残す古き東洋文化の栄光を明るみに出さねばならぬ。〉

二、日本を中心としたアジア・モンロー主義

テオドア・ルーズベルト大統領（第26代・一九〇一年～一九〇九年）は、日本・モンロー主義の範囲を、全アジア大陸から東はスエズ運河、西はカムチャッカまで認めている。

〈国際連盟規約第二十一条によれば、

「本規約は仲裁裁判条約の如き約定、又はモンロー主義の如き一定の地域に関する了解にして平和の確保を目的とするものの効力に何等影響なきものとす」

と規定されている。

しかしながら、亜細亜を亜細亜人の手に保持し、これ以上の西洋人の干渉を排除せんとするの政

策は東洋に於て旨く行はれるであらうか。多くの著名な人々がこの考へを称讃し有名な仏蘭西新聞ル・フィガロの最近の社説には次の見解が表明せられた。

「吾々は東亜の紛争に引入れられてはならない。若しこれに参加しても、その結果は無駄である。若しも国際聯盟が日支間の問題に手を着けなかつたならば、事態はもつと異なつて、日本は聯盟を脱退しなかつたであらう。吾々はこの経験の値打を無駄にしてはならない。」

「亜細亜の問題と欧羅巴の問題は同じ方法で処理してはならない。亜細亜のことを最もよく知つてゐるのは、亜細亜人なるを以て、亜細亜人の問題は亜細亜人間の交渉によつて解決するに任せ、これには介入せざるの方針を採るのが、賢明なる方法であることを知るべきである。」

右は欧羅巴(ヨーロッパ)諸国民が国際聯盟を通じて、また米国が武器工場及び金力政治家を通じて、支那の国内政治に不当に干渉し、武器を売込むことによつて支那軍閥間の武力闘争を不当に助長し、以て支那の平和的住民の生命を危険に陥れるのみならず、東洋の平和をも脅かすに至るを防止する必要より、最近日本政府が表明したる「支那から手を引け」といふ政策の根本的理由を表明したものに過ぎない。

故テオドア・ルーズヴェルト大統領は東亜にモンロー主義を設けることに賛意を表した。金子堅太郎子爵は、コンテムポラリー・ジャパンに於て公にせられた「日本モンロー主義と満洲」なる題目の論文に於て、一九〇五年日露戦争後にポーツマス平和会議が開かれた際、如何にテオドア・ルーズヴェルト氏が日本モンロー主義の宣言を提唱したかについて述べてゐるが、その論文の適当な

る部分は次の通りである。

「日本は西洋文明の原理及び方法を理解せる亜細亜に於ける唯一の国家である。しかし日本は西洋文明を同化し得るも、なほ自己伝来のものを破らないことを示した。すべての亜細亜国民は現代に適合するやう、自己を調整する必要に迫られてゐる。米国がその昔米大陸の指導者たる地位をとり、またモンロー主義によつて羅典亜米利加（ラテンアメリカ）諸国が、その独立を完成する間、欧羅巴諸国からの干渉を妨げたと同じやうに、日本は亜細亜諸国の現代への適合過程に於て、自然の指導者たるべく、その過渡期に於ける保護者たるべし。」

「若し、モンロー大統領がその名を冠する主義を宣言しなかつたならば、南米独立諸共和国の成長は同大陸以外の諸強国によつて妨げられたであらう。日本の亜細亜諸国に対する政策は、将来米大陸近隣諸国に於ける米国政策と類似のものたるべし。亜細亜に於ける日本モンロー主義は、欧羅巴の侵略に対する誘惑を取去るべく、日本は亜細亜諸国の指導者として認められ、その威力はその背後に於て国家的組織を再組織し得る楯となるであらう。」

「この『日本モンロー主義』は何処までを含むものなりやを訊ねた時、その範囲は印度、安南、比律賓、香港その他の欧米植民地を除く全亜細亜大陸、即ち東はスエズ運河よりカムチャッカの西までを含むべきであると答へた。同時に日本は、支那に於ける米国の『門戸開放と機会均等』主義を守るであらう。」

「若し日本がポーツマス条約締結後、右のやうな亜細亜モンロー主義を宣言するならば、私は

私の大統領任期中に於ても、又その終了後に於ても全力を以て日本を援助するであらう。」と続けて語った。〉

三、日本の正当性とそれへの期待

日本が対等の海軍比率を要求するのも、そして満洲事変も、国際聯盟脱退も、東洋の平和を維持せんとする責任感から出たものである。満洲国建設も欧米諸国のような領土獲得ではなく、独立を認めたものである。

〈故ルーズヴェルト大統領の提案は、東洋に於ける平和維持を保証し、同地弱小国が外国より干渉されるのを保護するとしても、何国の指導の下にこの提案は実現されるであらうか。それは日本だ、といふのが唯一の本問題に対する解答である。日本人以外は未だ何れの国民も示したことのない愛国的熱情に支持された、日本の今日の陸海軍の剛勇は、東洋人をその膝下に震へしめてゐる。

日本は東洋に対する亜細亜モンロー主義の如き実行可能の方法により、亜細亜諸国民を日本の指導下に統合せんとする希望を有してゐる証拠を一再ならず示した。日本が国際聯盟から脱退したのは、東洋の二重要国間の関係に西洋諸国が干渉せんとする企図への烈しい反抗に基くものである。日本が対等の海軍比率を要求するのは、東亜水域に侵入の懼ある敵国を却ける(しりぞ)に足る強力なる海軍力を保有せんとの希望に基く。又その同盟国満洲が、北満鉄道を獲んとした際に示した関心の程は、露西亜、満洲、日本間の目に見えざる軋轢(あつれき)の原因の一つを除去しようとする正しい主張を現す

ものである。日本は独立比律賓の領土及び行政上の保全を保証せんと欲し、その用意を有してゐるが、これは東洋を西洋の支配から次第に開放せんとするすべての東洋諸国民の希望と一致するものである。日本は、東洋諸国民に最も望ましいと思考する方法によつて、東洋の平和を維持せんと欲するものであるが、その為に已むを得なければ英国及び米国と一戦を交ふることも敢て辞せざるものなり、との意を在華(ワシントン)府日本帝国大使斎藤博氏が述べたことは、日本帝国の東洋に於ける平和維持の責任者たらんとするの決心を示す明確なる証拠である。(中略)

満洲国の場合は、日本帝国はこの上新しき領土を無闇に欲しがるものではないことを証明する最近の例である。一九三一年九月十八日の事変の結果、満洲を併合することは日本にとり容易に為し得ることであり、また欧州に於ける混乱した事態を考ふれば、世界の何れの国と雖も日本の満洲併合を妨げることは出来なかつたであらう。それにも拘らず、日本は西洋諸国の先例に倣ふことをせず、満洲の一吋をすら併合することを欲せずして、三千万満人の独立に対する希望を認めてやつた。西洋諸国は、この一九三一年九月十八日の事件が生じた原因よりも遙かに小なる原因を以て、極東領土を獲得したのだ。二人の宣教師の虐殺によつて独逸は膠州を奪ひ、ジャンク船の沈没によつて米国は比律賓を得、支那人が英国阿片の購入を拒んだ廉(かど)で、英国は香港を得た。また何等の理由無きにも拘らず、露西亜は支那をして遼東半島の租借権を与へしめた。この他に文明国の歴史に於て西洋人が過去に於ける領土獲得の主人であり、その犠牲者は東亜の国家及び国民であつたことを示すためには、他の無数の例を引用することが出来る。今や日本は多くの点に於て白人に勝つて

いることを示したので、白人は東洋に於ける真の脅威は日本であると、他の東洋諸国をして信ぜしめんとするであらう。東亜を分裂せしめることによつて、日本の力を弱くするために日本の経済力及び軍事力に対する白人の恐怖を東洋人に注入せんとするであらう。東洋を（その意志に反して）分裂せしめんがためになされたる陰険な宣伝によつて欺かれるやうなことが有つてはならない。〉

四、フィリピンは東洋と自国の伝統に回帰せよ

三百五十年にわたってスペイン・アメリカの支配下におかれたフィリピンは、本来の姿を失った。アジア諸国との共存によって民族の誇りはとり戻せる。

〈なほ他に比律賓がこの地に於けるモンロー主義に賛意を表すべき他の隠れた理由が存在する。それは、地理的、文化的に見ても東亜の諸国民が一体となつたがいいのである。比律賓に於ける文明は、日本に於ける文明と同様に孔子や老子のやうな聖人の教及び仏教の原理に基いてゐた。西班牙人来島以前に於ては、比律賓は仏教徒並に支那人の連合勢力によつて、建設されたる大帝国の一部を構成していた。ジャバのカドー地方に於けるボロ・ブヅール及びアンコール・バットに於て十二世紀初葉スルヤバルマン二世によつて建てられた、素晴しき霊廟は、今日に於ても幾百万の馬来人が、西洋諸国に対する闘争の最も暗黒な時代に於ても、自らを励ますために仰ぎ見る希望の信号火として立つてゐる。その均斉のとれた美、素晴らしい壮大さは、西洋の最も活発にして肥沃な芸術的想像によつてもまだその概念に於て、又実際に於て匹敵するものがなかつた。人間文明の最も

動揺したる三千年に亙つて、壮大さと素晴しさとが維持されたことは、馬来人の事業と文化の継続的性質を現すものである。かかる背景を考へれば、比律賓文明の基礎が三百五十年間の西洋支配の影響によつて、完全に蝕まれたとは思はれない。

地理的には比律賓は、周囲の数々の異なつた東洋勢力を巻込むべき渦を為してゐる。支那及び印度の世界総人口の約半分を容れる亜細亜本土を別とすれば、比律賓は北は北海道から濠州の北岸スマトラまで拡がる亜細亜大陸の海岸を囲む一連の島嶼の一部を為してゐる。比律賓人が好むと、好まざるとに拘らず、その国の生命は、東亜の諸国と固く結びつくことを自然は命じた。（中略）比律賓人よ。今や国家の独立的生活の発展に於て重要な役割を果すべきものは、一万哩以上も距つた地球の他の側から来る亜米利加及び欧羅巴の勢力ではなく、また比島将来の国策形成上究極に於て決定的要素たるべきものは、東洋の近隣諸国の行動であり、それとの接触であることを確信すべきの時である。

他の東洋諸国と比律賓とが、地理的に接近してゐることは如何に懐疑的な人をも、その国民生活は如何ともし難い程、東洋諸国と結びついて居り、太平洋に於ける諸紛争に於ては、東洋諸国と共に浮き沈みするものであることを、確信せしめるに至るであらう。東洋モンロー主義を創るために、東洋諸国と互ひに手を握るべき時機は既に熟してゐる。この協力の必要なるは、文化的地理的に考慮すれば明瞭なことではあるが、右は我が国家の安全上絶対に必要とするものであり、また種族的衿りがこれを要求するのである。しかるに、若しさうせずして他の方法を以てするとせば、我

が海岸は東洋の同胞からの攻撃に晒される至るのみならず、更に東洋に於ける有色人種の高き目的に叛くものなりとの非難を正当化することとなるであらう。〉

デュラン博士のその後

マカピリの顧問格であったデュラン博士は、戦後、対日協力者としてモンテンルパ刑務所に入れられました。その後、釈放されてから下院議員に当選、日本商社との共同事業でたびたび来日しています。

戦前、フィリピンに三十数年在住し、戦後も親交のあった金ケ江清太郎氏が『歩いて来た道――ヒリッピン物語』の中で、デュラン博士のその後について触れていますので、紹介します。

〈デュラン氏が、どうして大の日本びいきになり、日比同盟論まで提唱するようになったか、その詳しい動機や経緯は聞きおよんでいないが、アメリカの統治下にあった当時のヒリッピンで、堂々と日比同盟論を主張する氏の勇気と信念には、わたしも感服したものだった。

デュラン氏が学者としての立場から、あらゆる関係の文書を渉猟し、研究を重ねてゆくうちに日本の歴史と国体を知り、そして日本民族に心を惹かれ、ことに氏の魂を強くうったものが、日本古来の武士道の精神であったらしい。

ヒリッピンのように言葉も習慣も、そして文化も宗教も異なる群小の多民族が雑居している国で、国家としての歴史もまた、民族としての伝統もなく、まして植民地として永く外国の圧制下に

親日三巨頭［リカルテ、デュラン、ラモス］の運命

日本は開戦とともにフィリピンに進撃し、軍政を敷いた。日本としては、現地人の中から指導部を選択しなければならない。

当然考えられるのは、ここに紹介したリカルテ、デュラン、ラモスの親日三巨頭だが、あまりにも親日色が強すぎて親米的雰囲気の濃いフィリピンでは無理がある。

それに加えて、三人には人物的にも一長一短がある。「リカルテは頭なきも勇気あり、デュランは頭あるも勇気なし、ラモスに至っては両者ともなく、之れ三者のコンビネーション宜敷をえたる所以なり」（村田省蔵駐比大使の日記より）というように、日本の指導部は歯牙にもかけていなかった。

そのため、昭和十八年十月十四日、フィリピンの独立に当たっては、ホセ・P・ラウレル博士が大統領、ベニグノ・S・アキノが立法院議長、ホルヘ・B・ヴァルガスが駐日大使に就任する結果となった。

しかし、ラウレル政権は裏でアメリカとも繋がっているらしく、軍政の成果は挙がらず、抗日ゲリラに悩まされた。その間、ラモス等は日本軍の「傭員」となって、高い戦闘能力も発揮した。

しかし、彼らの悲願がやっと認められたのは敗戦が濃くなった昭和十九年十二月のことであった。山下奉文軍司令官は遂に「傭員」を「マカピリ」（フィリピン愛国同志会）として正式編成し、その代表者にリカルテ将軍、ラモス、デュラン博士の三人を据えた。

ところが、敗戦はいかんともし難く、ラモスは山下兵団に従ってバギオを撤退し、後退の途

中、昭和二十年五月七日以後、ヌエバ・ビスカヤ州内で死亡したものとみられている。今も日本人が遺骨収集に行った時、マカピリの一員としてラモスとともに戦った人々に出会うことがあるそうである。

またリカルテ将軍は、昭和二十年七月三十一日、副官の太田兼四郎に見守られて、マウンテン州の山中で衰弱死（78歳）した。彼の遺骨は多摩霊園の太田家の墓の中に葬られ、横浜の山下公園には、ラウレル駐日大使によって「リカルテ将軍記念碑」が建立されている。

最後の最後まで、日本を裏切らず、悲劇的最期を遂げたリカルテとラモスについては、田中正明著『アジア独立への道』に詳しいので、ここではピオ・デュラン博士を中心に語ったのである。

【名越】

リカルテ将軍記念碑

フィリピン協会により，1972年(昭和47年）7月10日，横浜市山下公園に建立された。碑文は協会会長の岸信介元首相。「アルテミオ・リカルテは1866年10月20日フィリピン共和国北イコロス州バタック町に生る。1896年祖国独立のため挙兵，1915年『平和の鐘の鳴るまで祖国の土をふまず』と日本に亡命，横浜市山下町149に寓居す。1943年生涯の夢であった祖国の独立を見しも，80歳の高齢と病気のため1945年7月31日北部ルソン山中に於て波瀾の一生を終る。リカルテは真の愛国者であり，フィリピンの国家英雄であった。茲に記念碑を建て，この地を訪れる比国人にリカルテ亡命の地を示し，併せて日比親善の一助とす。昭和46年10月20日」

苦しんできた国柄であってみれば、連綿たる歴史と伝統と文化を持った国家と国民に対して、深い憧憬を抱き、ことに明治維新後、近代国家として発展してきた隣邦・日本に、心から尊敬の念を寄せていたとしても、不思議なことではあるまい。しかも主君に仕えた武士たちの、烈々たる自己犠牲の忠誠心と、義を第一とする五常の道は、おそらくデュラン氏には驚異であったに違いない。

ともあれデュラン氏の日比同盟は、ヒリッピン人のなかにも多くの共感を呼び、ようやくナショナリズムに目覚めてきた人たちには、人気があったのである。戦時中渡航して来た日本の軍人や右翼関係の人の共鳴と支持を得て、それらの人たちと交わり、ことにアジア協会マニラ支部長望月音五郎氏などは氏を担ぎあげて、利用していたようであった。

終戦後は、対日協力者としてモンテンルパ刑務所に監禁されていたが、この人について今も忘れられない、一つの思い出がある。

それは、モンテンルパから釈放された氏が、郷里から出馬して下院議員となり、戦後間もなく二番目の新夫人を同伴、来日したことがある。その時は、まだヒリッピン大使館がなくて、ヒリッピン代表部の代表だったメレンショ氏の公邸で会ったことがある。デュラン氏はわたしの顔を見るなり、驚いた声でこう叫んだものだ。

「ミスター金ケ江、武士道の国ニッポンは、いったいどこへ消えてしまったのかね!?」

君主国日本に憧れていたジュラン氏の脳裡にあった、忠君愛国のイメージは、敗戦の虚脱のなかで混迷している日本の姿に接して、はかなくも、音をたてて崩れ去ったものらしかった。その驚き

と失望のうちに語るデュラン氏の述懐は、次のようなものであった。
同氏は、かねてから新夫人に向かって、日本ほど素晴らしい国はない、と口をきわめて礼讃し、わがことのように自慢していたという。
「日本の善良な国民は、天皇陛下をうやまうこと神のごとく、たとえば乗っている電車が、天皇のおいでになる皇居の前を通る時は、乗客はみんな起立して、皇居に向かって最敬礼するし、また日曜日には、ヒリッピン人が教会へお詣りするように、市民たちは朝早くから皇居前の二重橋という所へ行き、そこに跪(ひざま)ずいて両陛下を遙拝し、老いも若きも忠誠を誓うのだよ。こんな国民は世界広しといえども、この日本よりほかにはないんだ。なんと素晴らしい国民じゃないか」
ちょうどその日が日曜日だったので、デュラン氏は夫人を呼んで、
「お前は、三宅坂の教会に行って、ミサのお詣りをしてくるがいい。わたしは、これから二重橋へ行って、両陛下を遙拝してくるから」
そう言って一緒に宿舎を出たデュラン氏が、二重橋まで来てみると、跪いて遙拝している敬虔(けいけん)な日本人の姿は一人もなく、そのあたりを若い男女が手をつないで、楽しそうに散歩している意外な光景が眼に映り、まるで、マニラのルネタ公園にでも立っているような思いがしたデュラン氏は、思わず眉をひそめて、
「ここが日本の二重橋か……」
と、思わず口走ったというのである。

日本人であるわたしでさえも、終戦を転機に、百八十度転換した母国の激しい変貌にはすっかり戸惑ってしまったくらいだから、忠君愛国の心酔者だったデュラン氏が、愕きそして失望したのも、無理からぬことだったろう。

デュラン氏は、名状しがたい気持で宿舎に戻り、このことを夫人に話したくだりを語りながら、「ミスター金ケ江、妻に対して、こんなに面目を失墜したことなかったよ。僕の話を聞きながら笑っている妻の顔を、面目ないというのか、気まりが悪いというのか、まともには見られなかったよ」

と、こぼしたことがあった。

それでもデュラン氏の日本びいきは変わることなく、その後もたびたび来日して、日本商社となにか共同事業を計画しているようだった。（中略）新しい製品の開発に努力していたが、糖尿病が持病だったデュラン氏は、数年前に、事業の成功を見ずして他界したのである。ヒリッピンでは戦前、戦後を通じて異色の人物だった。

わたしの長男清彦が関西学院を卒業の時、卒論にとりあげたのが、このピヨ・デュラン氏の日比同盟論であったことも、わたしにとっては氏とのゆかりの一つである。

日本へも来日したことのあるファニタ夫人は、デュラン氏の亡きあと、アルバイ州の選挙区の人たちに推されて、下院議員に連続当選しているそうだが、これを見ても、デュラン氏がいかに人びとに人望があったか、想像されるのである。人間の真の価値というものは、その人の死後に決まる

ものだ、とよく言われるが、このデュラン氏などは、生前よりむしろ死後において、その価値が再認識された一人ではあるまいか……。〉　【名越二荒之助】

望月重信中尉と国柱会

捕虜教育とフィリピン国士の養成

日本軍政の特徴は、現地の青年を選抜し、徹底して教育したところにあります。中でも、宣伝班に所属していた望月重信中尉（東大文学部・支那哲学科昭和９年卒、大学院修了）は、捕虜になったフィリピン兵の教育からはじめています。

捕虜の集合教育では、アギナルド元大統領やリカルテ将軍を講師として招き、大東亜戦争の意義を説きました。捕虜教育が終ると、優秀な比島の青年を集めて「フィリピンを支える国士」の養成をはじめました。応募者二千名の中から六十三名を選び、「タガイタイ教育隊」を発足させたのでした。全寮制をとり、教官と起居をともにし、東洋的生活態度を叩き込み、日の丸掲揚、君が代斉唱、皇居遙拝まで指導したといいます。

教育の二本柱は、皇道思想の徹底と東洋精神への復帰でした。教材は望月中尉自身が作り、和英両

文の教科書〈『国柱〈Pillars of the Nation〉』『日本精神〈The Nippon Spirit〉』〉を用意し、東洋精神に基づくフィリピンの独立意識を振起しました。

タガイタイ教育隊で訓練を受けたトーマス・F・ゴメス氏（現イエローボル貨物会社社長）は、当時の望月中尉を次のように語っています。

〈私は彼の笑った顔を見たことがなかった。彼はいつもきびきびした軍隊式足どりで教室に入ってきた。講義は明確で要点をついていた。彼が八紘一宇（はっこういちう）について語る時は、狂信的とも思えるほど情熱的で、生気を帯びていた。厳格な鍛練主義者で、時間はいつも正確だった。〉

現在、船舶委員会会長をしているアブラハム・C・カンポ氏の望月中尉に対する印象――。

〈私が今まで学んだ先生の中で、望月中尉殿は最も優れた方の一人である。私の人生は先生の精神的な教えに支えられている。先生の教えた〝決断 Determination〟は、生涯の危機に当たって何度か私を救ってくれた。〉

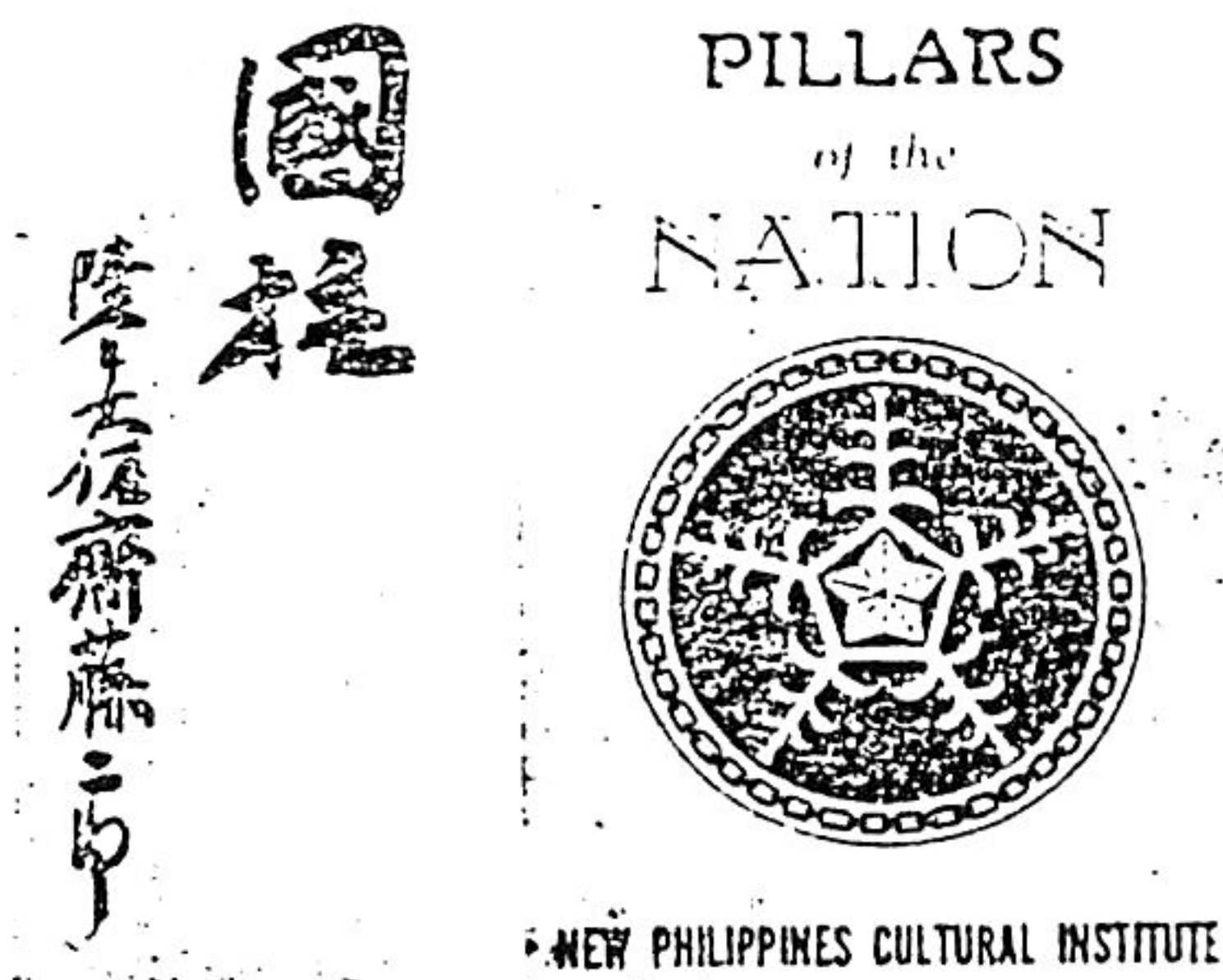
この望月中尉は、不幸にも昭和十九年五月二十二日、教育隊の近くでゲリラの手にかかって戦死しました。しかし、彼の植えた種は芽をふいたのです。

彼が戦死した六カ月後の十一月末、比島人だけの手によって「国柱会」が発足しました。発起人代表は親日三巨頭の一人ピオ・デュラン博士でしたが、実際の推進役はタガイタイ教育隊の出身者たちでした。会場のメトロポリタン劇場にはフィリピン青年約千名が集まり、民族主義感情で場内は興奮のるつぼと化したそうです。その時の決議は、「東洋精神を甦らせてくれた日本に協力し、自主自立

の精神を比島青年の間に広く呼び起こす」というものでした。
　その頃の日本軍は戦勢利あらず、レイテで敗れ、「神風特別攻撃隊」が発進していた頃です。誰の目にも日本の敗色は濃く映り、比島国内には抗日ゲリラが全島的に出没していました。その時、日本を支持するこのような大集会が、自発的に持たれたのでした。

日本軍の堕落ぶりを叱る

　熱誠こもる望月中尉の教育は、生徒をこのように心服させました。彼は真剣であっただけに、当時の日本軍の堕落ぶりを黙過できませんでした。彼は陣中新聞「南十字星」に、「小なりといえども余

望月重信陸軍中尉

望月中尉自身が「タガイタイ教育隊」の教材として和英両文の教科書を作り，主任教官として，フィリピン青年の独立意識を振起した（写真は英文表紙）

りに大なり」と題するエッセイを載せています。

〈戦場に於いてあれほど立派に戦ひ抜いた神兵の本性を忘却し、無辜の良民に些細な事柄にて平ビンタを喰はせたり、甚しきは一函の中に半分丈しかない煙草を一函分として無力な比島人に売りつけたものがある。（中略）甚しきに至つては、婦女子に強姦を敢行してあたら軍人の誉を失ひ、罪人の汚名を負ふて身を獄中に置いてゐるものがある。（中略）一部邦人の中には、自ら軍属を僭称して、比島人の家屋の借用を強要したり、或は日本軍政の威をかりて、暴利をむさぼることに汲々としてゐる者がある。これこそ獅子身中の虫である。これこそ聖戦を蝕む悪質匪である。大東亜戦争を完成する為には、匪賊を討伐すると共に、我々自身の中に存在する内なる匪賊を討伐することが肝要である。〉

私も軍隊の経験があるので、望月中尉の指摘がよくわかります。不心得者はどこの軍隊にもいるのですが、正義感と使命感に燃える望月中尉にとっては、日本軍人の中に見られる堕落ぶりを黙過できなかったのです。彼のこの熱誠がフィリピンの青年たちの心を摑んだのです。

ついでに触れておきますが、彼はいわゆる「神聖国家日本」だけを教えたのではありません。江戸前期の儒学者・山崎闇斎の故事を想起したのか、「もし、日本とフィリピンが戦うようなことが起こったら、諸君はフィリピン軍の中核となって日本と戦え」とも教えております。

【名越二荒之助】

二　インドネシア——大東亜戦争の意義を語る指導者たち

モハメッド・ナチール氏（元首相、世界イスラム教徒会議副議長）
アブドル・ハリス・ナスチオン氏（元国防軍参謀総長、陸軍大将）
ズルキフリ・ルビス氏（元陸軍参謀長代行、陸軍大佐）

独立をめぐる日本との関係

インドネシアは十七世紀に入ってオランダ（和蘭・阿蘭陀）に占領され、それ以後、大東亜戦争勃発までの長い間、蘭領東印度（らんりょうとういんど）と呼ばれていました。昭和十七年（一九四二年）一月、日本軍は北セレベスのメナドに進出、続いてスマトラ、ジャワへ進攻しました。それから二カ月もたたない三月八日、オランダ軍は日本に全面降伏し、ここに三百五十年におよぶオランダのインドネシア支配は終りました。オランダ軍を崩壊させた日本軍は、インドネシア各地で熱烈に歓迎されました。

日本はインドネシアをいったん軍政下に置きましたが、インドネシア語を公用語にし、現地人に独立への意欲をかきたて、三万八千人に及ぶ郷土防衛軍（ＰＥＴＡ・ペタ）を訓練しました。特にペタの

養成は後に独立戦争の中核となり、欧米から、高く評価されています。

昭和十八年四月にはインドネシアに政治参与の機会を与えると声明、さらに昭和十九年九月には独立させる方針を明確にします。オランダ時代から独立運動の中心人物であったスカルノとハッタは日本の軍政に協力し、日本の軍政はうまくいきました。もちろん未曾有の戦争中であり、インドネシアは兵站（へいたん）基地としての役割を担わされたため、労務者や米の供出などがインドネシアの生活を圧迫したのも事実です。

昭和二十年八月十一日、寺内南方軍総司令官はスカルノとハッタに九月七日を期して独立することを認めましたが、独立予定日前に日本が敗北したため、インドネシアは八月十七日、急遽独立を宣言しました。

独立宣言後、インドネシアではオランダとの戦争が待ち構えていました。日本は独立戦争を支援したくても、ポツダム宣言に基づく協定で、武器は連合国に渡すことを約束していました。そのため、公然と武器をインドネシア軍に渡したり独立運動を支援することはできません。それでも連合国に処罰されることを覚悟して、巧妙に武器を渡してゆきました。この武器が独立戦争に大きな役割を果たしました。

また日本軍の中には、生まれたばかりのインドネシア軍に対英・蘭戦争をまかすにしのびず、千名を超える人々は帰国をとりやめてインドネシア軍に身を投じ、大部分が戦死しました。現在生き残っている人は百名をすこし超える程度で、現地に住みついています。この間、一般に知られていない感

激の秘話がたくさん生まれました。

困難な独立戦争は四年以上続き、一九四九年（昭和24年）十二月に「インドネシア連邦共和国」として正式に独立しました。独立後、多数の日本人軍政関係者がインドネシアから最高のナラリヤ勲章を受けた点をみても、日本がインドネシア独立に果たした役割が分かると思います。

インドネシアの独立をめぐる日本との関係は、戦前・戦中・戦後に及び、それらを語れば全集を出さねばならないくらい資料も多く、部分的ながらすでに多くの著書が出されています。ここでは、現在生き残っているインドネシア人で、当時も枢要の役割を果たした三人とのインタビューを紹介することにしました。

このインタビューは、ＡＳＥＡＮセンターを主宰している中島慎三郎氏（下士官としてインドネシア作戦に参加）と、大東亜戦争当時、ジャワ派遣軍の作戦参謀をしていた宮元静雄氏（陸士・陸大卒、訳書『東南アジア連合軍の終戦処理』）が中心になって行ったもので、大東亜戦争の意義、ペタの役割、終戦処理について語ってもらいました。インタビューは平成元年から始められ、そのたびごとにＡＳＥＡＮセンターから報告書が出され、最終的には『インドネシアの郷土防衛義勇軍（ペタ）―終戦処理とインドネシアの国民感情に関する研究』としてまとめられています。

なお、インタビューする相手との交渉、インタビュー時の通訳などは中島慎三郎氏が担当、インタビュー内容の吟味、実際のインタビューは宮元静雄氏が行いました。また、それらのまとめは研究班の一員である阿羅健一が担当しました。インドネシアの指導者たちだけあって、よく大東亜戦争中の

日本とインドネシアの関係をとらえているといえるでしょう。

モハメッド・ナチール元首相に対するインタビュー

ナチール元首相は一九〇八年（明治41年）スマトラ島に生まれた。イスラムの団体に関係しながら、イスラムの近代化につとめ、大東亜戦争中はバンドン市の学務部長をつとめている。独立宣言後、インドネシア中央国民委員会委員長、情報大臣、マシュミ党総裁などの要職を経て、一九五〇年（昭和25年）には総理大臣となった。総理大臣辞任後は世界イスラム教徒会議副議長に就任、イスラム世界を代表する五大聖人と尊崇されている。

このインタビューは一九九〇年（平成2年）十二月三日、四日、六日にナチール邸で行われたものである。

――インドネシアの九割はイスラム教徒ですが、大東亜戦争が始まる前、インドネシアにおけるイスラム教の世界はどのような様子でしたか。

N（ナチール元首相）　イスラム教徒の集まりは、その土地その土地の郷土団体として機能していたが、一九〇八年（明治41年）ころから大同団結が叫ばれるようになりました。一九一二年（大正元年）になるとイスラム同盟がオランダに対する政治闘争をはじめ、さらに一九三〇年（昭和5年）代に入っていろいろな団体の意志統一ができるようになりました。そのような運動がだんだんと高揚してきた一九三九年（昭和14年）に第二次世界大戦が勃発して、インドネシアを植民地化してきたオランダがドイツに敗北しました。

そのころから誰が言うのでもなく、近い将来インドネシアに大変革が起こる、という声がおこり、私たちはそれに対応するための戦略を考えることにしました。私たち幹部が集まって世界情勢を分析し、その結果を各団体の信徒に伝えました。もちろん、このような運動はオランダ植民地政庁に隠してやっていたので、オランダ植民地政庁は何も知らなかったらしく、弾圧を受けませんでした。

――オランダがドイツに敗れてから二年ほどして日本軍がジャワに上陸したんですが、日本に対してインドネシア人はどのような考えを持っていましたか。

N　インドネシアは三百五十年間も植民地にされていましたので、オランダに対しては憎しみの感情を持っていたが、日本はどんなものか分かりません。私たちは余裕がないので、日本がアジアや世

モハメッド・ナチール元首相と質問者の宮元静雄氏（平成２年12月，ナチール邸にて）

右よりナチール元首相，宮元静雄氏，通訳の ASEAN センター代表の中島慎三郎氏。

界をどう見るかより、日本がインドネシアをどう取り扱うかが気になっていました。

――日本とオランダの違いはどのようなものでしたか。

N　イスラム教について言えば、オランダはイスラム教徒を叩くことに専心しましたが、日本軍は上陸するとすぐイスラム教徒にアプローチしました。

その頃、イスラムはある程度団結に向かっていましたが、日本軍はこれをマシュミという大組織にしました。

――インドネシアの独立について、ナチール先生はどのように考えていましたか。

N　日本軍が来てから、私はバンドン市の学務部長になりましたが、私たちの回りでは独立について口にしてはならないというようなムードがありました。ところが、ある日、姉歯準平（あねはじゅんぺい）バンドン市長（戦前、スラバヤの総領事）が「私は一番早く役所に来て、一番遅くまで仕事をする。日本軍の目的はインドネシアの独立を支援することだ。みなさんは高級官僚だから、率先窮行しなければならない。この中から首相が必ず出ると思う」と言いました。それを聞いて、非常に恥ずかしい気持になるとともに、日本人から独立という言葉を聞いてびっくりしました。

――姉歯さんの考えに納得しましたか。

N　姉歯さんは、独立、独立と叫ぶのは無意味だ、熱心に仕事をする以外に独立を実現させる道はない、官僚の能力と倫理を最高のものにしろ、というお考えで、身をもって仕事のやり方や公務員の生き方を示しました。私たちは姉歯さんの言う通り「言行一致、率先窮行、公益優先」でなくてはな

らないと思いました。姉歯さんの考えを聞いて、大東亜戦争は独立へのワンステップである、独立はインドネシア人の仕事であるという自覚が心の隅々に染み渡りました。つまり、日本軍は植民地主義者ではないということがはっきりしました。

――日本軍は昭和十八年にペタ（祖国防衛義勇軍）を養成しましたが、それについてどうお考えですか。

N　ペタが新聞に発表になったときは信じられませんでした。日本軍の真意は何だろう、インドネシア人だけの軍隊を作って、インドネシア人に武器を渡すということは、オランダ風に言えば、刑務所の囚人に武器を渡すようなものですからね。日本軍はインドネシア軍に殺害される恐れがあるわけでしょう。日本軍はそれを承知で、敢えてペタを発足させたんです。

――日本軍の発表を聞いてどうしましたか。

N　政治的性格の集会は禁止されていたが、私を含めてイスラムの指導的立場にいる二十人ほどがすぐ集まり、意見を交換しました。

私たちはあちらこちらで秘密裡に集会を開き、意見募集に努めましたが、様々な意見が出ました。これまで、植民地主義者が被植民地国の民衆に武器をくれたり、軍事訓練をほどこしてくれるなどということは前例がない。オランダは三百五十年間もインドネシアを統治しましたが、インドネシア人にピストル一丁くれませんでした。ですから、すぐに「とにかくこんなナイス・チャンスはない。日本軍の提案に乗ろう」という意見が大勢を占めました。しかし、反対意見も出ました。「戦闘方法を

日本軍に習うと、日本軍に忠誠心を持つようになる。奴隷になってしまう」と言うんです。日本軍が来てから失業者が増え、物不足もはなはだしくなったため、民衆の日常生活は苦しくなり、日本軍にもひどい兵隊も混じっていたから、日本批判が相当きつくなりました。さらに「将来、日本軍と戦って独立するというようになるかもしれない。なればこそ、敵をやっつける方法を日本軍から学ぼう」という意見も出ました。

このような時は、往々にして勇ましい日本非難の意見が取り上げられるものです。ところが、みんなの意見が出尽くしたとき、一人のキアイ（イスラム教の先達）が「日本軍の大きな贈り物はありがたく受け取ろう」と命令調で述べますと、たちまちイスラム全部の結論となり、ペタを受け入れることになりました。

しばらくして、ジャカルタ地区の大団長になったカズマンが、当番兵を連れ、乗馬姿で、日本軍と同じ軍服を着て、日本刀とピストルを持ってジャカルタを練り歩きましたが、日本軍の軍司令官と同じ服装だから、日本不信の念は雲散霧消しました。

――このペタが独立運動で大活躍しましたね。

N そうです。演説のうまい人が戦争中も戦後も相当な地位を得ましたが、血を流して本当に戦ったのは、ペタで訓練を受けたイスラム教徒です。中でも、イスラム教徒の戦闘集団のヒズブラがオランダとの戦いでは最前線で勇敢に戦ったので、たくさんの青年が死にました。

――日本軍が敗北し、いよいよ独立戦争ということになりましたが、武器はどうしましたか。

N　日本軍は「武器を渡すことはできない」と言いました。連合軍の命令で決まったのでしょう。しかし、私たちは日本軍の立場を理解していたので、プラプラ（馬鹿のふりをする。知らぬふりをする）、サンデイワラ（お芝居）をすることにしました。というのは、日本軍は私たちに武器をくれたがっていることが分かったからです。そこで私たちが大勢で竹槍を持って、ワァーワァーと騒ぐと、日本軍は、待っていたらしく、サアッと逃げ、私たちは日本兵が逃げ出すのを見届けてから武器をいただく、そういうプラプラのサンデイワラをしばらく続けました。

あのとき取った兵器、あのとき作った組織、あのとき戦った人々によって国軍ができました。

――日本軍全体をどう評価しますか。

N　人間は間違いを犯すものです。日本人もインドネシア人も、世界中の人間が間違いを犯すものです。ましてや戦争中ですからね。面白くないことが多々ありました。率直に言うことが人間関係の上で大切だから申し上げましょう。

労務者をタイやミャンマーなどに送りましたが、その中には能力も倫理も低い人間もいたでしょうが、立派な学生もたくさんいました。彼らがひどく傷つきました。今になっても、帰らない人がたくさんいます。この労務者問題は悲しい思い出です。ペタは私達を喜ばせましたがね。

――労務者については今でも不愉快に思っていますか。

N　そうですよ。だが、それは昔のことです。

――心に残る良いことはありますか。

N　あります。これまで述べてきたように、日本軍は良いことをたくさんしました。特にイスラムの重視とペタの編成が素晴らしい。次いで忘れられないことは、終戦直後にスカルノ氏に演説を許したことです。

独立宣言（昭和20年8月17日）の直後に、スカルノ氏は国民を集めて話をしたいと熱望したのですが、連合軍であろうと日本軍であろうと、許可しないに決まっています。ところが、イカダ広場（現在のモナス広場）で集会ができました。この集会で、スカルノ氏とハッタ氏が並んで国家戦略を明示し、国民に犠牲を要望したのです。国民全部が独立に命をかけるんだ、と決心しました。許可したのは宮元参謀だと聞いてますが、そうですか。インドネシアの指導者はみんな深く感謝しています。永久に忘れません。そのとき宮元参謀はいくつですか。

——三十七歳です。若いからできたんですね。ヨノ青年（ペタ出身。後にスラバヤ戦争の司令官）が通訳してくれました。私はイギリス軍から処罰されることを覚悟して、スカルノさんに演説してもらいました。英軍の幹部が、スカルノさんとハッタさんの間に座っている私を凝視していたことは言うまでもありません。

N　宮元参謀は私と同じ年齢だったんですね。

——イカダ広場の演説のとき、ナチール先生はどこにいましたか。

N　バンドンにいました。イカダ広場でスカルノ氏が演説したことを、姉歯さんから聞きました。この演説で国中が炎となって燃えました。国家の重要事は、ジャカルタにいなくとも手に取るように

分かりました。

――労務者の問題について釈明させてください。労務者をミャンマーに出した理由は、将来、ジャワに鉄道網を作ることを考えたからだったのです。ビルマに日本最高の鉄道技術のエキスパートが集まっているので、鉄道技術の一切を学ぶことができるであろう、という考えでエリートを選びました。もし戦争に勝っておれば、彼らはジャワに戻って鉄道大臣にも局長にも部長にもなったのです。敗北したために、現地でたくさんの餓死者を出したのが残念でたまりません。

N　（厳粛なムード。だが、ナチール先生は寛容な笑みを浮かべて聞いていた）

――最後にお聞きしたいのですが、大東亜戦争をどう評価しますか。

N　八年前、イラン・イラク戦争がおきたとき日本を訪れました。福田（赳夫）元首相から今日と同じ質問が出ました。答えは同じです。

大東亜戦争が起きるまで、アジアは長い植民地体制下に苦悶していました。そのため、アジアは衰えるばかりでした。アジアは愚かになるばかりでした。だから、アジアの希望は植民地体制の粉砕でした。大東亜戦争は、私たちアジア人の戦争を日本が代表して敢行したものです。だから、私たちに軍の力があったら、私たちが主力となって植民地主義者と戦いました。

大東亜戦争は何年も続きました。戦争は大量の消費行為で、生産がそれに追いつかぬし、輸入品のストックも皆無になってしまったから、物不足と失業とインフレのマイナス面が誰の目にもはっきりと見えるようになりました。その面から評価すると、日本軍は苛酷だったと言えるでしょう。オラン

ダは有言不実行だったが、日本軍は有言実行でした。

その第一は、植民地政治の粉砕です。第二は、ペタを組織したこと、即ち軍事訓練です。第三は、インドネシア語の普及です。第四は、イスラムの団結を計ったことです。第五は、スカルノやハッタをはじめとして行政官の猛訓練です。第六は、稲作および工業技術の向上です。

アブドル・ハリス・ナスチオン陸軍大将とのインタビュー

ナスチオン大将は一九一八年（大正7年）スマトラ島に生まれた。教員を経て一九四〇年（昭和15年）にオランダ陸軍士官学校に入り、日本軍がジャワに攻め入ったとき、オランダ軍の将校として日本軍と戦っている。独立宣言後、シリワンギ師団の初代師団長になり、引き続き陸軍参謀長、国防大臣、国軍参謀総長など軍の最も重要な地位を占めた。スカルノ大統領が退陣の際には後任に擬せられたが、暫定国民協議会議長に就任した。

このインタビューは一九九〇年（平成2年）十二月四日と六日にナスチオン邸で行われたものである。

――オランダの植民地政策はどういうものでしたか。

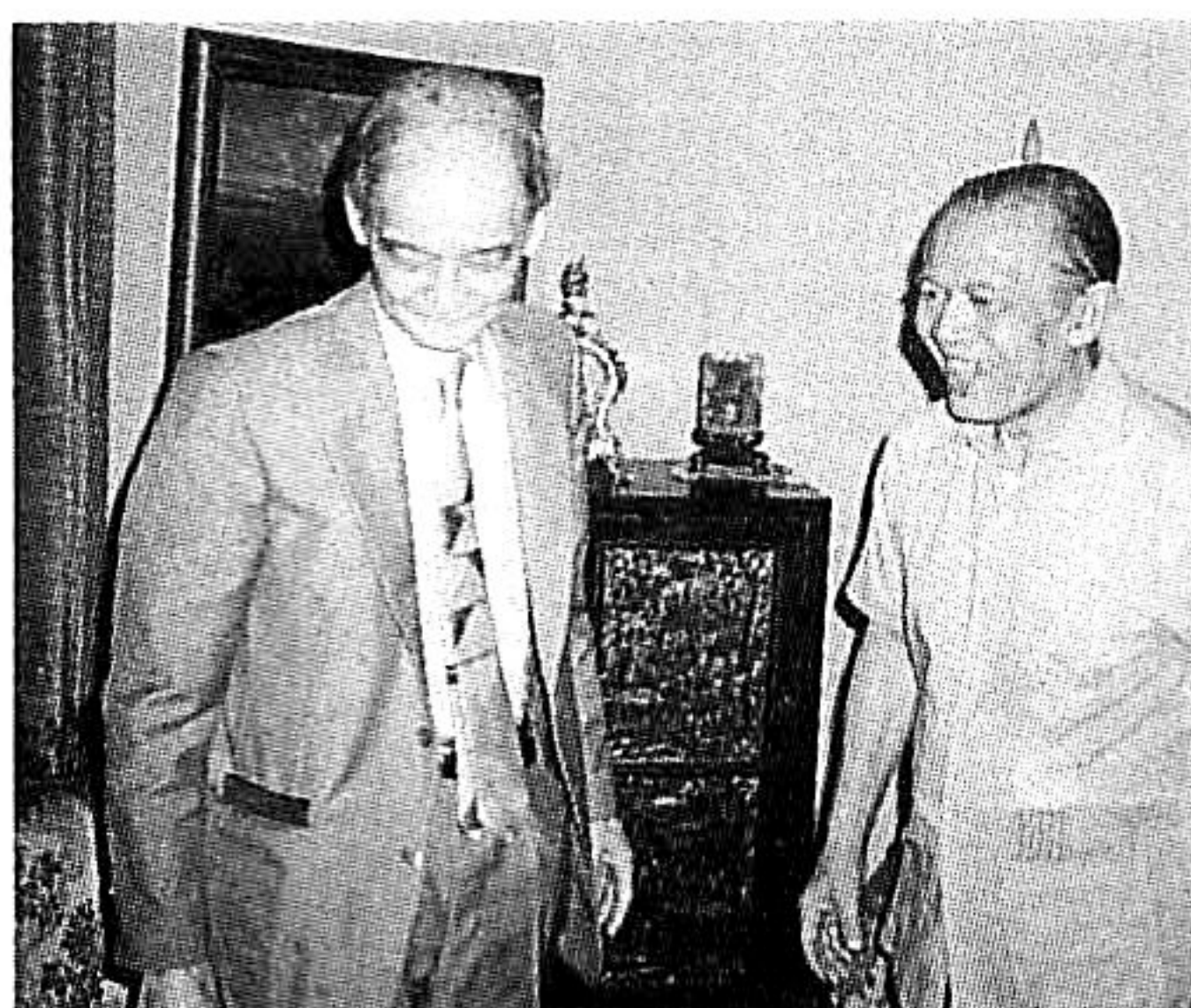
N（ナスチオン大将）　オランダの進出目的を簡単に言えば、農業と鉱業でした。それだけに農業政策は厳しいもので、強制栽培制度は耐えられるものではありませんでした。これに耐えられる民族は世界中にいないでしょう。それにオランダは、巧妙な間接統治方式をとりました。インドネシアの社会を三つに分け、上層をヨーロッパ人と日本人、中間層をアラビア人、中国人、インド人、そして下

層をインドネシア人としました。これはうまいやり方です。インドネシア人は最低層ですから生活することが精一杯で、苦しいという思いだけの毎日だから、独立を考える余裕などはありません。インドネシア人が恨むのは、目の前にいる中間層の中国人とインド人とアラビア人でした。

――オランダから独立するための戦いはどのようにして起こったのですか。

N　十九世紀、トルコが大ロシアと戦って敗北しましたが、トルコはイスラム国なので同じイスラム国のインドネシア人はカッとなりました。ところが、その大ロシアを貧弱な日本が破ったので、「日本はインドネシアの味方だ」という考えが広まりました。

そのころのオランダは、トルコではイスラムの近代化運動、インドネシアではイスラムの政治動向を気にしていました。

アブドル・ハリス・ナスチオン大将

ナスチオン大将（右）と宮元静雄氏
（平成2年12月，ナスチオン邸にて）

そのようなときに共産党が、一九二六年（大正15年）に赤旗クーデターを起こしたので、オランダは徹底的に叩きました。このクーデターで共産党が潰え去り、代わりにナショナリストのスカルノ博士とハッタ博士のグループが表面に出てきました。今度はイスラム教徒とナショナリストがオランダの敵となりました。

そうこうするうちに、ストモ博士やハッタ博士が日本を視察し、「日本の工業はすばらしい」「日本はインドネシアの味方だ」と言い出しました。タムリン博士も同調しました。また、スカルノ博士が「近い将来、太平洋で戦争が起きるから、我々はこれを利用して独立しよう」と演説しました。この演説は、青年に強烈なインパクトを与えました。同じような演説を、メナドのラトランギ博士もしました。

一方、昔からジャワにはジョヨボヨという伝説があります。それに、日露戦争の勝利とスカルノやラトランギの太平洋戦争必発論が加わったため、「インドネシアを救ってくれるのは日本だ」という声が圧倒的に強くなりました。ジャワは迷信の強い地域だから「日本がインドネシアを救う」という伝説は広く信じられました。「日本軍がインドネシアに来ることが熱望された」と言ってもよいくらいでした。

――そのようなときに日本が進出したわけですね。

N　そうです。それまでの独立運動は国民の一部であるナショナリストのものでしたが、日本軍が目の前で巨大な体軀の白色民族を叩きつぶして見せ、「インドネシアは独立すべきだ」と言ったので

す。インドネシア人は初めて、最上層のスカルノ、ハッタも最下層の農民も同じ民族なのだ、「独立はインドネシア人の手でできるんだ」ということが分かりました。といっても、知識水準の高いいちばん上の人は変わった（自覚した）が、いちばん下の人たちはトップがオランダ人から日本人に変わったというぐらいの考えでした。実際、日本が進駐してきても彼らのひどい生活内容は少しも変わりません。戦時下のため、むしろ悪化したのだから当然でしょう。

――日本軍とオランダ軍の違いはどういうものですか。

N　オランダはイスラム教徒もナショナリストも把握できませんでしたが、日本軍は巧妙で、たちまちこの二大グループを把握しました。

また、それぞれの軍隊の特徴を言えば、日本軍の将兵は言うことを聞かないと大衆の面前でもすぐ殴ったためにひどく嫌われましたが、オランダ軍の将校はよく分かるように説明しました。オランダはインドネシア民族の心理と風俗習慣をよく理解していたのです。

――スカルノという人物をどう評価しますか。

N　戦時中のスカルノは「インドネシアと日本は一心同体である。日本軍の援助がなければ、永久にインドネシアの独立はできない」と発言しました。スカルノと山本（茂一郎）参謀長とは肝胆相照らす仲でした。

しかし、我々の世代は、「日本とは一体何か、新しい植民地主義者ではないのか」と思いました。いつかは日本と戦う日が来るかもしれない、と覚悟しました。私自身は地下活動のグループに参加し

アラムシャ将軍（Ⅰ）

大著『ペタと義勇軍』

スカルノからスハルト政権の初期の段階までは、政府高官の六割まで、日本軍政時代に養成されたＰＥＴＡ（ペタ）（祖国防衛義勇軍）やスマトラ義勇軍出身者で占められていた。しかし、だんだん高齢になって引退すると、欧米留学組が国家の中枢を握るようになった。

イギリスに留学したヌグロホ博士がスハルト大統領にとり入って文部大臣になり、一九七七年に『標準インドネシア国史』という二千枚・六巻からなる大著をまとめた。反日の嵐が吹き荒れている頃にイギリスで学んだだけに、この歴史書はおよそ反日であり、ＰＥＴＡや義勇軍の役割も否定的である。教科書も、この歴史書を下敷きにして書かれている。

アラムシャ将軍がペタの役割を正しく伝えるべく著わした『ペタと義勇軍』(1987年刊)表紙に日本刀をあしらう。

こういう傾向に怒ったのが、スマトラ義勇軍出身のＨ・アラムシャ将軍（66歳）である。彼はかねてから日本軍の小さな欠点をあげつらうことに反対して、大きい功績の方を強調していた人物である。一九八七年（昭和62年）、彼はヌグロホの書いた歴史を正すために、『ペタと義勇軍―インドネシア国軍の母体』という大著を刊行した（この本は日本で目下翻訳中）。

インドネシアではこの本に刺激されて、他のペタや義勇軍出身者も次々と「証言集」をまとめはじめているという。

平成三年十月三日、天皇・皇后両陛下はご即位後初のご外遊の地タイ・マレーシアを経て、最後の国インドネシアを訪ねられた。

インドネシア・ムルデカ宮殿での歓迎行事やスハルト大統領夫妻とのご会見など、日本の新聞は小さな報道しかしなかったが、戦後の国賓の中で最大最高の歓迎だったと聞く。最初のタイでも、プミポン国王ご夫妻がドンムアン空港まで出迎える(戦後、どのような国賓でも空港までは出迎えなかった)など、最上級の歓迎だった。

インドネシアで、陛下はジャカルタ・カリバタ英雄墓地を訪れ供花された。この墓地には、英蘭軍との苛烈な独立戦争で戦死した文字通り「インドネシアの英雄」が眠っている。その数千八百柱。その中に十一柱の日本人が祀られている(このことも新聞は伝えない)。カリバタ以外の英雄墓地には、三十二柱の日本人が祀られている。

インドネシア独立戦争に参加した日本人は、約二千人。そのうち四百人が戦死したという。また、今でもインドネシアにとどまった日本兵で、生き残っている人は二百名弱。

インドネシアで日本軍政の見直しがはじまっていることを、アラムシャ将軍の本は教えてくれている。今、新しいアジアと日本の時代が開かれるようである。

【名越】

Panji Batalyon (Dai Dan Ki) PETA

前掲著書に掲載されている大団旗(ジャカルタ防衛義勇軍第一大団の筆書に注目)

大団旗。
日本陸軍の聯隊旗をモデルにしている。まん中の星と月はイスラムの象徴。

ました。我々は、戦争の後半になると、ドイツは負けたし、日本もそのうち負けるかもしれない、日本にばかり頼ることはできない、そのうち日本は応援しようとしても応援できなくなる、だから「自分たちの力で独立するんだ」と主張しました。だが、スカルノとハッタは聴き入れません。深く日本を信頼していたんですね。

―― 改めてお聞きしますが、日本軍が大統領としてスカルノ、副大統領としてハッタを選んだのはよかったのでしょうか。

N 独立戦争の時、本当に戦ったのは、第一がイスラム教徒で、その次がナショナリストでした。しかし、ベースは国民の貧窮です。我々は、独立しなくてこの貧乏の追放はできないと考えていました。だから、ナショナリストのスカルノとハッタがいなければ独立は無理でした。

―― 確かに日本軍は、スカルノさんやハッタさんを応援したいが、メイド・イン・ジャパンのレッテルを貼られるのを恐れました。なにしろ豪州のラジオ放送は、毎日「スカルノとハッタは日本のボネカ（お人形）である」とがなりたてていましたからね。

N 今になって考えますと、日本軍の立場は誠に困難でしたね。しかし、我々若い人は感情で動きます、理性だけで動くことはできません。昭和二十年八月十九日の朝だったと思います。私はバンドンにいたので、アルジ・カルタウイナタ大団長（独立してから国会議長）に「すぐ軍隊を結成しなければいけない」と進言しました。そのうちに次々と小団長がやってきて「すぐ戦争を始めましょう」「日本軍の手薄な所に軍隊を進めよう」と進言しました。ところがアルジ大団長は、「心配するな、日

本軍は味方だ」と言う返事でした。それほど若い人と大人たちは違っていました。だから我々若い人の動きにいちばん困ったのは宮元さんだったんでしょう。（笑い）

――インドネシアが独立できた原因は何なのでしょうか。

N　独立できた要素の第一は、日本軍が植民地政治体制を粉砕したことです。植民地体制の粉砕なくして独立はありえません。第二は、日本軍の猛烈な軍事訓練です。オランダはやってくれませんでしたし、我々自身がやろうと思ってもできるものではありません。日本軍時代の三年半でインドネシア人はすっかり変わったが、こんなに変わったことをイギリス軍やオランダ軍は分かっていませんでした。スラバヤでイギリス軍のマラビー将軍が戦死して、やっとインドネシア軍の凄さがわかったのではありませんか。

――メタモルフォシス（魔法的変化）ですね。幼虫が突然、蛾に変わったようなものです。

N　そうです。日本軍はたいへん立派なことをしてくれました。しかし、政治というものは感情的に見られるものです。その面から見ると、日本人はおもしろくない存在だったんですよ。そのへんは分かってください。（笑い）

――大東亜戦争は、インドネシアを覆っていた厚いカーペット（オランダの植民地政治）を剝いだようなものです。カーペットを剝いだからインドネシアは独立できた、と思っていますが、私のこの考えはどうでしょうか。

N　その通りです。日本は、歴史に残ることをしてくれました。誰も変えることのできない真実で

インドネシア軍政とノーベル平和賞

宮元静雄氏（陸軍ジャワ派遣軍作戦参謀）が私に、英軍が作成した『The War Against Japan, V.5. Surrender of Japan』という大冊（五五九頁）の原書を示された。その本は『対日戦争史、第五巻、日本の降伏』とでも訳したらよいであろうか。編著者はウッドバーン・カービー少将（Woodburn Kirby）である。

宮元氏は、その中の第二十八章「蘭領東インド・ジャワ（一九四五年九月～十月）」の部分を読めと言われる。全文をここで紹介できないが、日本が行ったインドネシア軍政に対する英軍の驚くべき着眼なのである。我々はともすれば、言訳がましく日本弁護に汗をかくのだが、イギリス人はストレートに事実を直視している。

本書やマウントバッテン東南アジア連合軍司令官の報告書（宮元訳）によれば、およそ次の三点を評価している。

① 日本軍はアジア諸民族の眼前で、彼らがとてもかなわぬと思っていた欧米軍を、一挙に撃破した。

② とても独立の意志も能力もないと思っていた植民地民族を、戦時中の短期間に組織し訓練し、強烈な愛国心をかきたて、軍事力も行政力も見違えるばかりに変貌させた。いわゆる「metamorphosis（魔術的変化）」を遂げさせた。このことは、当時の連合軍の誰も予想できないことであった。

③ 日本軍は敗戦すると、連合軍との間に交わされた停戦協定に基づいて、武器は全部連合軍に引き渡すことになっていた。ところが日本軍は、インドネシア軍に「武器が奪われた」と称して、巧妙に裏で武器を渡していっ

た。それによって、これまで「猫」のようにおとなしかったインドネシア人が、「虎」に変身し、遂に独立を達成したのである。

以上である。

私は読みながら「日本のインドネシア軍政は凄いことをやったものだ。そのすばらしさを日本人の多くは評価しないが、当時の敵国であった英国人が着目するのだから驚きである。日本軍政の特徴は、現地人を教育し、武器を与えて軍隊組織を作りあげたことである。そして、彼らに独立精神を振い起こさせた。それはインドネシアだけでなく、ビルマの三十人志士を中心とするビルマ国軍、そしてチャンドラ・ボースのインド国民軍の編成にまで及んでいる。日本敗戦後はこれらが中核となって独立に至ったのだから、その業績はノーベル平和賞、いやそれ以上かも知れない」と思った。私が宮元氏にそのことを告げると、氏は言った。

「私は軍人だから、ノーベル平和賞はいらない。やはり金鵄（きんし）勲章（武功抜群な陸海軍人に下賜された勲章。明治23年制定）だ。当時私は中佐参謀だったから、さしずめ功四級というところかな（笑い）」

【名越】

宮元静雄氏

明治41年，鹿児島生まれ。陸士陸大卒。熱河河北作戦に従軍し，昭和19年４月，ジャワ第16軍後方及作戦参謀として赴任。熱河河北作戦に従軍して，具さに民心把握の必要を痛感した体験がインドネシア軍政上に生かされたという。終戦時，作戦参謀。著書に『ジャワ終戦処理記』他。

す。それを解釈するのは政治家やマスコミや学者ですから、今、いろいろに言われていますが、歴史に残る金字塔を打ち立てたということは間違いのない事実ですよ。

ズルキフリ・ルビス元陸軍大佐とのインタビュー

ルビス元大佐は一九二三年（大正12年）スマトラ島に生まれた。大東亜戦争中にタンゲラン青年道場やペタ幹部錬成隊で日本軍の訓練を受け、抜群の成績で助教からペタの小団長になった。独立宣言後はゲリラ戦、諜報活動に従事し、一九五二年（昭和27年）に陸軍情報部長、一九五五年（30年）に参謀副長を経て参謀長代行となり陸軍の指導権を握った。しかし一九五八年（33年）にスカルノ大統領の容共独裁路線に対して反乱をおこした。入獄しても節をまげず「永遠の大統領候補」として国民的人気が高い。

このインタビューは一九九〇年（平成2年）十二月七日、ジャカルタのホテルで行われたものである。

――ペタ創設以降のことについて、おたずねしたい。ルビスさんはペタ（祖国防衛義勇軍）でどういう地位にいましたか。

L（ルビス元陸軍大佐）　タンゲランの青年道場を卒業したころ、ペタの創設が発表になり、それとともに中団長、大団長を養成するためにジャワ防衛義勇軍幹部練成隊ができました。そこでは、タンゲラン青年道場を卒業した何人かが指導学生として日本人教官を助けることになり、その一人として私も配属されました。

ペタが発足するとともに、私は小団長となったが、まもなくバリ島にも義勇軍を作ることになり、

土屋競大尉に従ってバリ島のシンガラジャに行きました。バリ島では二カ月間助教をつとめ、ヌガラ、クルンクン、タバナンの三カ所に大団を作りました。

――バリ島から帰ってからは、どういう仕事をしたのですか。

L　練成隊の後に義勇軍指導部ができて幹部候補生の教育をすることになり、引き続きそこで助教をつとめました。義勇軍指導部長には、新しく山崎一大尉が就任しました。山崎大尉は国際政治の分かる人でした。上品な人柄で、粗雑なところはまったくなく、もしかすると高貴な出ではないかと思いました。柳川宗成大尉は非常に激しい性格の人なので対照的でした。山崎大尉は、スカルノやハッタやハジ・アグス・サリムからも尊敬されました。ハジ・アグス・サリムは、独立してから外務大臣になった立派なイスラム教徒です。山崎大尉は、私たち三人を連れてハジ・アグス・サリムの家によ

ズルキフリ・ルビス元陸軍情報部長

ルビス大佐と中島慎三郎氏

アラムシャ将軍（Ⅱ）
大局観に立った大東亜戦争の意義

アラムシャ将軍は名前が痛快で、一度聞いたら忘れられない。背は低いが、政治行動は「荒武者」のごとき勇猛さを発揮する。しかし接しておれば、巌のごとき頼もしさがあり、王族出身だけに大人の風格をただよわせる。

平成元年（一九八九年）には、天皇陛下から日イ友好に尽くした功績で、勲一等瑞宝章をいただいている。かつて、スハルト政権下で官房長官や副首相をつとめたこともあって、大統領特使としてたびたび来日している。

昭和六十二年（一九八七年）に来日した時には、中曽根首相、福田元首相、塩川文相等にも会い、大東亜戦争の意義について、次のような突っ込んだ意見を述べている。

「日本軍政時代の三年半については、オランダ、チャイナ、アメリカなど、戦勝国の学者や欧米に留学して日本が嫌いになった人々は、悪い面ばかりを誇大にあげつらっている。しかしそれでは、全体を語ったことにならない。仮に日本の軍政に欠点があったとしても、たかが三年半である。オランダ時代の三世紀半とは比べものにならぬ。日本とオランダを同じ質、同じ量と見て批判するのは根本的に間違っている。

私は日本軍の小さな欠点をあげつらう代わりに、大きい長所を挙げてみたい。

第一は、インドネシアの全国民がオランダ人の醜態を見たことだ。短軀小身の日本兵が、巨漢を自慢するオランダ兵を、我々の目の前で打倒して見せてくれた時、我々の心に棲みこんでいた魔神のようなコンプレックスはたちまち消え去って、新しい勇気が湧いて来たのである。

第二は、日本軍の軍政が良かった。近き将来

に独立した時の大統領としてスカルノを、そして、副大統領としてハッタを当てると公表して、大切に取り扱った。

第三は、軍事訓練と武器の供与である。ジャワ派遣軍司令官・原田熊吉中将の熱烈な応援により、ＰＥＴＡが創設された。ＰＥＴＡは義勇軍と士官学校を合併したような機関で、三万八千人の将校を養成した。その他、インドネシア人が熱望する武器をすぐに供与してくれた。

昭和62年，大統領特使として来日したアラムシャ将軍（右）。中央は当時の中曽根康弘首相，左はその時に通訳した中島慎三郎氏。この時は、福田赳夫元総理や塩川正十郎文相(当時)にも会い大東亜戦争の意義について述べた。

第四は、日本軍が無条件降伏した後も、多数の有志将校がインドネシアの独立戦争に参加してくれたことである。我々インドネシア軍は戦争に未経験だったから、経験豊かで、しかも勇猛果敢な日本軍将兵の参加が、いかばかり独立戦争を我々に有利な方向に導いたか、はかりしれない。

第五は、ＰＥＴＡがインドネシア国軍の母胎となったことである。スハルト将軍はつねづね「ＰＥＴＡは独立戦争の主力であり、国軍の母胎となった」と言明している。

第六は、インドネシア国軍は戦略と戦術の方針を、日本軍の文献（「作戦用務令」等）によって作成したことである。」

【名越】

く行きました。まるで親父が子供を連れていくような感じでした。私たちはハジ・アグス・サリムから、最高の政治学と外交学のブリーフィングを受けました。

―― 指導部での助教生活は終戦まで続いたのですか。

L いいえ。それから、しばらくして、六川正美中尉に従ってシンガポールを経てパレンバン（スマトラ）に行きました。パレンバンに特別機関を作ることになったので、そのお手伝いをしました。

―― パレンバンで敗戦を迎えたんですか。

L そうです。敗戦を迎えたとき、信じられませんでしたが、私はすぐにインドネシアに独立の時が来たと直感しました。

六川中尉は「敗戦になった。ペタの保有する武器を一カ所に集めて、陸軍の司令部に返納しなくてはならない。これまでのようにはいかない」と説明しました。私は「しかし、独立には武器とお金が絶対必要だからお願いします」と要請したら、六川中尉は「お金はすべてやる。ピストルもやる。だが、小銃以上の武器はやれないことになったんだ」という説明を繰り返しました。

―― ジャカルタでは何をしましたか。

L ジャカルタに着いたら、すぐに山崎大尉やケマル・イドリスやダン・モゴットに会い、当面、何をしなければならないかを話し合いました。ケマル・イドリスとの合意事項は「独立はイギリスとオランダを相手とする戦争である。そのためには、まず我々が独立戦争のリーダー・シップを取る意志を明確にし、中核パワーを作らなければならない。今は烏合の衆だから、きちっとした軍隊を作る

ことが必要だ。さらに、情報機関の設立も必要だ」というようなことでした。

――武器はどうしましたか。

L　日本軍からもらいました。バニュワンギや東部ジャワでは、たくさんもらいました。しかし、スマランやバンドンでは少ししかもらえませんでした。

――そうやって国軍を作ったのですね。

L　そうです。ジャカルタではイギリス軍、それからオランダ軍の攻勢が続き、そのため私は情報の収集に忙殺されました。（詳しい戦闘経過は削除）

――武器は日本軍からもらったものだけでしたか。

L　日本軍からもらったものだけでは足りないので、シンガポールに買いに行きました。密輸の文

Piagam
Tanda Kehormatan
Presiden Republik Indonesia

ナラリヤ勲章の勲記

この勲章は，インドネシアの独立と復興，発展のため尽くした人に与えられる最高の栄誉で，これまで，前田精，高杉晋一，清水齊，小笠公韶，稲嶺一郎，金子智一の6氏。この勲記は金子氏のもの。

「インドネシア共和国大統領は

　　氏名　金子智一

　　役職　財団法人日本インドネシア協会理事

に対し，功労勲章ナラリヤを授与する。

　本叙勲は，1963年第5号法律に基づきインドネシア共和国政府との友好関係緊密化に際し，インドネシア国家及び民族に対し，多大なる貢献を評価してなされたものである。

ジャカルタ1988. 8 .17

インドネシア共和国大統領

スハルト」

払いはゴムや錫でした。砂糖で支払ったこともあります。

――「解散時の兵員数は約二百万」と、復員軍人大臣のサンバス少将は説明しています。日本軍保有の武器は約六万丁だから、全部渡しても足りなかったわけですね。

L　そうです。ぜんぜん足りません。完全武装の部隊は少なく、パラン（山刀）と竹槍の部隊が大部分でした。充分なものは、敢闘精神と国民の支援でした。

――最後に日本人へのメッセージを。

L　大東亜戦争が契機となって、アジアからアフリカまで独立しました。日本にだけ犠牲を払わせてすまないと思っています。そして、大東亜戦争中の日本軍政の特徴は、魂を持ってきてくれたことです。我々と苦楽を共にし、農作業や各種技術の初歩を教えてくれ、軍事訓練までほどこしてくれました。当時の日本人をトータルでみれば、軍人がもっとも真面目熱心で、インドネシア人の心をとらえました。むしろ商社員や軍属の中に利益追求に走り、不遜な者がおりました。親日派を反日に追いやったのは、彼らではありませんか。

ところが、現在のインドネシアには、確かにたくさんの日本商品が氾濫しています。優秀な日本の商社員もたくさん来ています。しかし彼らは、華僑と結託して金もうけに奔走するだけで、インドネシア人との間に心の交流がありません。海外で働く日本人に心の教育をしてほしいと思います。

【阿羅健一】

三　マレーシア・シンガポール――大東亜戦争を評価する人々

ラジャー・ダト・ノンチック氏（元上院議員）

ダトゥク・ザイナル・アビデン氏（マラヤ国民大学教授）

日本軍の〝残虐行為〟と〝華僑粛清〟の真相

日本が対米・英・蘭戦争を決意したとき、海軍はハワイのアメリカ太平洋艦隊を真っ先に攻撃し、一方、陸軍はマレー作戦を第一と考えました。陸軍がマレー作戦を最優先させたのは、戦争遂行にあたって石油やゴムなどの豊富な南方を占領する必要があったためであり、マレー半島がイギリス東洋支配の象徴であったからです。

このマレー半島には古代から王国が生まれていましたが、十六世紀から西欧の進出がはじまり、長らくオランダが支配していました。しかし、十八世紀になると新たにイギリスが進出し、十九世紀前半には完全にイギリスの支配下に置かれるようになりました。だから大東亜戦争がはじまる前まで、

そこは「英領マレー」と呼ばれていました。
また、マレー半島突端にあるシンガポールはサルタン（土侯）が支配していましたが、十九世紀にはイギリスが永久の領有権を獲得し、直轄植民地としていました。シンガポールは交通の要路で、天然の要害であったこともあり、大東亜戦争が始まる三年前、イギリスはここに堅固な要塞を築きました。プリンス・オブ・ウェールズを旗艦とする東洋艦隊はシンガポールを根拠地にしており、パーシバル中将を司令官とする約十万の陸軍部隊もここにいました。
マレー半島北部に上陸した日本軍は破竹の勢いで進軍を続け、昭和十七年二月十五日には、シンガポールに籠城したイギリス軍を降伏させました。わずか二カ月ほどのことです。赫々たる大戦果でした（117頁参照）。シンガポールは昭南（しょうなん）市と改名されました。英領マレーは、マレー人、華僑、インド人などが混在しており、また重要な資源地であったため、日本はマレーシアを積極的に独立させようとはしませんでしたが、東洋支配の象徴であるイギリスを撃滅したとして世界に衝撃を与えました。
このマレーシアとシンガポールは、日本の敗戦とともに一時イギリスの支配下に戻りましたが、やがて独立します。
しかし、敗戦とともに日本が果たした役割はすべて無視されるようになり、特に最近、マレーシアは「戦争中、日本兵が赤ん坊を放り投げ、銃剣で刺し殺したところ」、シンガポールは「日本軍が多数の華僑を粛清したところ」として喧伝（けんでん）されるようになりました。
赤ん坊を放り投げて刺し殺すということは、ドストエフスキーの『カラマーゾフの兄弟』や『死の

家の記録』に出てくるトルコ兵の話で、それからの発想でしょう。日本にそんな発想がないのは、兵隊に聞いてみるとすぐ分かります。

マレーシア生まれのラジャー・ダト・ノンチック氏はそれについて、こう語っています。

〈先日、この国に来られた日本のある学校の教師は、「日本軍はマレー人を虐殺したにちがいない。その事実を調べに来たのだ」と言っていました。私は驚きました。「日本軍はマレー人を一人も殺していません」と私は答えてやりました。日本軍が殺したのは、戦闘で闘った英軍や、その英軍に協力した中国系の抗日ゲリラだけでした。そして、日本の将兵も血を流しました。

どうしてこのように今の日本人は、自分たちの父や兄たちが遺した正しい遺産を見ようとしないで、悪いことばかりしていたような先入観をもつようになってしまったのでしょう。これは本当に

ラジャー・ダト・ノンチック氏は昭和59年４月29日，日本から勲二等瑞宝章を授与された。昭和天皇の大喪の礼と葬場殿の儀へも，アセアンを代表して出席している。

残念なことです。〉

このノンチック氏は大東亜戦争中、マラヤ南方特別留学生として来日、陸軍士官学校に学んだ人です。大東亜戦争後、知事、下院議員、上院議員を歴任しました。またASEAN結成支援のため、日本に留学した人たちとASCOJA（アセアン日本留学生評議会）を結成し、会長になりました。

ノンチック氏は日本の役割を、こうも述べています。

〈私たちアジアの多くの国は、日本があの大東亜戦争を戦ってくれたから独立できたのです。日本軍は、永い間アジア各国を植民地として支配していた西欧の勢力を追い払い、とても白人には勝てないとあきらめていたアジアの民族に、驚異の感動と自信とを与えてくれました。永い間眠っていた〝自分たちの祖国を自分たちの国にしよう〟というこころを目醒めさせてくれたのです。〉

〈私たちは、マレー半島を進撃してゆく日本軍に歓呼の声をあげました。敗れて逃げてゆく英軍をみたときに、今まで感じたことのない興奮を覚えました。しかも、マレーシアを占領した日本軍は、日本の植民地としないで、将来のそれぞれの国の独立と発展のために、それぞれの民族の国語を普及させ、青少年の教育をおこなってくれたのです。

私もあの時にマラヤの一少年として、アジア民族の戦勝に興奮し、日本人から教育と訓練を受けた一人です。私は、今の日本人にアジアへの心が失われつつあるのを残念に思っています。これからもアジアは、日本を兄貴分として共に協力しながら発展してゆかねばならないのです。ですから今の若い日本人たちに、本当のアジアの歴史の事実を知ってもらいたいと思っているのです。〉

ノンチック氏は、昭和五十九年に日本政府から勲二等瑞宝章を受賞しており、親日家ですが、これはノンチック氏のような一部だけの意見ではありません。

同じマレーシア生まれで、マラヤ国民大学教授のダトゥク・ザイナル・アビディン・ビン・アブドゥル・ワーヒド氏は、ラジオ番組で「マレーシアの歴史」を放送し、それが好評だったため、後にその話を『マレーシアの歴史』として出版しましたが、その中でこう述べています。

〈マラヤ政治史のうちでもっとも重要な出来事といえば、まず何をおいても一九四一年の日本軍のマレー半島進攻をあげねばならないだろう。日本のマラヤ占領は、マラヤの人々の間に政治意識の覚醒をもたらした。このようないい方は一見矛盾しているように聞こえるかもしれないが、日本軍政は我が国におけるナショナリズムを育成・発展させるうえで、いわば「触媒」の役割を果たしたということができるのである。

日本軍政の積極的な面についていえば、日本軍政部が、それまでもっぱら西欧人専用だったクラブやプールなどを、肌の色にかかわりなく一般に開放するなどの政策をとることによって、たとえ形式的にもせよ、「民族の平等」を標榜したことなどがあげられるだろう。今日では、このようなみえすいたジェスチャーはなんの意味ももたないようにみえるかもしれないが、その当時は社会に大きな影響を与える出来事だったのである。

事実、日本のマラヤ占領作戦の成功そのものが、マラヤ国民のイギリス人に対する態度に大きな変化をもたらした。つまり、たとえ日本占領期間が短期的に終わったとはいえ、マラヤ上陸作戦の

電撃的勝利は「大英帝国」の威信を大きく揺るがし、また「白人」は優秀であるという従来の固定観念をつき崩したことは確かである。〉

このように日本はマレーシアの人々を目覚めさせ、マレーシア独立のきっかけを作ったのです。

また、華僑粛清については、華僑が殺されたという事実だけが取り上げられていますが、それは、経緯を無視した一方的な表現です。

もともとマレー半島の華僑は、日本が支那事変として戦っていた中国の重慶政府に通じており、その反日活動はマレー作戦の前から注目されていました。大東亜戦争がはじまると、一部の華僑はイギリスに協力することを表明さえしました。その上、マレーの社会構造では、華僑がイギリスとマレー人・インド人の間に存在していて、日本がマレーを解放するということは、華僑にとって権益を犯されることになります。

ミルトン・オズボーン（オーストラリア生まれ。シドニー大学卒業後、オーストラリア外務省に入り、シンガポールのイギリス東南アジア研究所長など歴任。東南アジアに関する歴史書がある）の分析はその辺りをよくとらえています。こう述べています。

〈マラヤの戦争経験は、マレー人住民にとっては、比較的楽な経験であり、中国人にとってはかなり残酷かつ利益剝奪という経験であり、また少数派のインド人にとっては、特にこの社会の比較的裕福でない層にとっては、自分らがかつて就いたことのない、権限をもつ地位に日本人が登用してくれたので、身分の改善感を味わう機会であった。〉

このように、華僑にとって日本軍は歓迎すべき軍隊ではなかったのです。日本軍がマレー半島を進むにしたがって、イギリス軍に組織された華僑は遊撃隊として日本軍の作戦を妨害しました。シンガポールを目の前にして、日本軍の軍司令部戦闘指令所が襲撃を受けたり、シンガポール陥落後も倉庫が襲撃を受けたりしました。

すべての華僑が日本軍の作戦を妨害したわけではありませんが、日本軍を妨害した華僑が少なくないということは、日本軍将兵に多くの衝撃を与えました。マレー作戦に参加した兵隊たちは、〝白人からアジアを解放する〟という気持で戦っていましたから、白人の手先となっている華僑を知って表現のできない憤りを感じましたし、軍の参謀たちは〝ここで華僑に対し断固たる姿勢を示さなければ、これからの軍政は相当の妨害が予想される〟と考えたとしても当然です。

このような背景があり、日本軍は華僑粛清を実行したのです。確かに当時から「華僑を粛清する必要があったのか」という見方もありましたが、このことは日本軍にとって掃討作戦であり、純然たる軍事作戦であったのです。

大東亜戦争後、シンガポールを攻略した第二十五軍の参謀たちがシンガポールの国防省から招待されたことがあります。いわば華僑を粛清した当事者が招待されたわけです。

そのときにシンガポール国防省が考えていたことは、シンガポールを攻めた日本軍のような勇ましい軍になりたいということで、シンガポールを攻めた軍人から教えを乞うというものでした。ときの首相は、シンガポールが自治国になると同時に首相に就任していたリー・クアンユーで、リー・クア

ンユーは三十年にもわたりシンガポールを指導する人です。
このとき、かねて〝華僑粛清は行き過ぎだ〟と思っていた杉田一次氏（第25軍参謀）がリー・クアンユー首相に、
〈華僑の粛清は第二十五軍参謀として申し訳なかった。〉
とお詫びをしたところ、リー・クアンユー首相は、
〈過去のことだ。そんなことは考えないで、シンガポールのことで助言してもらいたい。〉
と言いました。
華僑粛清は日本としては軍事作戦であり、その上での杉田一次氏の言葉ですが、その杉田氏の言葉とリー・クアンユー首相の返事こそ、すべてを物語っていると言えるでしょう。

【阿羅健一】

四　ビルマ［ミャンマー］──独立の系譜

日本を裏切らなかったバー・モウ首相と独立の志士オン・サンの宿命的物語

ビルマの人々の言葉に導かれて

ビルマといえば最近（一九八九年6月18日）国名を、英語表記を自国語の発音に沿って「ミャンマー」に改めました。日本からは遠く、アジアの端にあります。そのうえ昨年（一九九〇年）の総選挙で、スー・チー女史（オン・サンの娘。本年10月14日、ノーベル平和賞受賞。オン・サン＝アウン・サン、本稿では当時からの表記に沿ってオン・サンに統一）が圧勝したのに、ソウ・マウン国防相らは政権を譲渡せず、相変わらず軍部独裁の社会主義体制を続けています。最貧国のひとつで、日本人にはあまり印象がよくないようです。

それでも、一歩ビルマの国内に足を踏み入れれば、涙の出るほどの親日的な人々に出会います。遺

骨収集に協力し、英霊に対して冥福を祈ってくれます。日本軍の勇戦ぶりを讃え、一九四三年（昭和18年）の独立の感激を語ります。たどたどしい日本語ながら、文部省唱歌「日の丸」や「愛国行進曲」を歌い、「ニッポン・ビルマ・バンザイ」を唱えてくれます。そのため、ビルマを訪問した日本人の中には、「ビルマ・メロメロ」になる人が多いのです。

私がビルマに強く魅かれるのは、父が転戦した所というのもひとつの理由ですが、大東亜戦争の初期、我々の先輩がその独立に貢献し、戦争末期にはビルマ防衛に悪戦苦闘した国だからです。最後は敗戦して報いられなかったけれど、その精神的遺産は現地に生きています。

特に本稿で主題にしたいのは、昭和十八年に日本が認めた独立について、日本のいくつかの百科事典が触れていないことです。また、我が国の近代史家の間では、「ビルマが独立したのは、日本の力によるのではなくて、むしろ日本と抗戦することによって、一九四八年（昭和23年）に独立した」とする見解がまかり通っているからです。これでは正しい歴史とはいえず、日本の果たした役割を抹殺することになります。私はその点を明らかにしたいのです。

ビルマの元首相バー・モウは、その著『ビルマの夜明け』の冒頭で次のように述べております。

〈その時代のビルマの真実は、ビルマの国民自身が話さない限り決して知られることはない。またそれらの事件の当事者が話さない限り、本当の真実が語られたことにならない。〉

私はバー・モウの指摘に従って、本稿ではビルマ人で当事者であった人々の言葉に導かれながら語りたいと思います。

日露戦争と〝ビルマのガンジー〟オッタマ僧正

そもそもビルマには、偉大な歴史がありました。十一世紀以降、ビルマ族による大帝国が三回にわたって建設されていました。すなわち、パガン朝（一〇四四年～一二八七年）、トングー朝（一五三一～一七五二年）、アラウンパヤー朝（一七五二年～一八八五年）であります。この間に元の襲来と清国からの侵略を受けています。そして、第一次から第三次に至る英緬戦争（一八二四年～一八二六年・一八五二年・一八八五年）によってアラウンパヤー王朝は滅亡しました。通算六百年にわたる栄光の王朝時代は終わり、イギリスがビルマ全土を領有するに至ったのです。しかしその後も、ビルマ人の抵抗は起こりました。

特にビルマ人に独立精神を奮い立たせたのは、他のアジア諸国と同様に、ボーア戦争（一八九九年～一九〇二年、南アフリカに移住したオランダ系農民が、土着民とともに、イギリスの統治に反抗して戦った戦争。イギリスの勝利に終わる）におけるボーア人の抵抗運動と、日露戦争（一九〇四年～一九〇五年）における日本の勝利でした。

ビルマの歴史家ティン・アウン博士は『ビルマ史』の中で、次のように述べています。

〈この頃にビルマに最初の映画館が出現したが、上映されたのはボーア戦争と日露戦争の記録映画であった。観客はスクリーンに写し出されたマフェキン（イギリス軍に包囲されたボーア人の町）のボーア人救出に安堵の溜息をつき、日本軍の兵士が、鉄道で輸送されるロシアの軍隊を襲撃する場面

に拍手を送った。
その頃は映画の検閲などもちろん無かったうえに、イギリスの役人たちは、ボーア人に対するイギリスの勝利を印象づける映画や、どっちみちイギリスの同盟国（注—日英同盟）である日本がロシアに勝つ映画は、ビルマ人に見せても害はないと考えていた。〉

こういう民衆の心を代表した人物に、ウ・オッタマ僧正（一八七九年〜一九三九年）がいます。彼は日露戦争の勝利に感激して、矢も盾もたまらず前後二回来日しています。その感激を『日本』という本に著わし、ビルマ国民に奮起を促しました。

〈日本の隆盛と戦勝の原因は、英明なる明治大帝を中心にして青年が団結して起ったからである。われわれも仏陀の教えを中心に、青年が団結・蹶起すれば、必ず独立をかちとることができる。〉

〈長年のイギリスの桎梏(しっこく)からのがれるには、日本にたよる以外に道はない。〉

とまで彼は主張していたのであります。

帰国後のオッタマは、インド国民会議派と密接な連絡をとりながら、ビルマの完全自治を要求する運動を起こしました。そのため、イギリス本国政府から民衆煽動の廉(かど)で投獄され、出獄後には青年仏教徒連盟（ＹＭＢＡ）の結成、改組して仏教徒団体総評議会（ＧＣＢＡ）を結成して不服従抵抗を展開しました。その間、三度も投獄されながら、釈放後は納税ボイコット運動を起こして終身刑を宣告され、日本がイギリスに宣戦布告する二年前の一九三九年（昭和14年）に獄死しました。

オッタマ僧正について、ビルマの歴史学者マウン・マウン博士は『ビルマとネ・ウィン将軍』の中

で次のように記しています。

〈今まで西欧の歴史や地理の本に、その国民は体軀矮小で取るに足らぬ人間であると書かれてきたアジアの日本が、二十世紀初頭ロシアに大勝を博したため、日本はビルマの志ある青年たちの目に正に旭日昇天の国として映った。日本を見たオッタマは、東京の大学で一時教鞭をとってからインドを経てビルマに帰って来て、近代国家建設のための日本国民の団結と勤勉について、素晴らしい土産話をたくさんするのであった。〉

現在、ラングーンにはオッタマ公園があり、その横の十字路には高いオッタマの像が建立されています。彼は〝ビルマのマハトマ・ガンジー〟というべく、毎年オッタマの誕生日には、その生地であるアラカン州のアキャブで、彼を偲ぶ追悼式が行われているといいます。オッタマは、ビルマの独立回復を見ることなく世を去りました。しかし、かれの不屈の精神は独立の志士たちに継承され、果敢な独立運動の展開を生み出したのであります。

大東亜戦争とバー・モウ博士

大東亜戦争中、日本軍政下で初代のビルマ首相となったバー・モウも、子供の頃に日露戦争の勝利を聞いた感激を、次のように述べています。

〈私は今でも、日露戦争と、日本が勝利を得たことを聞いたときの感動を思い起こすことができる。私は当時、小学校に通う幼い少年に過ぎなかったが、その感動はあまりに広く行きわたってい

たので、幼い者をもとりこにした。たとえば、そのころ流行した戦争ごっこで、幼いわれわれは日本側になろうとして争ったりしたものだ。こんなことは、日本が勝つ前までは想像もできぬことだった。（中略）それはわれわれに新しい誇りを与えてくれた。歴史的にみれば、その勝利は、アジアの目覚めの発端、またその発端の出発点とも呼べるものであった。〉（『ビルマの夜明け』）

バー・モウが生まれたのは一八九三年（明治26年）、すでにビルマは三次にわたる対英戦に敗れ、すっかりイギリスの植民地支配下に置かれていました。日露戦争がはじまったのは、彼が十一歳の時であります。

彼はラングーン大学、カルカッタ大学卒業後、英ケンブリッジ大学で弁護士資格をとり、仏のボルドー大学に留学し、ビルマ人としては最初の哲学博士の称号を得ました。帰国後、ラングーン大学教授を経て弁護士となり、反英独立運動の闘士として活躍しました。

彼はスカルノやナセルばりのハッタリ的独裁者ではなく、ネルーに近い教養と緻密な才知を兼備した巨人的風格の持主でした。彼は民族運動を志すと、まずシンエタ（貧民）党を結成しました。彼の存在は大きく、一九三七年、ビルマが正式にインドから分離し、英の直轄植民地となってから、初代の首相に就任しました。ヨーロッパで第二次大戦の様相が濃くなると、一方では日本と政治的接近工作を開始し、三九年には内閣総辞職を行いました。

彼は野にくだると「自由ブロック」を結成して、総裁に就任（書記長はオン・サン）。ビルマ全土でデモや集会を行い、それがたちまち反英国民運動となってふくれあがりました。一方では日本軍やイ

ンドの独立派と接触を深め、一九四〇年（昭和15年）にはオン・サンら三十人の志士を国外に脱出させました。脱出先は海南島で、彼ら青年志士に日本軍の教育を受けさせ、ビルマ国軍の基礎を作らせるのが狙いでした。

しかし、このような運動の中心人物がバー・モウであることがイギリス側にわかり、彼は英官憲に逮捕されて無期刑に処せられました。

三十人志士と南機関

バー・モウの指示により、オン・サンら三十人志士がビルマをあとにして海南島に向かったのは、一九四〇年（昭和15年）八月十四日のことでした。彼らは中国密航者を装い、ノルウェーの貨物船ハ

昭和18年11月，東京で開かれた大東亜会議に出席したバー・モウ首相のために，伊原宇三郎画伯（帝展特選３回，日本美術家連盟委員長）が描いた肖像画（油絵）

イリー号に乗り込みました。それは冒険に等しい旅でした。

彼らの中には後の大統領ネ・ウィンもいました。当時、オン・サンは二十五歳、ネ・ウィンは二十九歳。オン・サンは、祖父が反英ゲリラの指導者として処刑されたこともあって、熱烈な抗英的愛国者として成長し、三十名の志士の代表には年少のオン・サンが選ばれました。

海南島三亜での訓練は、世界でもっとも軍紀の厳しい日本軍の指揮下で行われたわけで、苛酷そのものでした。非戦闘員の長であったオン・トクは、当時の辛さを著書『わが冒険』の中で述べています。

〈毎日の日課は余りにも日本的で、日本の国旗への敬礼、皇居遥拝、そして日本の歌を日本語で歌うというものだった。彼らはこれをも軍事訓練の一部だとする人種主義に凝り固まっていて、我々はどうしてもついてゆけなかった。〉

しかし、オン・サンを中心とする幹部たちは、海南島における日本人の指導方法を批難するようなことはしませんでした。彼らは、日本の協力を得て、純粋なビルマ国軍をつくることに強い使命感を抱いていました。

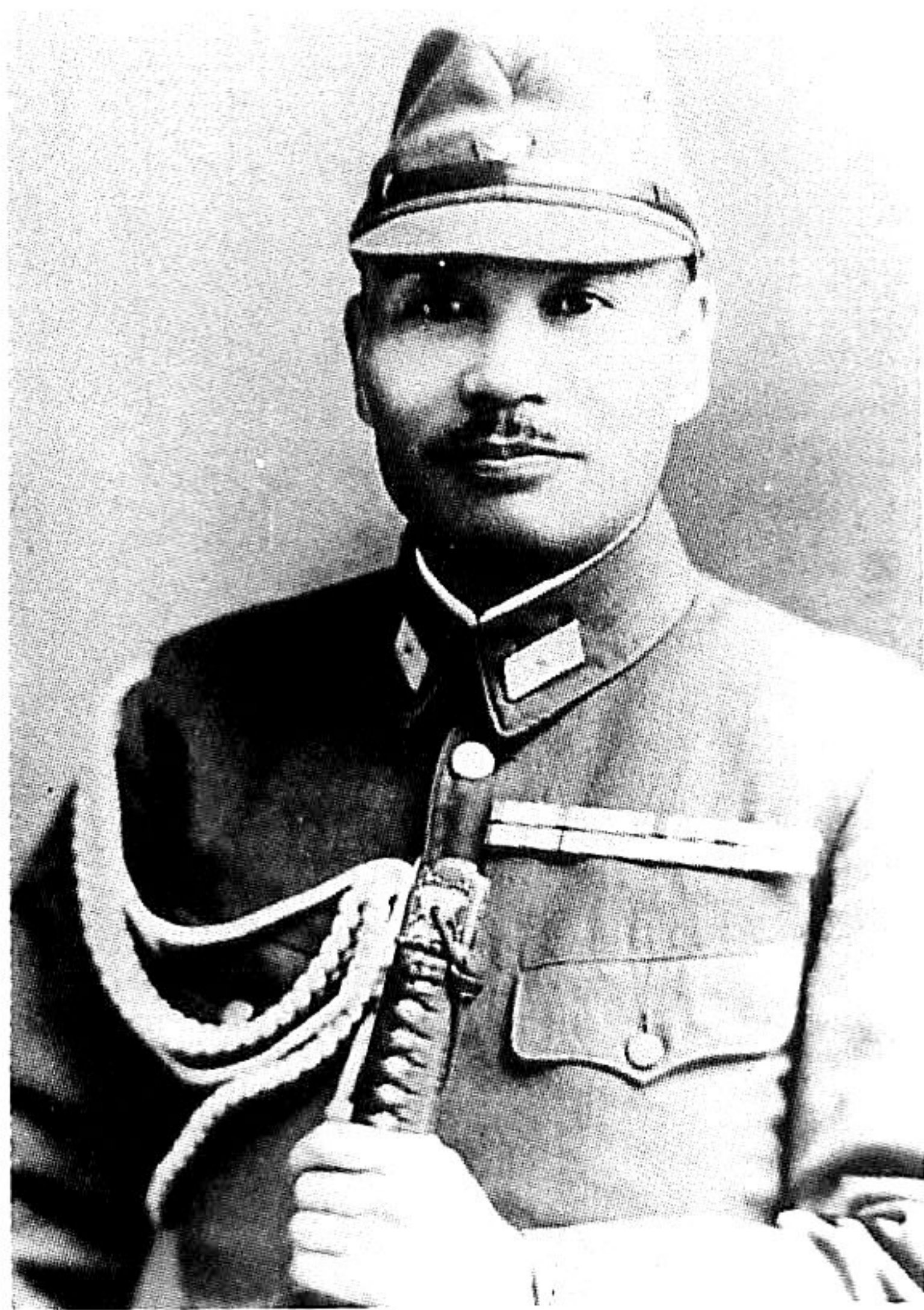
海南島で彼ら三十人を指導したのは、対ビルマ秘密工作機関として作られていた「南機関」（大本営直属）です。その機関長鈴木敬司大佐は、恩賜の軍刀をもらった秀才で、バー・モウも鈴木大佐を、「例えば英国近代史に出てくるアラビアのロレンスのような非凡な人物であった」と評しています。鈴木大佐も「独立は人に乞うたり、人が与えてくれるのをあてにして得られるものではない」と

指導したし、南機関に所属した日本の将校たちは、「自分の生命をビルマ独立のために捧げる」と誓っていました。

ビルマ独立義勇軍（BIA）の進撃

昭和十六年（一九四一年）十二月八日、日本はついに開戦しました。三十人の志士たちはタイのバンコクに集まり、ビルマ独立義勇軍（Burma Independence Army：BIA）を編成しました。それはイギリスの植民地となって百年間、軍隊をもたなかったビルマにとって画期的なできごとでした。

このビルマ独立義勇軍の生みの親である鈴木大佐は「ボ・モージョ」という名前を与えられまし

ビルマで刊行された『THE MINAMI ORGAN』（南機関）に載った30人志士の面々。（前列中央がオン・サン，その右が鈴木大佐）

鈴木敬司大佐（後に少将）

た。「ボ・モージョ」というのはビルマ語で「稲妻・雷帝」を意味します。それまでビルマは植民地による暗黒支配が続いたために、いろいろな予言が信じられていました。その中に、英国は南東から稲妻のように襲いかかる日本軍によって滅ぼされる、という内容のものもありました。また鈴木大佐は、かつて英国のビルマ占領により、タイにのがれた直系のビルマ皇太子ミングンの子孫だという噂さえ広まりました。

十二月三十一日、バンコクで日本伝統の古式に則り出陣式が開かれました。このビルマ解放軍の司令官は、ボ・モージョとなった鈴木大佐で、オン・サンは少将に任命されました。こうしてビルマ解放軍が編成せられ、ビルマにとっては第四次対英戦争がはじまったのであります。

日本軍は四個師団をもって、わずか五カ月でビルマを制圧しました。それは文字通り稲妻のような速さでした。英国の陸軍少佐ジョン・L・クリスチャンは『ビルマと日本人の侵入』の中で、日本軍の太平洋地域および東南アジアでの勝利について、「歴史上、最も驚くべき軍事的業績」と述べています。日本軍とビルマ独立義勇軍の進撃によって、ビルマ人の間に英雄的行為も生まれました。そのひとつは、戦時中のアジア人の間で伝説とさえなりました。その物語を、バー・モウは次のように書いております。

〈それはサルウィン川での戦いのさ中のできごとであった。日本人将校がビルマ人にボートで対岸へ渡らせてくれるように頼んだ。船の通路は数カ所の英国陣地からまる見えで、その射程距離にあった。今行くことは死ににいくようなものだった。しかし四人のビルマ人船頭が進み出た。

二人の船頭と日本人将校が船底に伏せ、残りの二人の船頭はまっすぐ平然と立って櫓を漕いだ。船が中ほどに来て、岸からまる見えになった時、二人の漕ぎ手は集中砲火を浴びて倒れた。残る二人の船頭は一言もしゃべらず、すぐ持ち場に着いて漕ぎだした。ちょうど船が対岸に着いた時、この二人も弾丸にあたって死んだ。これは例のない英雄的行為であった。〉（『ビルマの夜明け』）

一九四二年四月初め、ついに日本軍はサルウィン川を渡り、対岸の英国要塞マルタパンを占領しました。続いて追撃戦にうつり、ペグーとラングーンへと押し進みました。ボ・モージョの部隊も日本軍のあとを追いました。新しくできたビルマ軍はいたるところで歓迎され、青年たちは部隊への志願を競って申し出て、そのため武器が不足し、竹槍で間にあわせなければならないほどでした。

鈴木大佐が「雷帝（ボ・モージョ）」と称して30人志士と共に行けば，ビルマ人たちは歓呼して迎えた。白装束の馬上姿が雷帝こと鈴木大佐。

ＢＩＡから鈴木雷帝への感謝状

ビルマ独立義勇軍（ＢＩＡ）は、オン・サンやネ・ウィンらの三十人志士を中心に創設された。それには雷帝（らいてい）・鈴木敬司（すずきけいじ）大佐が機関長をつとめた南機関（鈴木大佐の変名・南益世より命名）が大きく関わっていた。

大本営の命により帰国（昭和17年）する鈴木大佐へ、ＢＩＡは感謝状と軍刀一振を贈った。

次に紹介するのは、感謝状の後半部分だが、前半は、ビルマ建国からイギリスの侵略について述べ、日本を「アジアの前衛」と位置づけ、日本軍と独立義勇軍が連合軍をビルマから追い払った勝利を「ビルマ独立を求める運動の歴史の中でも、大きく讃えられることになろう」としている。そして、次の文が続く。

「父親がその子供に教えさとすがごとく、その子供を守るがごとく、雷将軍は真の情愛をもって、ビルマ独立軍の兵士全員を教え、全員をかばい、全員のことに心をくだいてくれた。ビルマ人は、その老若男女を問わず、このことを忘れることは決してない。

今日の世界で確固とした独立を自らのものにするためには、ビルマ独立軍のような地上軍だけに頼るわけにはいかない。雷将軍は、かくてビルマ海軍の創設にも着手したのである。

ビルマのためにこのような骨折りをした雷将軍は、いまや日本に帰らんとしている。われらは、ビルマ独立軍の父、ビルマ独立軍の庇護者、ビルマ独立軍の恩人を末長くなつかしむ。将軍のビルマ国への貢献も、いつまでも感謝される。たとえ世界が亡ぶとも、われらの感謝の気持が亡ぶことはない。

日本にお帰りのあかつきには、ぜひとも日本

の天皇に、東条首相に、最高指導層に、そして老若男女に、報告していただきたい。将軍が身をもって体験されたわれらビルマ人の好意、忠誠心、勇気、日本兵への助力、さらに、日緬間の友好協力を求めるわれらの努力を――。また、ビルマがす速く独立を達成するためには次のことが必要である。

(1)　雷将軍の創設になるビルマ独立軍の強化拡大と武装状態改善。
(2)　ビルマ海軍の大小艦船の所有。
(3)　ビルマ空軍の創設（これがやがて可能になることをわれら信じて疑わない）。

雷将軍の健康と繁栄を心から願う。いかなる旅にても決して危害を加えられることのないように、安らかさと幸せと、そして長寿を祈る。われらビルマ独立軍兵士は、将軍のために祈り、将軍の思い出をいついつまでも大切にする。将軍にもわれらビルマ独立軍のことをいつまでも思い出していただけるよう念じつつ、この告別の辞を美しい緑の小箱にいれて、お贈りいたしたい。

ビルマ独立義勇軍」

昭和五十六年、ビルマ政府は独立に関与した鈴木大佐をはじめ七人の日本人、川島威伸、杉井満、泉谷達郎、高橋八郎、赤井八郎、水谷伊那雄の各氏に、ビルマ最高の栄誉「オン・サン賞」を授与し、最高の敬意を表した。　【柚原】

ビルマ独立義勇軍から鈴木敬司大佐へ贈られた感謝状。左側の絵は，大佐がビルマ兵を抱き上げ，その兵士がビルマ鉄鎖の鍵を開けているところ（節末亡人所蔵）

AUN SAN TAGUN TITLE（オン・サンの旗）の勲章は，ビルマ最高の栄誉。日本での授与は7人だけである。

ビルマ独立精神の昂揚

昭和十七年（一九四二年）日本軍がビルマに進駐すると、バー・モウはモゴック刑務所を脱獄（4月13日）して日本軍に合流し、八月にはビルマ行政府長官となりました。

緒戦の日本の勝利は、ビルマの人々の心に、久しい間眠っていたアジアの意識を喚びさましました。タキン派（民族解放派）の指導者コドー・マインは、

〈私の人生で今日ほど幸せだったことはない。わが国土から英国が追放され、偉大なアジア民族が馳せつけて他のアジア民族を解放してくれた。我々に古代の遺産と国土と自由、宗教、文化を取り戻してくれた。私は死ぬ前にこの幸せな日を見ることができた喜びに泣いた。〉

と、ビルマ各地を遊説してまわりました。

共産党の指導者タントンの言葉も、極めて素直でした。

〈日本はまちがいなく我々に独立を与えてくれる。これを否定する人間は敵方の宣伝をまいている英国の間諜だ。我々の独立が完全に根付き、我々がそれを敵から守ることができるまで、日本人にとどまってくれるよう頼むべきだ。〉

また、戦後の初代大統領となったウー・ヌーは、戦時中の外交協会の機関紙「ビルマ」一九四四年九月号で、

〈モンゴル民族再興の闘士であり代表者である日本は、東洋におけるアングロサクソンの支配と影

響を取り去ることに成功した。アジア民族統一の業はまさしく歴史的必然であり、これはたやすく成就したものではなく、また気楽に維持できるものでもない。（中略）そしてこの共栄圏を建設するに際し、東条首相のごとき先見の明ある立派な信じるに足る指導者をいただく東亜十億の民は、実に幸運である。〉

と書いて、大東亜共栄圏構想を支持しています。

さらにオン・サンのごときは、新設ビルマ軍の軍事訓練と通信に、日本語を使用することに同意しました。バー・モウはそれまで日本に対し、学校や官庁で日本語を使うことをキッパリと断わっていたのです。そこで、バー・モウが、オン・サンにこのことを詰問すると、「どうせ日本軍が我々の軍

昭和18年３月，バー・モウ博士一行が来日した時の記念撮影。前列右から，杉山元参謀総長，オン・サン司令官，嶋田繁太郎海相，タキン・ミヤ長宮，バー・モウ博士，東条英機首相。

隊をこれから長く訓練するのだし、そんな大した違いはない」と答えました。

一九四三年（昭和18年）三月、バー・モウはオン・サンを帯同して日本を初訪問し、天皇陛下に謁見、東条首相と会談しました。七月には新憲法の最終草案を正式に承認して、バー・モウを満場一致で国家代表に選出。八月一日にはビルマ独立を宣言して新憲法を制定、米英両国に宣戦を布告し、ラングーンで日本（特命全権大使・沢田廉三）との同盟条約に調印しました。

その時の独立宣言は、

〈本日ビルマは五十年以上にわたる英国の領有の後、世界の自由にしてかつ主権を保有する国家の間にその当然占むべき地位を回復せり。ビルマは連綿として絶えざる長き歴史を通じ、誇りをもって当然の地位を占め来り、その間、ビルマの光栄は天における日月の如く輝きたり。〉（当時の日本の新聞より）

から始まる格調高いものでした。

バー・モウはその翌日の夕方、全国民に向けてラジオを通じて演説。

〈今日の歓喜がいかに筆舌を越えるものであるか、いう必要はない。多くの人たちは、生存期間中に見ることをほとんどあきらめていた解放のこの日を、まのあたりにして泣いた。しかし我々は夢だけではなく、現実があることを知っている。いまや戦争によって独立を手にしたからには、この戦争で独立を守らねばならぬ。〉

外相になったウー・ヌーも、歴史における日本の役割を強調。

〈歴史は、高い理想主義と、目的の高潔さに動かされたある国が、抑圧された民衆の解放と福祉のためにのみ生命と財産を犠牲にした例を、ひとつくらい見るべきだ。そして日本は人類の歴史上、初めてこの歴史的役割を果たすべく運命づけられているかにみえる。〉

新しくビルマ国軍司令官となったネ・ウィンも、日本軍との緊密な協力によって、ビルマの独立を達成することを宣言し、ビルマ婦人連盟会長キンママ・モウ女史（バー・モウ夫人）も、日本の新聞に「私たちはこれまでビルマの女性としてやってきた。これからはアジアの女性たらねばならぬ」とさえ語っています。

また、独立を宣言した八月一日、三十人の若者を日本の陸軍士官学校（当時の校長は沖縄で自決した牛島満中将）に入学させています。その後も、多くのビルマ青年が入学し、帰国後はビルマ国軍で枢要な地位につき、独立後の国家を支えていったのです。

反ファシスト抵抗運動とオン・サンの裏切り

バー・モウはその後、大東亜会議で訪日（134頁参照）し、昭和十九年秋にも訪日しました。その間、ビルマ国内の危機は深刻化していました。ビルマの独立にとって重要なことは、勝利者の側につくことだとする日和見主義者が頭をもたげていたのです。

彼らは日本人をファシストと非難し、その運動を反ファシスト抵抗運動と呼びました。この派は主

牛島中将とビルマ人士官候補生

牛島満（うしじまみつる）陸軍中将（鹿児島、陸士第20期、大将）といえば、今でも多くの人々は、昭和二十年六月二十三日早暁、「秋をまたで枯れゆく島の青草は皇国の春によみかへらなむ」の辞世を遺して自決した、沖縄防衛軍司令官としてその名を覚えている。

戦死者十七万とされる沖縄戦は多くの住民を巻きぞえにした悲惨な戦いだったこともあり、海軍の大田實中将（当時少将）の最後の電文「沖縄県民斯ク戦ヘリ　県民ニ対シ後世特別ノ御高配ヲ賜ランコトヲ」思い起こす人が沖縄には多いともいう。

この牛島中将が陸軍士官学校の校長として着任した翌十八年八月一日、ビルマはイギリスの桎梏から解かれ独立した。

記念すべきこの日、ビルマから三十人の若者がビルマ人第一期士官候補生として、牛島校長の陸軍士官学校に入学してきた。

それから三十年余も経た一九七四年（昭和49年）のことである。

ビルマの首都ラングーンで「沖縄の戦い」という日本映画が上映された。すると、ビルマ政府発行の英字新聞「ワーキング・ピープルズ・デーリー」に「我々の知っている沖縄の英雄」という大きな見出しのもとに、牛島中将の写真まで添えて一通の投稿記事が載った。

投稿者はボーム・タイメン。士官候補生として来日した三十人の一人だった。

彼は、入学したその日、牛島中将が校長として「大変暖かい歓迎の辞を述べられた」ことに対し「我々を自分の息子のように愛情をもって取り扱われた態度に深い感銘を受け、そして感

激した」ことから書き起こしている。

牛島校長の自らには厳しく他には温かい人柄についてのエピソードもいくつか交え、その牛島校長が沖縄へ赴任する際の「一九四五年の二月のある非常に寒い朝」に「祖国に帰ったら、必要あらば命を犠牲にしても諸君の国民と諸君の軍隊に奉仕してもらいたい」と語った「感動的な別れの言葉」は「今でも忘れられない」と感慨深く記している。

このような牛島校長だったから、候補生一同は「心から尊敬した」とも記す。

牛島満大将
明治20年，鹿児島県に生まれ，同41年，陸士卒。大正５年陸大卒。昭和11年，歩兵第１連隊長。同12年，少将・歩兵第36旅団長。同14年，中将・第11師団長。同17年，陸軍士官学校長。同19年，第32軍司令官として沖縄へ赴任し，同20年６月23日早暁，古式にのっとって自決した。陸軍大将に昇進。

沖縄戦における牛島中将の自決については、「我々ビルマの候補生に教えられたことを身をもって実行された」と受け止め、日本の軍人精神を讃えている。

この一文に表われているように、ビルマには今でも牛島中将を通じて大東亜戦争の「遺産」を大切にしている人がいる。我々日本人はこのことを誇りとすべきなのであり、この「遺産」を現代に生かし、そして次代に伝える義務を背負わされているのである。背負うべきは「贖罪意識」ではない。【柚原】

として、ビルマ軍の有力指導者たち、タキン党の社会主義者、秘密共産党員等からなっていました。彼らは組織能力に優れ、ビルマ軍を自派につけることによって最強の勢力となりました。
　当時の陸軍大臣であったオン・サンとその一派は、もし英国が勝ったら、英国に投じて独立を維持しようと狙っていました。そのため彼は、一方で国内の反ファシスト勢力と通じ、英陸軍スリム中将とも結ばれていました。
　したがって彼の出所進退は、慎重であり巧妙でした。一九四五年（昭和20年）二月一日には、「我々は日本及び東アジア諸国との緊密な団結のもとに、英米から日本を護るという民族的責務に対して、自らを無条件に捧げる」と宣言していました。そして三月中旬になると、彼はビルマ陸軍を率いて、第一線に出て戦うとして出陣式を企画しました。出陣式の場所はシュウェ・ダゴン聖寺の大広場です。出陣式は盛大に行われました。この式には、バー・モウ代表、オン・サン陸相、日本軍代表、石射猪太郎ビルマ大使らが参列しました。
　ところがオン・サン陸相は、自らこの部隊を率いてブローム方面に向けて出陣したと見せかけ、ラングーンを離れるや三月二十七日に、突然ペグーの日本人部隊を攻撃して、公然と反日ゲリラ戦を展開しはじめたのでした。まさに明智光秀のような日本軍に対する裏切りでした。
　かくして親英的なビルマ愛国軍が結成され、続いて日本軍はラングーンを撤退。四月には英軍がビルマを再占領し、ドーマン・スミス英総督が戦後のビルマ政策を発表しました。しかしバー・モウとその同志たちは、極めて危険な状況のもとに、タイ国境近くに移動し、最後の最後までビルマ国土の

一角に独立の旗を死守していました。やがて石射ビルマ大使は日本降伏を通告し、バー・モウは日本に亡命しました。

オン・サンの最期とその生涯

このあわただしい動きの中にあって、オン・サンらはセイロン（現在のスリランカ民主社会主義共和国）で、マウントバッテン東南アジア連合軍総司令官と会談しました。親英的な愛国軍は、正式の「ビルマ軍」と改称し、「反ファシスト人民自由連盟」という組織も作られました。

一九四六年には反ファシスト人民自由連盟の第一回全国大会が開かれ、オン・サンは初代の議長に選ばれ、九月には正式に首相に就任。そして十一月には、制憲議会総選挙と独立を英総督に要求しました。英議会はビルマ問題を討議し、一九四七年一月、オン・サン首相とアトリー首相の間でビルマ独立協定が調印されました。この協定は制憲議会と自治領並の待遇を約束するもので、日本が与えた独立にはまだほど遠いものでした。

四月に制憲議会総選挙が実施せられ、反ファシスト人民自由連盟が圧勝しました。そして六月の制憲議会では、英国との断絶が可決。このまま推移すれば「便乗主義者」のオン・サンらによって、ビルマは共産派に牛耳られることに危機感を抱いたウ・ソー元首相の率いる過激派は、七月十九日、オン・サンら閣僚七名を、会議中暗殺しました。時にオン・サン三十二歳。

重ねて、短かったオン・サンの生涯を思う時、彼の真意はいったいどこにあったのでしょうか。

彼が海南島に脱出したのが一九四〇年八月、時に二十五歳。翌年十二月にはビルマ独立義勇軍を結成し、日本軍とともにビルマに進駐するや、全国民から歓呼をもって迎えられました。バー・モウ内閣が成立すれば初代の陸軍大臣となり、バー・モウとともに日本を訪問。しかし、日本が敗北の瀬戸際に立たされると、日本への義理を捨て、国内の反日派と通じて英軍に寝返りました。彼はその心境をバー・モウに書き送っています。

〈私には日本人を責める気持はありません。戦略的な見地に立ってみれば、解って頂けると思いますが、(中略)究極の勝利をおさめるのは我々の大義であるという確信があります。戦争があろうとなかろうと、平和であろうとなかろうと、我々の国の独立を求める戦いは勝利するまで続けなければなりません。私は最善をつくします。貴方には今は理解しかねるかも知れません。でも信じて下さい。しばらくすれば私の真意がどこにあったか、判って頂けるでしょう。〉

この手紙はあわただしい陣中で走り書きしたものですが、彼の本音を伺(うかが)うことができます。この手紙の実物は、今もバー・モウの遺族のもとに保管されています。この手紙はオン・サンの本心を探る重要な資料ですが、もうひとつ紹介しましょう。『戦史叢書・シッタン・明号作戦』に、オン・サンと南機関以来の軍事顧問・高橋八郎大尉との対談が載っています。

高橋――今後あなたはどうするつもりか。

オン・サン――これからも引き続き日本と行動を共にすることはビルマの滅亡を意味する。

高橋――英国とはどんな交渉をされているのか。

オン・サン―理想とするところはビルマの完全独立である。それが不可能なら自治領だ。この線で交渉中である。またもし、以上の二つとも承認されないときは、飽くまで英国と戦うつもりである。ビルマの独立を主張するには、少なくともここで反日の姿勢を示し、英国に具体的に証を立てねばならぬ。だから叛乱を起こしたのである。

オン・サンは果たして日本を裏切ったのでしょうか。彼にはもともと親日・反日・親英・反英の意識を超えて、祖国独立への悲願があり、その戦略が常に優先していました。ビルマの独立回復という立場に立つ時、彼の出所進退もやむを得ないものがありました。もし彼がバー・モウとともに日本に亡命していたら、戦後のビルマは収拾できない混乱に陥っていたかもしれません。

彼としては「ビルマ独立」という至上の悲願を達成するために、反ファシストを建前としながら、英軍と交渉する道を選びました。英国としても、すでに独立の美酒を味わったビルマ民衆の心情を無視することはできません。オン・サンはそこを読んで奔走しました。

彼が歴史に登場した期間はわずかに七年。目的のために手段を選ばないかに思われる変幻自在の働きはレーニンを思わすものがあり、独立達成の寸前に暗殺された点はガンジーに似ており、三十二歳の若さで命を断たれた点は吉田松陰を思い出させます。

史上、志半ばにして暗殺された者は、しばしば神として崇められます。オン・サンは今ビルマ独立の英傑として他の六人と共にオン・サン廟に祀られ、暗殺された七月十九日は「殉死の日」として、国民追悼の記念日に制定されています。かくしてオン・サンは、ビルマ連邦（ミャンマー連邦）共和国

とともに生き続けるのであります。

「歴史は半分しか語られなくなった」

バー・モウは戦後、日本に亡命し、新潟県六日町で潜伏生活をはじめました。国際情勢の好転を待って登場の機会を伺っていましたが、その見込もなく、終戦の年の十二月、英占領軍に自首し、巣鴨の拘置所に収容せられました。特赦されて一九四六年（昭和26年）八月に帰国し、マハバマ党を結成。戦後のビルマにあっても、反英・反左翼・議会主義擁護の路線を貫きました。

彼は英国統治下にあって二回、戦後のネ・ウィン軍政下においても迫害を受け、生涯に投獄せられること六回。日本進駐下にあっても、日本軍の手によって暗殺の対象とすらなりました。それでも日本をうらまず、日本の友として政治信条を貫きました。

彼が『ビルマの夜明け』を書いたのは、現在横行している歴史の歪曲を正すためでした。彼はその序文の中で、著作の動機を述べています。

〈ひとつの歴史の曲解の例をあげよう。時間的順列では、われわれの植民地主義からの解放は、一九四三年に英国が初めて敗北を喫し、ビルマから去ってわれわれが独立を宣言したときから始まる。ビルマ軍は独立を獲得するために英国軍と中国軍に対して果敢に戦ったのであった。しかし、この重大な事実は、独立がその数年後、植民地勢力からの贈り物としてわれわれの手に入ったとするビルマ自身の戦後の宣言によって隠されていた。このようにしてわれわれは戦争中のもっとも重要な

歴史的業績のひとつを現実には否定してきたのである。〉
〈ビルマ独立義勇軍の誕生もまたそのひとつだった。戦争の真只中にあらわれたこの独立義勇軍はこの種のものでは初めてのもので、ビルマ中にめざましい本格的な軍事行動を展開するのに大きな役割りを果たした。英国の植民地主義権力がビルマから追いだされたとき全国民が喜びで湧きかえったことも無視されてきた。〉
〈いまや物語は半分しか語られなくなった。反英国的なものはすべてぬぐい去られ、物語は初めから終わりまで、戦争の最後の時期の反日暴動と、あふれるほどの憎悪に満ちた反日感情と反日の声のこだまでつづられていった。〉
彼の「物語は半分しか語られなくなった」という指摘は、戦後日本の「ビルマ史」にも当てはまるのではありませんか。日本で語られるビルマ史には、日本の果たした役割が抹殺され、バー・モウが嘆いた「戦争の最後の時期の反日暴動と、あふれるほどの憎悪に満ちた反日感情と反日の声」が、日本にも反映しているように思われてならないのです。

日本への頂門（ちょうもん）の一針（いっしん）

バー・モウが英文で書いた『ビルマの夜明け』はイギリスで発刊（一九六八年）され、日本でも翻訳（昭和48年）されましたが、実はビルマでは刊行されていないのです。それが果たせないところに、歴史が「半分しか語られなくなった」バー・モウの嘆きが実証されていましょう。ところが、真

実は必ず現われるものなのです。『ビルマの夜明け』がイギリスで発刊された時、「ロンドン・タイムス図書週報」（一九六八年5月23日号）は、次のように書評をのせています（以下は、松田福松氏訳による）。

〈ビルマを長いイギリスの植民地支配から解放したものは誰か。それはイギリスでは一九四八年、独立を与えたアトリー首相の労働党内閣だというのが、常識になっている。しかしバー・モウ博士は、この本の中で、全く別の歴史と事実を紹介し、日本が第二次大戦で果たした役割を公平に評価している。〉

「ロンドン・タイムス」は、このようにバー・モウの著書の主題を的確に摑んで、著書の中から次の言葉を引用しています。

〈真実のビルマ独立宣言は、一九四八年一月四日ではなく、一九四三年八月一日に行われたのであって、真実のビルマ解放者は、アトリー氏とその率いる労働党政府ではなく、東条大将と大日本帝国政府であった。〉（序）

〈歴史的にこれを見るならば、日本ほどアジアを白人の支配から離脱させることに貢献した国はない。しかしまたその解放を助けたり、あるいは多くの事柄に対して範を示してやったりした諸国民そのものから、日本ほど誤解を受けている国はない。これは実に日本が、その武力万能主義者と民族の夢想とのために謬（あや）まられたためである。〉

〈もし日本が武断派的独断と自惚れを退けて、開戦当時の初一念を忘れず、大東亜宣言の精神を一貫し、南機関や鈴木大佐らの解放の真心が軍人の間にももっと広がっていたら、いかなる軍事的敗

北も、アジアの半分、否過半数の人々からの信頼と感謝とを、日本から奪い去ることはできなかったであろう。日本のために惜しむのである。〉
〈そうは言っても、最終的には日本が無数の植民地の人びとの解放に果たした役割は、いかなることをもってしても抹消することはできないのである。〉
〈私は敗戦後の日本が、あらゆる屈辱と軽蔑に対して、何の抗議も抵抗もしないどころか、占領政策に便乗し阿諛迎合至らざるなき変わり方に、日本人は奴隷民族に堕落してしまったかと疑った時期があった。しかしその後の日本経済と、現実対応の姿を見て、長い目でみるならば、日本の敗戦は実際に於ては歴史的意味に於ける敗北ではなかったのではなかろうか。この敗戦は日本人に新しい現実主義を教え、日本人本来の偉大さと、世界列国の間に伍する本来の地位とを、発見させたのではなかろうか。〉

私はここでこの見解を評するつもりはありません。それよりも、当時、日本とともにイギリスに敵対したバー・モウの著書を刊行し、このように紹介している英国のふところの広さに驚くのです。

バー・モウは一九七七年（昭和52年）五月、ラングーン郊外で静かに息を引きとりました。時に八十四歳。日本の新聞はベタ記事でその事実を報道（10数行）しただけでした。福田赳夫氏は昭和五十三年に首相としてビルマを訪問し、その後も歴代首相や外相が訪問しましたが、日本と運命をともにしたかつての戦友に対して、敬意を表してもらいたかったと願うのは、私だけでしょうか。

【谷口次男】

五　インド——独立に果たした日本の役割

ラス・ビハリ・ボースとスバス・チャンドラ・ボースの連携

日本で行われているチャンドラ・ボースの法要

八月十八日はスバス・チャンドラ・ボースの命日です。毎年、ボースの遺骨が眠る蓮光寺（東京都杉並区和田）で法要が営まれます。先輩に連れられて、今年初めて参列してみました。今から四十六年も前に亡くなった一人のインド人の慰霊祭が行われると聞いて、好奇心もありました。実は私はこれまで、ボースの名前は聞いたことがある程度で、その実績などはほとんど知りませんでした。

蓮光寺の境内に入れば、正面にボースの胸像が建っています。その後には、インドのラダ・クリシュナン大統領、ネルー首相、インディラ・ガンジー首相等が参拝した時に書いた短い弔辞が、記念碑として建立されています。

法要は寺の二階で行われました。そこに、黄金の厨子に入ったボースの遺骨が、本尊の右側に安置されています。望月康史住職が導師となって約一時間半、日蓮宗方式で営まれ、その後、懇親会となりました。参加者はインド大使館の人々をはじめ、在京インド人、元光機関の林正夫氏、留学生と縁の深かった松島和子女史等約五十名。そのほとんどが、ボースとともにインド独立運動に献身した光機関の旧軍関係者でした。

彼らは五十年近い前の事を、目を輝かせながら、まるで昨日の事のように語り、当時のインド国歌やインド国民軍（Indian National Army: INA）の進軍歌「征け征けデリーへ」をヒンズー語で合唱するのです。

チャンドラ・ボースの遺骨が眠る蓮光寺。その庭に建てられた記念碑。参拝したネルー首相，プラサド大統領，インディラ・ガンジー首相の弔辞が刻まれている（左壁）

蓮光寺にチャンドラ・ボースの胸像が建立され，平成２年８月18日に除幕。除幕式にはインド国民軍（INA）の元戦士たち多数がインドから参列した。（左は名越）

また、彼らは戦後、何回もインパールの古戦場を訪ね、インドを訪問し、現地との交流は今も脈々と続いています。二十九歳の私が質問すれば、持参したアルバムを出して、我が事のように熱心に説明してくれます。

それによれば、ボースの銅像はインドの各地に建立され、インド建国の英傑として未だに〝生きている〟そうです（「カバー写真解説」参照）。私は、大東亜戦争の遺産がこんな形でインドに生きているのを実感して、すっかり驚きました。それに、ボースの一代はダイナミックで、壮大なドラマです。

＊

現在、我が国は経済大国となって、日本製のテレビや自動車がインドにも氾濫しているでしょう。しかし、彼らにどれだけの精神的な感動を与えているというのか。それに較べて、戦前の日本が果した役割は、かくも活々と感情的に現地に生きているのです。我々は先輩が残した大切なものを忘れているのではないか――。

名状しがたい感銘を持って会場を後にしました。その後、日印関係の歴史やボースに関する著述を読みあさりました。探せばたくさんの本が出ています。私は若い日本の青年に伝えたく、日本をバックにして活躍した二人のボースを主役にして語りたいと思います。

ビハリ・ボースを救った在野の大アジア主義

今日、あまり語られることはないのですが、日本を拠点にして、独立運動を展開したインド人はけ

っして少なくありません。

日本が彼らの活動の拠点になったのは、日本が日露戦争に勝利したからでした。ガンジーの直系で独立インドの初代首相となったジャワハルラル・ネルーは、当時のインド人の日本観について戦後、次のように述べています。

〈日本が大国ロシアを破った時、インド全国民は非常に刺激され、大英帝国をインドから放逐すべしという独立運動が全インドに拡がりました。ボース氏が新興国日本を頼って亡命した気持ちはよく解ります。〉（昭和32年10月13日、ビハリ・ボース息女哲子氏への談）

この「ボース」とは、スバス・チャンドラ・ボースではなく、インド独立連盟初代総裁を務めたラス・ビハリ・ボースのことです。ビハリ・ボースとチャンドラ・ボースは、二人ともベンガルの名家

ラス・ビハリ・ボース像
この銅像は1986年（昭和61年）5月25日，カルカッタのスレンドラナート公園に建立された。高さ2mの台座の上に立った等身大の像である。出生地の西ベンガル州政府の手によって建てられ，建設大臣ジャティン・チャクラボリティ氏をはじめ多数の独立運動の志士や市民によって除幕された。

の出身ですが、家系等に特別なつながりはありませんでした。

*

十六世紀以降のインドには、ヨーロッパの植民地主義の触手が伸び、ポルトガル、オランダ、英国がそれぞれに覇を競い合っていました。そして、最終的には英国がこの戦いに勝利し、すでに衰退期を迎えていたムガール回教帝国を分割支配してゆきます。しかし、インド人の英国に対する反抗は絶え間なく続き、英国はその都度これを弾圧しなければなりませんでした。

ラス・ビハリ・ボースも英国に対する強烈な反抗者の一人で、一九〇五年（明治38年）には、インド総督ハーディング卿へ爆弾を投じた犯人として英官憲から執拗に追跡されています。続いて一九一五年（大正4年）には、北インド一帯に大規模な騒乱を起こそうとして失敗（ラホール事件）し、その年の秋には日本への決死の脱出行を行ったのでした。

ところが、英国情報部はビハリ・ボースの来日を逸速く察知し、日本政府に国外追放処分を要求してきたのです。

日本政府は、第一次大戦中のことでもあり、国家の安全保障の面からも日英同盟を重視、ビハリ・ボースの国外追求を受け入れました。

しかし、新聞の論調や世論はボースに同情的であり、在野の有志も「政府方針は道義に悖る」として断固拒否の構えを見せ、頭山満を中心に犬養毅、寺尾亨、杉山茂丸らによって強力な反対工作が推進されました。そして、それが一度政府側に拒否されると見るや、今度はビハリ・ボースを柔道家の

壮士達に護衛させ、新宿中村屋主人相馬愛蔵邸へと移し匿ったのでした。頭山の意を体した内田良平や葛生能久らが、陰に陽にボースを守りました。
ラス・ビハリ・ボースはそこでひそやかな亡命生活を続けますが、やがて相馬の息女俊子と結ばれ一男二女をもうけることとなるのです。

藤原岩市少佐の熱意に打たれたインド兵捕虜

昭和十六年十二月八日に大東亜戦争が勃発すると、翌年二月、ビハリ・ボースは赤坂山王ホテルに「インド独立連盟（Indian Independance League:IIL）」の看板を掲げ、積極的な活動を開始しました。また、東京放送を通じて、アジア各地のインド人に反英独立闘争への決起を訴えました。

藤原岩市少佐（当時）
わずか8名で出発した藤原少佐を機関長とするF機関であったが，シンガポール陥落（昭和17年2月15日）直後には5万名に近いインド国民軍（INA）が生まれていた。

日本軍が、極東における英国の最大拠点シンガポール要塞を陥落（昭和17年2月15日）させた後、ビハリ・ボースは『印度侵略史』で次のように記しています。

〈イギリスを印度から一掃しない限り、日本の理想とする大東亜共栄圏の確立は不可能なのである。東条首相は深くこの点に鑑みられ、去る二月十六日シンガポールの演説に於いて、我々印度人に対し、一日も早くイギリスの束縛を脱却し、「印度人の印度」を建設することを要望された。（中略）ここに東条首相の断乎たる印度援助の声明を聞くことを得て、実に天にも昇る悦びである。今こそアジアの復興する時が来たのだ。今こそ印度を復興する日が来たのだ。〉

彼は、大東亜戦争勃発をインド独立の好機ととらえたのでした。

一方、日本国内における動きとは別に、戦場となったマレー半島でもインド独立に関する重大な出来事が起ころうとしていました。インド国民軍（ＩＮＡ）の誕生です。

日本軍が進攻を予定していた東南アジアの英国領土には、英軍将校に率いられた多数のインド兵が配備されていました。いわゆる英印軍と呼ばれた部隊です。

そのため、日本の参謀本部では、英印軍の内部攪乱を行うべく藤原岩市(ふじわらいわいち)少佐の下に「Ｆ機関」を編成し、インド人工作に当たらせたのでした。Ｆ機関は、東南アジアのインド独立運動組織であるＩＩＬのプリタム・シンらとも協力関係を確立し、日本軍部隊がマレー半島の英軍への攻撃を開始すると直ちに行動を起こしました。彼らは、インド兵への投降を叫び掛け、多数の英印軍の帰順工作に成功するのです（117頁参照）。そのため、第二十五軍の山下奉文(やましたともゆき)将軍は、マレー半島攻略戦をかなり有利に

展開することができました。

しかし、藤原少佐の真の意図は、単に日本軍の戦いを有利に進めることのみにあったのではありませんでした。少佐の真意は、インド兵捕虜によってインド独立軍を建設し、インドの独立を勝ち取ることにあったのです。

少佐は、インド兵捕虜達を温かく遇し、インド独立軍の結成を強く説きました。インド兵捕虜の一人で、後にインド国民軍（ＩＮＡ）の初代司令となるモハン・シンは、インド兵捕虜とＦ機関とＩＩＬの間でインド料理の合同食事会が催されたとき、感極まって藤原少佐に次のように述べました。

〈戦勝軍の日本軍参謀が、投降したばかりの敗残のインド兵捕虜、それも下士官、兵まで加えて、同じ食事でインド料理の会食をするなどということは、英軍の中では夢想だにできなかったことである。（中略）藤原少佐の、この勝者、敗者をこえた、民族の相違をこえた、温かい催しこそはインド兵一同の感激であり、日本のインドに対する心情の千万言にまさる実証である。〉（田中正明著『アジア独立への道』）

ビハリ・ボースとモハン・シンの対決

しかし、日本に支援されたインド独立運動の前途には、なお厳しい問題が横たわっていました。まず、その第一は、日本の政府軍部の中では、まだまだインドの独立運動についての理解が薄かったことです。大本営のインド工作は、あくまでも英軍に対する後方攪乱戦との意味が濃厚だったのです。

そして、インド独立運動のもう一つの問題点は、東南アジア各地のインド独立運動家の間に分裂の危機が生まれたことでした。

昭和十七年三月二十八日より、東南アジア各地のインド独立運動家のリーダー達を結集して、「東京会議」が開かれ、ラス・ビハリ・ボースが「インド独立連盟」の初代総裁に推されました。

表面上は大盛会に終った会議でしたが、同時にこの会議では、インド独立運動家同士の対立が浮き彫りにされたのでした。中でも、もっとも激しく対立することになったのは、ビハリ・ボース、A・M・ナイルらの日本在住のグループとモハン・シンらの軍人グループ（インド国民軍首脳）です。

モハン・シンらは、日本軍とインド国民軍は完全に対等でなければならないと考え、それが受け入れられなければあらゆる対日協力を拒否すべきだ、としました。これに対しビハリ・ボースは、日本との対等権を要求することは大切だが、そのためにはまず日本人に協力し、その信頼を得ることこそが必要だ、と考えました。ビハリ・ボースは、この対立を収拾すべくモハン・シンの説得に努力しましたが、バンコクで開催された独立連盟の第二回大会以降、両者の対立は決定的となり、モハン・シンは遂にビハリ・ボースの手によって解任されてしまいました。

セクト間対立は、独立運動そのものにとって重大な危機となりつつありました。

誰もがスバス・チャンドラ・ボースの来日を望んだ

しかし、東亜在住のインド人によるインド独立運動の分裂は、もう一人のボース、スバス・チャン

ドラ・ボースによって救われることとなります。
スバス・チャンドラ・ボースは、わずか四十一歳の若さでインド最大の政治組織「国民会議派」の議長まで務めたことのある大政治家で、民衆の彼に対する信頼にも絶大なものがありました。
しかし、彼の主張があまりにも急進的な反英・独立主義であったため、穏健派で国民会議派の最大の実力者たるマハトマ・ガンジーに警戒され、会議派の中枢より遠ざけられました。ガンジーは、強大な軍事力を持つ英国から一気に独立を勝ち取ることは不可能と考えており、抵抗と妥協のバランスを何よりも重視していたのでした。
あくまで急進路線を貫こうとしたチャンドラ・ボースは、英官憲の厳しい弾圧を受けました。しかし、彼は、英国と交戦中のドイツへの決死の脱出を決行、かの地において一〇〇キロワットの強力な

ネタジ（統領）の敬称で呼ばれたスバス・チャンドラ・ボース（1897〜1945）
自由インド臨時政府を樹立し，アジア各国の信頼もあつく，日本軍とともにインパール戦を闘い，台湾において飛行機事故で客死（８月18日）。今でもインド政府は公式に死を認めておらず，国民も，生きていると信じているほどの英雄だ。その遺骨が日本に葬られていることはあまり知られていない。

チャンドラ・ボース[ネタジ]に対するガンジーとウー・ヌーの評価

ここに紹介するのは、一九四七年一月二十三日、ネタジ(統領)五十一回目の誕生日に寄せたマハトマ・ガンジーの言葉である。

「我々がネタジの生涯から引き出すことができる最大の教訓は、彼が同志の人々に一体化の精神を注ぎ込んだことである。その結果、同志たちはすべての宗教的、地域的障壁を乗り越えることができ、共通の理由から血を流したことである。彼独自の業績は歴史のページのうえで彼を不滅にするだろう。インドに帰ってきたネタジの後継者たちが私に会った時、すべてが例外なく、ネタジの感化が彼らの上に輝き、インドの自由を獲得するというただ一つの目的のために働くことを言ったのである。いかなる宗教的、あるいは地域的差異に対する疑念も、彼らの心に影を落としていなかった。(中略)

彼が自身の軍隊をもって初めて立ち上がった時、彼はその数は重要ではないと考えていた。

一般に、チャンドラ・ボースとマハトマ・ガンジーは政敵と考えられている。そもそも年齢はガンジーの方が二十八歳も年長だし、国民会議派の最高指導者であった。しかしボースは、ガンジーの不服従運動ではとても独立達成は不可能として袂を分ち、直接行動に訴えた。

ところが、ボースがインド国民軍(ＩＮＡ)を指揮してインパールに迫った時(一九四四年)には、ガンジーはその成功を期待していた。日本敗戦後、英国がＩＮＡの指導者たちを軍事裁判にかけた時には、ガンジーもネルーも、国民とともに猛反対した。それが全国的規模に広がり、一九四七年(昭和22年)八月十五日のインド独立につながったのである。

その人数がどれだけ少なかろうと、自由インドのために最善をつくして耐え抜くであろうと、彼は考えたのだ。

　ネタジの最高、最大の業績はカーストや階級の違いを払拭したことにある。彼はただ単にベンガル人ではなかった。彼は決してカースト的に考えることはなかった。彼は下のすべての人人にあらゆる違いを忘れさせ、一つの熱意に燃え立たせたのは、一人の人間として行動するということだったのである。」（スバス・チャンドラ・ボース・アカデミー編『ネタジと日本人』）

　ビルマで、オン・サン等と反英運動を続け、バー・モウ内閣で外相を勤めた人物にウー・ヌーがいる。彼は、オン・サンが暗殺されてから首相となったのだが、ネタジには鮮烈な印象を持っていたらしい。一九五七年（昭和32年）一月二十三日、ネタジ第六十一回目の誕生日に、次のような言葉を寄せている。

「ネタジは我々の時代の偉大な人物の一人である。若い学生として才能は光り輝いていた。早くから宗教的情熱をたぎらし、成長しては祖国の人々の貧困とインドは自由ではないという事実をより深く考えるに至った。（中略）

　戦争中、ビルマにいる頃、私は彼を知る機会に恵まれた。彼が常に根底に持ち続けたただ一つの理念がインドの独立であった。彼はインドの自由に向って邁進し、そのためにはどのような犠牲も厭わないことを決心していた。（中略）

　ネタジはインド独立の戦いにおいて巨大な役割を果たしている。ネタジの行動は多くの自由を求める国々を鼓舞し、これからも鼓舞し続けるであろう。ネタジは希に見る偉大なインド人であるばかりではなく、世界的に偉大な人物なのである。挨拶を贈る機会を得たことを私は大変光栄に感じております。」（『ネタジと日本人』）

【名越】

電波を使い、インドに対英抗戦を呼び掛けていました。

そのドイツにいるボースの関心が、この頃にはすっかり日本に向けられるようになっていたのです。当時の日本軍はビルマの英軍を駆逐し、インドへ迫る勢いを見せていました。

ボースは日本行きの決意を固め、大島浩駐独大使や山本敏武官に懇願しました。

〈私は、もしインド脱出の際、日本がイギリスと戦争を開始していたら、万難を排して日本行きを強行したであろう。（中略）この千載一遇の時期にヨーロッパの地に留まっていることは、まったく不本意の至りである。私は、一兵卒としてなりともイギリス人と直接戦いたい。〉（アレクサンダー・ヴェルト著『チャンドラ・ボースの生涯』）

一方、ボース招致の声はアジアでも大きくなっていました。

ＩＩＬ書記長のプリタム・シンやインド国民軍（ＩＮＡ）初代司令官のモハン・シンは、早い時期からチャンドラ・ボースの招致を藤原少佐へ強く要望していました。また、東南アジアにおけるインド独立運動の最大の指導者たるラス・ビハリ・ボースまでもがチャンドラ・ボースの来日を強く望んだのでした。

ビハリ・ボースは、その強靱な意志力ですでにインド独立連盟を立て直し、インド国民軍を再建し終わっていましたが、独立運動のより大いなる前進のためには、若いチャンドラ・ボースの力がぜひとも必要だったのでした。ビハリ・ボースは岩畔（いわくろ）機関（Ｆ機関の発展解消後の組織）の岩畔豪雄（ひでお）大佐に「チャンドラ・ボース来日の暁には、彼の下で働いてもよい」とその決意を披瀝し、岩畔大佐を感動

させました。
それぞれ立場の異なる東南アジアのインド独立運動家達が、一致してチャンドラ・ボースの来日を強く望んだのです。
日本政府は正式にチャンドラ・ボースのアジア招致をドイツ政府に要請、ドイツ政府はこれを受諾しました。遂にボースは、アジアへ行き、英国と直接戦う機会を手に入れたのでした。ボースは、ドイツ海軍の潜水艦でドイツのキールを出港しました。
ボースには最愛の妻エミリーがいましたが、彼女はドイツに残されました。ボースに付き従うことができたのは副官一人のみだったのです。
チャンドラ・ボースは、マダガスカル島南端で日本のイ二六号潜水艦へ移乗し、太平洋のサバン島へ到着、飛行機で東京へと向かいました。

インド独立運動の統一成る

チャンドラ・ボースが東京へ到着すると、ビハリ・ボースも南方から日本へと戻って来ました。
チャンドラ・ボースとビハリ・ボースとが奇妙なライバル意識を持っているのではないか、と日本の政府、軍関係者の一部は心配しましたが、それは一切杞憂に終わりました。六月中旬に行われた二人の初会見では、両志士の固い握手が抱擁に変わり、その後、一時間以上もの会談がまるで旧知同士の親しさと笑顔で行われました。

チャンドラ・ボースの来日は、インド人同士の対立を急速に解消しました。それだけ彼はインド人の間では名望があり、また実際、人を惹き付ける魅力を持っていました。そして何より、年長であり運動の先輩であるビハリ・ボースが彼を全面的にバックアップしました。

かくしてチャンドラ・ボースは、その後のインド独立運動を強力に推進する体制をつくり上げることができたのでした。

この後、昭和十八年七月にシンガポールで開催されたインド独立連盟の大会では、ビハリ・ボース総裁からチャンドラ・ボースを新総裁とする提案がなされ、満場の割れるような拍手でもって承認されたのでした。ビハリ・ボースは最高顧問に迎えられました。

翌日、チャンドラ・ボースは、再建されたインド国民軍（ＩＮＡ）を東条首相と共に閲兵し、祖国インドへの進撃を叫び掛ける熱弁をふるいました。

東条首相がチャンドラ・ボースの隣に寄り添うように並んでいる姿は、ボースが日本人の信頼を勝ち得ているとの印象を人々に与えました。実際、声高に日本への要求ばかりを掲げるインドの独立運動家達に辟易していた東条は、ボースと会見した後は、すっかりインドびいきになっていたのです。

ボースの演説に応える兵士達の熱狂的な叫び、「チェロ・デリー（進めデリーへ）」はいつ果てることなく、シンガポールの空に響き渡りました。

そして、この頃からボースは、ガンジーが「マハトマ（巨大な魂）」と呼ばれたように、人々から「ネタジ（統領）」の敬称で呼ばれることとなるのでした。

日本への信頼と日本への要求

昭和十八年（一九四三）の夏を過ぎると、日本軍の軍政下にあったビルマ、フィリピンが相次いで独立を果たしました。

このことは、チャンドラ・ボースを勇気づかせました。彼は、日本が独立の約束を果たしたことに感銘を受けたのでした。実際、英国は幾度もインドとの約束を反故にしてきました。第一次大戦の折りにも、インドに自治を許すと約束して戦争協力を強いておきながら、戦後、インドに与えられたのはローラット法といわれる政治活動弾圧法でした。ボースにとっては、日本が英国よりもはるかに誠

昭和18年６月22日，首相官邸で東条首相と会談するスバス・チャンドラ・ボース統領。（カルカッタ・チャンドラ・ボース記念館提供）

インド国民軍の進軍歌「征け征けデリーへ」と「愛国行進曲」

インドのカルカッタには、チャンドラ・ボースの私邸を改装して記念館が作られている。ボースの甥シェシール・K・ボース氏が館長で、ボース関連のあらゆる資料が集められている。

彼の寝室や書斎がそのまま残され、身辺に持っていた文房具や、着用していた衣服はじめ、頭山満が「破邪顕正」と箱書きして昭和十八年に贈呈した日本刀も展示されている。また売店では、ボースの一代をアルバムにした写真帖や録音テープも売られている。

今、私の手もとにあるテープは、元・光機関員としてチャンドラ・ボースの指揮するインド国民軍（ＩＮＡ）とともに戦った井上哲也氏が購入してこられたものである。

この録音テープには、冒頭に昭和十八年六月二十六日、東京から東南アジアに住むインド人に、インド独立を呼びかけたボースの放送演説が吹き込まれている。続いて、ＩＮＡの進軍歌「征け征けデリーへ」（作曲はネパール人プーラン・ジン）が吹き込まれている。

その他、当時のＩＮＡを奮起させたインドの国民歌謡が入っているのだが、最後は何と日本の「愛国行進曲」（ヒンズー語で歌われている）なのである。特に「征け征けデリーへ」は日印両軍に愛唱されていた。

昭和十九年の春、インパール作戦の成功を予想して編成されたビルマ派遣の大本営特別報道班に加わった作曲家の古関裕而氏は、ビルマのＩＮＡを見学した。この時、ＩＮＡの兵士達が歌っていた歌を自ら採譜し、日本国の歌詞をつけた。それが「征け征けデリーへ」として、日本に紹介されたのである。

征け征けデリーへ

一、征け征けデリーへ母の大地へ
いざや征かんいざ祖国目指して
征け征けデリーへ母の大地へ
いざや征かんいざ祖国目指して
進軍の歌は今ぞ高鳴る
我等の勇士よ眦あげて
見よ翻るよ独立の旗

二、征け征けデリーへ母の大地へ
いざや征かんいざ祖国目指して
征け征けデリーへ母の大地へ
いざや征かんいざ祖国目指して
聞かずやあの声自由の叫び
屍踏み越え征けよ強者
赤き血潮もてわが旗染めん
　征け征けデリーへ母の大地へ
いざや征かんいざ祖国目指して

昭和十八年七月五日、インド国民軍の最高指揮官として将兵たちを前に、ボースは、
「兵士諸君！　これからわれわれの合言葉は『チェロ・デリー』（進めデリーへ）としよう。われわれの任務は、生き残った英雄たちがデリーのレッド・フォートで勝利の行進をするまで終わらない」
と檄をとばした。
　その合言葉「チェロ・デリー」とともに「征け征けデリーへ」は愛唱された。歌は精神を鼓舞し、慰めもするのである。
　毎年八月十八日、ボースの亡くなった日に法要に集うインド独立運動に献身した旧軍関係者は、これをヒンズー語で合唱する。今やこの進軍歌は、彼らにとってボースとともに生きたことを偲ぶ歌となっているのかもしれない。
　しかし、だからこそボースは脈々と生き続けてもいるのである。

【名越】

実だと感じられたのは無理からぬことでした。

独立ビルマの初代首相バー・モウは、ボースの日本への態度について次のように述べています。

〈多くの国々が降伏した危機に際しても、ボースは屈せず最後まで日本側に立つという彼の公約を守った。（中略）一九四五年一月、日本が崩壊寸前であることを目撃した後でも、彼は再び日本人たちに彼とその軍隊、兵士たちは神風精神とその血をもって、戦い続けるであろうと語った。〉（バー・モウ著『ビルマの夜明け』）

この年十月二十一日、ボースは「自由インド臨時政府」を樹立、直ちに日本政府もこれを承認しました。これを受けて、自由インド臨時政府は米・英国への宣戦を布告したのでした。日本と自由インド臨時政府は、対等な同盟国としての戦争へと突入したのです。

ところで、インドにおけるチャンドラ・ボースは今でも独立運動の英雄なのですが、戦後の日本では、ボースは日本軍国主義の協力者であるとして、その存在を黙殺する史家が少なからずいます。しかし、実際のチャンドラ・ボースは、自由インド臨時政府と国民軍の立場を強化すべく、非常に厳しく日本側と交渉しました。

しかも彼が際立っていた点は、常に日本との対等権を要求すると同時に、自らも相手を信頼し、誠意を尽くしたことです。そのことが交渉相手に感銘を与え、日本側の協力をより多く引き出す結果となりました。このような方法は、先輩であるビハリ・ボースのやり方を基本的に受け継いだからなのかもしれませんが、特にチャンドラ・ボースはその雄弁で、持てる力を存分に発揮したのでした。

そして彼は、日印軍の相互の敬礼、占領地行政、裁判権等、ほとんど相互の対等権を勝ち取ることに成功するのです。大東亜会議後には、臨時政府の領土としてアンダマン、ニコバル諸島まで日本から獲得しました。臨時政府には、日本からの公使の派遣も行われ、臨時政府の外務大臣を訪問、翌日、答礼を受けています。

一部の史家には、これら日印交渉の過程で起こったいくつかのトラブルを理由に、日本とインド政府の関係がはなはだ不平等であったことを力説する人もいるようですが、当時の状況に即して考えるならば、それも間違っています。我々は、ボースが、連合国に対するフランスのドゴールよりも「日本軍に対する発言権を確保しえた」（葦津珍彦著『日本人が虐殺された現代史—S・C・ボースの生涯』）点にこそ着目しなければならないでしょう。

アジア解放への願い

チャンドラ・ボースのインド独立への願いは、さらにアジア解放の願いへと広がってゆきました。昭和十八年十一月五日から、東京でアジアの独立国を集めた大東亜会議が開催（134頁参照）され、彼もオブザーバーとして参加しましたが、彼がもっとも意気投合したアジアの指導者は汪兆銘（字は精衛）でした。当時の中国には複数の政権が乱立しており、中でも有力なのは汪兆銘の南京政府と蔣介石の重慶政権だったのです。彼はその足で南京の王兆銘のもとへ立ち寄り、ラジオ放送で蔣介石に、日本との和平と、重慶・南京両中国政府の統一を強く呼びかけました。

〈今日支那の統一を妨げているのは何であるのか私は尋ねたい。日本か、さに非ず。日本は諸君の統一を望んでゐる。然し米国及び英国は、支那統一を望んでいゐるであらうか。過去に於いて諸君は日本に対し、不満を抱いてゐたのを私は知つてゐる。かつて諸君は日本と戦ふべく決意したのを知つてゐる。然しその日本はも早存在しない。今日諸君に直面する日本、アジアに直面する日本は昔日の日本ではない。然りとすれば諸君は今日何者と戦つてゐるのであるか。〉（スバス・チャンドラ・ボース述『進めデリーへ』）

もともとインド国民会議派は、英国との良好な関係を維持しつつ独立運動を展開したいとの意図もあり、日本と中国（蔣介石）の紛争に関しては中国側に同情的でした。ボース自身も、かつては日本に不満を持っており、「蔣介石を米英の傀儡（かいらい）だと言ふのならば、何故日本は米英と直接戦はうとしないのか」と考えていました。

しかし、今や日本は米英と開戦し、中国との間に対等和平を望んでいるのです。ボースは、アジアが団結して米英の侵略勢力に対決することを望み、それを蔣介石に熱心に呼び掛けたのでした。

ところが、蔣介石はボースの呼び掛けを無視しました。それのみか、インド国民軍がビルマ方面へ進出しはじめると、連合軍側は英印軍内部に反乱の起きるのを警戒してこれを後退させ、米式装備で編成された中国国民党の精鋭部隊を投入してきました。蔣介石の重慶軍がインド国民軍の前に立ちはだかったのです。チャンドラ・ボースはこれに激昂し、録音を南京放送に送って再び放送しました。

〈最近私は印緬国境に在る同志からの情報を得た。それによると英当局は印度部隊を国境線から後

退せしめ、支那兵を以てこれに替らしめたのである。この情報は（中略）我々が印度へ進撃の暁には、我々は英国兵とではなく、支那軍と戦はなければならないことを物語つてゐる。若しも蔣介石が自ら国民主義者、愛国者を以て任ずるならば、何故彼は、英国を助けて印度国民主義者圧迫のために自身の軍隊を送つたのであらうか。〉（前掲『進めデリーへ』）

彼は、英帝国の手先となった蔣介石へ満腔の怒りを胸に、きたるべきインド解放作戦の準備に取り組みました。

悲劇のインパール作戦

昭和十八年になると、それまで逐次増強されてきた東部インドの英軍がビルマへ侵攻する気配を見せはじめました。しかし、当時の日本軍の戦力で増強された英軍を迎え撃つとなると、かなりの苦戦が予想されました。そこで考え出されたのが、英軍のビルマ侵攻の拠点となるインド東部の要衝インパールに対して先制攻撃をかける作戦でした。「う号作戦」、いわゆるインパール作戦です。

そして、この作戦にはインド国民軍も参加することになったのです。また、日本軍の目的はあくまでも英軍の殲滅（せんめつ）であることを示すべく、日本軍が占領した領土は直ちにインド人の支配に移すことも決まりました

チャンドラ・ボースは狂喜しました。彼は、いかにこの日を待ち焦がれていたことでしょう。彼は、インド国民軍がインド領内へ進軍すれば、必ずインドの同胞が呼応決起すると確信していたので

す。実際、日本を非難してきたあのガンジーですらも、日本軍が優勢であったころには、「日本軍にたいして敵対的ではなくなる時期」（長崎暢子著『インド独立』）があったのです。ボースが、インド領内進攻後の英軍撃滅を確信していたのは無理からぬことと言えます。

ボースは、臨時政府をビルマの首都ラングーンへと前進させました。

インドへ進攻する日本の第十五軍は、まず、ビルマ・中国国境の敵（中国、米軍）をフーコンに釘づけにするべく第十八師団「菊」を北ビルマへ派遣、続いて第三十三師団「祭」、第三十一師団「烈」がインパールへと進攻する作戦を立てました。昭和十九年三月八日よりインド進攻ははじまり、インド国民軍も「チェロ・デリー」を叫びながら、日本軍やビルマ国防軍とともに進撃を開始しました。

ボースは三月二十日、自由インド放送を通じてラングーンからインド国内の同志に呼び掛けます。

〈インド国民軍は今や攻撃を開始し、日本帝国陸軍の協力を得て、両軍は肩をならべて共同の敵、アメリカ、イギリスおよびその連合国に対し、共同作戦を進めつつあり。外国侵略軍をインドより放逐せざる限り、インド民衆の自由なく、アジアの自由と安全はなく、またアメリカ・イギリスの帝国主義戦争の終息もなし。（中略）ここに自由インド政府は、インドの完全解放の日まで、日本の友情と共に戦い抜くべき厳粛なる決意を布告す。〉（林田達雄著『悲劇の英雄チャンドラ・ボースの生涯』）

ボースの声明に応え、日本側でも東条首相が談話を発表し、「帝国の目的とするところは、敵勢力を撃破し、インドを完全にインドに委ねんことにある」ことを強調しました。

インド進攻に先立って、岩畔機関は光機関（山本敏機関長）へと再編されていましたが、その光機

関（当時の機関長は磯田三郎中将）では、インド国民軍を支援すべく、インド国民軍の進攻方向に何組もの特殊工作隊をばらまきました。ある工作班は、前面の英印軍大隊長が留守だとの情報を入手、寝返りの工作を行いましたが、その折にひとつのエピソードが伝わっています。

光機関の工作員が敵陣へ近付くと英印軍が射撃してきたため、インド国民軍の工作員が日本人工作員の前に立ちはだかり、大声で叫びました。

「日本人を殺すな。われわれインド人の独立のために戦っているんだぞ！」

ヒンズー語の叫びを聞いて射撃は一瞬止みましたが、すぐに射撃が再開されました。すると今度は日本人工作員が立ち上がって両手を広げ、ヒンズー語で叫びました。

「同胞を殺すな。撃つならまず俺を撃て。俺はお前達に話に行くところだ。武器は持っていない」

これを見ると、再びインド国民軍兵が日本兵の前に両手を広げて立ちます。この繰り返しにとうとう相手は根負けして、一個大隊すべてが寝返ったということです。

一方、インパールを目指す日本軍の初期の進撃は順調に続いていました。第五十五師団はアキャブ方面へ前進して陽動作戦を展開、第三十一師団は北方の要衝コヒマに達し、第十五師団は北方から、第三十三師団は南方からインパールへと迫りつつありました。四月初旬には、インパール包囲態勢がほとんど完成されようとしていたのです。国民軍も、日本軍とともに祖国インドへ進撃しました。イスラム教徒もシーク教徒もヒンズー教徒も、ボースの下でひとつになり勇敢に戦いました。

ボースは、新解放区の初代知事として臨時政府の蔵相であるチャタジー中佐を任命しました。

しかし、日本軍の勝利もここまででした。四月になると、日本軍の進撃はピタリと止まり、戦線は膠着状態に陥りました。日本側の補給は途絶え、食糧や弾薬の不足に悩まされ始めました。それに対し、英印軍側は航空機によって多量の補給物資の空輸投下を受けることができました。また、彼らには日本側にない強力な機甲部隊がありました。日本軍もインド国民軍も劣弱な装備をものともせず、勇戦敢闘しましたが、英印軍を殲滅することは不可能でした。日本軍とインド国民軍は撤退を余儀なくされました（152頁参照）。

七月、遂にインパール作戦は正式に中止されました。日本軍とインド国民軍の死者の数はインド領のみで二万余名にも及びました（英軍は死者一万五千、傷者二万五千）。それのみならず、撤退する日本軍、インド国民軍を追って強力な英印軍がビルマへと侵入しつつありました。

インパール作戦の失敗はボースをひどく落胆させましたが、彼は希望を捨てませんでした。ボースはイラワジ河の線で英印軍を迎え撃とうとする日本軍に協力し、新鋭の二個師団を投入することにしました。ボースは国民軍首脳を集めて説きました。

〈この敗勢にあってなお、日本軍と肩を組み提携を続けることに疑問を持つ向きもあるだろう。しかしいま日本軍を裏切れば、我々は景気の良いときだけ日本軍と手を組んだという誹りを受ける。また、武装闘争をあくまで続けることが、英印軍に我々の不退転の決意を悟らせ、インド人兵士をイギリスの支配から我々の側に走らせることになる。〉（稲垣武著『革命家チャンドラ・ボース』）

当時、日本の敗戦の影は色濃く、七月にはサイパン島の失陥とともに東条内閣が倒れました。しか

し、インド国民軍は日本軍とともに英軍のビルマ反攻をくい止めるべく移動を開始しました。

巨星墜つ

昭和十九年十一月一日、インパール作戦の失敗の後、ボースは三度目の東京訪問を行いました。インド臨時政府の立場を強化するための交渉が来日の主たる目的でしたが、この訪問は彼がアジアに来て以来、縁のあった人々との最後の別れの機会となりました。

ボースは、日本政府との交渉や行事で多忙の間を縫い、失脚した東条元首相を訪問し、歓談しました。すでに権力の座にいない人間をわざわざ訪うのは、彼が恩を忘れぬ人間であったからです。また、最初の来日の時以来、幾度もその門を叩いて世話になった頭山満翁はちょうどこの頃亡くなり、ボースを大いに悲しませました。

ラス・ビハリ・ボースも重病にかかっていました。チャンドラ・ボースは直ちに病床へ駆け付け励ましました。死の床の老革命家は、チャンドラ・ボースの手を握りしめ、自分が果たせなかったインド独立の悲願を達してくれることを頼みました。二カ月後、ビハリ・ボースはその生涯を閉じます。そして、この時がチャンドラ・ボースにとっても最後の東京訪問となるのでした。

ラングーンに戻ったチャンドラ・ボースは、インド国民軍を指導して、日本軍とともにビルマへ進攻する英軍と戦いました。しかし、多数の航空機の援護と強力な機甲部隊に護られた英軍は数、装備とも圧倒的な優位を確保しており、精神力のみに頼る日本軍とインド国民軍は次第に追い詰められて

ゆきました。ラングーンにも、英軍の戦車部隊が迫りつつありました。
チャンドラ・ボースは、臨時政府、国民軍ともに踏み止まり最後まで戦うと強硬に主張しましたが、閣僚や日本軍が引きずるようにして撤退を促しました。ここに残れば、強力な英軍によって蹂躙されるのは目に見えています。
当時、光機関所属だった村田克巳大尉は、日本軍の退避行の中でもみくちゃにされているボースに出会いました。大尉は思わず、「ボース閣下、ご期待に添い得ず残念でした。ご健闘を祈ります」と声をつまらせ、涙ながらに叫びました。するとボースは、大尉の感傷を叱咤するように「勝利の日まで闘争だ！　ジャイ・ヒンド！（インド万歳）」と力強く答えたのでした。ボースの闘志には尚烈々たるものがありました。
しかし、彼の日本との共闘もそれまででした。昭和二十年八月、日本政府は天皇の大権を変更しないとの諒解の下ポツダム宣言を受諾することを決定したのでした。八月十一日、根岸忠素通訳がタイ駐在大使からの極秘書簡をマレーにいるボースのもとへ届けました。ボースはそれを読むと、眉も動かさずに師団長に訓練中止を命じました。
心中はともかくも、ボースはつとめて平静に繕い、威厳を保ちました。
「日本はどうなるのでしょう」
根岸通訳がそう問うと、ボースは静かに答えました。
「天皇の勅令が下った以上、日本国民は従わなくてはなるまい。それでも日本が亡国するとは思わ

ない。敵は天皇を戦犯として追及するかもしれないが、天皇制を廃してはならない。万やむをえない時にはリージェント（摂政）に皇太子を立てるべきだろう」

ボースは日本敗戦の瞬間を迎えるまで徹底抗戦の放送をしていましたが、すでにあらゆる事態を想定して、その進退を考えていたのでしょう。ボースの日本敗戦後の行動は驚くほど沈着冷静でした。彼は、臨時政府の職員や国民軍将兵の退職金からジャンシー連隊（婦人部隊）の帰国手続きにまで注意を払う周到さを見せたのです。

しかし、彼はインド独立の闘いをけっして放棄したわけではありませんでした。彼自身はソ連へ行き、再起をはかろうとしたのでした。日本はボースにとって大切な友邦でしたが、すでに日本が降伏してインド独立運動援助を放棄してしまった以上、ボースは別の手段で闘争を続けなければならなかったのです。彼は、南方総軍の寺内寿一（ひさかず）総司令官へソ連行きの飛行機の手配を依頼しました。日本はソ連と交戦中であったため、東京の大本営は難色を示しましたが、南方総軍は独断で九七式重爆撃機を提供しました。日本軍が彼に示した最後の武士の情けでした。

八月十七日、飛行機はボースらを乗せ、出発しました。機はいったん台湾へ寄り燃料を補給、そこから大連へ飛び、南下するソ連軍と接触を取ることになっていたのでした。

しかし、運命は非情でした。十八日午後二時、飛行場を飛び立ったチャンドラ・ボースの乗機は、離陸直後に左エンジンから突然火を吹きました。そして次の瞬間、バランスを失った機は爆音とともに飛行場へ墜落したのです。まったく予期せぬ事故でした。

辛うじて脱出したボースは炎に包まれ、その巨大な体軀が人々には不動明王のように見えました。ボースの火は急いで消し止められ、直ちに台北軍病院に運ばれましたが、全身ひどいやけどで手のほどこしようがありませんでした。ボースは臨終間近の床で「天皇陛下と寺内さんによろしく」と伝言し、「同士があとから来るから」と言って大往生しました。

インド独立運動史に、その輝かしい一ページを記したスバス・チャンドラ・ボースは、ここにその生涯を閉じたのです。時に昭和二十年八月十八日午後八時。享年四十八歳でした。

日本軍はその夜、ボースの傍らに儀仗兵を配置し、祭壇を作って通夜を行いました（遺骨は日本に送られ、蓮光寺によって護られてきた）。

死して凱旋したチャンドラ・ボース

日本の敗戦に伴い、インド国民軍も整然と連合軍に降伏しましたが、彼らには過酷な戦争裁判が待ち受けていました。インド国民軍はもともと英印軍の捕虜を中心に結成されていたので、支配者たる英国側の憤りは尋常一様ではなかったのです。今後の英印軍の規律維持のためにも、国民軍兵士は反逆罪で厳しく処罰しなければなりません。英国は「みせしめ」のための裁判を用意したのでした。

しかし、事は英国の思う通りには進みませんでした。戦時中には厳しい検閲によって知らされなかったインド国民軍の実態が、終戦後次第に明らかになると、インド民衆は熱狂的に彼らを支持しました。国民軍のスローガンの一つであった「ジャイ・ヒンド（インド独立万歳）」を人々は叫び、チャン

ドラ・ボースの写真を熱烈に買い求めました。

そして遂には、民衆の抗議行動は反乱の様相を呈してきました。民衆は、警官隊と激しく衝突、軍隊も反乱を起こしました。すべてのインド水兵が英軍に背き「インド国民軍海軍」を名乗りました。水兵らは、市民と合流して市街戦を展開したため、英軍は戦車隊を出動させて市民のデモを攻撃、数千人の死傷者を出して後、やっとこれを鎮圧しました。

しかし、この後も市民の憤りはおさまらず、英軍の対日戦勝パレードはボイコットされ、家々には弔旗が掲げられました。のみならず、パレードの予定されていたコースへ数万の抗議デモが侵入しようとし、再び警官隊と衝突、流血の惨事が繰り返されました。

インドで売られているボース関係の書物

インドの書店には，今もチャンドラ・ボース関係の本がたくさん並んでいる。これは私が訪ねたとき購入したもので，持ち帰りを考え軽くて薄い本ばかりを選んだ。翻訳家の足羽雄郎氏に一部訳してもらったが，残念ながら本書に紹介する紙数はない。ボースはインド人離れのした Fighting Spirit（戦闘精神）を持った Springing Tiger（俊敏なる虎）で，そのスケールはインドの若者にとって魅力の的である。私がインドの青年に「チャンドラ・ボースとネルーとどちらが偉いか」と質ねたら直ちに答えた。「それはチャンドラ・ボースだ。彼はインド独立に命をかけた。それに対してネルーは総理大臣になりたい男だった」と。さしずめボースが「西郷隆盛」なら，ネルーは「大久保利通」というところのような感じだった。チャンドラ・ボースの魅力は消えず，彼に関する本は今後も出版されるだろうし，売れ続けるであろう。

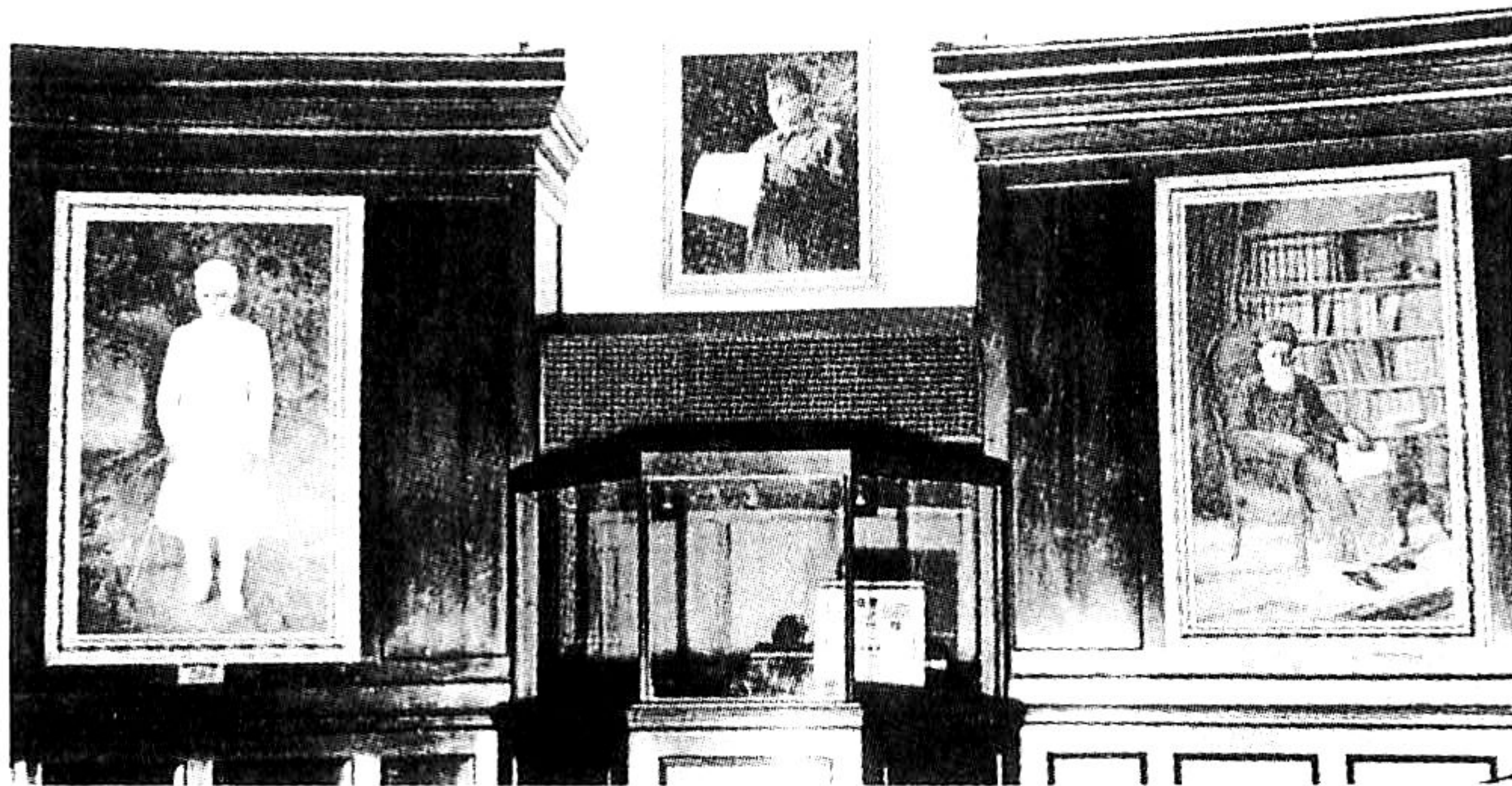
【名越】

インド国会議事堂中央に掲げられたボースの肖像

神聖なるインド国会議事堂のメモリアル・ホールには、これまで、マハトマ（大聖）・ガンジーに思想的影響を与えたといわれる二人の偉人の写真が飾られていた。

ところが、デザイ内閣に代った一九七八年一月二十三日、ネタジ（統領）・チャンドラ・ボース八十一回目の誕生日に、彼の肖像が中央上部に掲げられ、盛大な記念式典が持たれた。

その時の大統領のスピーチ――。

「スバス・チャンドラ・ボースこそ、もっとも華麗で独創に満ちた革命家であった。また、彼こそ他の指導者と袂を分かつ勇気をもった信念の人であった。ボースのインドへの献身を思う時、マハトマ・ガンジーとの相克はもはや忘れるべきである」

インド人離れしたボースのダイナミズムは青年のみならず老人に至るまで、その心を永久に摑み続けるのである。【名越】

英国は、インド独立の動きをすでに封ずることができませんでした。一九四七年八月十五日、インドは二百年もの長きにわたる英国の植民地支配から遂に独立を勝ち取るのです。

ガンジーに指導された非暴力抵抗運動は、ある時代の一定の条件下においては非常に有効な戦術でした。しかし、チャンドラ・ボースとインド国民軍の戦いによって誘発されたインド民衆の蜂起がなければ、インドの人々はさらに何十年も英国の支配に甘んじなければならなかったでしょう。

インド国民軍裁判で国民軍将兵弁護のために召喚された日本人証人に対し、インド法曹界の最長老パラバイ・デサイ博士は次のように述べています。

〈インドはほどなく独立する。その独立の契機を与えたのは日本である。インドの独立は日本のおかげで三十年早まった。〉（前掲『アジア独立への道』）

チャンドラ・ボースは、死して祖国に凱旋したのです。

今も残るインドの親日感情

独立後のインドの主導権は、再び漸進主義者の手に移りました。インドのインテリの多くは英国で学んだため、大東亜戦争中の日本に対してもファシズム国家と規定する見方が支配的です。しかし、一般のインド人の中には親日的な国民がけっして少なくありません。特に、日本軍が英軍と直接戦ったインド東部の住民（ナガ族、マニプル族が多い）は概して親日的と言われています。それは、彼らが戦後、日本人戦没者の遺骨収集のためにこの地を訪問する旧軍、遺族関係の人々にとても協力的であ

慰霊団が発掘した日本兵の真相

一枚の「徴発書」

敵国のイギリス人をして「偉大なまでに見事な防御戦」と言わしめたコヒマ戦、この戦闘にまつわる感動的な物語りをご紹介してみたい。

昭和五十年、インド政府の許可がようやくおりて、日本人による遺骨収集が開始された。その後も数回実施されているが、平成三年四月に行なわれた慰霊遺骨収集の旅のときのことである。団員である歩兵第五十八聯隊戦友会のメンバー十四名は、昼は「すまん、すまん」と言って死んでいった戦友の遺骨を求め、夜は現地のナガ族の人々との交流を深めようと挺身されたが、あるとき、ナガの若者が一枚の紙切れを団員の亀山正作氏のもとに持参してきた。

「何だろう」と思って見ると、「徴発書」とある。

徴発書

ペッサマ

一、苦力　二二名　約一時間使用

二、藁　　二束

三、野菜　一貫目

右、品目徴発ス、但代金ハ後拂ノ事

四月三日

インド・コヒマのナガ族の若者の１人が「我が家の家宝だ」といって見せてくれた「徴発書」

長家部隊
関口少尉 ㊞

このような文面だが、びっくりした氏は穴があくほど見つめ、当時、部隊に厳重な軍規保持の命令が出ていたことを思い出していた。後払いするとある代金なので、とりあえず全員で拠出し合い四百ルピーを支払い、責任だけは果たした。

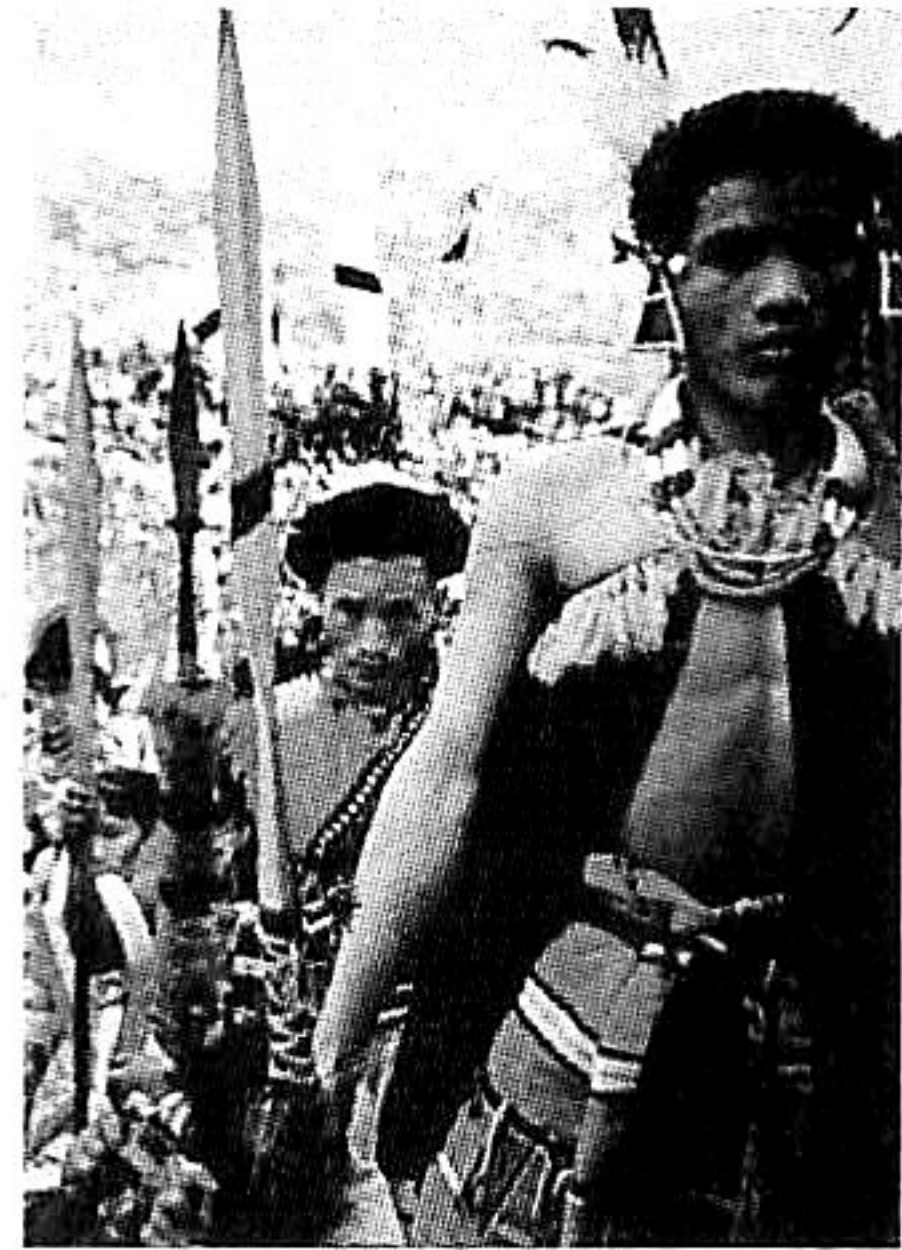
そのナガの若者は「これは、お祖父さんが大切にしていて、これを持っている限り日本と仲良くできる、我が家の家宝だ」と言う。また「日本の勇敢な兵隊さんにあやかりたい」ともつけ加えるのである。

インパール作戦における日本陸軍がいかに軍規を厳正に守るよう全軍に下命していたかを、この一枚の「徴発書」が、はしなくも動かざる物証として、戦後の日本人に語りかけてきている。と同時に、コヒマのナガ人の心に消すことのできない強烈な印象を植えつけ、そして去っ

平成3年4月11日，コヒマで日英印戦没将兵の合同慰霊祭と日英老兵達の和解の儀が催され，日本からは「第二次烈会コヒマ巡拝団」の14名が参加。

コヒマの人口は約10万人。5千人の善男善女が集まった。

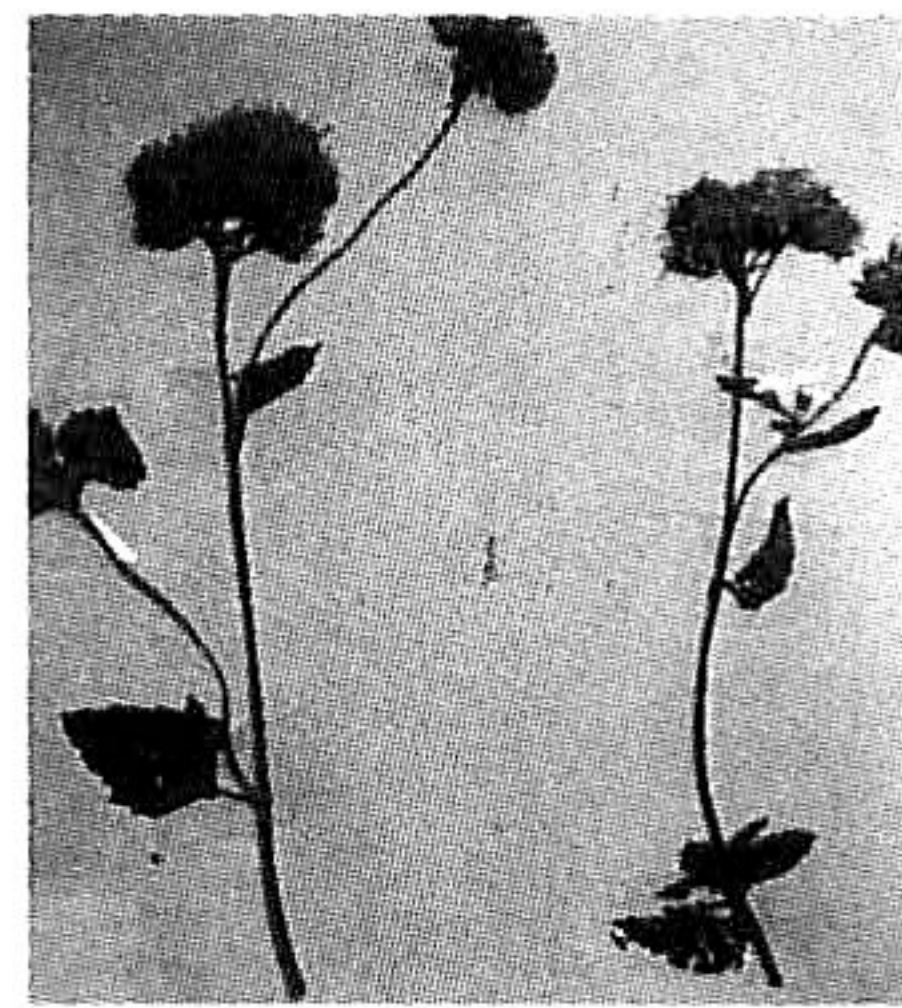
コヒマの市長（左から2人目）は14名の日本人をコヒマの名誉市民として推挙し，友好の象徴として団長に大槍を授与した。

ていった日本軍将兵に対する敬愛の情の存在をも語り伝えているのである。

現地ナガ族の若者たちは勇者(旧日本軍)を迎える礼として，それぞれ伝統の民族衣裳で盛装して参列。

日本兵の花

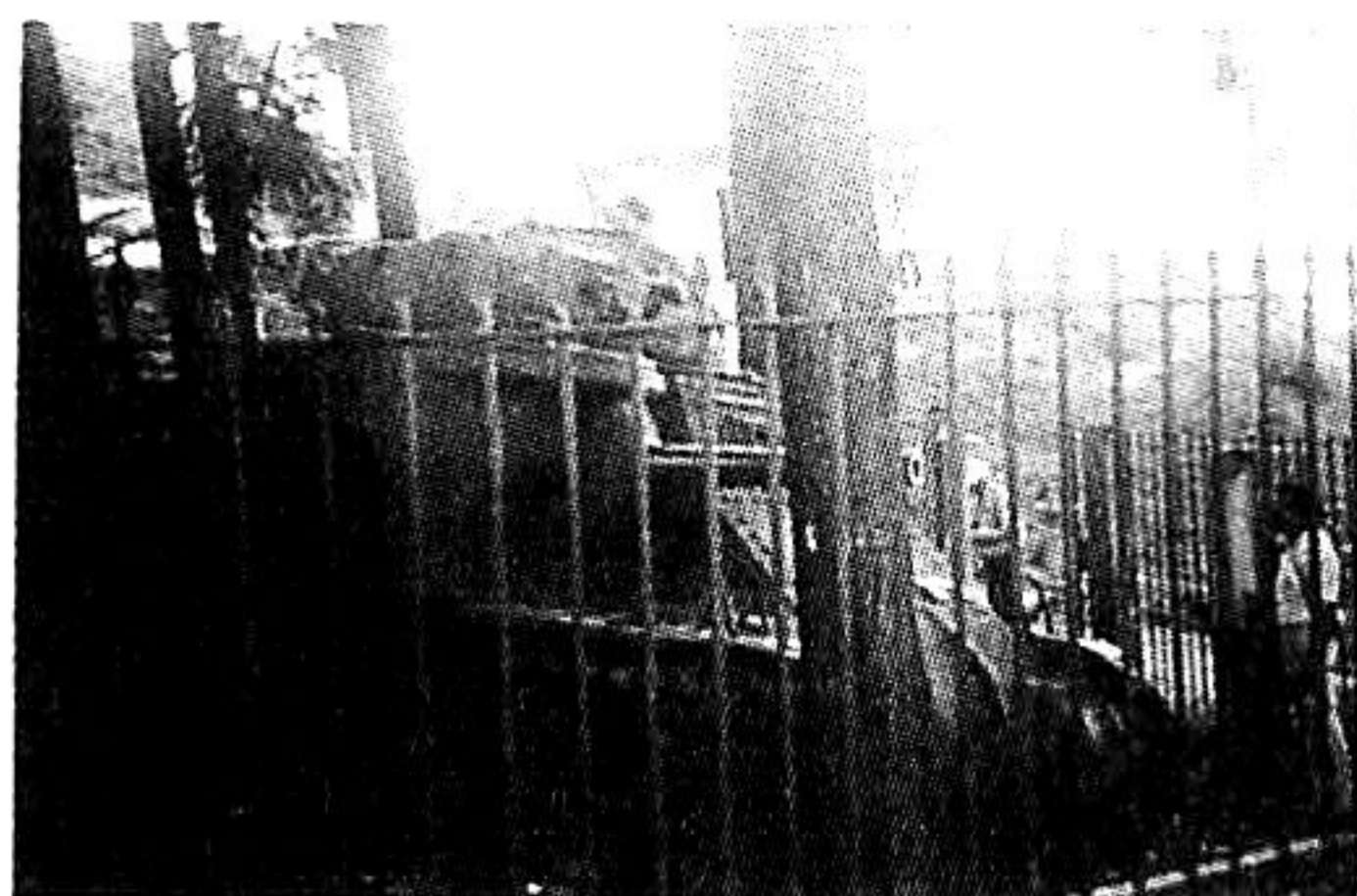
日本軍人に対するナガ人の敬愛の情については、もうひとつの感動的な話をご紹介しないわけにはゆかない。

それはやはり今回の慰霊の旅における体験だが、「日本兵の花（ジャパニーズ・ソルジャーズ・フラワー）」についてである。

この花が何故に「日本兵の花」と名づけられたのか、その辺の事情を聞いてみると、この花はまず野生の雑草に咲く紫の花で、非常に生命力が強くて繁殖力があり、少々のことでは枯れることはない。そして群生して仲良くいっせいに花をつける。それにこの花は、日本の兵隊さんが去っていった後に、いっせいに咲き出した、そこで「日本兵の花」と名づけた、と語る。

日本軍が去った後でコヒマの野に群生しだした紫の花。住民は「ジャパニーズ・ソルジャーズ・フラワー(日本兵の花)」と名づけている。

名前のいわれは以上のようなことだが、ナガの人々にとってこの花は、日本兵の姿と二重写しになった。

生命力の旺盛さは、素手に近い装備で敵の戦車を鹵獲（ろかく）したその敢闘精神に、群生していっせいに咲くのは、敵の圧倒的優位な武力に屈することなく、最後まで組織的に立ち向かったこと

に、それぞれイメージされたのである。
日本兵は、まさしくナガの人々にとって自慢のタネなのである。
尊敬する日本兵の多くが死してコヒマの山地に眠り、生き残った日本兵が去るや、この紫色の花がいっせいに咲き出し、そこで誰言うとなく、この花を「ジャパニーズ・ソルジャーズ・フラワー」と、親しみを込めて称するように至った。

日本軍が肉弾攻撃で分捕ったイギリス戦車を，コヒマの人々は勇気のシンボルとして保存している。

この話を聞かされた団員の一人は、涙ながらに採集し、ひそかに日本に持ち帰り、遺族の方方に配って歩かれたそうである。

コヒマの戦跡に立って

社会人類学者で『タテ社会の人間関係』などを著わした中根千枝氏（東京大学名誉教授）は、戦後、日本人として初めてコヒマを訪ねた。昭和二十九年のことである。その時の模様が同氏

日英争奪となったテニスコートの中央に立つ記念碑。右が争奪の境界となった桜の木。

著「未開の顔・文明の顔」(『高田歩兵第五十八聯隊史』より)の中に綴られている。

「私は忙しい調査の日程をさいて、こうしてたおれて行った将兵の行方をできるだけ訪ね歩いた。英軍の墓地はあのように美しく作られてあるが、さて日本将兵の墓地はどうなのであろう。今のコヒマにそのことを知る人はなく、困難をつづけたが、ある日、村の青年が、前に日本軍の墓地があるということを聞いたとやって来た。

しかし、はなしは非常に漠然としている。親切にも三人の青年が私について雨のコヒマを一日がかりで探してくれた。やっと、コヒマのはずれのちょっとした丘を登った刑務所の裏あたりらしいということは判ったが、そのあたりは草ぼうぼうのジャングルで、まるで見当がつかない。近くの小さな掘立小屋で聞いてみると、そこの老婆が案内してくれるという。老婆に案内されてみると、私たちが探しまわったその草ぼうぼうのジャングルが墓地だというのだ。

『ここですって!』私は思わずきき返した。老婆は、『ここです』と重ねていう。と、連れの青年が、『ああ、そうだ、やっぱりここだ。ごらんなさい、この草の茂みを』と指した。草や潅木の間をすかしてみると、なるほど、ちょうど人間のからだくらいの大きな土まんじゅうが幾十と列をなして見られるではないか。生い茂った茨におおわれて、よくよく目をこらさなければ、それと判らない。老婆は更に何百と土まんじゅうが並んでいる茂みに、私たちを連れて行ってくれた。

戦争がすんで間もなく、英軍の死体は集められ、立派なお墓が政府の力で作られた。それなのに、日本兵の死体はジャングルの中にくさるにまかせて放置されてある。これではあまりに気の毒だと、ナガ人たちが、はっきり日本兵と

わかるものをコヒマ周辺のジャングルから集めてきて、最も日本兵の死体の多かったこの地に埋葬したのである。と老婆は私に告げる。私が見たところでは、少なくとも五、六百体はありそうだった。（中略）

連れの青年のひとりは、静かな口調で私に語った。『日本の兵隊は実に勇敢でした。英印軍には立派な武器がありました。そして飛行機も。日本の兵隊は銃剣一つで立ち向かっていきました。死ぬことを少しもこわがっていないようでした。それに、とても軍律がきびしかった』

美しく整えられている英軍墓地（インド兵の墓はない）。日本兵の死体はナガ族の人々がジャングルから集めて埋葬した。

『軍律が？　……』

私は、しばしば聞かされた中・南支、フィリピンなどの日本軍の話を思い出し、ここで救われるような気がして聞きかえした。

『ええ。日本の兵隊は私たちの婦女子に決して悪いことをしませんでした。食物を奪いとられたことはありましたが、はげしい空腹に負けるのは、それは仕方がないと思います。英印軍のなかには私たちの婦女子にずいぶんひどいことをしたのも少なくありませんでした。私たちは、負けたとはいえ、日本軍のあの勇敢さと軍律のきびしさを、今でも尊敬しています』

額にかかる冷雨を手でぬぐいながら、青年は遠いところをみつめるような眼差しをした。

（中略）

私はただ土まんじゅうの前にひざまずき、茨のとげに足を刺されながら、故国の八千万の同胞にかわって長い祈りをした。（後略）」【相澤】

るという事実に端的に表われています。

昭和五十年、中津瀬游氏は、モールメンでの戦友の遺骨収集を手伝ってくれた現地の人に、お礼としてシャツを贈りました。ところが、昭和五十三年に再び中津瀬氏がそこを訪れたところ、何と仏壇にそのシャツが供えてありました。何故着ないのか、と問う氏に彼は、「このシャツは、戦争から三十年も経って戦友の骨を拾いに来たあんたがくれたシャツだ。宝ものだ。とても着れない」と答えました。そして、「あんたが来るのを待っていた。遺骨もたくさん拾ってある」とも言いました。

遺骨収集には、どの地域でも現地の人々が積極的に協力してくれ、日本からの遺骨収集派遣団が日本へ持ち帰る遺骨の約八割は、住民の事前集骨によるものでした。場所によっては、エスコートしてくれる軍隊まで遺骨収集を手伝ってくれる（石上敏明氏談）こともありました。また、インパールでは派遣団側が何の依頼もしないのに盛大な儀式を行なうことを現地の人々が望んだため、焼骨場への葬列では警察と民間の楽隊が荘重な音楽を奏で、追悼式では地元代表が哀悼の辞を述べる立派な儀式が毎回開催されることとなったのでした。

現地の人々は、日本人が軍規粛正で特に婦人暴行がまったくなかったことを、常に称賛します。それは、コヒマでもインパールでも同様です。日本軍を追ってここへ来た英印軍は、略奪と婦人暴行が相当ひどかった（西田将氏談）ため、統制のとれた日本軍の姿が心に残ったのでしょう。

また、日本人の勇敢さも現地の人々にはとても印象的だったらしく、コヒマには日本軍が擱座させた英軍のＭ３グラント戦車が現在も保存されています。この方面の日本軍は対戦車火器をほとんど装

備していなかったため、布団に黄色火薬を詰めた即席対戦車地雷をキャタピラの下にほうり込み、敵戦車を破壊しました。現地の住民は来訪者があるたびに、「これは昔、日本のマスターがやったんだ」と我がことのように自慢している（亀山正作氏談）そうです。

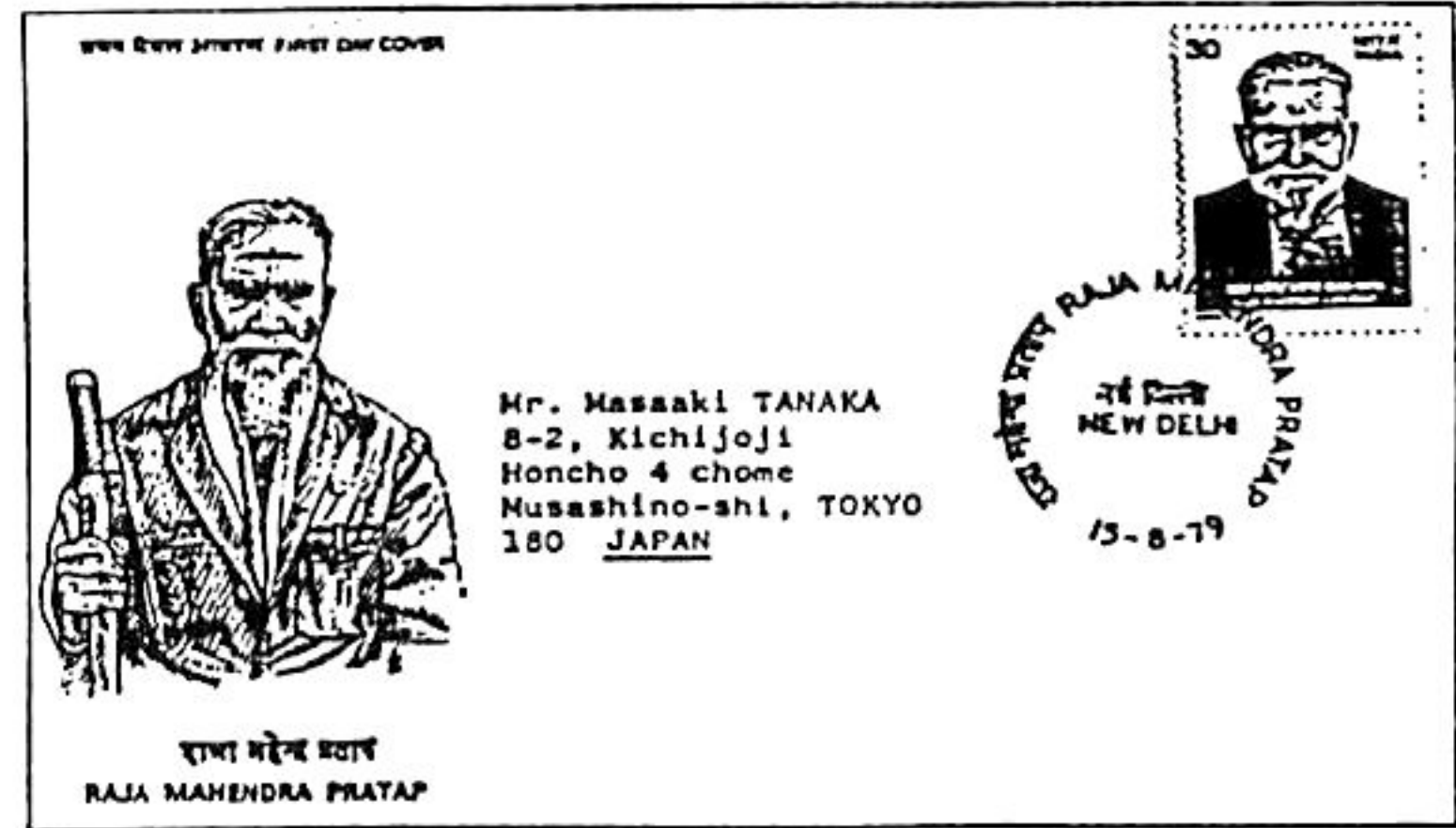
インパール作戦で戦場となった現地の人々は、意外にも親日的なのです。

しかし人々は、単に日本人一人ひとりが規律正しく勇敢であったことを評価しているわけではありません。インドの少なからぬ識者達が、大東亜戦争中に日本国家が果たした役割について肯定的な発言をしているのです。

ラダビノッド・パール判事が、大東亜戦争を評価し、極東国際軍事裁判で「日本無罪論」を主張したのは有名ですが、その他のインド人の中にも大東亜戦争を評価する人は数多くいます。元インド国民軍のハビブル・ラーマン大佐は次のように述べています。

〈ビルマ、インドネシア、フィリピンなどの東アジア諸国の植民地支配は一掃され、次々と独立し得たのは、日本がはぐくんだ自由への炎によるものであることを特に記さなければならない。〉

（スバス・チャンドラボース・アカデミー編『ネタジと日本人』）

さらに、忘れてならない人がおります。インド独立の功労者として尊敬されていたマヘンドラ・プラタップのことです。彼は戦前、日本でもビハリ・ボースらとともにインド独立運動を展開したこともある知日家ですが、戦後、インドに帰って国会議員となり、日本に対してこそ賠償を払うべきだとする「逆賠償論」を主張しました。

マヘンドラ・プラタップの記念切手

1986年はマヘンドラ・プラタップの生誕百年に当ったので，同じく生誕百年のビハリ・ボースとともに両雄の百年祭が全国的規模で祝われた。プラタップは1915年，ドイツ皇帝の支援のもとアフガニスタンに「インド独立臨時政府」を樹立し，義勇軍を編成した。しかし第一次大戦でドイツが敗れ，昭和８年，５度目の来日を機に都下・小平に住んで，万教帰一の愛の宗教を説いた。在日16年。日本敗戦後，インドに帰り，国会議員となって逆賠償論を説く。1979年，93年の生涯を閉じた。

かって、ＮＨＫの磯村尚徳氏は「進め、デリーへ！　――インド独立のかげに」の番組製作のために各地を取材しましたが、インドにおけるスバス・チャンドラ・ボースの存在が「我々の想像以上」に大きいことを、驚きをもって語りました。それは、即ち日本の戦った大東亜戦争とインド独立の関係にも我々の想像以上に深いものがある事を物語っています。

日本では小さなお寺（蓮光寺）の中でしか話題にされない話が、この国では公然たる歴史事実として人々の心の中にとうとうと流れているのです。ジャイ・ヒンド、ボース・ジャイ！

【彌吉博幸】

第四部　日米戦争の超克

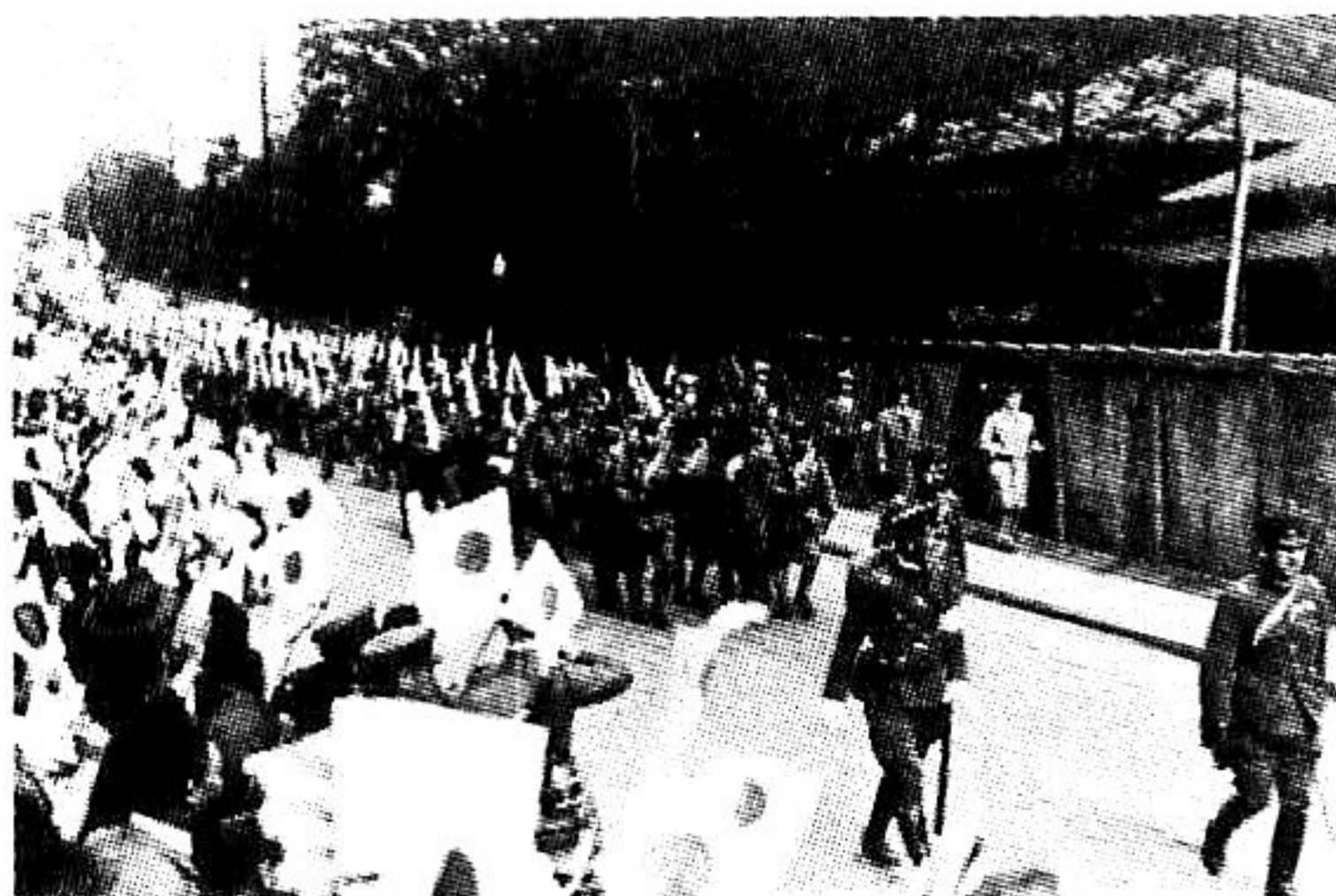
一　大東亜戦争をどう教えるか

教科書記述のモデル

外国の教科書に比べて暗くみじめで貧弱な日本の教科書

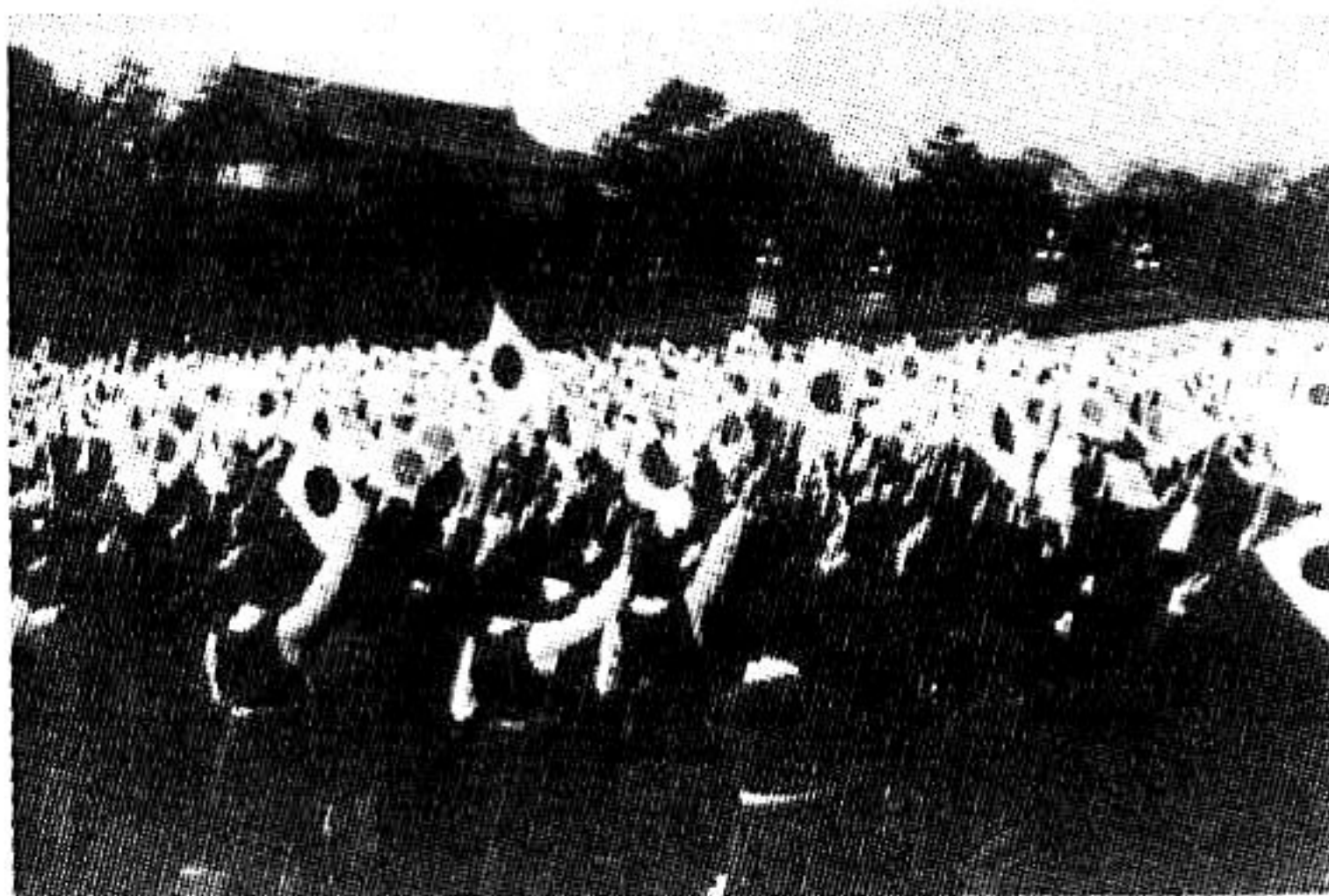
大東亜戦争はアジア諸国に大きな衝撃を与え、強い影響をもたらしました。それだけにアジア諸国の教科書は、第二次世界大戦に対して相当のスペースをさいています。また、米・英・仏等の教科書は、大版でぶ厚く、読み物風の詳しい記述になっています。

それに対して日本の歴史教科書は、大きさこそあまり変わらないものの、全体が薄く、大東亜戦争についての記述も簡単で、事実関係の羅列が目立ちます。

それに、極東国際軍事裁判（昭和21年5月～23年11月、略称・東京裁判）の影響がいまだに尾をひいており、昭和五十七年夏に起こった教科書騒動もあって、「侵略」の用語が散見され、日本の立場や、

我が国が果たした積極的役割については、黙殺しています。これでは印象に残らず、逆に「贖罪感」を植えつけるばかりの味気ない暗記科目になってしまいます。

それに、教科書の挿絵や写真は、みじめなものばかりが目立ちます。特に小・中学校の教科書（8種類）は、パターンが決まっています。載せられた写真は、「だいこんをかじる貧しい農村の少年（満洲事変の頃）」「鉄道爆破のあとを調べる国際連盟調査団（リットン調査団のこと）」「動員された女学生」「学童の集団疎開」「東京大空襲」「広島・長崎の原爆投下」というように。

それに対して外国の教科書は、自国の立場を踏まえ、それを正当化しています。それでいて案外、日本の立場にも理解を示したところがみられます。

アメリカの中等教育用教科書
『The Aflo－Asian World』
「1936年，満洲に向かって出征する歩兵部隊を国民は歓呼して送っている。その頃の満洲は確固たる日本の管理下に置かれていた」

Schoolgirls in celebration at the Imperial Palace after the fall of Nanking in December 1937. *National Archives*

アメリカの大学用教科書
『The Making of Modern Japan』
「1937年12月，南京陥落後，皇居前で戦勝を祝う女学生達」

私は外国の教科書にならって、我が国の立場で「大東亜戦争」について教科書のモデルを書いてみました。挿絵や写真は、日本の教科書が使わない、もっと明るいものを、と考えました。ところが、私が使いたいような写真はすでに外国の教科書が使っているのです。ここでは、敢えて各国の教科書の写真を紹介しながら、教科書記述のモデルを示したいと思います。

「大東亜戦争」記述のモデル

昭和十六年（一九四一年）十二月八日は我々日本人にとって、忘れることのできない日である。この日、日本人は、史上例を見ないほどの決意をもってたちあがった。

General Hideki Tojo, leader of Japan during the Second World War

イギリスの中学校用教科書
『The Modern World since 1870』
「第2次大戦中，日本のリーダーであった東条英機将軍」

The surrender of the British
Can you see General Percival and General Yamashita?

シンガポールの中等教育用教科書
『Social and Economic History of Modern Singapore』
「イギリス人の降伏—君たちはパーシバル将軍と山下将軍がどれか判るか」

それまで欧米諸国（オランダ、イギリス、フランス、アメリカ等）は、数百年にわたって東洋諸国を植民地にしてきた。それに対してアジアには、確固たる独立国がなく、我が国は、東亜の安定に責任を感じ、努力を重ねていた。

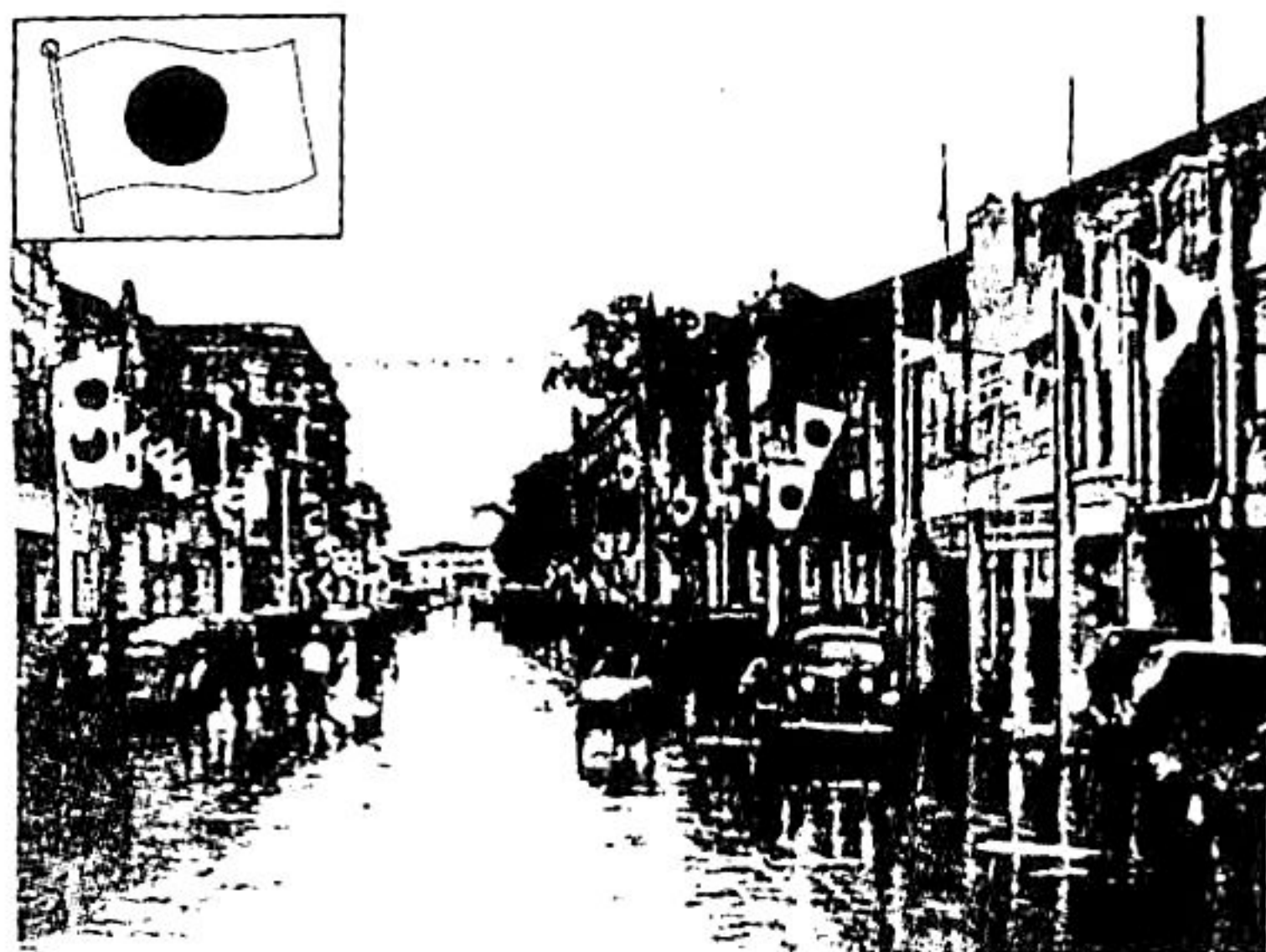
当時、中国大陸には、ソ連と結んで米・英の援助を受け、抗日戦を続ける重慶政府（蔣介石）と、反共親日和平路線を歩む南京政府（汪兆銘）とがあった。我が国は重慶政府への援助ルートを断つべく、仏領インドシナへ進駐した。すると米・英は、オランダや重慶政府をかたらって、ＡＢＣＤ包囲陣を作り、日本に対し、石油その他の禁輸を断行した。この経済封鎖は、我が国に対する公然たる制裁であり、挑戦であった。我が国は、和戦両様の構えをもってアメリカとの外交交渉に臨んだ。

当時、天皇陛下（昭和天皇）は外交交渉重視を強く望まれた。しかし、アメリカは誠意を示さず、交渉を長びかせるばかりであった。我が方は、「仏印以外には進出しないから、石油を売ってもらいたい」という妥協案をもって、最後通告としたが、アメリカ側は十一月二十六日、突如「ハル・ノート」をつきつけてきた。それは「（満洲を含む）中国大陸から撤兵すること、日独伊軍事同盟を死文化すること、南京政府を否認すること」というものであった。

これは、八カ月間におよんだ日米交渉を無視した挑戦状であった。もし、これを受け容れれば、第二、第三の難問をふきかけてくるであろう。また、明治以来の我が国の努力は、ことごとく水泡に帰してしまう。当時の誇り高き日本民族として、このような屈辱に耐えることはできなかった。かくして我が国は、十二月一日、天皇陛下に開戦の御聖断を仰ぎ、十二月八日、国の命運をかけて米・英に

宣戦布告したのである。

我が軍はまっ先に真珠湾を攻撃してアメリカの太平洋艦隊に大打撃を与え、同時に、イギリス領の香港やマレー半島にも攻撃を開始した。さらに十日にはマレー沖で、イギリスの極東艦隊の主力（プリンス・オブ・ウェールズとレパルス）を全滅させた。続いて、フィリピン、インドネシア、ビルマ等にも進撃し、それらの地域を植民地にしていた米・英・蘭等の牙城を撃破した。

それらの国々が、数百年にわたって植民地にしていた東南アジアの重要拠点を、一挙に撃滅したのである。この戦果に国民は歓喜し、アジアの諸民族は狂喜した。戦域はさらに広がり、東南アジア一帯はいうまでもなく、北はアリューシャン列島から南はオーストラリア、西はマダガスカルに至るま

A street in Singapore after the British surrender
You can see the Japanese flags hanging outside houses along the street. The Japanese Flag has a red circle in the centre of a white field. The red circle represents the Sun, which in turn represents Japan as the "Land of the Rising Sun". (You have read that the first Emperor of Japan was said to be a descendant of the Sun Goddess).

シンガポールの前掲教科書
「イギリスが降伏した後のシンガポールの街―君たちは道路に沿って戸外に掲げられた日本の旗を見ることができる。日本の旗は白地に赤い丸が描かれている。赤い丸は太陽を現わし，それはまた日本が日出る国であることを意味する。（君達は日本の最初の天皇が太陽の女神の子孫だということを学んだはずである）」

で、史上空前の大作戦を展開した。
やがて昭和十八年には、八月にビルマ（バー・モウ首班）、十月にはフィリピン（ラウレル大統領）、の独立を承認した。十一月には、それらの首脳も加えて、タイ（ワンワイタヤコーン殿下）、満洲（張景恵首相）、中華民国（汪兆銘首席）、自由インド仮政府（スバス・チャンドラ・ボース首班）等の首脳を集め、東京で「大東亜会議」を開いた。
この時に発せられた「大東亜共同宣言」は、相互の自主独立と伝統の尊重、互恵繁栄、人種差別撤廃の立場から、すべての国々を本来のあるべき姿にたちかえらせる東亜新秩序の建設にあった。
この宣言は、植民地主義国である米・英の利益擁護のために作られた大西洋憲章（後に連合国共同宣言となる）に較べて、自主独立・伝統尊重、人種差別撤廃等の理想が盛られ、画期的なものであった。この理想実現のためには、大東亜戦争に勝利しなければならなかった。
しかし、我が方は緒戦の勝利に奢りがあり、アメリカの戦力を誤断し、広げ過ぎた戦線を有効に活用する戦略的配慮を欠いていた。ミッドウェー敗戦以来、海戦において次々と各個撃破され、徐々に包囲されていった。
それでも望みを捨てず、太平洋の島々（アッツ、タラワ、サイパン、ペリリュー、硫黄島等）では、玉砕するまで戦った。フィリピン防衛戦以来、世界戦史に見られない特攻隊まで繰り出し、壮絶なる戦いを続けた。沖縄防衛戦では軍民一体となって、中・女学生まで戦いに参加し、約三カ月も持ちこたえた。

しかし、敵は本土に対して連続的に無差別爆撃を繰り返し、国土は焼土と化し、遂に広島（8月6日）・長崎（8月9日）に原子爆弾を投下した。八月九日、ソ連は突如日ソ中立条約を破って、満洲、樺太に侵攻してきた。それでも国民は戦意を失わず、徹底抗戦を誓っていた。

しかし、天皇陛下は国民の悲惨さを見るにしのびず、ポツダム宣言の受諾を決意せられた。その時の我が国の唯一の条件は、国体護持（日本の本質を守ること）であった。八月十五日、陛下はラジオを通じて全国民に受諾の詔書を読みあげられた（玉音放送）。

思いもかけない御聖断に、一億国民は慟哭（どうこく）した。中には、ポツダム宣言では国体は護れないとして抵抗を主張する人もあり、敗戦を潔しとせず、自決する人々も多かった。しかし御聖断は、外地軍人

115　団隊訓練中の女性

インドネシアの中等教育用教科書『SEJARAN NASIONAL INDONESIA』
「団体訓練中の（インドネシアの）女性」。日本が最初に行った「三A運動」（アジアの光・日本，アジアの守り・日本，アジアの指導者・日本）時代のもの。

116　戦闘訓練中の郷土防衛義勇軍（ペタ）

インドネシアの前掲教科書
「戦闘訓練中の祖国防衛義勇軍（ペタ）」
日本が訓練したペタの役割については本書第三部「2，インドネシア」参照。

も含めていっせいに守られた。開戦の時も終戦の時も、詔書とともに整然たる行動をとったことは、世界の驚きであった。

かくして我が国は、歴史上例を見ない大敗戦を迎えた。その果てに残ったものは、「国体護持、神州不滅（日本本来の国柄を見失わず、戦争には敗れても、魂は滅びない）」の誓いだけであった。民間人の中には、その人柱となるべく、集団自決した人々もあった。八月十五日は、その時の誓いを再思する日である。

【名越二荒之助】

二　米英側から見た第二次世界大戦の批判と反省

英米同罪論からルーズベルト開戦挑発論への展開

歴史を公平にみるために

大東亜戦争に日本が敗れてから七年間、日本は連合国（主としてアメリカ）による占領統治下におかれました。その間に極東国際軍事裁判（東京裁判）が行われ、大東亜戦争の名称は抹殺されて「太平洋戦争」なる語の使用を強制され、日本は一方的な侵略国に仕立て上げられたまま、今日に至っています。

しかし、歴史を公平に見るならば、日本だけが一方的に悪の権化であったはずもなく、そのことは、英米の識者によってつとに指摘されているところです。日米開戦からはや半世紀を迎えようとする今日、私どもはそうした英米の反省の声にも虚心に耳を傾け、もっと冷静な、バランスの取れた目

で歴史を振り返る必要があると思うのです。

この章では、そうした意味で、日本と戦った連合国側で、戦後、対日戦争についてどのような反省がなされて来たのかという点を中心に、資料を紹介してみたいと思います。私たちは教科書の中で、日本が中国や東南アジアに一方的に侵略し、南京では大虐殺を行い、真珠湾を一方的に奇襲したというようなことばかり教わって来ましたけれども、そのような見方が如何(いか)に一面的な物の見方でしかないかということを、これらの資料は教えてくれているように思うのです。

リンドバーグの批判する対日戦争中のアメリカ軍

チャールズ・リンドバーグといえば、一九二七年(昭和2年)に大西洋横断の単独初飛行を成し遂げたことで有名ですが、彼がまた、合衆国の参戦に強く反対して時の大統領ルーズベルトと対立した反戦運動のリーダーだったことは、日本ではあまり知られていない事実です。そのリンドバーグの書いた『リンドバーグ第二次大戦日記』は、南太平洋の激戦地で実際に前線を視察しながら書かれたものですが、米兵の日本軍に対する戦いぶりを、次のように痛烈に批判しています。

〈一九四四年(昭和19年)七月十三日

(中略)話が日本軍とわが軍が犯す残虐行為に及んだ。わが軍の一部兵士が日本人捕虜を拷問し、日本軍に劣らぬ残虐な蛮行をやっていることも容認された。わが軍の将兵は日本軍の捕虜や投降者を射殺することしか念頭にない。日本人を動物以下に取り扱い、それらの行為が大方から大目に見

られているのである。われわれは文明のために戦っているのだと主張されている。ところが、太平洋における戦争をこの眼で見れば見るほど、われわれには文明人を主張せねばならぬ理由がいよいよ無くなるように思う。事実、この点に関するわれわれの成績が日本人のそれより遥かに高いという確信は持てないのだ。〉

「日本軍の捕虜や投降者を射殺する」ことは、明白な国際法違反です。八月三十日の日記にも、リンドバーグは次のように書いています。「敵を悉く殺し、捕虜にはしないというのが一般的な空気だった。捕虜をとった場合でも、一列に並べ、英語を話せる者はいないかと質問する。英語を話せる者は尋問を受けるために連行され、あとの連中は『一人も捕虜にされなかった』」、つまり全員射殺された、というのです。

戦後、連合国側は日本軍による捕虜虐待を頻り(しき)と問題にし（例えばバターン「死の行進」）、多くのB・C級戦犯がその罪を問われて処刑されましたが、これらも元はといえば日本側が国際法に忠実に則って、大量に投降してくる敵兵を捕虜にしたからこそ生じた問題です。日本側にも多くの落ち度があったことは認めるとしても、捕虜や投降は一切認めようとせず、全員射殺してしまうアメリカのやり方と、果たしてどちらが残虐だというのでしょうか。

リンドバーグは良心の鋭い人でしたから、この点で煩悶せずにはおれなかったのでした。

〈同年七月二十一日

今朝、ビアク島の断崖にたてこもる日本軍の強力な拠点に再度の攻撃を加えることになった。（中

略）もう何週間も、二百五十名から七百名の間と推定されるいわば一握りの日本軍は圧倒的な強敵に対して、また充分に補給された火器が撃てる限りの猛砲撃にも、その拠点を固守し続けてきたのだ。

仮に攻守ところを変えて、わが方の部隊がかくも勇敢に立派に拠点を固守したのであれば、この防衛戦はわが国の歴史上、不撓不屈と勇気と犠牲的精神との最も光栄ある実例の一つとして記録されたに相違ない。が、安全でかなり贅沢な将校クラブに座しながら、これらの日本軍を「黄色いやつばら」と表現するアメリカ軍将校の言に耳を傾けねばならないのである。彼らの欲求は日本兵を無慈悲に、むごたらしく皆殺しにすることなのだ。オウィ島に来て以来、敵に対する畏敬の言葉も同情の言葉も聞いた覚えは全くない。

自分が最も気にしているのは、わが将兵の側にある殺戮の欲望ではない。それは戦争に固有なものである。問題は敵の尊敬に値する特質にさえ敬意を払う心を欠いていることだ。（中略）われわれには勇敢な行為であっても、彼らがそれを示すと狂信的な行為ということになる。われわれは声を限りに彼らの残虐行為をいちいち数え立てるが、その一方では自らの残虐行為を包み隠し、ただ単なる報復措置として大目に見ようとする。〉

ビアク島にたてこもって拠点を死守する日本軍の戦いぶりを、「不撓不屈と勇気と犠牲的精神との最も栄光ある実例の一つ」と認めようとせず、「黄色いやつばら」の「狂信的な行為」であるから「皆殺し」にするしかないと考える米軍側の態度に、リンドバーグは「文明」の名の下に戦っている

と称するこの戦争に対する懐疑を、ますます深めていくのでした。

〈同年七月二十四日
（中略）穴の底には五人か六人の日本兵の死体が横たわり、わが軍がその上から放り込んだトラック一台分の残飯や廃物で半ば埋もれていた。同胞が今日ほど恥ずかしかったことはない。（中略）わが同胞が拷問によって敵を殺害し、敵の遺体を爆弾で出来た穴に投げ込んだ上、残飯や廃物を放り込むところまで堕落するとは実に胸糞が悪くなる。〉

リンドバーグが太平洋の前線を視察した一九四四年の日記には、この種の記述が至るところに出て来ます。そしてリンドバーグは、日記の全編を次のような言葉で締め括るのです。

〈一九四五年六月十一日
ドイツ人がヨーロッパでユダヤ人になしたと同じようなことを、われわれは太平洋で日本人に行って来たのである。（中略）地球の片側で行われた蛮行はその反対側で行われても、蛮行であることには変わりがない。『汝ら人を裁くな、裁かれざらん為なり』。この戦争はドイツ人や日本人ばかりではない、あらゆる諸国民に恥辱と荒廃とをもたらしたのだ。〉

こうしたリンドバーグの忠言に耳を貸すこともなく、アメリカを中心とする連合国は、戦争に勝利するや直ちに、「文明」の名において一方的に日本を断罪したのでした。そしてその裁判の中では、弁護側の提出した日本側に有利な状況証拠は一切却下され、原爆投下や捕虜虐殺など、戦時国際法に照らして明らかに違法である米国の戦争犯罪については、まったく問題にすることすら許されなかっ

たのです。

ヘレン・ミアズの『アメリカの反省』

また、占領下の日本では厳格な検閲制度が敷かれ、アメリカの占領政策に不利な言論は悉く封殺されていました。ここに紹介する、対日戦争に対するアメリカ人自身の痛烈な反省の書であるヘレン・ミアズの『アメリカの反省』も、占領下日本での翻訳出版はGHQがこれを許さず、日本人が本書を手にしたのは占領解除後のことでした。

ミアズは、満洲事変以前の日本の軍事行動について、「民主的西欧諸国が造ったとほりの国際法によって是認されたものである」と述べ、また満洲事変そのものについても、単純な日本の侵略行為とはいえない、「それについては全西欧列強が責任を分担せねばならない」と論じているのです。

〈西欧列強が国際関係第一課として日本に教へたことを、そして必要とあれば、彼等が現在でもなほ行つてゐることを、今、日本が実行したからといつて、これを咎め立てするのは卑怯だつた。僅か二、三年以前には、他の西欧列強、就中、イギリスは、中国とその途中に、二万の軍を駐屯させてゐたのだ。他の西欧列強は中国に対して、軍隊や砲艦を行使できるのに、何故日本が行使してはいけないのか、おそらく日本人は了解に苦しむことだらう。〉

そして当のアメリカ政府自身も、一九二七年まで、「中国の『山賊兵』の乱暴から、アメリカ市民と資産を守るためにといふ、日本の言分と全く同様な理由により、中国に武力を発動」していたでは

ないか、とミアズは言うのです。
ミアズは満洲事変へのアメリカ政府の対応について、「我々は、中国の独立のために一応身構へをしたが、実際には（中略）我々自ら中国の独立を侵害してゐたのである」と断じ、アメリカの政策を次のように批判しています。
〈もしもアメリカが、中国に関して純粋に自己否定的であつたならば、特権を放棄した筈である。この特権があつたればこそアメリカ政府は、純然たる主権国家なら当然外国に許可せぬやうな権利を、中国内で要求できたのである。例へばアメリカは、揚子江に砲艦を碇泊させる権利を持つてゐた。我がアメリカなら、ミシシッピー河上に外国の砲艦を碇泊させることなど、断じて許可するまい。〉
ジョン・トーランドも、ピューリッツァ賞を受賞した著作『大日本帝国の興亡』の中で、ミアズと同様のことを指摘しているのは注目すべきでしょう。
〈イギリスやオランダがインドや香港、シンガポールおよび東インド諸島を領有することはこれを完全に認めることができるが、日本が彼等のまねをしようとすれば罪悪であると糾弾する根拠はどこにあるのか？　なぜ、インディアンに対して術策を弄し、酒を使い、屠殺をして土地を奪ったアメリカ人が、日本人が中国で同じことをしたからといって、指をさすことができるのだろうか？〉
彼等のこうした批判は、日本の立場そのものに特に同情的であるというわけではありませんが、欧米のアジアに対する積年の植民地支配を自己批判し、日本だけを責める資格が我々にあるのだろ

うかと鋭く問うている点で、欧米人の良心を代表するものと言えるでしょう。

ウェデマイヤーの批判するルーズベルトの対日挑発

以上の批判は、いわば「日本も悪いが英米も同罪ではないか」（あるいはリンドバーグのしばしば引用する『聖書』の言葉によれば、「何故、兄弟の目にある塵を見て、己が目にある梁木（うつばり）を認めぬか」「汝ら人を裁くな、裁かれざらん為なり」）といった種類のものですが、アメリカ人の自己批判はそこに止まってはいませんでした。

戦争が終ると、今度は直接対日戦争に関わった人々の間から、驚くべき事実が証言されはじめたのです。それは、日本に対して対米開戦を余儀なくさせた責任は、ルーズベルト大統領その人にあるという批判です。ここでは、そのような証言の一つとして、マーシャル参謀総長の懐刀であったウェデマイヤー将軍の著した『ウェデマイヤー回想録』を取り上げてみましょう。

ウェデマイヤーは一九四一年初頭から一九四三年秋まで米陸軍参謀本部戦争計画部におり、米国の第二次大戦戦略動員計画を作成、数次の米英巨頭会談にもマーシャルに随行して列席した人物です。この本の中でウェデマイヤーは、「日本の真珠湾攻撃は、アメリカによって計画的に挑発されたものであるという事実」を明記しているのです。

もともとアメリカ国民に、第二次大戦への参戦の意思は毛頭ありませんでした。ルーズベルトは大統領選挙の公約中に、アメリカの子弟が二度と外国の戦場に送られることはないと、何度も盛り込ま

なければならなかったほどです。世論は圧倒的に反戦を支持しておりました。そのアメリカが何故、ドイツや日本を敵に回して戦わざるを得ない羽目に陥ったのでしょうか。ウェデマイヤーは、次のように書いております。

〈ルーズベルトは、アメリカ国民を戦争にまきこまない、と国民に誓ったが、その約束を公然と破らずに、チャーチルと結んだアメリカをヨーロッパ戦争に介入させる約束を果たすことのできるただ一つの方法は、ドイツか日本を挑発してアメリカに戦争をしかけさせることである、とにらんでいた。〉

ルーズベルトはヒトラーのドイツを深く憎んでおりましたから、内心では米国の対独参戦をすでに決意していたのです。ただ、それでは不戦の誓いを掲げたが故に彼を大統領に三選した米国民の納得が得られるはずもありません。ルーズベルトとしては、あくまで不戦中立のポーズを取りながら、謀略によってドイツか日本を挑発し、枢軸国の方から先に攻撃させることが必要でした。そうすれば、米国民も立たざるを得ないことになるからです。

そしてドイツでなく、日本を次第にそのターゲットにしていく経過を、ウェデマイヤーは次のように書いています。

〈ルーズベルトは、ドイツに対米宣戦させようとした極端な挑発行動も失敗し、アメリカ国民の大多数の参戦反対の決意も固く、アメリカ議会で宣戦布告の同意が得られる見通しもなかったので、彼は目を太平洋に転じた。実際、日本を強制して対米宣戦を布告させるよう、外向的、経済的に日

本を圧迫することは可能な状況であったので、もしそうするならば、日本はドイツほど、がまんづよくないと思われた。

これに対し日本は、その存在を危険にさらさずには後退できないまでに、あまりにも深く日中事変に介入していた。アメリカは、日本が面目をつぶさない限り現に保持している地点から撤退できない、という妥協の余地のまったくない提案を日本側におしつけた。〉

これがいわゆる「ハル・ノート」であったことは申すまでもありません。ハル・ノートを日本側に突き付ける前日の日記に、スチムソン陸軍長官は次のように記していたことも、忘れてはならぬ事実でしょう。

〈問題はどのように彼ら（日本を指す）を操って、われわれには余り過大な危険を及ぼすことなく、彼等に最初の一発を発射させるような立場に負い込むべきか、ということである。これは難しい注文であった。〉

ウェデマイヤーの回想録は、こうして真珠湾攻撃がルーズベルトの仕掛けた、米国民を参戦に導くための謀略工作であったことを明らかにした上で、次のように述べております。「アメリカが第二次大戦に参戦していなかったならば、少なくとも独ソ両国がともに疲れはてるまで参戦を見合わせていたならば、ソ連が現在、地球の半分近くの広大な地域に君臨するような事態にはならなかったであろう」と。

ルーズベルトはスターリンを「〈彼の友人〉であり、あるいは、友人となりうるものであり、そし

てソ連は、アメリカの永久的な同盟国、あるいは永久的な同盟国となしうる国である、と想像した」ことによって、対ソ戦略を決定的に誤ったのでした。ウェデマイヤーは「連合国側の過失のうち最大のものは、同盟国ソ連の戦後に対する意図を正しく判断できなかったことである」と述べ、痛恨を込めて、次のように記しております。

〈(アメリカは) 親友と思いこんだ共産主義者という大蛇にアメリカ国民の人心を毒させて、アメリカの理想をゆがめさせたため、枢軸側に対して同情と客観性とを失った。(中略)ルーズベルト大統領は、第二次大戦の終結に当たり、なにか計画を持っていたかといえば、彼は三大国による懲罰的戦後処理を強行しようとしただけで、(中略) 無条件降伏を主張することによって、アメリカみずからヨーロッパとアジアにおいて、スターリンの勢力を増大させたのである。

(中略)

今日の時点からみれば、アメリカとしては、戦略計画を明確にして、ソ連に対し急速かつ効果的に、その領土と勢力とを拡張する機会をあたえないようにしておくべきであったことは、あまりにも明瞭な事実である。(中略) アメリカの失策はスターリンの力を大きく増大させ、彼ひとりがこの大戦で利益をおさめる結果となり、彼は平和会議の席上であらゆる詭計を用いるようになった。〉

結局アメリカは、日独憎しとの感情のあまりに、真の敵であった共産勢力を味方と思い込み（ルーズベルトは、スターリンを「共産主義者と考えるのは馬鹿げている。彼はただロシアの愛国者であるだけだ」と公言していました）、気が付いた時には、北朝鮮から中国大陸、そして東欧に及ぶ共産勢力の大躍進を

許していたのでした。

ハミルトン・フィッシュの告発するハル・ノートの真相

ルーズベルトの政敵で、真珠湾当時、野党である共和党のリーダーとして、下院において米国の開戦阻止運動を果敢に展開していたハミルトン・フィッシュは、『日米・開戦の悲劇』という著書の中で次のように書いています。

〈日本は、米国との開戦を避けるためならほとんど何でもする用意があったであろう。（中略）日本は、フィリピンおよびその他のいかなる米国の領土に対しても、野心を有してはいなかった。しかしながら、ひとつの国家として、日本はその工業、商業航行および海軍のための石油なしには存立できなかった。

非常な平和愛好者である首相の近衛公爵は、ワシントンかホノルルに来てもよいからルーズベルト大統領と会談したいと、繰り返し要望していた。（中略）在日米国大使であったジョセフ・グルーは、日本がどれだけ米国と平和的関係を保ちたいと希望していたかを承知しており、かかる首脳会談の開催を強く要請した。しかしルーズベルトおよびその側近の介入主義者たちは、策謀とごまかしとトリックを用いて、全く不必要な戦争へわれわれをまき込んだのである。〉

日本人も米国人も、戦争を望まなかった点では一致しておりました。日本政府は、米国との開戦を避けるため、最後までぎりぎりの努力をしておりました。また、米国内でもフーバー元大統領やタフ

ト上院議員、それにリンドバーグやフィッシュらが先頭に立って参戦反対で世論の圧倒的支持を得ていました。にも拘わらず、戦端は開かれてしまったのです。それも、日本の「奇襲」にアメリカが激昂するという、最悪の形で。

チャーチルは第二次大戦を「無用の戦争」と形容しましたが、フィッシュも次のように述べています。

〈日本との間の悲惨な戦争は不必要であった。これは、お互い同士よりも共産主義の脅威をより恐れていた日・米両国にとって、悲劇的であった。われわれは、戦争から何も得るところがなかったばかりか、友好的であった中国を共産主義者の手に奪われることになった。〉

フィッシュは惜しくも今年（一九九一年）一月に亡くなりましたが、彼の最後のメモワールが今秋、アメリカで出版されることになっています。そしてその中でフィッシュがハル・ノートについて述べていることは、アメリカ人・日本人の双方にとって衝撃的な事実であると言わねばなりません。

（以下、引用は「諸君！」平成3年8月号所載）

〈外交委員会のメンバーであった私でさえ、日本を侮辱するような最後通牒が送られていたなどとは全く知らなかったのだ。否、私を含む全てのアメリカ人は、ルーズベルト大統領と声を合わせて、日本軍による真珠湾攻撃を「汚辱の日」として弾劾した。アメリカ人誰もが、奇襲という卑怯な攻撃に激昂したのである。（中略）我々は、ルーズベルトが我々を欺いて、戦争に導いたなどとは、疑いもしなかった。（中略）真珠湾攻撃の何年も前から、ルーズベルトの宣伝機関は、日本人

を我が国に戦争を仕掛けてくるおそるべき脅威として描こうとしていたが、今日では、事実はその全く逆であったことを示す証拠がある。〉

フィッシュはこう述べた後、ハル・ノートの発出経緯について次のように言うのです。

〈四十年以上かけて、ついに私は、コーデル・ハル国務長官を通じて一九四一年十一月二十六日に日本側に手渡された最後通牒（の原案にあたる文書）を著した本人を突き止めた。その名を聞いたら、多くのアメリカ人は驚きを禁じ得ないと思う。（中略）財務次官ハリー・デクスター・ホワイトによって書かれたのである。（中略）

ホワイトは後年、（中略）政府機関文書をソ連に流すなどスパイ活動をしていたことを告発された当事者である。過激な最後通牒を日本に送った最終的な責任者はルーズベルト大統領であるが、その文書（の原型）は隠れた共産主義擁護者の手になるものだったのだ。〉

ホワイトの草稿は、日米開戦に先立つこと半年前の六月六日付で、すでにヘンリー・モーゲンソー財務長官宛に提出されていました。「モーゲンソーもルーズベルトも、ホワイトが共産党擁護者であり ホワイトが権力の座に登用した人物達が正真正銘の共産党員であったことは知っていたに違いない。（中略）友人の何人もが共産党員なのでルーズベルト自身は政府内で共産主義を狩り出すことに関心がないと語ったことがある。（中略）政府内で工作する共産主義者たちがアメリカに対してもたらした脅威に、ルーズベルトが無関心であったことは許しがたい」と、フィッシュは書いています。

ハル・ノートが「政府内で工作する共産主義者」の作文であったとすると、日米の不幸な戦争を引

き起こした要因の一つとして、ルーズベルト政権の奥深くまで浸透していた共産主義者の影響力も、けっして無視できないことになります。

何故なら、彼ら共産主義者にとって米国を日本との戦争に引きずり込むことは、アメリカの対ドイツ参戦を実現し、ソ連を救う上で、当時喫緊の課題であったに相違ないからです（六月二十二日、ドイツは独ソ不可侵条約を破棄してソ連に攻め入り、ソ連は窮境にありました）。

フィッシュは『日米・開戦の悲劇』の中で、ルーズベルトには戦後、スターリンに西ヨーロッパを明け渡す目論みさえあったことを明らかにし、次のように述べています。

〈スターリンとその共産主義体制に対し、好意的であると知られていた助言者達が、ルーズベルトにはいたのである。これらの助言者達の中には、ルーズベルトの主要秘書兼、外交問題担当補佐官を務めたが、親共産主義的であると、公に非難され、後に逃亡したロックリン・カリーもいた。また、ハリー・デクスター・ホワイトは、財務省の外交問題に関する代表であったが、同じく親共的と言われた。アルジャー・ヒスは、国務省で高い地位におり、かなり後になるまで、彼の親共産主義者としての活動は、明らかにならなかった。そして恐らく、ルーズベルトの右腕であり、ルーズベルトが、スターリンときわめてうまくいく仲であると言っていたハリー・ホプキンスもそうである。ホプキンスは、スターリンとルーズベルトに対して、他の誰よりも影響力を有していた。

これらの助言者達の中で誰が、西ヨーロッパを実質的に共産主義の支配下におくといった計画書を書くのを手伝ってもおかしくない。〉

戦後、ソ連や中共が世界を席巻するのを目の当たりにして、米国は慌てて反共政策に転ずることになりますが、その種を蒔いたのは、実はルーズベルトの米国政府自身であったのです。何とも皮肉なこと、と言わねばなりません。

大東亜戦争は一方的な「侵略」戦争ではなかった

アメリカ建国の父ジョージ・ワシントンに、「訣別の辞」という、歴代大統領に与えた訓戒があります。

〈ある特定の国々に対して永久的な根深い反感をいだき、他の国々に対しては熱烈な愛着を感ずるようなことがあってはならない。他国に対して常習的に好悪の感情を抱く国は、多少なりとも、すでにその相手国の奴隷となっているのである。（中略）国家間の平和は、この好悪の感情の犠牲となって失われることがしばしばある。〉

しかし、ルーズベルトの行った政策は、この建国の父の遺訓を悉く無視するものでした。彼は英国に熱烈な愛着を抱き、ソ連にも好意的な感情を終始抱き続け、一方でドイツと日本を激しく嫌悪しておりました。ヒトラーの脅威から英国を救出するために、米国が対独戦に参加できるよう、嫌がる米国民を無理やり日本との戦争に引きずり込み、中国では蔣介石を頻りに支援して、日本を国際的孤立に追い込んだのでした。

その結果が共産勢力の大躍進であり、何のことはない、アメリカは共産主義の脅威を作り出すため

に参戦したようなものでした。

一方、イギリスのチャーチルも、英国外交の伝統であったヨーロッパ大陸の勢力均衡政策をかなぐり捨て、ナチの徹底的破壊を企図したために、ソ連の大幅な東欧進出を許す結果になったばかりか、第二次大戦の結果、植民地のすべてを失い、事実上の二流国に転落してしまいました。

私どもは、対日戦争に対する米英両国の反省を通じて、大東亜戦争がけっして日本だけの一方的な「侵略」戦争という性質のものではなかったこと、その淵源にはルーズベルトの対日謀略があり、さらにその背後には、ルーズベルトをも籠絡していたスターリンの老獪な戦略があったということを、けっして見逃してはならない、と思うのです。

【勝岡寛次】

三　アジアは「反日」か「親日」か

今も続く二つの評価とそれを超克する方途を探る

日本兵のビンタから

アジア諸国は果たして「反日」なのか、それとも「親日」なのか。現地を訪問してみれば、国によって雰囲気が違うし、年齢や体験によってもまちまちです。けっして「親日一色」でもなければ、「反日一色」でもありません。複雑な意識を持っていることを、ありのままに理解したいのです。

朝日新聞社が発行している『ＡＥＲＡ（アエラ）』（平成3年8月20日号）は「大東亜の人質・南方特別留学生」「東南アジアは戦争を教え続ける」という二つの特集記事を載せております。当時の南方特別留学生たちは、喜んで日本に留学した人々が多かったのに、見出しに「人質」を使うのはひどいと思いました。ところが読んでみると、案外多面的な記事になっています。

元フィリピン兵士で「南方特別留学生」として来日していたレオカディオ・デアシス氏（71歳）は、次のように言っております。

〈食事の配給のときだ。米粒がこぼれた。毎日労働に駆り出され、とにかく腹が減っていた。拾おうとしたら、日本兵にいきなり「ビンタ」をくらった。あんな冷酷で凶暴な日本人と生活などしたくないと思った。〉

私も軍隊の初年兵時代、毎日のように下士官や古年次兵にビンタをくらっていたので、気持はよくわかります。しかし当時の私は、戦う軍隊を作るためには、このような厳しさが必要なのだと甘受していました。マレーシアの元留学生などもその点を理解していたのか、冷酷な猛訓練に対して、「いい経験でした」『精神を鍛えられました」と受けとめている例も紹介しています。

＊

そもそも日本軍隊は世界でもっとも精強を謳われ、それだけに短兵急であり、直線的でした。日夜猛訓練に明け暮れ、相手の立場を考えるなどという余裕はありませんでした。また開戦前に、異民族に接する心構えとして、現地人の信仰心や習慣など詳しく教えることもしませんでした。それに、野戦の軍隊はいきりたっていますから、現地人のもどかしさに気合を入れるべく、いきなり平手打ちをくらわせた例も多かったと思います。

信仰心篤い仏教徒にとって、頭は仏の宿るところですから、他人が触ることさえ許されないのに、ビンタをとったりすれば、生命的な屈辱を感ずるのは当然です。横柄で無暴な日本兵のイメージは、

たちまち千里を走ります。一部の心ない者の仕業によって、九仞の功を一簣に虧いた（多年の努力をささいなことで失敗させること）例が多かったと思います。

反日感情を作りあげたもの

アジア諸国の中でもっとも知日派の一人であるビルマのバー・モウ首相は、その回顧録の中で、日本のために惜しむとしながら、反日感情を作りあげた構図を明らかにしております。

日本は緒戦の段階で、南機関（機関長・鈴木敬司大佐）が育成したビルマ独立義勇軍を先頭にビルマに進撃しました。その時「ビルマ人の間に起こった新しい精神運動の鼓動」を、バー・モウは感動的に伝えております。根が哲学者である彼は、ビルマ人たちが「雷帝、東方より来る」と信仰的に受け止めた「神秘の輝き」を語っています。

しかし彼は、ビルマ人の間に芽生えたこの「新しい精神」と「新しい時代」を、日本人自身が無残にも打ち砕いてしまったとして、日本軍の横暴を強調しています。

〈冷酷で短気な日本軍人が残虐な振舞いをしたこと、そして、もっと残酷なやり方でビルマとビルマ人及びその資源を日本の戦いのために利用したことについては、疑う余地がない。（中略）これらの軍人はビルマ人の知っているすべての者よりはるかに残虐であった。これらの人々の残虐性、横柄さ、民族的自負はビルマ人の心に戦時中の記憶として深く残っている。東南アジアの非常に多くの人々にとっては、それらのみが戦争の記憶のすべてである。〉

彼は、日本軍の残虐性が、東南アジアの多くの人々に、それがすべてであるように受けとられてしまったことを指摘しているのです。インドネシアの教科書も、次のように書いております。

〈日本時代にインドネシアの民衆は、肉体的にも精神的にも、並はずれた苦痛を体験した。日本は結局独立を与えるどころか、インドネシア民衆を圧迫し、搾取したのだ。その非人道性はオランダを超えるものがあった。（中略）ロームシャ（労務者）たちの待遇は、極めて残酷であった。彼らが労働中に少しでも不注意だったりすると、平手で叩かれ、銃で殴られ、鞭で打たれ、足蹴にされた。これに抵抗した者は殺された。〉（中学用『歴史』一九八八年、スランカイ社刊）

このような文章だけを紹介されれば、日本軍が東南アジアで行ったことはお話にならず、恥ずかしくて顔向けできない気持になります。しかし、このような文章だけを振りかざして、日本軍を犯罪者のようにきめつけることは、ちょっと待っていただきたいのです。敢えて私が行う日本への弁護・弁明にも耳を傾けてもらいたいと思います。

一、当時の日本は、米・英を相手とする大戦争のさ中にありました。だから米・英・蘭のように、数十年あるいは数百年かけてゆっくり植民地政策を実施するような「ぜいたく」は言っておれませんでした。勝利しなければアジア解放の夢も失われてしまいます。そのため、現地人にずいぶん無理を強いました。戦況不利となれば食料不足も起こり、労務者をかりたてる必要にも迫られ、対日ゲリラも起こり、疑心暗鬼の孤立感に追い込まれました。このへんの事情を汲みとるだけの心の広さを持ってほしいのです。

二、そもそも戦争は残虐さをともなうものです。いかなる国の軍隊も、戦場に出かければ集団の狂気と化する一面があります。紳士的人道的に行われる戦争というものはありません。

オランダやイギリス等は白人優越意識を持っていましたから、初期の段階でいかに暴虐の限りを尽くしたことか。独立をめざして蜂起した集団が、いかに残酷に弾圧されたことか。日本だけを残虐視するのでなく、過去の植民地諸国の事例にも目を向けてほしいのです。

三、アジア人の中には、「白人が威張るのは我慢できるが、日本人が威張るのは許せない」という風潮があるようです。また日本人にも、「白人には遠慮するが、アジアの人々に対しては偉そうにする」という気風が抜けきれません。早くアジア人相互の不信感とか憎悪を超克して、アジアの精神的伝統である慈悲（釈迦）とか、仁愛（孔子）の精神に回帰したいものです。

大局を見るアジアの目

これまでアジアの反日感情の構図について考えてきましたが、日本の果たした役割を大局的に評価する人々は多いのです。昭和六十一年（一九八六年）三月に私たちがインドネシアを訪問した時、サンバス将軍（元東欧大使、復員軍人省長官、ペタ〈祖国防衛義勇軍〉ではスハルト大統領と同期）に会いました。私が教科書に書かれた反日的記述の部分を紹介すると、「そのことは知っている」と前置きして淡々と語りました（通訳はＡＳＥＡＮセンター代表・中島慎三郎氏）。

〈今、インドネシアでもその他の国でも、大東亜戦争で日本の憲兵が弾圧したとか、労務者を酷使

したとか言っているが、そんなことは小さなことだ。いかなる戦場でも起こり得るし、何千年前もそうだったし、今後もそうだ。日本軍がやったもっとも大きな貢献は、我々の独立心をかきたててくれたことだ。そして厳しい訓練を課したことは、オランダのできないことだ。日本人はインドネシア人と同じように苦労し、同じように汗を流し、〝独立とは何か〟を教えてくれた。これはいかに感謝しても感謝しすぎることはない。このことはペタの訓練を受けた者は、一様に感じていることだ。特にインドネシアが感謝することは、戦争が終わってから日本軍人約千人が帰国せず、インドネシア国軍とともにオランダと戦い、独立に貢献してくれたことである。日本の戦死者は国軍墓地に祀り、功績を讃えて殊勲章を贈っているが、それだけですむものではない。〉

ボゴールの自宅前で熱弁をふるうサンバス将軍。ペタの訓練所が自宅近くにあり，プンチャク峠の頂上に「ペタ発祥記念塔」を建立するのだと意気込んでいる（昭和63年３月）。

このように評価するのは、サンバスさんだけではありません。一九六〇年代までのインドネシアの教科書は、日本の果たした積極的役割にも触れていたのです。いくつか紹介してみましょう。

〈インドネシアの指導者たちの要請で、一九四三年に『祖国防衛義勇隊』（ＰＥＴＡ（ペタ））が作られ、全インドネシア民族の熱烈な歓迎を受けた。このＰＥＴＡには、より多くの青年たちが最後まで闘うために結束されていった。日本の厳しい軍事訓練を受けて、やがてこのインドネシア青年たちは祖国独立の扉を開くべく立ちあがるのである。〉（一九六三年刊、中学生用、アンワール・サヌレ著『現代国史Ⅲ』）

〈日本の占領は後に大きな影響をもたらすような利点を残した。

第一にオランダ語と英語が禁止されたため、インドネシア語が成長し、使用が広まった。この三年半の間に培われたインドネシア語は驚異的な発展を遂げた。

第二に日本は〝セイネンダン〟や〝ケイボウダン〟に組織された青年たちに軍事教練を課して、竹槍と木銃によるものだったとはいえ、きびしい規律を教え込み、勇敢に戦うことや耐え忍ぶことを訓練した。

第三に職場からオランダ人がすべていなくなったことにより、日本はインドネシア人に高い地位を与え、我々に大きな責任を要求し、重要な仕事を任せた。

第四に日本は『ＰＵＴＥＲＡ』（民衆総力結集運動）や、『ジャワホウコウカイ』を通じてジャワに本部を置き、すみずみにまで支部の広がった大組織を運営することを我々に教えた。

我々が独立を宣言した後に、オランダの攻撃から独立を守らなくてはならなくなって、以上四点は特に測り知れないほどの価値ある経験であった。〉（一九五八年、中学三年用、ストロ著『世界の中のインドネシア』）

日本軍政がもたらした貢献としてアメリカのジョージ・S・カナヘレ博士も『日本軍政とインドネシア独立』の中で以上の四点について触れています。また本書278頁には、アラムシャ将軍が挙げた六点を紹介しています。

＊

横道にそれたようです、冒頭に紹介した「ＡＥＲＡ」にかえりましょう。

「南方特別留学生」として昭和十八年（一九四三年）にインドネシアから留学し、戦後、京大法学部を卒業したシャリフ・アディル・サガラ氏（66歳・弁護士、広島での被爆体験者）は次のように言っています。

〈日本は植民地支配者であるオランダを追い払った。驚異のアジア人であった。〉

〈一番好きな日本語は「徳」です。戦争中の日本人が見せた団結心、愛国心、大和魂（やまとだましい）、民族意識、私もそうなりたい、と思った。〉

〈「大東亜共栄圏（だいとうあきょうえいけん）」も、戦争に勝つための方便（ほうべん）だったのかもしれない。よくわかりませんが……。ただ、アジア人も殺されたが、日本人もたくさん殺された。戦争になったのは、日本だけの責任ではないような気がするのです。〉

マレーシアで言論界・政界に大きな影響力を持つモハメド・ソビー氏――。
〈僕は憲兵隊の警部だった。日本軍のおかげで我々は独立を早めることが出来た。日本とマレーシアには英国にはない共通点がある。八紘一宇の精神だ〉
戦無派・烏賀陽記者のアジア取材メモから――。
〈今こそ、日本は大東亜共栄圏のリーダーになるべきです。〉
〈かつて、アジア人は助け合って発展しよう、といったではないか。今こそ、大東亜共栄圏の約束を実行してくれ。〉
〈五十年前、日本人はアジア人になろうとした。だから私たちは親日なのです。だが、戦後の日本は西洋人になろうとしている。最近留学した若者は、みんな反日になって帰ってくる。〉

海部演説の代案

現代の日本のマスコミ界では、「太平洋戦争史観」に禍されてか、あるいは、大東亜戦争の肯定面をとりあげたら、またぞろ戦争を勃発させるという警戒感からか、否定的な記事ばかりが氾濫する状況にあります。ものは多面的に見なければなりませんので、「ＡＥＲＡ」の中から敢えて肯定的な発言を選んでみました。

もちろん、ここに紹介したのはごく一部であって、アジアの人々の中には、「大東亜戦争の理想は正しかった。今もコンティニューだ（継続している）」というような意気軒昂たる発言も耳にします。

そうした中にあって、海部俊樹首相は、平成三年の四月末からＡＳＥＡＮ諸国を訪問し、五月三日にシンガポールで演説しました。その中に次のような発言がありました。

〈今年は太平洋戦争の開始から五十年の節目に当たり、私はあらためて今世紀前半の歴史を振り返り、多くのアジア・太平洋地域の人々に耐えがたい苦しみと悲しみをもたらした我が国の行為を厳しく反省する。〉

〈日本国民すべてが過去の我が国の行動についての深い反省にたって、正しい歴史認識を持つことが、不可欠と信じる。次代を担う若者たちが、学校教育や社会教育を通じて、我が国の近現代史を正確に理解することを重視して、その面での努力を一段と強化する。〉

この演説は大東亜戦争の成果を否定し、お詫びすることになります。当時、ＡＳＥＡＮ諸国を廻っていた中島慎三郎氏が直ちに現地レポートを書いて、一冊のパンフレット（『海部首相の人気がＡＳＥＡＮで失墜』）を作成しました。それによると、海部演説に対して、現地の知日派たちがいかに幻滅したかがよくわかります。レポートによれば、「日本はあれだけの大戦争を勇敢に戦いながら、その国の首相が、先輩の業績を否定するような発言をするのは無責任だ」と彼らは批判するのです。

私もよく海外旅行をして現地の人々と渡りあうことがあるのですが、サムライ精神を持った彼らですから、お詫びをする日本人は、歴史を否定する者として、軽蔑するのです。過去の歴史がよかったとか、悪かったとか、簡単に断定する軽薄さを彼らは笑うと言ったらよいでしょうか。威張るのもダメ、ペコペコするのもダメなんです。むしろ、自国の歴史的業績や文化遺産に誇りを持って語る者

は、愛国者として尊敬するんです。「中島レポート」の中からいくつか紹介してみましょう。

〈ヨーロッパは五百年にわたってアジア・アフリカを搾取した。しかし彼らはけっして謝罪しないし、賠償金も払わない。五百年のヨーロッパが謝罪しないのに、三年半の日本が謝罪するのは、外交音痴だ。もしこれがイギリスや中国だったら、「海部首相は利敵行為をした。彼は売国奴である」と罵倒されるに決まっている。英・蘭・仏等はなぜ謝罪も賠償金も払わないのか、研究しなさい。〉（オランダ系混血児、元新聞記者。ヤン・ヴィダル夫人）

〈日本の戦争目的は植民地主義の打倒であった。その目的の大半は達成したが、まだ残っている。南アフリカがそうだし、サハロフ博士も言うように、〝ソ連は最後の植民地主義国〟だ。中国もチベットや新疆を併呑した植民地主義国だ。これから我々が取り組まねばならない植民地一掃の大事業は、中・ソが相手になる。そんな時に行なった海部演説は、植民地主義打倒の悲願を放棄したことになる。海部さんは日本の果たしてきた歴史を踏まえ、A・A諸国の悲願を代表して、まだ残る植民地主義を攻撃すべきであった。かつての日本は、スカルノ、ハッタ、バー・モウ、ラウレル、アキノ、汪兆銘、チャンドラ・ボース等を応援したのに、たった一度の敗戦で大切な目的を忘れてしまったのは、遺憾である。〉（先に紹介したサンバス将軍）

〈私と同じ早大出身の海部首相が、大東亜戦争を理解しないのは遺憾である。あれでは戦死者は犬死になってしまう。アジアの大部分は親日派なのに、なぜ少数派の反日派に迎合するのか。その理由を聞きたいものである。〉（陸軍士官学校では加藤六月衆議院議員と同期。終戦後、早大理工学部卒。元

海部演説を批判するウトモ氏

東京医科歯科大学の名誉教授であり、学士院会員でもある総山孝雄氏から、私は平素いろいろ教示をいただいている。

氏は大東亜戦争時、通信隊の小隊長としてマレーからスマトラに転戦した。氏はその体験を『スマトラの夜明け』と『南海のあけぼの』二冊にまとめて刊行している。このうち『スマトラの夜明け』を英文で書き、今度アメリカで刊行する予定になっている。氏はさらに『インドネシア独立と日本』を英文で書き、インドネシア語に翻訳されて刊行された。

その刊行を担当したウトモ・サストロウイノト（Utomo Sastorowinoto）氏から、総山氏に手紙（英文）が届いた。（５月25日発信）。その一節を総山氏に翻訳してもらった。

「日本の総理大臣が東南アジア訪問中に、太平洋戦争で行った侵略行為に関して、全アジア人に謝罪の意を表明したことは、誠に残念であります。この結果、アジアの諸民族を白人の植民地支配から解放した前大戦における日本人の善意を、アジアの諸民族がもはや信じなくなってしまうからであります。彼の言葉は、大東亜戦争の聖なる使命を人びとに理解させようとする私たちの努力のすべてを裏切るものであります。」

読者はお気づきのように、ウトモさんは、太平洋戦争と大東亜戦争を区別して書いている。原文では、大東亜戦争のところを「the Holy Mission of the DAI-TOA」と大文字を使っているのである（傍点部分）。　【名越】

モハマディア大学学長。数年前までインドネシアの早大ＯＢ会会長。オマール・トシン博士）

これ以上のコメントをする必要はありますまい。いずれにしても「海部演説」は残念というよりほかありませんでした。せめてあの時、大平正芳さんまでの歴代首相が述べていたように、

〈過ぐる大戦の評価は、長い歴史の審判にまちたいと思います。〉

とか、あるいは次のように述べてほしかったのです。

〈今年は大東亜戦争の開始から五十年の節目に当たり、私はあらためて今世紀の前半の歴史を振り返り、多くのアジア・太平洋地域の人々が、数百年に及ぶ植民地支配のもたらした耐え難い苦しみと悲しみを乗り越えて、見事な独立国として成長されつつあることに心から敬意を表し、深い感慨を覚えるものであります。〉

猜疑心の増幅を意図する人々

海部演説は、昭和五十七年夏に起こった教科書騒動以来の路線に連なるものであります。「侵略」を「進出」に書き直した教科書はなかったのに、マスコミがすべてそうなったような報道キャンペーンを張り、それがアジア諸国に連動しました。遂に「政府の責任において是正する」旨の官房長官談話（8月26日）となり、この談話は『新編日本史』事件にも甦り、藤尾文相辞任に発展しました。

それ以来、政治家のお詫び発言が続くのですが、この際、日本とアジアの間に、猜疑心や批判を意図的に増幅する人々に踊らされている面があることに注目しなければなりません。

その意図的な謀略について、フィリピン大学のエルピディオ・サンタロマーナ助教授（国際関係論）が注目すべき指摘をしています。「朝日新聞」（平成3年8月13日付）の「論壇」欄に載ったもので、題は「緊密協議でアジアの信頼高めよ」となっています。

氏はこの論文の冒頭で「恐らく日本で考えられているほどには、フィリピン人の対日感情は悪くない。単純に『良い』とは言い切れないまでも、一般的に前向き、肯定的に受け止めていると言える」と書いています。そして、フィリピンの「最近のある世論調査によると、『友好的な国』として三六％が日本を挙げ、アメリカ（七三％）に次いで二番目に高い数字を占めた」例を挙げています。そして最後を次のように結んでいるのです。

〈（現在フィリピンでは）「日本軍国主義の復活」に対する猜疑心が、消えていないことも事実だ。「友好的な国」でありながら「信頼度」が低いのも、この点と関連しているようだ。

ただ、主にそうした猜疑心や批判を展開しているのは、たいてい日本のいわゆる「平和主義者」とか左派系の様々な市民団体等を含む非政府組織（ＮＧＯ）などと緊密な関係を持つ、フィリピン側の大学人やＮＧＯなどの関係者らであることに注目すべきだろう。

特定のイデオロギーを持つグループなどが、政治的な意図を隠して、フィリピン側の記憶を掘り返すように猜疑心を必要以上にあおっているように思えてならない。だとすれば、比日両国はそれぞれにゆがんだイメージに反応するという不幸な結果を招くことになる。成熟した関係を築いてゆくには、今こそ冷静な視点が求められる。〉

マレーシア・ノンチック元上院議員の指摘

この原稿を書いたサンタロマーナ助教授は、日本とフィリピンの間に、「猜疑心や批判を展開」し醸成しているのは、特定のイデオロギーを持った日比両国の左派系の人々の必要以上の「あおり」である、と指摘しているのです。この文章を読んで、私も思い当ることがあります。

昭和六十三年（一九八八年）に、一部改訂された高校の英語教科書に、マレーシアで起こった日本兵の残虐行為がとりあげられたことがあります。マレー半島に進撃した日本兵が、赤ん坊をほうり投げて、落ちてくるところを銃剣で突き刺したという教材なのです。この話は、マレーシアの教科書にも絵入りで掲載されているのですが、今ではフィリピンでも語られるようになりました。

この話は、本書・第三部の「三、マレーシア・シンガポール」でも紹介されているように、ドストエフスキーの小説に出てくる話なのです。その中で、トルコ兵が残虐にもロシアの子供を、前に述べた方法で殺したことが書かれているのが、日本兵の仕業にすり変えられたようです。

また、その年の八月二十一日付の「朝日新聞」にも、三面十段抜きで、「侵略の犠牲知ってほしい」「日本軍が行った華人虐殺」「生残ったマレーシア人五人が来日」というセンセーショナルな見出しが踊っています。「村は燃えあがり血の海になった。泣き叫ぶ弟を日本兵は刺した。一族二十六人が殺され、自分も刀傷」等の文章も目につきます。私がマレーシアで受けた印象とまったく違う世界が描き出されています。

現在、クアラルンプールに在住している土生良樹氏に、それら一連の資料を送りました。すると早速土生氏から、八月十六日発行の現地「華字新聞」を直送してきました。

この「華字新聞」には、筑波大学附属高校の高島伸欣氏が、日本の反戦民間組織「アジア太平洋侵略戦争遺難人民を心に刻む会」の指導者の一人として、学生を連れて人民殺害の調査にやってきたとして、慰霊碑に参拝している写真も載っています。彼らは「虐殺」で生き残った五人の軍人を案内して、広島の原爆慰霊碑に参拝しました。そのことが「朝日ジャーナル」にも詳しく載っています。

その年の十二月、マレーシアの下院議長や上院議員を勤め、戦時中には「南方特別留学生」として来日し、宮崎高等農林や東京大学で勉強したラジャー・ダト・ノンチック氏（現在66歳）が来日しま

マレーシアの大物政治家ラジャー・ダト・ノンチック氏。第２期南方留学生として来日，宮崎高等農林，陸士，東大で学ぶ。「大東亜戦争はコンティニューだ（継続している）」と説いて止まない。土生良樹著『日本人よありがとう』の主役。右上に掲げられている肖像写真は昭和59年４月29日に勲二等瑞宝章を日本政府からおくられた時のもの（昭和63年５月，自宅居間にて）

した。私はこれら一連の資料を持って氏に意見を聞きました。

日本語のよく読める氏は、じっと資料に目を通していましたが、途中でゲラゲラ笑いだすのです。〈名越さん、私に説明を求めるまでもなく、皆わかるではないか。マレーシアは多民族国家であって、マレー人と華人の比率は四五％対三五％だ。華人は、現在も経済界の実権を握っている。だから、マレー人の反華人感情は根強い。戦争中には、華人とマラヤ共産党を中心にした「マラヤ人民抗日軍」がゲリラ活動をしていた。日本軍は当時マレー人を優遇し、華人の抗日ゲリラに対しては国際法でも認められている軍事行動の掃討作戦を展開した。恐らくこの教科書は、容共華人勢力の強いスミラン州で使われているのではないか。マレー人の勢力の強い州では、こんな教科書は使わないはずだ。それに、容共勢力は日本にもある。日本の左翼イデオロギー活動分子と、マレーシアの容共華人組織が連動して、朝日新聞を舞台に反日・反マレーシア活動を続けているんだよ。〉

ノンチック氏は『日本人よありがとう』に書かれたように、戦中戦後にかけて波瀾万丈の生涯を送った人です。それだけに大人の風格を持ち、現在の日本人のように細かな分析は性にあわないらしく、あとは笑い飛ばしてしまいました。

フィリピン大学のサンタロマーナ氏も指摘するように、日本と現地双方のイデオロギー集団（トラブル・メーカー）が演出する連携プレーに騙されないよう「冷静な視点」をもちたいものです。そして、日本とアジア諸国との間に「成熟した友好関係」を築きあげたいと思います。

【名越二荒之助】

四　憎悪のアジアか仁愛のアジアか

岡倉天心の『東洋の理想』とサンフランシスコ講和会議におけるスリランカ代表の演説

霊感に溢れた天心の主張「アジアは一つ」

明治の時代にあって、アジア諸民族の精神的覚醒を訴えて獅子吼（ししく）した岡倉天心（一八六二年～一九一三年）が、その代表的著作『東洋の理想』（一九〇三年〈明治36年〉にロンドンで出版。原著は英文）の冒頭で「アジアは一つである」と喝破したことは、世間に広く知られています。このあまりにも有名な言葉に続く文章は、次のとおりです。

〈二つの強大な文明、すなわち、孔子の共同体主義を持つ支那文明と、ヴェーダ（バラモン教の根本聖典）の個人主義を持つインド文明とを、ヒマラヤ山脈が分け隔てているというのも、両者それぞれの特色を強調しようがために過ぎない。しかし、雪をいただくこの障壁といえども、すべてのア

ジア民族にとっての共通の思想的遺産ともいうべき窮極的・普遍的なものに対する広やかな愛情を、一瞬たりとも妨げることはできない。こうした愛情こそ、アジア民族をして世界の偉大な宗教の一切を生み出さしめたものであり、地中海とバルト海の海洋的民族が、ひたすら個別的なものに執着して、人生の目的ならぬ手段の探求にいそしむのとは、はっきり異なっている。〉（訳文は主として平凡社・東洋文庫第四二二巻ならびに筑摩書房・明治文学全集第三八巻に拠りました。以下も同じ）

東洋の理想を芸術論的観点から精密に論じた後、天心は、アジアの現状を直視して、別著『東洋の覚醒』（一九〇一～二年にインドで執筆）の中で、以下のように叫んでいます。

〈アジアの兄弟姉妹たちよ！　おびただしい苦痛が、われらの父祖の地を蔽っている。東洋は柔弱の同義語となった。土着の民とは奴隷の綽名である。われらの温順に対する讃辞は反語であって、西洋人からすればその礼儀正しさは臆病のせいなのだ。商業の名において、われらは好戦の徒を歓迎している。文明の名において、帝国主義を抱擁している。キリスト教の名において、無慈悲の前にひれ伏している。国際法の光は白い羊皮紙の上に輝いている。だが、あますところなき不正のかげが、有色の皮膚に暗く落ちている。〉

〈われらは永く理想の中をさまよってきた、もう一度現実に目覚めようではないか。無感動の河を漂ってきた、もう一度現実の苛酷な岸辺に立とうではないか。われらは、水晶のような透明な抑制を誇りとして、互いに孤立してきた。いまや共通の悲惨の大洋の中で溶け合おうではないか。西洋のやましい良心は、しばしば黄禍の幻影を呼び招いた。それならば、東洋の静かな凝視を、白禍に

向けようではないか。〉

〈日本の輝かしい復活は、アジア復興の一つの実例として、きわめて教訓的である。日本はまた、国家的統一を達成し、西洋の征服に備える軍備を保有するという二重の課題を持っていた。（中略）自国の陸海軍の強化の着実な政策は、日本を近代列強の一員たらしめた。列強が理解し尊敬することができるのは、野蛮な力だけなのである。遂に領事裁判権は廃止され、西洋諸国のうちで最も誇り高き国が、日本との同盟を求めるにいたったのである。〉

〈太陽はふたたび東方の空に輝き始め、意気消沈せる夜は明けた。魔力は遂に破られた。われらは、陽光が揚子江流域にひろがり、その光線がメコン川のさざ波に躍るのを見る。不惜身命の四千万の島国の民（日本国民）がこれを成し遂げたのだ。なぜ四億の支那人と三億のインド人が、略奪を事とする西洋のこれ以上の侵犯を食い止めるために武装してはならないのか。なぜイスラム教諸国は、栄光あるジハード（聖戦）を起こさないのか。（中略）こうして、大いなるアジアの平和は、人類を普遍的な調和の衣で包むにいたるであろう。ヨーロッパは、より自由で強いアジアの手から、祝福を受けるであろう。〉

天心はさらに『日本の覚醒』（一九〇四年〈明治37年〉にニューヨークで出版）の記述の中で、本質的に平和的傾向を持つ日本の特性について、明確に次のように説明しています。

〈日本は戦争を計画し領土を拡張する野心を抱いていると、しばしば諸外国から非難される。長い間、征服、植民を繰り返してきた西洋諸国にしてみれば、彼らを戦争に導いた拡大欲などに日本は

動かされていないといったところで、それを信じるわけにもゆくまい。しかしながら、日本の対外政策の歴史を検討するほどの人間なら直ちにわかることは、日本が終始一貫して平和維持を希求し、万やむをえず戦争に訴えるときは、まったく自衛のためにほかならないという事実であろう。そもそも外国を攻略しないということは、わが国文明の本性そのものから来ているのである。〉

〈いったい戦争というものは、いつなくなるのであろうか。西洋では、国際道徳が、個人道徳の高さにはとてもおよばないところに残されたままである。侵略国には一片の良心もなく、弱小民族を迫害するためには、騎士道も棄て去られる。自衛の勇気と力のない者は、奴隷になるよりほかはない。残念ながら、頼むに足る友は、いまなお剣である。西洋が見せるこの奇怪な組合わせ――病院と魚雷、宣教師と帝国主義、膨大なる軍備と平和の確保――、これらは何を意味するか。こういう自家撞着は古来の東洋文明にはなかったものである。日本の王政復古の理想は、こういうものではなかった。日本の革新の目標も、このようなものではない。われらを幾重にも包んでいた東洋の夜は明けた。だが、世界はまだ人類の黎明期にある。西洋はわれらに戦争を教えてくれた。それなら、いつ、西洋は平和の恵みを学ぶのであろうか。〉

以上瞥見した天心の思想は、日本にとって「条約改正がたえず念頭にあり、強大な帝国主義的進攻を周囲に感じていた」（浅野晃氏）明治という時代を背景にして形成されたものであり、「天心の考えは、そういう国際情勢を知悉した者の持つ一種正当防衛的な思想として、ギリギリの激しいものを含んでいた」（河北倫明氏、「近代における伝統」）ことが認められます。天心の文章は、後年の大東亜戦争

の勃発を予想させるような啓示的な内容を含んでいたといえましょう。
『東洋の理想』に序文をしたためた英国人、マーガレット・E・ノーブル女史が、
〈アジアの諸民族を、過去において彼らの偉大さを形づくり、現在その回復をもたらす力を有している本来の目的の追求へと呼び戻すために、何らかの努力をすることは、価値あることなのです。それゆえ、岡倉氏のように、アジアを、われわれが想像していたような地理的断片の寄せ集めとしてではなく、おのおのの部分が他のすべての部分に依存し、全体が単一の複合的生命を息づいている一つの統一された生ける有機体として示すことは、この上なく価値あることなのです。〉
と述べているのは、まことに正鵠を得たものです。
「アジアは一つ」という天心の認識と理想は、アジアの多くの人びとに多大の感銘と影響を与えましたが、彼の思想を地で行った目ざましい実例を、第二次世界大戦直後のスリランカ（一九四八年に英国植民地から独立し、一九七二年にセイロンの旧称を変更）において見ることができます。これについて、以下に述べましょう。

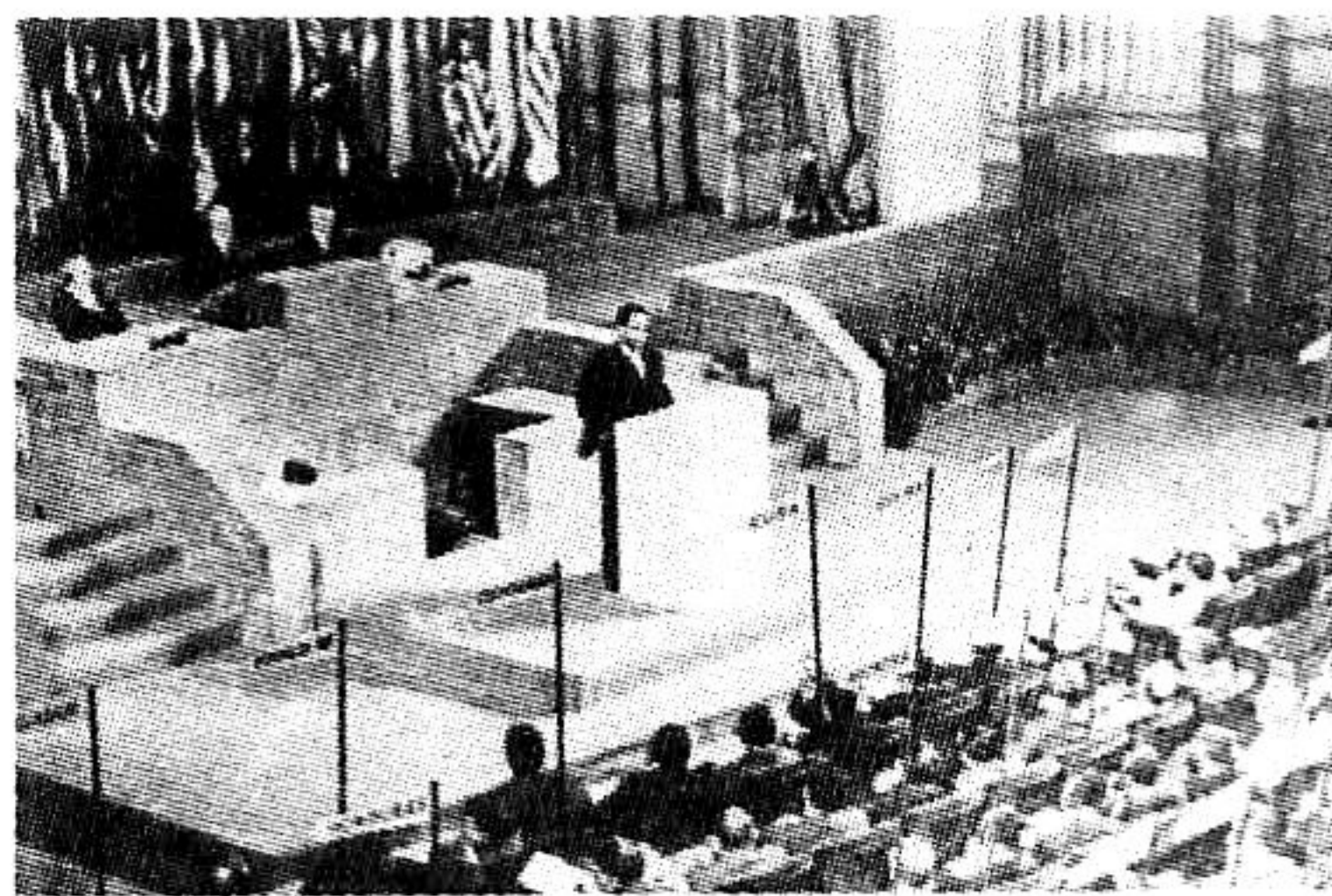
対日講和会議と東洋精神の発露——J・R・ジャヤワルダナ氏

アジアの発展途上諸国の宗教・開発・教育問題を検討する国際会議（コロンボで開催）に参加するため、筆者は平成元年（一九八九年）十一月の中旬から下旬にかけて、スリランカを訪問し、コロンボ周辺から古都キャンディにまで足をのばしました。

北海道よりもやや狭い面積を持ち、人口が約千六百万（当時）のこの「輝ける島国」（スリランカの原義）は、ココ椰子（の実）、紅茶、ゴムという三種の一次商品の生産に特化した典型的なモノカルチュア経済を持ち、国民一人当たりの国民総生産（GNP）も六万円前後（駐日スリランカ大使館から示された数値）にとどまっていましたが、人口の七四パーセントを占めるシンハラ人は、篤く（小乗）仏教を信じていて、敬虔、温和かつ清潔であり、一九八三年（昭和58年）七月以来、主として島の北東部で少数民族（人口の約二〇パーセント）であるタミール人との間で紛争が生じていたにも拘らず、国全体としては比較的に安定した状態にあるように思われました。

この会議中の一日、プランテーション産業大臣であるガミニ・ディサナヤケ氏を囲んで数名の会議参加者による午餐会が開かれました。その席上、たまたま筆者の談話が、昭和二十六年（一九五一年）九月のサンフランシスコ対日講和会議でのセイロン代表、J・R・ジャヤワルダナ（Junius Richard Jayewardene）蔵相のかの「不朽の名演説」（9月6日に行われました）におよび、筆者はこの演説の中に示された日本へのスリランカ国民の熱い友情にあらためて深甚の謝意を表明したところ、同大臣はわが意を得たりとばかりに微笑んで、当時の日本国民を感激せしめたこの世界的に有名な演説の外交史的背景についても詳細に説明して下さり、大いに学ぶところがありました。

この講和会議を契機にして「自由にしてかつ独立した日本」が復活することを強く望んでいたジャヤワルダナ氏の格調高い演説から、重要な部分を抜粋して、以下に紹介いたしましょう。

〈私は、日本の将来についてのアジア人民の一般的態度に内在する心情を、代弁できるものと主張

する。〉
〈完全に独立した日本を希求する論拠が、初めて提言され考慮されたのは、一九五〇年一月にコロンボで開催されたコモンウェルス〔いわゆる英連邦〕外相会議においてであったが、同会議は日本のことを孤立的な問題としてではなく、南および東南アジア地域の構成部分として、考慮した。本地域は、世界の富と人口の大きな部分を占めてはいるが、最近ようやく自由を取り戻したばかりの諸国から成り、しかもそれら諸国の人民は、幾世紀にもわたり無視された結果、今なお苦しみ悩んでいる。〉
〈日本への態度についてセイロン、インド、パキスタンというアジアの国ぐにを動かす主要な観念

J・R・ジャヤワルダナ大統領

蔵相時代の1951年9月，サンフランシスコ対日講和会議の席上，全世界の前でセイロン(現スリランカ)代表として，日本の大東亜戦争の真意を堂々と述べ「賠償を取り立ててはならない」と不朽の名演説をした（写真下)。ジャヤワルダナ大統領を描いた『J.R. JAYEWARDENE』の著者も「J.Rは日本と日本国民との讃美者として知られている」と論評している。

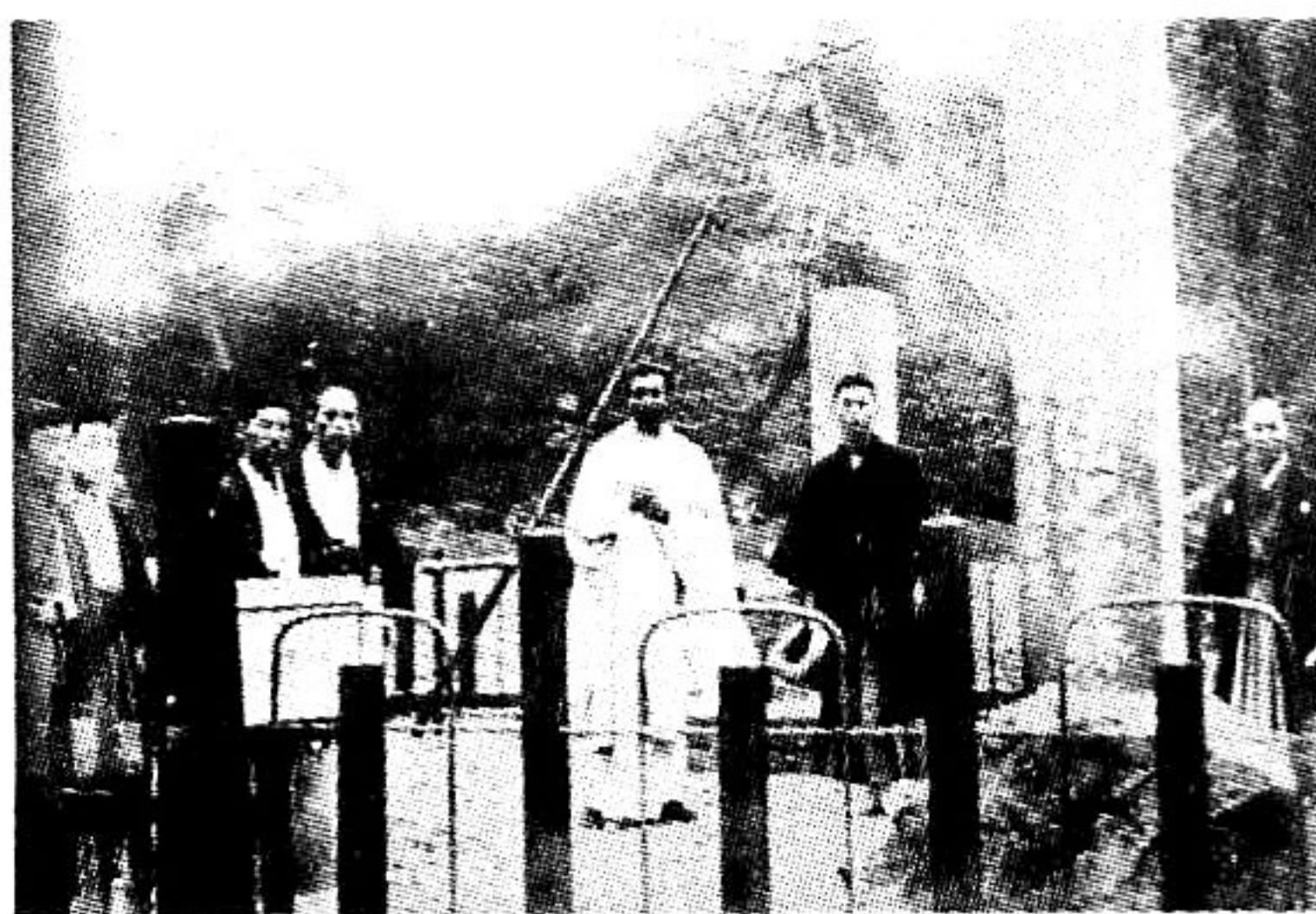
は、日本は自由でなければならないというものであるが、本条約は全体的に右の観念を具現していると、私は主張する。〉

〈アジアの諸国民はなぜ、日本が自由になることを切望しているのか。それは、アジア諸国民と日本との長きにわたる結びつきのゆえであり、また、植民地として従属的地位にあったアジア諸国民が、日本に対して抱いている深い尊敬のゆえである。往時、アジア諸民族の中で、日本のみが強力かつ自由であって、アジア諸民族は日本を守護者かつ友邦として、仰ぎ見た。私は前大戦中のいろいろな出来事を思い出せるが、当時、アジア共栄のスローガン（植民地解放・大東亜共栄圏樹立の構想）は、従属諸民族に強く訴えるものがあり、ビルマ、インド、インドネシアの指導者たちの中には、最愛の祖国が解放されることを希望して、日本に協力した者がいたのである。〉

〈セイロンの私たちは、幸運にも侵入を免れたが、空襲や、東南アジア司令部麾下の大軍の駐留や、わが国の主要産品の一つであるゴムの大量採取――当時セイロンは連合国にとり天然ゴムの唯一の生産地であった――は、そのため蒙った損害の賠償を請求する資格を、わが国に与えている。だが、私たちは（日本に）賠償を求めようとは思わない。なぜなら、私たちは、その教えが無数のアジア人の生涯を気高いものとした、かの偉大なる教師・釈尊の〝憎悪は、憎悪によっては消えず、仁愛によって消える〟との言葉を信ずるからである。〉

スリランカの友誼を忘れるな

Ｊ・Ｒ・ジャヤワルダナ氏は、セイロン最高裁判所判事を父として、一九〇六年（明治39年）九月十七日に生まれ、もっぱらセイロンで法学教育を受け、初め法曹界に職を得ましたが、後に政界へ転進し、また、早くから、マハトマ・ガンジー、Ｐ・Ｊ・ネルー等が指導するインド国民会議派の抗英独立運動に強い共鳴を覚え、さらにスバス・チャンドラ・ボース氏からも深い影響を与えられました。学生時代には、法学部ホールにガンジーの肖像画を掲げて——それは英国の支配に対する公然たる挑戦でした——大学当局を狼狽させ、後にセイロン国民会議派（英国のくびきからセイロンを解放するための闘争の先頭に立っていました）に参加して、一九四〇年（昭和15年）以降インド国民会議派の大会にも列席し、インドの独立運動を模範としつつ、祖国解放のために挺身したのです。

インド首相インディラ・ガンジー（左）と話すジャヤワルダナ大統領。

明治35年に日本の近代仏教改革者の田中智学師（国柱会創始者で明治節制定の提唱者）を訪ねたセイロンの傑僧アナガーリカ・ダルマパーラ師。ジャヤワルダナ氏はその親日感情を受け継いでいる正統後継者。

明治時代に日本を訪れ、日本をモデルにして祖国の独立と発展を図ろうと運動した愛国の傑僧アナガーリカ・ダルマパーラ以来の伝統的親日感情を受け継いだジャヤワルダナ氏を、S・P・セナディラなる人は、「J・Rは日本と日本国民との讃美者として知られていた」と論評しています。

一九五一年九月、サンフランシスコに赴く途中、日本に立ち寄ったジャヤワルダナ氏は、宿舎とは別の場所で個人的に鈴木大拙氏と会見し、小乗仏教と大乗仏教との差異の問題について質しましたが、鈴木師の「相違点ではなく、一致点を考えよ。われらは共に、仏・法・僧を、かつまた八正道を、受けいれているではないか」との言葉に、感ずるところがあったといわれます。

サンフランシスコの会議で、前述のごとく、釈尊の教えに言及したジャヤワルダナ氏は、また次のようにも述べています。

〈南アジアからビルマ、ラオス、カンボジア、シャム〔タイ〕、インドネシア、セイロン、さらに北のかたヒマラヤ山脈を越えて、チベット、支那、最後に日本にいたるまで、人道主義のうねりを拡げ、かつ共通の文化と遺産により幾百年もの間私たちを一つに結びつけたのは、偉大な教師にして仏教の創始者である釈尊の、このような教えである。この共通の文化は、本会議への出席の途次、先週私が日本に立ち寄って気づいたように、今なお存在するものであり、日本の指導者、閣僚、市民ならびに寺院の僧侶をはじめ、日本の国民一般は、現在なお、釈尊という平和の偉大なる教師の影像により感化され、その後に従おうと望んでいるとの印象を、私は得た。私たちは、日本国民にそうする機会を与えなければならない。〉

スリランカの著名な政治家、Ｄ・Ｓ・セナナヤケ氏とともに、国際共産主義（ソ連の外交政策）は世界の奴隷化を企てるもので、ロシアが右の政策を断念するまでは、ロシアと行動を共にすることはできないとの信念に徹していたジャヤワルダナ氏は、対日平和条約原案に対するソ連の修正案に関連して、次のように述べています。

〈日本の自由は制限されるべきだというソ連代表の見解に、私は賛成できない。ソ連代表が日本に課そうとする制限、例えば、自由な国家が当然に保有してしかるべき防衛力を維持する日本の権利への制限などは、本条約を受けいれ難いものとするだろう。また、ソ連が、カイロ宣言とポツダム宣言に反して、琉球諸島および小笠原諸島の日本への返還を望むのであれば、千島列島と南樺太も日本に返還されてしかるべきではないか。〉

〈日本が外部からの侵攻と国内の破壊活動に備えて、自国の軍事的防衛を組織するよう取り計らうことも、本平和条約の目的なのである。日本がそうするまでは、日本は自国の防衛のために友好国の援助を求めるべきであり、日本経済を害する賠償を取り立ててはならない。〉

ジャヤワルダナ氏は、その後、幾多の閣僚ならびに首相の地位を歴任し、一九七八年二月からは大統領として、スリランカの政治的進路を賢明かつ健全なるものとする上に、大きく貢献され（一九八二年に任期６年で再選されました）、一九八九年一月に退任の後にも、第三世界の代表的政治家の一人として強い影響力を発揮されました。

日本国民は、日本がもっとも困難な状態にあった終戦直後に、日本の戦争行動の真意を理解して、

全世界の前で日本への温かい思い遣りを示したスリランカ国の友誼を固く銘記し、アジア人の霊性が日本国民に訴えかつ期待したところのものに、謙虚に応えてゆくべき道義的責任を現在も将来も有することを、けっして忘れてはならないのです。

【佐藤和男】

五　アメリカ大統領に謝罪を要求する

大東亜戦争完結のために

果たすべき戦勝国の責任——昨日の敵は今日の友・敵をも愛する心

拝啓　アメリカ大統領閣下、我が国は今から五十年前、貴国と死力を尽くして戦いました。我が国は惨憺たる敗北を喫し、貴国によって七年間も占領されました。占領政策が巧妙であっただけに傷跡が深く、まだ根治されたとは言えないのです。

確かに経済は貴国を脅威に陥れるまでに成長しましたが、占領政策の後遺症を今もひきずっている点に気づいてほしいのです。我が国では自国の歴史伝統が正しく教えられず、靖国神社に総理大臣も参拝できない始末です。湾岸戦争でもキッチリとした対応ができず、防衛の基本が確立されていないのです。誇りと自信に満ちた独立国というにはほど遠い状況にあります。それもすべては、貴国によ

る占領政策に由来しているのです。

閣下にはよく理解していただけると思いますが、戦争は勝った方に大きな責任がともなうものなのです。勝った後に敗戦国に対し憎悪心を持って臨むか、それとも敗戦国の立場を理解して、むしろ勇戦に敬意を表するかによって、戦後の秩序が安定するかどうかが決まり、戦勝国の評価も定まるのです。例を挙げてみましょう。

日露戦争の時、旅順を陥落させた乃木将軍は、明治天皇のご指示によって、敵の将軍ステッセルに対し、武士の礼をもって遇しました。両将軍の会見の時には「昨日の敵は今日の友」として、相互に勇戦を讃えあいました。その後、乃木将軍はステッセルに約束した通り、ロシア兵の墓地を整備し、慰霊のための礼拝堂を建立しました。そしてロシア側の軍人と僧侶を招き、ロシア正教に基づく盛大な慰霊祭を挙行しました（占領後「神道指令」を出して、宗教に干渉したアメリカとは雲泥の差です）。そのため、ロシア人は日本人を心から尊敬するようになりました。

このような例は、第二次大戦中にもいくつかありました。一九四二年（昭和17年）五月三十一日、日本海軍軍人六人が、三隻の特殊潜航艇に乗ってシドニー湾を奇襲しました。猛反撃を受けて、二隻はシドニー湾に、一隻はタスマン海に沈んでしまいました。ところが、シドニー地区海軍司令官グールド少将は、湾内に沈んだ二隻を引き揚げ、四人の棺を日章旗で包み、驚くなかれ、戦時中にも拘わらず海軍葬の礼をもって弔ったのです。グールド少将は弔辞の中で、日本軍人の勇気を讃え、オーストラリアの青年たちに日本軍人の千分の一の愛国心でも持つことを呼びかけています。

もう一つ、貴国の例を挙げてみましょう。

ジョン・Ｆ・ケネディ少尉（もちろん後の第35代アメリカ大統領です）は、ＰＴ一〇九という魚雷艇の艇長としてソロモン海戦に従軍していました。ソロモンでは、毎日のように彼我肉迫する激戦が続いていました。一九四三年（昭和18年）八月三日のことです。駆逐艦「天霧」（艦長・花見弘平少佐）が迫ってくるＰＴ一〇九を突き切り、ケネディ艇長以下十三名は海中に投げ出されました。艇長は部下を叱咤してようやく虎口を脱しましたが、背骨を割られ入院する身となりました。

その後ケネディは、下院議員時代に来日し、ＰＴ一〇九を真っ二つにした艦長をつきとめました。その頃、花見元艦長は福島県塩川町で町長をしており、二人の間に友情が芽生えました。ケネディは大統領に立候補する時、花見町長に応援を依頼しました。花見氏は現職のため出かけることができず、乗組員の部下が代りに出かけました。かつての敵同士が、恩讐を超えて結ばれる友情はヤンキー気質をくすぐり、貴国の新聞は大々的に報じました。選挙の結果がどうなったかは、閣下が御存知の通りです。

このような例は個人的であって、国家対国家の例ではないと思われるかもしれません。ところが、そういう例があるのです。中華民国の蔣介石総統です。彼は八年間に及ぶ抗日戦に勝利した後、国民に対して「旧悪を思わず人に善をなす」という有名な演説を行いました。その演説の中には、バイブルの「敵をも愛せよ」という言葉があり、「人類は一家のごとき親密な関係を作り得る」ことも強調していました。

この蔣演説が、いかに当時の日本人を感動させたことか。我が国では蔣総統への尊崇の気持が盛りあがり、神社や銅像や記念碑さえ建立されました。今後、我が国でも、第二次大戦の生んだ美談のひとつとして末永く語り伝えられるものと思われます。

世界新秩序再建設のために

さてここで閣下に、「人類は一家のごとき関係」と述べた蔣演説について考えていただきたいのです。この「人類一家」という考え方は、我が国の建国の理想である「八紘一宇（はっこういちう）」と同じ意味なのです。我が国はもっと具体的に「万邦ヲシテ各々其ノ所ヲ得シメル（八紘一宇）」という世界政策を掲げ、外交文書では「Universal Brotherhood（世界同胞）」を使っていました。

一九四三年（昭和18年）十一月、東京で大東亜会議が開かれ、「大東亜共同宣言」が採択されましたが、その中でも、それぞれの国が伝統を体現した本来の姿にたちかえることを謳っています。これがあるべき世界秩序の原点ではありませんか。

さらに、貴国が中心に進められた「極東国際軍事裁判」でも「八紘一宇」の用語を再検討し、判決書の中では「その伝統的な文章は、究極的には全世界に普及する運命をもった人道の普遍的な原理以上の何ものでもなかった」としております。

現在、ソ連を中心とした共産主義の態勢は崩壊しつつあります。世界は新しい秩序を構築しなければなりません。それでは、あるべき世界新秩序の原理は何か。やはり、それぞれの国が、自国の文化

や伝統に回帰することではありませんか。

貴国が世界の指導者をもって任じられるならば、日本も本来の姿に立ち戻ることができるように、次の三点を実行に移していただきたいのです。これが、日米戦争に勝利したアメリカのとるべき最終的責任であり、かくして我が国の大東亜戦争は完結し、「戦後は終る」のであります。

日本に謝罪すべき三点

まず第一にやっていただきたいことは、靖国神社に参拝してほしいのです。

昭和天皇のみならず、我が国の歴代の首相が訪米した時には、アーリントン墓地に眠る貴国の英霊に黙祷を捧げ、花輪を供えております。閣下も来日されたら、米国を代表して靖国神社に参拝し、日本の英霊に敬意を表していただきたいのです。

もし日本政府が、憲法に抵触するから参拝を遠慮するように言ったら、その理由を問い質して下さい。恐らく憲法第二十条を持ち出し、政教分離原則を語るに違いありません。

そうしたら「あの憲法原案はアメリカが作ったものだから、自分が一番よく知っている。そもそも政治と宗教は、完全に分離できるものではない。時に一致し、相互に調和すべきものだ。それにあの第二十条は、国が〝宗教活動〟をすることを禁じたのであって、儀礼やら生活慣習まで禁じたものではない。日本の最高裁もそのように最終判断をくだしているのではないか」とたしなめて、堂々と公式参拝していただきたいのです。その時、マスコミが一時騒いでも、国民の八割が喝采することは間

違いありません。
そして二番目にお願いしたいことは、国会演説の機会を作って、次の二点について謝罪していただきたいのです。
ひとつは、軍事占領下に米製の憲法を押しつけたことです。一九〇七年（明治40年）に貴国も批准している「陸戦の法規慣例に関する条約」（ハーグで締結）では、「占領者は占領地の法律を尊重」することが謳われています。また、一九四五年（昭和20年）八月十一日の「バーンズ回答」では、「日本国政府ノ最終形態ハポツダム宣言ニ遵ヒ、日本国民ノ自由ニ表明シタル意志ニ依ツテ決定」すると述べております。敗戦直後、占領軍の指示もあって、我が国も憲法草案を作ったのですが、それを押しのけ、米原案を通すよう圧力を加えました。
それに、この憲法は、改正が困難なように定められており、国連軍や湾岸戦争に協力しようにも難しい状況にあります。
いずれにしても、米製憲法を押しつけたことは、フェアなアメリカ精神に反するし、内容にも矛盾が多く不備であるので、撤回したいのが本心である旨述べていただきたいのです。
続いて国会演説では、戦勝国が極東国際軍事裁判を行い、日本を過去に遡って裁いたことは罪刑法定主義の原則に反しますので、謝罪してほしいのです。
いかなる戦争でも、相互に正義があります。特に大東亜戦争は、欧米諸国がアジアのほとんどの地域を植民地にし、日本を圧迫したところにその遠因があります。そのことを棚にあげて、日本だけを

犯罪国家として裁いたことは（パール判決書をまつまでもなく）違法不当な行為であります。そして、ＡＢＣ級戦犯を作って、千余名を絞首刑や銃殺刑にしてしまいました。

人の命は再び還ってきません。処刑された人々は、ほとんど運命を甘受して刑につきました。彼らは国家の命ずるままに戦い、そして殉じたのです。彼らに何の罪がありましょうか。

閣下はアメリカの大統領として、彼らに哀悼の意を表し、「ノー・モア軍事裁判」を誓い、遺族には慰謝料を払うことを約束していただきたいと思います。

国会演説で以上二つの謝罪を表明されたら、広島へ直行してほしいのです。

広島には「原爆慰霊碑」があります。そこには、原爆犠牲者が眠っております。黙祷を捧げられたら、碑文が刻まれていることに気づかれるはずです。碑文には「安らかに眠って下さい。過ちは繰返しませぬから」と横書されています。

元来、この文章には主語がないので、原爆を投下する過ちを犯したのは誰なのか、はっきりしないのです。だから、その文章の最後のところに「アメリカ合衆国大統領」と彫り込んでほしいのです。そうすれば、原爆を投下した人もはっきりするし、その碑の下に眠る十七万余の方々の魂も鎮まりますから。

以上、①靖国神社参拝、②米製憲法の押しつけと極東裁判への謝罪、③原爆投下の責任明示、の三つのお願いを率直に申しあげました。

これは誰にもわかることで、けっして無理なお願いとは思えないのです。日本国民のほとんどが思

っていることでもあるし、「さすがフェアな国・アメリカの大統領」として尊敬の念を持つことは間違いありません。世界各国も、「やはり世界の指導者をもって任ずるアメリカだけある」として、かえって評価が高まるのではないでしょうか。

閣下のご見識に期待いたします。

敬具

［本稿は発表前に翻訳家の足羽雄郎氏の目にとまり、翻訳して、平成3年10月1日付でブッシュ大統領に、そして10月10日には、同様趣旨のものを駐日米大使アマコスト氏宛に送られた］

【名越二荒之助】

大東亜戦争関係年表

【作成・坂本夏男】

和暦	西暦	事項
文政二	一八一九	2・― ラッフルズ、シンガポール島を英国東インド会社の領土とする
文政七	一八二四	5・― 第一次英緬戦争(英国、下ビルマを征服)
九	一八二六	6・―
天保一〇	一八三九	9・― 九竜沖海戦(アヘン戦争始まる)
天保一三	一八四二	8・29 南京(なんきん)条約調印(英国、香港を獲得)
嘉永五	一八五二	4・― 第二次英緬戦争(英国、ペグー州を併合)
		6・―
六	一八五三	6・3 米国使節ペリー、浦賀に来航
		7・18 露国使節プウチャーチン、長崎に来航
安政元	一八五四	3・3 林煒(あきら)、井戸覚弘(いどさとひろ)とペリー、横浜で日米和親条約に署名
		12・21 筒井政憲、川路聖謨(としあきら)とプウチャーチン、下田で日露和親条約に署名
安政三	一八五六	10・8 広東でアロー号事件発生。続いて英・仏と清との間にアロー戦争
万延元	一八六〇	10・24 清国、英国と北京条約調印。翌日、仏国と調印
		11・14 清国、露国と北京条約調印(露国、沿海州を獲得、南端にウラジオストクを建設)
文久三	一八六三	7・2 薩英戦争(〜7・3)
元治元	一八六四	8・5 馬関戦争(〜8・8)

年号	西暦	月日	事項
慶応 三	一八六七	10・14	徳川慶喜（よしのぶ）、大政奉還上表を朝廷に提出
		12・9	朝廷、王政復古を宣言
明治 四	一八七一	7・29	伊達宗城（だてむねなり）と李鴻章、天津で日清修好条規を締結
八	一八七五	5・7	榎本武揚（えのもとたけあき）とゴルチャコフ、ペテルスブルクで樺太千島交換条約に調印
九	一八七六	2・26	黒田清隆、井上馨と申櫶、尹滋承、江華府で日朝修好条規（江華条約）に調印
一八	一八八五	11・―	第三次英緬戦争（英国、上ビルマを併合、ビルマ王国滅亡）
二〇	一八八七	10・17	仏国、仏領インドシナ連邦を形成（総督の統轄）
二七	一八九四	7・25	連合艦隊第一遊撃隊、豊島沖で清艦と交戦（日清戦争始まる）
二八	一八九五	4・17	伊藤博文、陸奥宗光と李鴻章、李経方、下関で日清講和条約に調印
		4・23	独・露・仏三国公使、遼東半島の清国への還付を勧告（三国干渉）
三〇	一八九七	6・16	米・ハワイ合併条約、ワシントンで調印
		6・21	大隈重信外相、ハワイ合併に関し米公使に抗議
三一	一八九八	3・6	独清膠州湾租借条約成立
		3・27	露清旅順・大連湾租借条約成立
		4・25	米国、スペインに宣戦（米西戦争始まる）
		12・10	米西平和条約、パリで調印（米国、フィリピン、グアム等を獲得）
三二	一八九九	3・―	義和団、山東で蜂起
		9・6 11・21	米国務長官ジョン・ヘイ、列国に中国の門戸開放覚書を通告
三四	一九〇一	9・7	北清事変に関する最終議定書（辛丑条約）、北京で調印

年号	西暦	月・日	事項
明治三五	一九〇二	1・―	シベリア鉄道開通（ウラジオストク・ハバロフスク間）
		1・30	林董（ただす）とランスダウン、ロンドンで日英同盟協約に調印
三六	一九〇三	4・8	露国、第二次満洲撤兵を不履行
		6・―	東支鉄道、本営業開始
三七	一九〇四	2・9	連合艦隊駆逐隊、旅順口を攻撃（日露戦争始まる）
三八	一九〇五	1・1	旅順の露国軍、降伏を申し出る
		5・27 5・28	連合艦隊、バルチック艦隊を日本海で全滅（日本海海戦）
		9・5	小村寿太郎、高平小五郎とウイッテ、ローゼン、ポーツマスで日露講和条約に調印
四三	一九一〇	8・22	寺内正毅（まさたけ）と李完用、京城で韓国併合に関する条約に調印
大正　三	一九一四	7・28	オーストリア、セルビアに宣戦（第一次世界大戦始まる）
		8・23	日本、ドイツに宣戦（第一次世界大戦に参加）
		11・7	独立第18師団、青島を攻略
四	一九一五	1・18	日本、中国に「二十一か条要求」を提出
		5・9	中国、日本の要求を受諾（中国、この日を国恥記念日とする）
		6・―	ラス・ビハリ・ボース、日本に亡命（後に相馬愛蔵の娘俊子と結婚）
七	一九一八	8・2	日本政府、シベリア出兵を宣言
		8・12	第12師団、ウラジオストクに上陸開始
		この年	ウ・オッタマ僧正、民族闘争を宣言

年号	西暦	月日	事項
大正 八	一九一九	1・18	パリ講和会議開会（連合国側27カ国参加、ドイツ参加認められず）
		6・28	同盟及び連合国とドイツ国との平和条約（ヴェルサイユ条約）調印
		この年	真珠湾の防御施設及び乾ドック完成
一〇	一九二一	7・―	スバス・チャンドラ・ボース、C・R・ダスの下でインド独立運動に参加
		11・12	軍備制限、太平洋及び極東問題等に関する会議（ワシントン会議）開会
		12・13	日英米仏四国条約調印（日英同盟廃棄決定）
一一	一九二二	2・6	海軍軍備制限に関する条約調印
		〃	中国に関する九国条約調印
昭和 三	一九二八	6・4	在満日本軍の一部、奉天（現・瀋陽）付近の皇姑屯で張作霖を爆殺（重傷後間もなく絶命）
		8・27	戦争放棄に関する条約（不戦条約）、パリで調印
		12・29	張学良東三省保安総司令、満洲に青天白日旗を一斉に掲揚（易幟事件）
五	一九三〇	1・21	ロンドン海軍軍縮会議開会（日英米仏伊、参加）
		4・22	ロンドン海軍条約調印
六	一九三一	9・18	在満日本軍の一部、奉天北方柳条湖で満鉄線路爆破（この事件を契機に満洲事変始まる）
七	一九三二	1・28	海軍陸戦隊、上海で中国軍と交戦（第一次上海事変勃発）
		3・1	東北行政委員会、奉天で満洲国建国宣言を発表
		5・15	海軍の青年将校、首相官邸で犬養毅首相を射殺（五・一五事件）
八	一九三三	3・27	日本、国際聯盟を脱退

年号	西暦	月日	事項
昭和一一	一九三六	2・26	皇道派青年将校、一四〇〇余名の部隊を率いて決起（二・二六事件）
		12・12	張学良西北剿匪副総司令ら、蔣介石委員長を監禁（西安事件）
一二	一九三七	4・1	バー・モウ博士、ビルマ初代首相に就任。一九三五年制定の新憲法実施。ビルマ、インドから正式分離（英の直轄植民地となる）
		7・7	中国軍、盧溝橋付近（北京の西南方）で夜間演習中の日本軍に発砲
		7・8	日中両軍、盧溝橋付近で衝突（支那事変勃発）
		8・13	日本陸戦隊、上海で中国軍と交戦（第二次上海事変発生）
		10・—	ビハリ・ボースを会長とし、インド独立連盟日本支部結成
		12・13	中支那方面軍、南京を占領
一三	一九三八	1・16	日本政府、「爾後国民政府を対手とせず」の声明を発表
		11・3	日本政府、東亜新秩序に関する声明を発表
一四	一九三九	5・11	日ソ両軍、ノモンハンで衝突（ノモンハン事件始まる）
		5・末	チャンドラ・ボース、マハトマ・ガンジーと対立、国民会議派議長を辞任
		7・26	米国、日米通商航海条約廃棄を通告（半年後、発効）
		9・1	独軍、ポーランドへ進攻開始（第二次世界大戦勃発）
		9・3	英・仏、対独宣戦
		10・—	ビルマ、自由ブロック正式結成（総裁にバー・モウ博士、書記長にオン・サン就任）
一五	一九四〇	7・2	スバス・チャンドラ・ボース、カルカッタの自宅で英国官憲に逮捕される
		9・23	第5師団、北部仏印に進駐開始

昭和一五	一九四〇	9・27	日独伊三国同盟条約、ベルリンで調印
		10・18	英国、ビルマルートを再開（援蔣物資の輸送開始）
		この年	鈴木敬司大佐（後の南機関長ボ・モージョ）ラングーン（現・ヤンゴン）入り
一六	一九四一	3・8	野村吉三郎駐米大使、ハル国務長官と第一回会談（日米交渉開始）
		3・―	オン・サン、新同志募集のため、ビルマに潜入。三〇人の同志、海南島でゲリラ訓練
		3・28	スバス・チャンドラ・ボース、決死の脱出行、ベルリンに姿を現わす
		4・13	松岡洋右外相、建川美次大使とモロトフ外相、モスクワで日ソ中立条約に調印
		6・22	独軍、ソ連へ進攻開始（独ソ戦勃発）
		7・2	御前会議、「情勢の推移に伴う帝国国策要綱」決定
		7・25	米国、在米日本資産凍結令を公布（翌日発効）
		7・28	陸海軍部隊、南部仏印に平和裡に進駐開始
		8・1	米国、対日石油輸出を全面的停止
		8・9	ルーズベルト大統領、チャーチル首相、カナダ・ニューファンドランド島プラ
		8・12	センシァ湾で会談（大西洋会談）
		8・14	右米英首脳、大西洋憲章をワシントン及びロンドンで発表
		9・6	御前会議、「帝国国策遂行要領」決定
		10・19	永野修身軍令部総長、ハワイ作戦に同意
		11・2	自由インドセンター、ベルリンで発足（この頃から、インド独立を呼びかける自由インド放送開始）

昭和	西暦	月日	事項
一六	一九四一	11・5	御前会議、第二次「帝国国策遂行要領」決定
		11・6	陸軍、南方各軍司令官の補職を発令
		12・1	御前会議、対米英蘭戦を決定
		12・8	第25軍先頭部隊、マレー東岸に上陸
		〃	機動部隊、真珠湾を攻撃。特殊潜航艇、真珠湾攻撃に参加
		〃	陸海軍航空部隊、フィリピンを空襲
		〃	米英両国に宣戦の詔書渙発
		〃	右両国、対日宣戦布告
		12・10	大本営政府連絡会議、今次戦争を「大東亜戦争」と呼称することを決定
		〃	海軍航空部隊、マレー沖で英艦プリンス・オブ・ウェールズとレパルスを撃沈（マレー沖海戦）
		〃	グァム島攻略部隊、同島を占領
		12・21	坪上貞二（つぼがみていじ）駐泰大使とピブン首相、バンコクで日本国タイ国間同盟条約に署名（即日実施）
		12・22	第14軍主力、リンガエン湾岸に上陸
		12・25	第23軍、香港島を攻略
		12・28	南機関、バンコクでビルマ独立義勇軍（ＢＩＡ）を編成
一七	一九四二	1・2	第14軍、マニラを占領
		1・11	第5師団、クアラルンプールを占領
		2・14	陸軍落下傘部隊、パレンバンに降下、同地製油所等を占領

昭和一七	一九四二	2・15	第25軍、シンガポールを攻略
		2・16	東条英機首相、帝国議会で東亜解放を宣言
		2・17	藤原岩市少佐、モハン・シン、降伏したシンガポール英軍より引き渡されたインド人捕虜に対し、インド国民軍（ＩＮＡ）への参加を呼びかける
		2・22	チャンドラ・ボース、日印提携・独立を声明
		3・8	第15軍、ラングーンを占領。ボ・モージョと義勇軍、ラングーン入り
		3・9	第16軍、バンドンを占領、蘭印軍全面降伏
		3・12	マッカーサー米極東軍司令官、コレヒドール島を脱出、オーストラリアへ
		4・18	米機動部隊、日本本土を初空襲（いわゆるドーリットル空襲）
		5・29	チャンドラ・ボース、ヒトラーと会見
		5・31	特殊潜航艇、ディエゴ・スワレス湾（マダガスカル島北端付近）に特攻
		5・31	特殊潜航艇、シドニー港（オーストラリア東岸）に特攻
		6・5	日米両機動部隊、ミッドウェー島付近で海戦（ミッドウェー海戦）
		6・7	
		8・7	米軍、ガダルカナル島・ツラギ島等で反攻開始
		8・—	ビルマ行政府設立、バー・モウ博士長官に就任。ビルマ防衛軍、正式に誕生
一八	一九四三	1・8	第16軍参謀本部別班、タンゲラン（ジャカルタ西方）で、インドネシア青年に軍事訓練を開始
		1・28	東条首相、帝国議会で年内にビルマ独立を演説
		2・1	第17軍、ガダルカナル島撤収作戦開始

昭和一八	一九四三	
	4・18	連合艦隊司令長官山本五十六大将、南太平洋ブーゲンビル島付近で戦死（後任古賀峯一大将）
	5・16	チャンドラ・ボース東京着
	5・29	アッツ島守備隊、玉砕
	5・31	御前会議、「大東亜政略指導大綱」を採択（ビルマ、フィリピンの独立を決定）
	7・4	インド独立連盟代表者会議、シンガポール（当時、昭南）で開催（チャンドラ・ボースが新総裁に、ビハリ・ボースが最高顧問に就任）
	7・5	チャンドラ・ボース、東条首相と共にシンガポールでインド国民軍を閲兵
	8・1	ビルマ、イギリスより独立を宣言（国家代表バー・モウ）、米英に宣戦布告
	10・3	第16軍、ジャワ防衛義勇軍の編成を公布（即日施行）
	10・14	フィリピン、アメリカより独立（フィリピン共和国成立。ホセ・P・ラウレル、初代大統領に就任）
	〃	日本国・フィリピン国間同盟条約、マニラで調印
	10・21	チャンドラ・ボース、シンガポールで自由インド仮政府樹立
	10・23	日本政府、自由インド仮政府を承認
	10・24	自由インド仮政府、米英に宣戦
	10・30	谷正之大使と汪兆銘行政院院長、南京で日本国中華民国間同盟条約に調印（即日実施）
	11・5	日本政府、東京で大東亜会議開催（日本、中華民国（汪）、タイ、満洲、フィリピン、ビルマの各国代表出席、自由インド仮政府代表陪席）
	11・6	

昭和	西暦	月日	事項
一八	一九四三	11・6	大東亜会議事務局、「大東亜共同宣言」発表
一九	一九四四	1・7	自由インド仮政府、シンガポールからラングーンへ移動
		3・8	第15軍、インパール作戦開始（7・12、同作戦中止）
		3・31	連合艦隊司令長官古賀峯一大将、パラオからダバオに移動中、戦死（後任豊田副武大将）
		7・7	サイパン島守備隊、玉砕
		8・2	テニアン島守備隊、玉砕
		8・11	グァム島守備隊、玉砕
		9・7	拉孟守備隊、玉砕
		〃	黒木博司大尉（人間魚雷回天発案者）、樋口孝大尉と共に徳山湾で殉職
		9・14	騰越守備隊、玉砕
		9・22	フィリピン共和国、戒厳令を施行し米英に宣戦
		10・25	神風特別攻撃隊（敷島隊）、レイテ島付近で米艦を攻撃
		11・19	回天特別攻撃隊（菊水隊）、ウルシー泊地を攻撃
二〇	一九四五	1・9	連合軍、リンガエン湾沿岸に上陸開始。陸軍海上挺進部隊、同湾で米船団を攻撃
		1・27	コレヒドール島部隊、玉砕
		2・4 2・11	米英ソ三国首脳（ルーズベルト、チャーチル、スターリン）ヤルタで会談
		2・11	右三国首脳、ソ連の対日参戦に関する協定（ヤルタ協定）に署名
		2・15	海軍震洋特別攻撃隊、マリベレス港（バターン半島南端）の米国船団を攻撃

昭和二〇	一九四五	
	3・3	米軍、マニラを完全占領
	〃	英印軍、メクテーラ（ビルマの要衝）を完全占領
	3・11	アンナン皇帝バオダイ、独立を宣言
	3・13	カンボジア国王シアヌーク・ノロドム、独立を宣言
	3・17	ビルマ国軍、ラングーンで出陣式挙行（その後、全軍反乱開始）
	3・25	硫黄島の栗林（くりばやし）兵団、夜半から総反撃実施（以後、組織的戦闘終了）
	4・1	米軍、沖縄本島中部西岸に上陸開始
	4・5	モロトフ外相、佐藤尚武（さとうなおたけ）大使に日ソ中立条約不延長を通告
	4・7	海上特別攻撃隊（戦艦大和以下10隻）、九州南西で米艦載機の攻撃により、主力全滅
	4・8	ラオス国王シサヴァンヴォン、フランスから独立を宣言
	5・24	義烈空挺隊、沖縄北・中飛行場に強行突入、主力玉砕
	6・23	第32軍司令官牛島満（みつる）中将ら、摩文仁（まぶに）で自決（沖縄の戦闘、事実上終了）
	7・17	米英ソ三国首脳（トルーマン、チャーチルのちアトリー、スターリン）ポツダムで会談
	8・2	
	7・26	トルーマン大統領、米英中対日共同宣言（ポツダム宣言）を発表
	8・6	米軍、広島に原子爆弾を投下
	8・8	モロトフ外相、佐藤大使に対日宣戦布告を手交
	8・9	ソ連軍、満洲、北鮮、樺太に進攻開始
	〃	米軍、長崎に原子爆弾を投下

和暦	西暦	月日	事項
昭和二〇	一九四五	8・9 8・10	御前会議、聖断でポツダム宣言条件付き受諾を決定
		8・14	御前会議、聖断で連合国回答受諾を決定
		8・15	終戦詔書の玉音放送
		〃	第5航空艦隊司令長官宇垣纏（まとめ）中将以下、最後の沖縄特攻敢行
		8・17	スカルノら、インドネシアの独立宣言
		8・18	チャンドラ・ボース、台北で飛行機事故のため重傷、台北陸軍病院で死去
		8・30	マッカーサー連合軍最高司令官、厚木に進駐
		9・2	重光葵（まもる）外相、梅津美治郎参謀長、東京湾のミズリー号上で降伏文書に署名
		12・―	バー・モウ博士、英占領軍に自首、巣鴨拘置所に収容される
二一	一九四六	11・3	政府、日本国憲法を公布
二二	一九四七	1・28	オン・サン首相とアトリー首相、ロンドンでビルマ独立協定に調印
		4・20	蘭国、インドネシアで全面的軍事行動を開始
		7・19	オン・サン首相と全閣僚、ウ・ソー派に暗殺される
		8・15	インド独立令により、統治権は英国よりインド国民に移る（インド独立、新政府首相ネルー）
二三	一九四八	1・4	ビルマ、連邦共和国として独立（現・ミャンマー）
		1・17	蘭・インドネシア停戦協定、レンビル号上で調印（2・16、停戦）
二四	一九四九	11・2	蘭・インドネシア連邦共和国樹立協定、ハーグで調印（12・27発効）
		11・8	仏・カンボジア独立協定、パリで調印（一九五〇・2・3発効）

年号	西暦	月日	事項
昭和二六	一九五一	9・4 9・8	対日講和会議、サンフランシスコで開催（52カ国参加）
		9・6	セイロン（現・スリランカ）代表ジャヤワルダナ、大東亜戦争の意義について演説
		9・8	日本を含む49カ国、サンフランシスコ講和条約に調印（ソ連、チェコ、ポーランド3カ国、調印拒否）
		〃	吉田茂首相とアチソン国務長官ら日米安全保障条約に調印
二七	一九五二	4・28	サンフランシスコ講和条約、発効（日本、独立を回復）
二九	一九五四	4・29	中印チベット協定、北京で調印（平和5原則提唱）
三〇	一九五五	4・18	第一回アジア・アフリカ会議、インドネシア・バンドンで開催（アジア・中東・
		4・24	アフリカから、日本、中国を含む29カ国参加）
		4・24	アジア・アフリカ会議、バンドン10原則を発表

備考

1、接近した年月日は、事項がそれらにまたがる場合を示す。
2、江戸時代における国外の事項の年月日は、西暦である。
3、昭和時代以前は、原則として人物の肩書等は省略した。

国別引用・参考文献（著者名下の括弧内は日本人以外の国籍の略。玉砕戦・自決、特攻隊、外国中高等教育用教科書は別項）

＊全般および日本

『日本軍が銃をおいた日』ルイス・アレン（英）、寺尾睦也・寺村誠一訳、昭51、早川書房
『戦争の責罪』カール・ヤスパース（独）、橋本文夫訳、昭25、桜井書店
『大日本帝国の興亡』ジョン・トーランド（米）、毎日新聞社訳、昭46、毎日新聞社
『東南アジア連合軍の終戦処理』英国政府出版局、宮元静雄訳、昭60、ジャワ第十六軍司令部戦友会
『東南アジアの解放と日本の遺産』ジョイス・C・レブラ（米）、村田克己、近藤正臣、エディ・ヘルマワン、林理介訳、昭51、秀英書房
『日本弁護論（Ⅰ・Ⅱ）』ラダビノード・パール（印）、中村粲解注、昭51、研究社
『アジアの情勢』オーエン・ラティモア（米）、小川治訳、昭25、日本評論社
『華僑新生記』胡邁、井田啓勝訳、昭19、新紀元社
『日本外交年表竝主要文書（下）』外務省編、昭41、原書房
『現代史資料34・太平洋戦（1）』実松譲編、昭43、みすず書房
『共同研究パール判決書』東京裁判研究会、昭41、東京裁判刊行会
『極東国際軍事裁判速記録（6・8）』新田満夫編、昭43、雄松堂書店
『太平洋戦争原因論』日本外交学会編、昭28、新聞月鑑社
『日本の歴史25・太平洋戦争』林茂、昭49、中央公論社
『世界に生きる日本の心』名越二荒之助、昭62、展転社
『アジアに生きる大東亜戦争』ＡＳＥＡＮセンター編、昭63、展転社
『大東亜戦争への道』中村粲、平2、展転社

『アジア独立への道』田中正明、平3、展転社
『日本外交の座標』細谷千博、昭54、中央公論社
『日本人が虐殺された現代史』新勢力社編集委員会編、昭48、新人物往来社
『「大東亜戦争」の時代』波多野澄雄、昭63、朝日出版社
『社会六上(平成4年度版)』文部省検定済教科書、教育出版
『社会六上(平成4年度版)』文部省検定済教科書、光村図書
『大東亜戦争を見直そう』名越二荒之助、昭43、原書房
『戦後教科書の避けてきたもの』名越二荒之助、昭56、日本工業新聞社
『「太平洋戦争」と「もう一つの太平洋戦争」』信夫清三郎、昭63、勁草書房
『明治維新と東洋の解放』葦津珍彦、昭37、新勢力社
『大東亜戦争肯定論』林房雄、昭59、やまと文庫
『悲劇縦走』平泉澄、昭55、皇学館大学出版部
『愛国心の目覚め』田中卓、昭37、至文堂
『大東亜戦争』山岡貞次郎、昭45、育誠社
『大東亜共同宣言』大日本言論報告会編、昭19、(社)同盟通信社
『黎明の世紀―大東亜会議とその主役たち』深田祐介、平3、文藝春秋
『東洋の理想』岡倉天心、佐伯彰一・樋谷秀昭・橋川文三訳、昭58、平凡社
『東洋の覚醒』岡倉天心〔亀井勝一郎・宮川寅雄編『明治文学全集38』昭43、筑摩書房〕
『日本の覚醒』岡倉天心〔亀井勝一郎・宮川寅雄編『明治文学全集38』昭43、筑摩書房〕
『真珠湾までの経緯――開戦の真相』石川信吾、昭35、時事通信社
『日本外交文書日米交渉―一九四一年(上・下)』外務省編、平2、外務省
『日本外交史　23日米交渉』加瀬俊一、昭45、鹿島研究所出版会

『連合艦隊参謀長の回想』草鹿龍之介、昭54、光和堂
『泡沫の三十五年』來栖三郎、昭23、文化書院
『真珠湾作戦回顧録』源田実、昭47、読売新聞社
『平和への努力』近衛文麿、昭21、日本電報通信社
『野村吉三郎』木場浩介編、昭36、野村吉三郎伝記刊行会
『大東亜戦争回顧録』佐藤賢了、昭41、徳間書店
『真珠湾までの365日』実松譲、昭48、光人社
『私の波濤―あ、海軍士官一代記』実松譲、昭50、光人社
『昭和の動乱(上・下)』重光葵、昭27、中央公論社
『復刻版　大海令』史料調査会編、昭53、毎日新聞社
『時代の一面』東郷茂徳、昭27、改造社
『東條英機宣誓供述書』東京裁判研究会編、昭23、洋洋社
『史観・眞珠湾攻撃』福留繁、昭30、自由アジア社
『真珠湾攻撃』淵田美津雄、昭50、河出書房新社
『戦史叢書・ハワイ作戦』防衛庁防衛研修所戦史室、昭42、朝雲新聞社
『米國に使して』野村吉三郎、昭和21、岩波書店

＊アメリカ（亜米利加＝米）
『真珠湾攻撃』ジョン・トーランド、徳岡孝夫訳、昭57、文藝春秋
『回想のローズヴェルト』ジョン・ガンサー、清水俊二訳、昭43、早川書房
『東條英機（上・下）』ロバート・J・C・ビュートー、木下秀夫訳、昭36、時事通信社
『滞日十年（下・上）』ジョセフ・C・グルー、石川欽一訳、昭23、毎日新聞社

『真珠湾の審判』ロバート・A・シオボールド、中野五郎訳、昭29、講談社
『回想録』コーデル・ハル、朝日新聞社訳、昭24、朝日新聞社
『太平洋戦争への道程—盧溝橋より真珠湾』デビッド・J・ルー、島田周子訳、昭42、原書房
『パールハーバー』ロベルタ・ウールステッター、岩島久夫・岩島斐子訳、昭62、読売新聞社
『リンドバーグ第二次大戦日記(下)』チャールズ・A・リンドバーグ、新庄哲夫訳、昭49、新潮社
『アメリカの反省――アメリカ人の鏡としての日本』ヘレン・ミアズ、原百代訳、昭28、文藝春秋新社
『ウェデマイヤー回想録』アルバート・C・ウェデマイヤー、妹尾作太男訳、昭42、読売新聞社
『日米・開戦の悲劇』ハミルトン・フィッシュ、岡崎久彦訳、昭60、PHP研究所
「誰が対日『最後通牒』ハル・ノートを仕掛けたのか」ハル・ゴールド［「諸君!」平成3年8月号］
A Diplomatic History of the American People. Baily, Thomas A. Meredith Corporation, 1969.
President Roosevelt and the Coming of the War 1941. Beard, Charles A. Yale University Press, 1948.
The John Doe Associates Backdoor Diplomacy for Peace, 1941. Butow, Robert J. C. Stanford University Press, 1974.
The Road to Pearl Harbor, Feis, Herbert. Princeton University Press, 1950.
Turbulent Era A Diplomatic Record of Forty Years 1904 - 1945, (Vol. II). Grew, Joseph C. Houghton Mifflin Company, 1952.
Admiral Kimmel's Story. Kimmel, Husband E. Henry Regnery Company, 1955.
This is Pearl! The United States and Japan - 1941. Millis, Walter. William Morrow & Company, 1947.
Roosevelt I Knew. Perkins, Frances. The Viking Press, 1946.
Pearl Harbor The Verdict of History. Prange, Gordon W. with Goldstein, Donald M. and Dillon, Katherine V. McGraw–Hill Book Company, 1981.
Henry L. Stimson Diaries. Stimson, Henry L. Yale University Library.
An Active Service in Peace and War. Stimson, Henry L. and Bundy, McGeorge. Octagon Books, 1971.

Back Door to War The Roosevelt Foreign Policy, 1933 - 1941. Tansill, Charles C. Henry Regnery Company, 1952.
Foreign Relations of the United States Japan: 1931 - 1941, (Vol. II). U. S. Dept. of State. United States Government Printing Office, 1943.
Pearl Harbor Attack : Hearings Before the Joint Committe on the Investigation of the Pearl Harbor Attack (79th Cong.,) part2, part10, U. S. Congress Joint Committe on the Investigation of the Pearl Harbor Attack. United States Government Printing Office, 1946.
The Time For Decision. Walles, Summer. Harper & Brothers Publishers, 1944.
Pearl Harbor Roosevelt and the Coming of the War. Waller, George M. (Revised Edition). D. C. Heath and Company, 1965.
New York Times. Tuesday, December 9, 1941.

＊イギリス（英吉利＝英）
『第二次大戦回顧録』ウィンストン・チャーチル、毎日新聞翻訳委員会訳、昭和24～30年、毎日新聞社
Japan's Imperial Conspiracy. Bergamini, David. William Heinemann Ltd, 1971.
The War Speeches of the Rt. Hon. Winston S. Churchill, (Vol. II). Eade, Charles. Cassell & Company Ltd, 1952.
Main Fleet to Singapore. Grenfell, Russell. Faber and Faber Ltd, 1952.
The Secret Diary of Harold L. Ickes, (Vol. III). Ickes, Harold L. Weidenfeld and Nicolson, 1955.
The Week Before Pearl Harbor. Hoehling A. A. Robert Hale Ltd. 1963.
The Times. Wednesday, June 21, 1944.

＊インド（印度＝印）
『進めデリーへ』スバス・チャンドラ・ボース、昭19、朝日新聞社

『戦へるインド』スバス・チャンドラ・ボース、総合印度研究室訳、昭18、総合印度研究室
『「進めデリーへ」の反響に想う』藤原岩市、昭56、自然社
『高田歩兵第五十八聯隊史』高田歩兵第五十八聯隊史編集委員会編、昭57 ［「コヒマの戦跡に立って」中根千枝］
『印度侵略史』ラス・ビハリ・ボース(印)、石井哲夫、昭17、東京日日新聞社・大阪毎日新聞社
『知られざるインド独立闘争――A・M・ナイル回想録』A・M・ナイル(印)、河合伸訳、昭58、風涛社
『インド独立にかけたチャンドラ・ボースの生涯』アレクサンダーヴェルト(独)、新樹社編集部訳、昭46、新樹社
『悲劇の英雄チャンドラ・ボース』林田達雄、昭43、新樹社
『ネタジと日本人』スバス・チャンドラ・ボース・アカデミー編、平2、スバス・チャンドラ・ボース・アカデミー
『革命家チャンドラ・ボース』稲垣武、昭61、新潮社
『インド独立―逆光の中のチャンドラ・ボース』長崎暢子、平元、朝日新聞社
『F機関』藤原岩市、昭41、原書房
『昭和史の天皇(8・9)』読売新聞社編、昭44、読売新聞社
「インドの独立と大東亜戦争」田中正明［「民族と政治」昭和63年12月号］

＊チャンドラ・ボース関係（インドで購入したもの、英文のみ）

THE WAR OF THE SPRING TIGERS. GERARD H. CORR, Morrison & Gibb (London) 1975.（新書版で再刊されたベスト・セラーズもの）
NETAJI, AZAD HIND FAUJ AND AFTER. R. M. KASLIWAL, ESKAY (NEW DELHI) 1983.
Subhas Chandra Bose and the Indian National Movement. Hari Hara Das. STERLING PUBLISHERS (NEW DELHI), 1983.
THE SPRING TIGER. HUGH TOYE, GASSELL (London), 1959.
CROSSROADS–SURHAS CHANDRA BOSE. SISIR K. BOSE, NETAJI RESEARCH BUREAU (Calcutta), 1962.

NETAJI AND INDIAN INDEPENDENCE. B. K. AHLUWALIA, Harnam Publication (New Delhi), 1983.
SUBHAS CHANDRA BOSE. AMAR, CHITRA, KATHA 3氏の共著。 IBH Publishers Pvt. （劇画、発行年不明）
NETAJI–A pictorial Biography. Sisir Kumar Bose, Ananda Publishers, 1979.（写真集）

＊インドネシア

『日本軍政とインドネシア独立』ジョージ・S・カナヘレ(米)、後藤乾一・近藤正臣・白石愛子訳、昭56、維新報知社
『ジャワ終戦処理記』宮元静雄、昭48、ジャワ終戦処理記刊行会
PETA DAN GYUGUN CIKAL BAKAL TNI. H. Alamsjah Ratuperwiranegara
『インドネシアよ永遠なれ―金子智一氏ナラリア勲章受章記念』金子智一氏の受章を祝う会、平元、(社)日本歩け歩け協会
『インドネシアの郷土防衛軍・ペタ』ペタ研究班、平3、ASEANセンター
『アジアの教科書に日本軍批判記事―インドネシアの教科書の著者とその背景』中島慎三郎、平3、ASEANセンター
『海部首相の人気がASEANで失墜』中島慎三郎・堀内綱男、平3、ASEANセンター
『市來龍夫と吉住留五郎の対談―スカルノとハッタとアグス・サリムが尊敬した戦前派日本人』中島慎三郎編、平3、ASEANセンター
『義勇軍指導部・山崎大尉の日記ダイジェスト』中島慎三郎・阿羅健一、平3、ASEANセンター

＊オーストラリア（濠太剌利＝濠）

『東南アジア史入門』ミルトン・オズボーン、山田秀雄・菊池道樹訳、昭62、東洋経済新報社

＊オーストリア（墺太利＝墺）

『クーデンホーフ・カレルギー全集(3)』リヒャルト・クーデンホーフ・カレルギー、鹿島守之助訳、昭45、鹿島研究所出版会

＊シンガポール（新嘉坡＝新）

『現代シンガポールの社会経済史（一九八五年版）』中学初級歴史編集委員会〔石渡延男・益尾恵三編『外国の教科書の中の日本と日本人』昭63、一光社〕

＊スリランカ〔セイロン（獅子国＝獅）〕

MY QUEST FOR PEACE. J. R. Jayewardene, Stamford Press Ltd, Singapore, 1988.
President J. R. JAYEWARDENE. S. P. Senadhira, Sri Satguru Publications, INDIA.

＊ナイジェリア

『ナイジェリア―歴史への入門』マイケル・クローダン、中村弘光・林晃史訳、昭58、帝国書院

＊ビルマ（緬甸＝緬）

『ビルマの夜明け』バー・モウ、横堀洋一訳、昭48、太陽出版
『ビルマという国』鈴木孝、昭52、国際ＰＨＰ研究所
『ビルマにおける日本軍政史の研究』太田常蔵、昭42、吉川弘文館
『その名は南謀略機関―ビルマ独立秘史』泉谷達郎、昭42、徳間書店
『ネ・ウィン軍政下のビルマ』今川瑛一、昭46、アジア評論社
『ビルマ記』高見順、昭19、協力出版社
『ビルマ史』五十嵐智昭、昭18、教典出版
『ビルマ―地誌・歴史・経済』ハンス・ウルリッヒ・シュトルツ、昭49、創文社
「日本占領下のビルマ」ウー・ヌー〔「中央公論」昭和30年4・5月号〕
「会誌ビルマ」昭59～平3、ビルマ英霊顕彰会

「勇士はここに眠れるか」全ビルマ戦友団体連絡協議会、昭55
『外交官の一生』石射猪太郎、昭47、太平出版社
『秘録・大東亜戦史（3）』富士書苑編、昭29、富士書苑
『昭和史の天皇（8）』読売新聞社編、昭44、読売新聞社
『アーロン収容所』会田雄次、昭37、中央公論社

＊フィリピン（比律賓＝比）

『フィリピン戦線の日本兵』アルフォンソ・P・サントス、瓜谷みよ子訳、昭63、パンリサーチインスティテュート
『フィリピンの歴史』グレゴリオ・F・サイデ、松橋達良訳、昭48、時事通信社
『アキノ家三代（上・下）』ニック・ホアキン、鈴木静夫訳、昭61、井村文化事業社発行・勁草書房
『比律賓独立と東亜問題』ピオ・デュラン、野木静一訳、昭17、ダイヤモンド社
『比島の国柱』望月信雄編、昭55、野口喜三雄・刊行委員一同
『鬼哭―リカルテ将軍の霊に捧ぐ』太田兼四郎、昭47、（財）フィリピン協会
『国際浪人プッタギナモー』若宮清、昭57、潮出版社
『神聖国家日本とアジア―占領下の反日原像』鈴木静夫・横山真佳編、昭59、勁草書房
『歩いてきた道―ヒリッピン物語』金ケ江清太郎、昭43、国政社

＊フランス（仏蘭西＝仏）

『ドゴール大戦回顧録』ド・ゴール、村上光彦・山崎庸一郎訳、昭和35～41年、みすず書房

＊マレーシア（馬来＝馬）

『日本人よありがとう―ラジャー・ダト・ノンチックの半生記』土生良樹、平元、教育新聞社

『マレーシアの歴史』ザイナル・アビディン・ビン・アブドゥル・ワーヒド編、野村亨訳、昭53、山川出版社
『日中戦争いまだ終わらず—マレー「虐殺」の謎』中島みち、平3、文藝春秋
「反日華僑とマレー人」名越二荒之助［教科書正常化国民会議発行「教育正論」昭和63年11月1日第31号］

＊満洲・支那［中国］

『満洲國出現の合理性』ジョージ・ブロンソン・レー（米）、田村幸策訳、昭11、日本国際協会
『リットン報告書』ビクター・アレクサンダー・ジョージ・ロバート・リットン（英）、外務省仮訳、昭7、国際聯盟協会
『コミンテルン並に蘇聯邦の対支政策に関する資料』興亜院政務部、昭14
『日露戦争以後』中山治一、昭32、創元社
『中国の眼』玉島信義編訳、昭34、弘文堂
『中共雑記』エドガー・パークス・スノウ（米）、小野田耕三郎・都留信夫訳、昭39、未来社
『東亜先覚志士記伝』黒龍会編、昭41、原書房
『ドキュメント昭和—世界への登場』ＮＨＫドキュメント昭和取材班編、昭63、角川書店
『中国共産党略史』伊達宗義、平3、拓殖大学海外事情研究所

＊玉砕戦・自決

『コヒマ』アーサー・スウィンソン（英）、長尾睦也訳、昭52、早川書房
『硫黄島』ビル・Ｄ・ロス（米）、湊和夫監訳、昭61、読売新聞社
『敗北から勝利へ』ウィリアム・Ｊ・スリム（英）、陸上自衛隊幹部学校訳
『玉砕戦史』安井久善編、昭45、軍事研究社
『全滅の思想』椋本捨三、昭53、光人社
『アリューシャン作戦記録』参謀本部・第一復員局編、昭21

『玉砕』長尾唯一、昭44、日本文芸社
『戦史叢書・北東方面陸軍作戦1・アッツの玉砕』防衛戦史室、昭43、朝雲新聞社
『戦史叢書・イラワジ会戦』防衛戦史室、昭44、朝雲新聞社
『世紀の自決』額田坦編、昭43、芙蓉書房
「故三浦襄翁特集号」池田他人編［「バリ会報」第3号、昭和27年6月］
『バリ島に眠る三浦襄翁―インドネシア独立のみ陰に』越野菊雄、昭32、日本インドネシア協会
「日本人キリスト者三浦襄の『南方関与』」原誠［「東南アジア研究」第16巻第1号、昭和53年6月］

*特攻隊

『神風』ベルナール・ミロー(仏)、内藤一郎訳、昭47、早川書房
『ドキュメント神風』デニス・ウォーナー(濠)、ペギー・ウォーナー(濠)、妹尾作太男、妹尾作太男訳、平元、徳間書店
『自死の日本史』モーリス・パンゲ(仏)、竹内信夫訳、昭61、筑摩書房
『高貴なる敗北』アイヴァン・モリス(英)、斎藤和明訳、昭56、中央公論社
『特殊潜航艇戦史』ペギー・ウォーナー(濠)、妹尾作太男、妹尾作太男訳、昭60、時事通信社
『特別攻撃隊』リチャード・オネール(英)、益田善雄訳、昭63、霞出版社
『ビルマの夜明け』バー・モウ(緬)、横堀洋一訳、昭48、太陽出版
『Fighting Elites KAMIKAZE』DAVID BROWN (英)、Bison Books Ltd, London, 1990.
『月明の湾港』豊田穣、昭49、文藝春秋
『写真集・軍神松尾中佐とその母』木下鉄二編、昭54、本渡諏訪神社社務所
『敷島隊五軍神の志るべ』神風特攻敷島隊五軍神奉賛会、昭50、楢本神社社務所
『神風特別攻撃隊の記録』猪口力平・中島正、昭59、雪華社
『帝国陸海軍の最後』伊藤正徳、昭36、文藝春秋

「一外人の美挙」［「東郷」昭和46年6月号］

＊外国中高等教育用教科書

Social and Economic History of Modern Singapore 2. LOWER SECONDARY HISTORY PROJECT TEAM, Longman. Singapore Publishers, 1985.
THE MAKING OF MODERN JAPAN. K. B. Pyle D. C. HEATH AND COMPANY (Toronto), 1978.
The Modern World since 1870. L. E. Snellgrove Longman (London), 1968.
The Aflo–Asian World. Edward R. Kolevzon, Allyn and Bacon, 1978.
HISTOIRE 3e. Fernand Nathan, 1978.
People and Civilizations–A World History. John M. Thompson Kathleen Hedberg, Cinn and Company, 1977.
『世界の歴史教科書シリーズ』（帝国書院）『6・インド』『10・フランス』『32・インドネシア』『33・ナイジェリア』
『インドネシア』インドネシア共和国教育文化省、森弘之・鈴木恒之訳、昭57、ほるぷ出版［世界の教科書＝歴史015］
『軍国主義―東南アジアの教科書にみる日本』世界の教科書を読む会編、昭46、合同出版
『アジアの教科書に書かれた日本の戦争―東アジア編・東南アジア編』越田稜編著、平2、梨の木舎

編集後記　エネルギー史観の提唱

「歴史は民族の偉大なるものを断絶することなく伝承することである」
カール・ヤスパース（ドイツの哲学者、一八八三～一九六九）
「歴史を有するということは、戦勝の喜びと敗北の悲しみを自分のこととして味わい、それらを記憶の血管の中に同時に甦らせることである」
フェルディナンド・ブリュンティエール（フランスの文学史家、一八四九～一九〇六）
「日本にはありとあらゆるものがある。しかし、自分自身がない」
バーナード・リーチ（イギリスの陶芸家、一八八七～一九七九）

ガザリー元外相に触発されたモチーフ――アジアに対して論戦する政治家出でよ

この本はどんなモチーフ（衝動・動機）をもって書かれたのか。編集後記はそこから入らなければなりますまい。思いだすのは、マレーシアの元外務大臣であったガザリー・シャフィー氏のことです。氏はＡＳＥＡＮを創ったことが認められて、外交官として最高といわれるハマーショルド賞をもらった人です。

たびたび来日するのですが、昭和六十三年の九月に東京のあるホテルで、我々三人（玉井顕治、中島慎三郎両氏と）が会った時のことです。氏は、参議院の長老であるT氏に会った直後であったので、よほど腹にすえかねたのでしょう、私たちにまくしたてて来ました。

〈日本の政治家はどうしてお詫びばかりするのか。今もT氏は、私に会うと一番に「過ぐる大戦において、我が国は貴国に対してご迷惑をおかけして申し訳ありませんでした」と言うのだ。私は思わず言ってしまった。

「どうしてそんな挨拶をするのか。我々はペコペコする日本人は嫌いだ。なぜサムライらしく毅然としないのか。日本はどんな悪いことをしたと言うのか。大東亜戦争で、マレー半島を南下した時の日本軍は凄かった。わずか三カ月でシンガポールを陥落させ、我々にはとてもかなわないと思っていたイギリスを屈服させたのだ。私はまだ若かったが、あの時は神の軍隊がやってきたと思っていた。日本は敗れたが、英軍は再び取り返すことができず、マレーシアは独立したのだ。その偉業を忘れて、政治家たるものが、ステレオ・タイプのように同じ言葉でお詫びをする。人種がすっかり変わってしまったのかと思ったよ」と。〉

我々は受け答えする間もなく、彼の熱演は続きます。

〈日本の政治家はなぜ論争しないのか。一九七四年の一月であったか、田中角栄首相がインドネシアを訪問したことがある。その時、四万の学生デモにとり囲まれて立往生し、ヘリコプターで虎口を脱し、何もせずに逃げ帰ってしまった。首相は、どうして学生を相手に公開討論を申し込まな

かったのか。学生との討論の中で、日本の立場を堂々と打ち出したら、一度に人気が上がり、日本が見直されていたのに、惜しいチャンスを失ってしまった。

特に私が惜しいと思うのは、日本くらいアジアのために尽くした国はないのに、それを日本の政治家が否定することだ。イギリスのサッチャー首相でなくても、責任感をもった政治家だったら、国家の名誉にかけて、必ず反論する。もし私が日本の政治家だったら、次のように言うだろう。

「その頃、アジア諸国はほとんど欧米の植民地になっていて、独立国はないに等しかった。日本軍は、その欧米の勢力を追い払ったのだ。それに対して、ゲリラやテロで歯向かってきたら、治安を守るために弾圧するのは当然ではないか。諸君らは、何十年何百年にもわたって、彼らからどんなひどい仕打ちを受けたかを忘れたのか。日本軍が進撃した時にはあんなに歓呼して迎えながら、敗けたら自分のことは棚にあげて、責任をすべて日本にかぶせてしまう。そのアジア人の事大主義が、欧米の植民地から脱却できなかった原因ではないのか」と。

目先をごまかしてお詫びをする日本人ほど、調子がよくなると、今度は威張りだすのだ。威張るのもダメ、ペコペコするのもダメだ。

コヒー一杯で、談笑しながら語る「ガザリー節」は尽きることがありません。

〈日本人は、バック・ミラーばかり見ている。バック・ミラーは写し出されたもので、真物ではない。自分の目で前を見なければ、運転を誤るよ。〉

彼はマレー語で語り、通訳はトアン・中島こと中島慎三郎氏（トアンはインドネシア語で旦那の意）。こ

の二人は気心が知れた仲なので、本音丸出しで、生徒の私どもにずいぶんサービスしてくれました。
彼の言うように、バック・ミラー（極東裁判）ばかり見ているのは、政治家だけではありません。日本のマスコミも、学会も、時代風潮も、発想が貧弱で、幼児性から抜け出せないのです。それを吹き飛ばすような本は書けないものか——。これが私にとって、長い間の懸案でした。

甲斐田・倉林両氏の提案——アメリカの戦争責任明示とルーサー女史の提言

ところが、今年（平成3年）の五月十八日、東京・飯田橋にある新日本協議会の事務所に、各団体の責任者（4月12日「ゴルバチョフ大統領に謝罪と領土返還を求める国民大会」を挙行したメンバー）が集まったことがあります。
その時、甲斐田徹氏（新日本協議会事務局長）が、ガザリー氏に似たようなことを、今度はアメリカに対して言うのです。
〈今年は、大東亜戦争開戦五十年に当たる。アメリカはまたぞろ〝真珠湾を忘れるな〟という手垢のついたスローガンを持ち出している。そのアメリカに対してNOというだけではつまらない。アメリカに戦争の責任を感じさせ、謝罪をさせるべきだ。それによって、日・米戦争は超克できる。そこまでいかないと、パール判事に恥ずかしい。まず手始めに、スケール大きく、世界の識者の言葉ばかりで、大東亜戦争の全貌を語る本を出してみるのはどうであろうか。〉
するとそれに応えて、倉林和男氏（英霊にこたえる会事務局長）が発言しました。氏には『いわゆる

「A級戦犯」についての検証』と題する内外資料を満載（特に支那事変関係資料は秀逸）した著書があります。氏は、最近の体験を次のように披露しました。

〈先日、アメリカのABCニュースの東京支局から取材申し込みがあった。開戦五十年の特集番組を作るためだ、という。かつて慶応大学にも留学していたキャサリン・A・ルーサー女史が、カメラマン三人とともにやってきた。私は靖国神社の社頭で、全国戦友会連合会の小野孚一事務局長や亀山正作常任理事らと会ったのだが、彼女の日本語は流暢で、取材態度は公平で、気持がよい。我々が開戦の経緯について、質問されるままに話したことをかいつまんで言えば、次のようになる。

「昭和十六年三月八日からはじまった日米交渉だが、アメリカはその交渉をまとめる気はなかった。それが証拠に、大西洋憲章が出されたのは、交渉最中の八月十四日だった。その憲章は、すでに開戦するつもりで戦後のことまで決めているではないか。

また、戦後の昭和二十年十一月二十三日、『米国上・下両院合同真珠湾調査委員会』で行ったハル国務長官の供述によれば、『私は最初から平和的解決に到達するチャンスは、二十分の一も、五十分の一も、百分の一もないと予想していた。（中略）当時の軍最高幹部は、米国のみならず、侵略に抵抗しつつある諸国の防備を整えるためには、時間が必要と強調していた』と述べているではないか。この文書は、極東裁判の時に弁護人から提出されたが、無視された。

いずれにしても、日本を開戦にはめこむというルーズベルトの謀略は成功した。確かに開戦には成功したが、日・独を叩き過ぎたために、戦後は中・ソを中心とする共産勢力の大侵略を許してし

まった。このようにアメリカは、開戦に間違いを犯し、終戦策に失敗した。第二次大戦におけるアメリカ側の戦争責任も知ってほしい。」

すると、それに対するルーサー女史の返答がよかった。彼女は言う。

「私も、アメリカの公文書館で史料に当たったが、肝腎なところは脱落していた。今日はじめて日本の立場を聞かされた。日本の政治家はアメリカに来た時、なぜこのことを堂々と主張しないのか。アメリカ人は、単なるイエス・マンは尊敬しないのだ。日本は自らの立場を世界に向かって主張すべきだ。そしたら、かえって敬意が払われ、歴史の見方にも厚味がでるのではないか。」

ルーサー女史の言うように、政治家に論戦を要求しても、日本には、跳ね返すだけの精神的土壌がない。大東亜戦争に関する出版物も、マスコミ動向も、否定的・批判的にしか見なかったり、あたかも犯罪行為を行ったかのような取り上げ方が多い。日本にはありとあらゆるものがあるが、自分自身がないのである。しかし我々は、政治家やマスコミに責任を押しつける前に、我々自身が取り組んで、解答を出すだけの努力をしようではないか。〉

三つの編集方針――追体験による表現とエネルギー史観

二人の発言は、大東亜戦争観の盲点を衝いたもので、活発な発言が続きました。かくして、これらの発言をモチーフとして一書を刊行することに一決しました。私はかねてからたくさんの関係資料を集め、持て余していたこともあって、結局、編集を担当することになった次第です。

今年は、開戦記念日の十二月八日をめざして、各種団体が各地で記念集会を予定しています。それになんとしても間に合わすために、出版を急がねばなりません。しかし意義ある出版にすべく、次のような編集方針をたてました。

① 大東亜戦争は相手があり、永い歴史的遠因があった。広い視野で、多面的かつ長期的に見るために、外国人の資料を優先的に駆使すること。

② 大東亜戦争の批判とか評論ならたくさん出ているし、どんなことでも言える。やはり、あの当時を生きた人々の心になって、喜びも悲しみも記憶の中から甦らせなければ歴史とは言えない。「エネルギー史観」というか、あれだけのスケールを持ったエネルギーがなぜ起こったのか。それを明らかにするのが、戦争史の前提である。だから、できるだけ当時の時代に迫るために、「日中戦争」ではなく「支那事変」を使う。「日中戦争」という戦争は、歴史上存在しないからである。また、我が国本来の呼称である「大東亜戦争」で統一する。ついでに言えば、「軍国主義」も当時は使われなかった。「高度国防国家」であった。

③ 当時を追体験しながら表現する試みを次代に伝えるために、戦後教育を受けた若い皆さん方に執筆協力を依頼すること。しかし、若い人々だけでは完璧を期し難いかも知れない。そこで、戦中派で、近現代史を専門にしている坂本夏男氏（元皇学館大学教授）、青年指導に献身している鈴木正男氏（財団法人大東会館学生寮理事長）、国際法の権威である佐藤和男氏（青山学院大学教授・法学博士）らに顧問格として加わっていただき、一部執筆もお願いすることにする。

見事に完結した民族のドラマ

共同執筆による本の製作は、落伍者を出してはならないマラソン・レースに似ています。ランナー（「執筆者略歴」参照）に集まってもらって、第一回の編集会議を持ったのが七月一日。その後も何回か拙宅に集まり、分担を決めて資料を渡しました。しかし、資料だけでは自分のものにはなりません。あの時代を追体験して表現しなければ、血の通ったものにはなりません。執筆担当者は、当時の生証人や遺骨収集に尽力した人々の話を聞き、慰霊祭に参列し、靖国神社の遊就館に赴き、国会図書館に足を運ぶという日々が続きました。

特に若い執筆者は、勤めを持っていて思うにまかせぬことがありましたが、今から五十年前に、日本はこんな凄いことをやったのかという感動が、彼らを常ならぬ心境にかりたてました。やがて「歴史は民族の偉大なるものを、断絶することなく伝承すること」という使命感に燃えてゆきました。せっかく出版するのだから、これまで誰も気づかなかったことを、新しく掘り起こさなければ、意味の乏しいものになります。多くの方々の協力やご教示をいただきながら、発見は感動を呼び、感動が執筆を導いてゆきました。

執筆が進むにつれて、大東亜戦争の全貌が見えてきました。それは、ダイナミックな「民族のドラマ」として見事に完結しているのです。日露戦争に較べて、その規模は遙かに大きく、しかも悲劇に終わっただけに、これまでの戦争に見られない日本的伝統と個性が顕現されました。我々がそれを求

めて追体験したといっても、まだ九牛の一毛に過ぎません。求めれば求めるほど、奥行きは限りなく広がってゆきます。

さらに、敗戦のもたらした影響や、アジア各国に残した遺産、そして連合国の戦争指導への批判、アジア各国に対する要望、あるいはアメリカへの謝罪要求と、主題が次々とふくらみ、ペンが躍りました。

編者としては、荒野にひとり叫ぶような思いにかられながらも、英霊の声に導かれつつ、突き進むよりほかありませんでした。締切に急かされ、息つく暇もないうちに原稿を持ち寄り、読みあわせ、何回か書き直しながら、最後は、団子レースのようになってゴールに到着した(9月30日)というのが、実感でした。

＊

本書では、我が国でタブー視されている韓国や中国との関連に迫るべく、それらの資料を田中健之氏(アジア・ナショナリズム研究家・27歳)が用意していました。ところが、急に入院する身となり、割愛せざるを得なくなったことを残念に思います。

しかし、この企画を知った多くの方々から資料や写真の提供をいただき、激励を受けました。中でも、東南アジア諸国を取材・訪問・通訳の役割を担いながら、すでに二百回以上も歴訪し、「ＡＳＥＡＮ資料」を六百三十点にわたって発行している中島慎三郎氏からは、資料の確認、情報提供等で特別のご教示をいただきました。これらご協力いただいた方々の芳名を別に掲げて謝意を表する次第で

す。また、これらの中から中途で発見された新資料は、別に「スポット・ライト」（22点）の欄を設け、写真も約九十点を挿入することができました。
出版を引き受けた展転社は、相澤宏明社長も執筆陣に加わり、柚原正敬編集長も自ら執筆に当たりながら全体のまとめと盛り上げに蔭の力となって尽力。また、資料や写真の蒐集からレイアウトに至るまで八面六臂の努力を傾注し、予定通り完成に漕ぎつけられたことを、編者として感謝してやまない次第です。

平成三年十一月三日

名越二荒之助

取材協力・写真・資料提供者芳名（敬称略、50音順）

足羽雄郎、渥美堅持、阿部文義、池田他人、井上哲也、石上敏明、江崎道明、太田弘毅、甲斐田徹、貝田充郎、加藤秀雄、上遠野正一、金子智一、金子昇、椛島有三、神屋二郎、亀山正作、河本學嗣郎、倉林和男、㈶教科書研究センター、斎藤久子、清水國雄、㈪国柱会、鈴木節、大東亜戦争五十周年実行委員会、田中香浦、田中健之、田中正明、玉井顕治、鶴田秀起、中島慎三郎、中津瀬游、長嶋歓一、西田将、西谷洋子、日本政策研究センター、野畑寛子、野村宏之、濱口益夫、林正夫、弘津恭輔、総山孝雄、藤井千賀郎、藤田昌雄、藤本隆之、防衛庁防衛研究所戦史部、保坂治良、堀浩平、堀内綱男、牧野勇、宮元静雄、宮本二郎、望月信雄、柳生妙子、山田恵久、吉野秀一郎、陸上自衛隊幹部学校図書室、若宮清

カバー写真[表]解説

レッド・フォートに「凱旋」したチャンドラ・ボースとINAの群像

私がインド滞在中，もっとも鮮烈な印象を留めたのは，レッド・フォート前の「チャンドラ・ボースとINA（インド国民軍）兵士の群像」であった。この巨大な銅像は，戦後30年を記念して1975年（昭和50年）1月に建立され，日本の「朝日新聞」（1月29日付）も「独立の英雄の銅像完成，いまもなお根強く残る生存説」という見出しで，特派員発の記事を載せている。この記事によれば，当日は労働者や学生など市民数千人が集まり，ジャッチ・インド副大統領の手で除幕式が行われた，という。

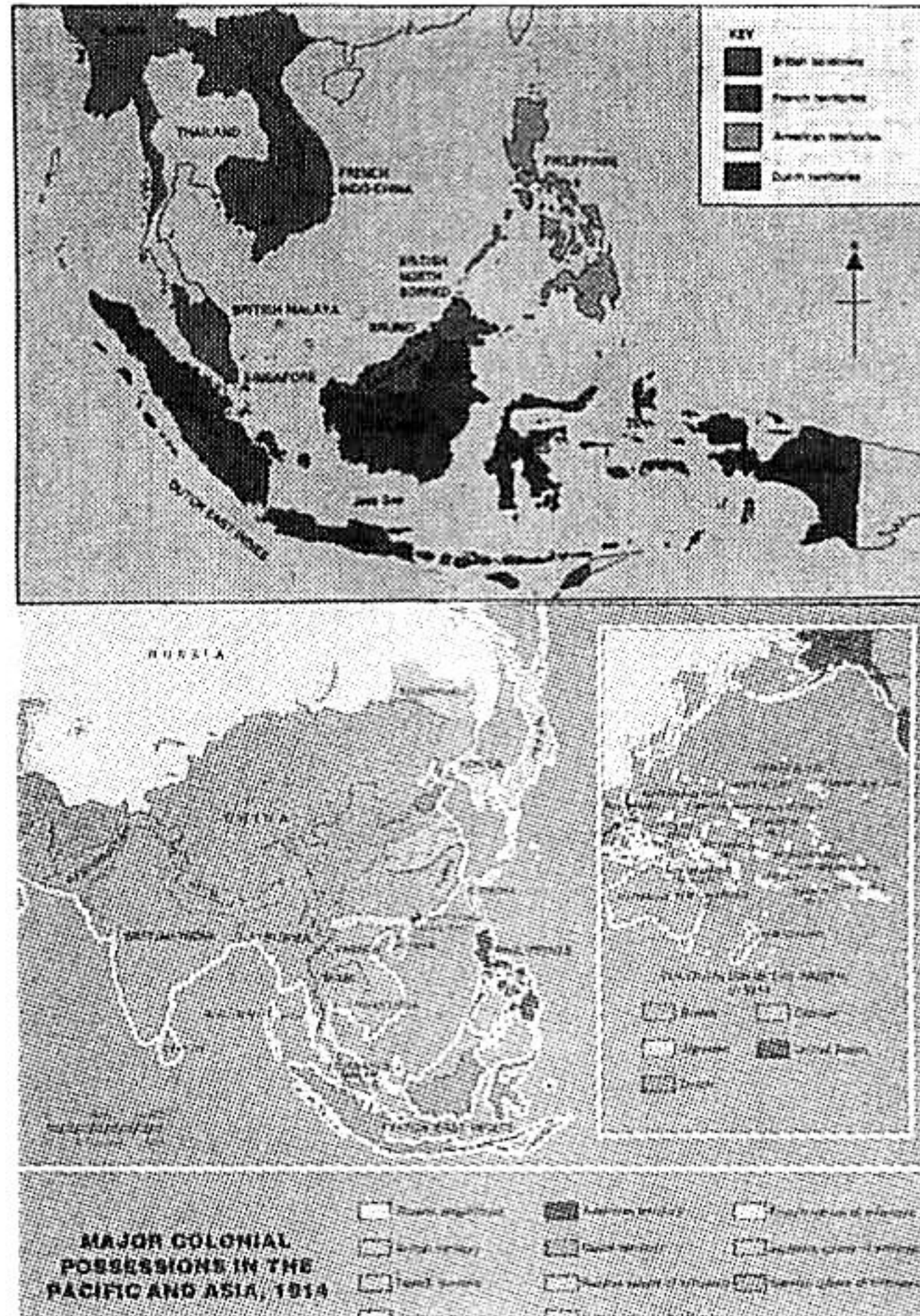
オールド・デリーは，ムガール帝国（インド最後の独立国）の首都であった。その中央に第5代シャー・ジャハンの居城レッド・フォート（原名ラール・キラ，赤い砦）があった。イギリスがセポイの反乱（1857年，第1次インド独立戦争）を鎮圧した時，デリ王を一方的に裁き，ビルマに終身刑を決めた場所がこのレッド・フォートである。それ以来レッド・フォートは英植民地主義の牙城となり，インド人にとっては栄光と怨念の場所となった。チャンドラ・ボースも，演説の中で何度か，レッド・フォードをめざして進撃することを呼びかけている。

そのレッド・フォートの前に，広大なチャンドラ・ボース公園がある。その中央に，かつて日本の戦友であったチャンドラ・ボースが，インド国民軍の兵士たちを従え，レッド・フォートを指差して立っている。皮肉にもこの銅像の台座の上には，かつて大英帝国最盛時のイギリス王ジョージ5世の像が建っていて，それを取り除いてボース像を据えたところにインド人の執念をみる思いがする。

高さ12mある群像の勇姿は，ボース一門の気魄を象徴し，銅像の台座には「偉大なるインド独立の戦士であるネタジ・スバス・チャンドラ・ボース（1897年1月23日生）は，英国の支配からインドに自由をもたらすため，外国軍隊の中にインド国民軍を組織し，苦難の戦いを開始した」（ヒンズー語，インド青年ウトポル君訳）と刻まれている。　**【名越】**

カバー写真[裏]解説

1941年(昭和16年)以前における欧米諸国のアジア植民地地図

シンガポールの『現代シンガポールの社会経済史』(中学初級歴史編集委員会編, 1985年, ロングマン・シンガポール出版社)は「東南アジアにおけるヨーロッパの植民地, 1941年」と題して, 地図をカラーで載せている。また, アメリカの中等教育用世界史教科書『人々そして私達の世界』(A・O・コンスラー他著, 1977年, ホルトラインハート・ウインストン社）は「1914年, 太平洋とアジアは大部分植民地支配に置かれていた」という見出しをつけて地図を載せている。いずれも, 当時, 欧米諸国がいかにアジア諸国を植民地として侵略していたかが一目瞭然でわかる。オランダはインドネシアを, イギリスはインド・ビルマ・マレーシア・シンガポール・オーストラリア等を, フランスはインドシナ3国(ベトナム・ラオス・カンボジア)を, アメリカはフィリピンをそれぞれ蚕食していた。
当時, アジアのチャンピオンであった日本は, アジアの安定と自国の自存自衛を同意語に考えていた。これが使命感となり, 遠因となって大東亜戦争に発展したのである。
アメリカの陸軍参謀本部で第2次大戦の前期3年間, 戦争計画の立案に携わったウェデマイヤー大将は「ドイツが最も侵略的な国家で, たび重なる平和の破壊者であるという世間の想像は誤っている。このことを確かめるには, 正しい歴史を研究する必要はない。地図を一見すれば, イギリスやフランスが平和愛好国家であったかどうか, すぐわかることだ」(『ウェデマイヤー回想録』)と述べている。ウェデマイヤーはドイツについて述べているのだが, それはドイツ以上に日本に当てはまることではないのか。
アメリカの他の教科書やイギリスの教科書も, カラーではないが同様の地図を載せている（カバー裏折返に掲載)。　**【名越】**

執筆者略歴（年齢順）

坂本夏男（さかもと　なつお）
大正５年，佐賀県生まれ。東京帝国大学卒。都立高校教諭，久留米工専教授，皇学館大学教授等を歴任。著書に『明治の栄光』『久留米市史(第３巻)』他。論文に「東上内閣の対米外交」他。近代史研究家。

鈴木正男（すずき　まさお）
大正11年，愛知県生まれ。國學院大学卒。陸軍飛行第７戦隊にて各地に転戦。復員後，大東塾・不二歌道会事務局長。著書に『昭和天皇の御巡幸』『昭和天皇のおほみうた』他。大東塾・不二歌道会代表。

名越二荒之助（なごし　ふたらのすけ）
大正12年，岡山県生まれ。山口高商卒。ソ連抑留，復員後，高校教諭・教頭を歴任。著書に『大東亜戦争を見直そう』『世界に生きる日本の心』『日韓2000年の真実』他。前高千穂商科大学教授。

佐藤和男（さとう　かずお）
昭和2年，東京生まれ(本籍，広島県福山)。海軍兵学校(75期)・東京商大(現一橋大学) 卒。著書に『憲法九条・侵略戦争・東京裁判』他。『世界がさばく東京裁判』を監修。青山学院大学教授。法学博士。

阿羅健一（あら　けんいち）
昭和19年，宮城県生まれ。東北大学文学部卒。現代史をテーマにルポルタージュを雑誌に発表する傍ら出版企画に従事。著書に『聞き書・南京事件』『ジャカルタ夜明け前』他。ノンフィクション作家。

相澤宏明（あいざわ　ひろあき）
昭和22年，大阪府生まれ。高校を中退して師子王学塾に入塾，日蓮教学・日本国体学を研究。(財)本地郷団を経て展転社を創立。著書に『日本の建国覚書』『行動の日蓮学』他。展転社代表取締役。

谷口次男（たにぐち　つぐお）
昭和25年，三重県生まれ。日本大学法学部卒。在学中に同大今泉研究所（旧皇道学院)講座修了。論文に「社会科教育法」「師道論」他。都内私立高校社会科教諭・日本教師会理事・東京都教師会副会長。

渡辺徹二（わたなべ　てつじ）
昭和26年，福島県生まれ。日本大学理工学部卒。東進スクール講師を経て，同56年，日本国体学会に研究員として入所。論文に「パソコン討論・天皇」「地球汚染への提言」他。私立大学付属高校教諭。

柚原正敬（ゆはら　まさたか）
昭和30年，福島県生まれ。早稲田大学中退。(財)本地郷団出版局真世界社を経て，同57年，展転社創立に参画。共著に『台湾と日本・交流秘話』他。展転社取締役編集長・台湾研究フォーラム代表。

勝岡寛次（かつおか　かんじ）
昭和32年，広島県生まれ。早稲田大学大学院文学研究科博士課程(教育学)修了。論文に「占領軍の日本語政策について」「日本教職員組合の成立事情について」他。明星大学戦後教育史研究センター勤務。

平田清美（ひらた　きよみ）
昭和34年，長崎県生まれ。神奈川大学卒(専攻は国際法)。全うな常識人・社会人の立場から国家・社会に対し発言し行動する正論の会や正統表記の実践普及活動に参加している。貿易会社に勤務。

彌吉博幸（やよし　ひろゆき）
昭和37年，佐賀県生まれ。佐賀大学理工学部在学中，日本教育研究会にて近現代史研究。共著に『大東亜戦争とアジアの歌声』『台湾と日本・交流秘話』『日韓2000年の真実』他。東亜政策文化研究所員。

The Pacific zone, scene of Japanese plans for a new empire

Changing Attitudes in Europe

Although various motives led Europeans to dominate Asia and

カバー〔折返〕地図：イギリスの教科書『The Modern World since 1870』掲載の「太平洋地域における日本の新植民地計画」地図

：アメリカの教科書『People and Civilizations』掲載の「ヨーロッパの姿勢転換」地図

カバー〔裏〕地図：シンガポールの教科書『Social and Economic History of Modern Singapore 2』掲載の「東南アジアにおけるヨーロッパ植民地、1941年」地図（461頁参照）

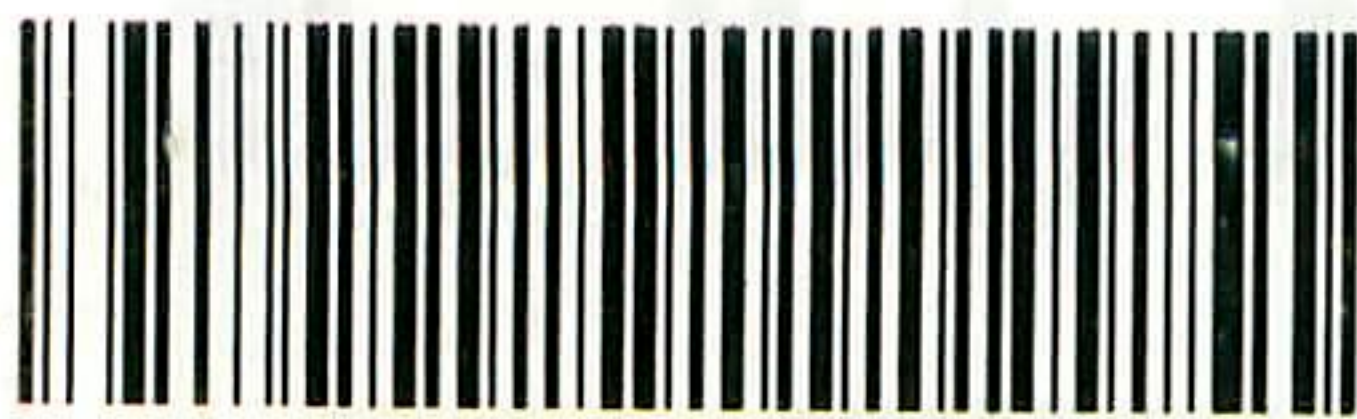
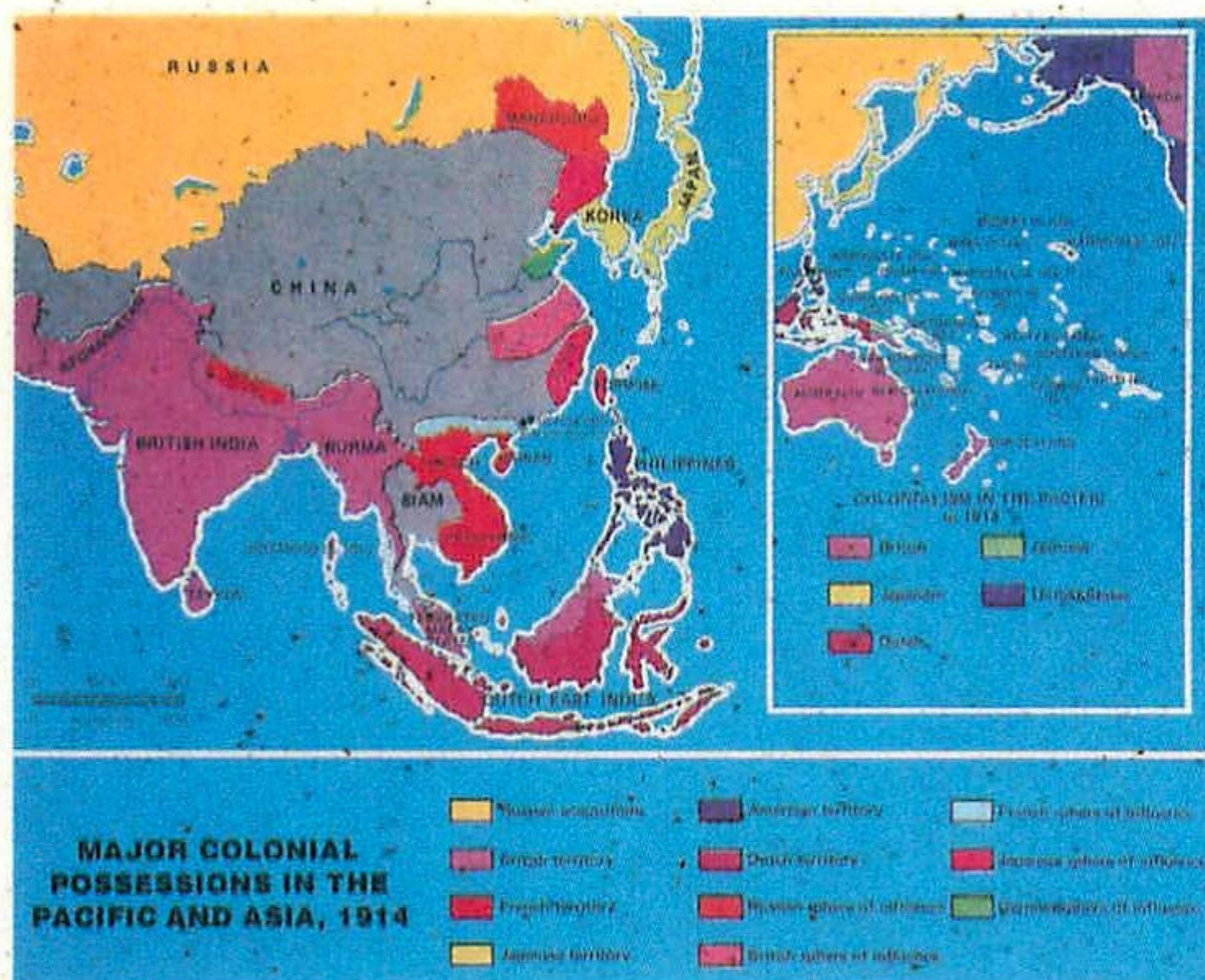
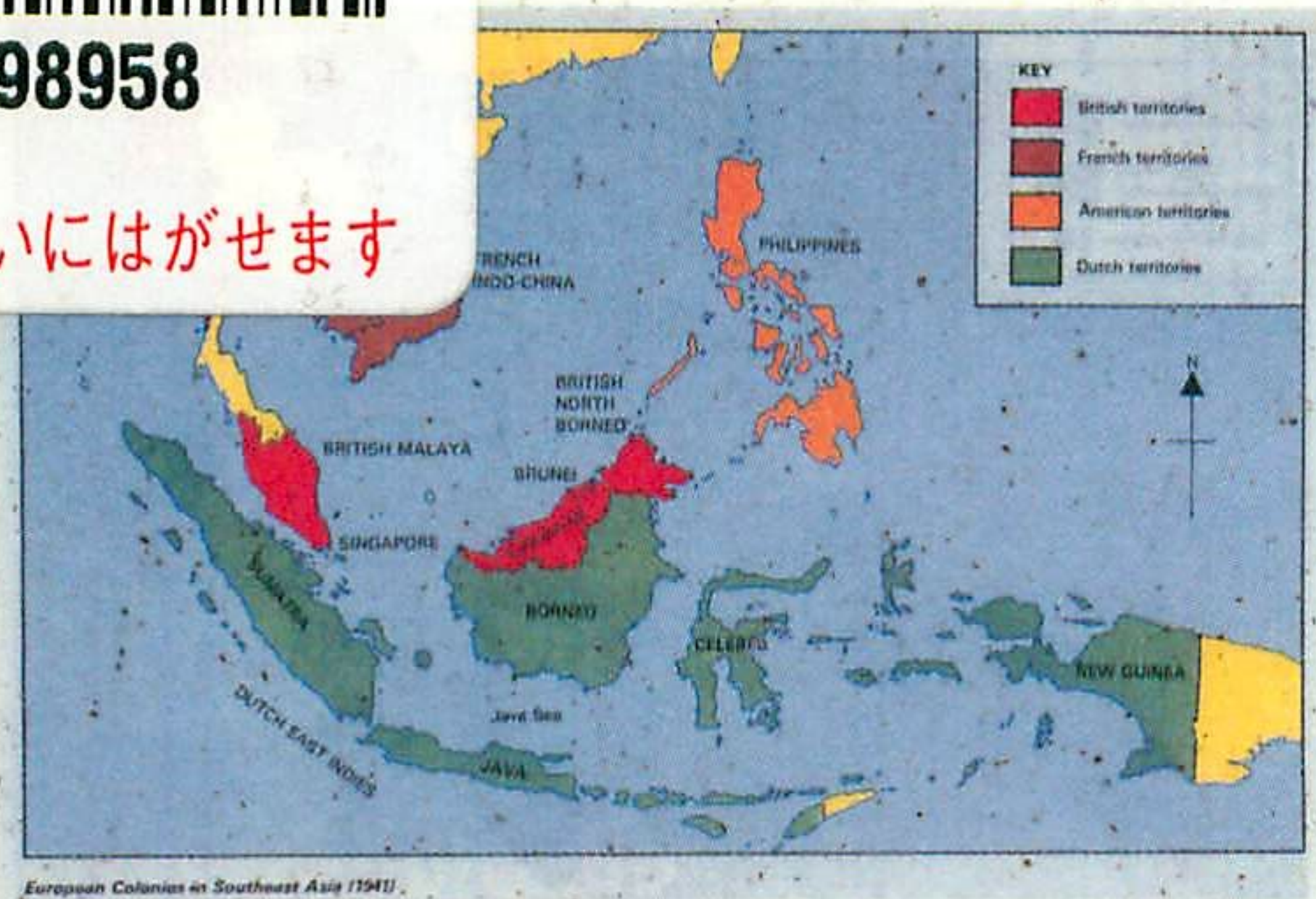
：アメリカの教科書『People and Our World』掲載の「太平洋とアジアにおける主な植民地支配、1914年」地図（461頁参照）

撮影協力／片岡正志

カバーデザイン／妹尾善史

...ission of DAI-TOA

European Colonies in Southeast Asia (1941)

MAJOR COLONIAL POSSESSIONS IN THE PACIFIC AND ASIA, 1914

ISBN4-88656-073-3 C0021 ¥1800E
展転社／定価：[本体1800円＋税]